

日本近代文学

第10集

日本近代文学会編集

<自由論文>

北村透谷における国民・民衆の問題	藪 禎子 1
君死にたまふことなかれ	翁 久美 13
『発展』『毒薬を飲む女』（岩野泡鳴）試論	伴 悦 28
一高の青春—折蘆を中心—	助川 徳是 41
『それから』論	熊坂 敦子 56
大正期のロシア文学と朔太郎	久保 忠夫 70
「田園の憂鬱」の文体	山敷 和男 83
「あにいもうと」の成立—その一側面—	東郷 克美 95
伊東静雄論—「小さい手帖から」をめぐる—	川口 朗 112
横光利一の思考と現実 —新感覚派時代にみる可能性—	佐藤 昭夫 122
中原中也「言葉なき歌」と「蛙声」と —愛児文也の誕生と死—	飛高 隆夫 135
「惜しみなく愛は奪ふ」と「クララの出家」 —笹淵博士の再批判に対する反論—	小坂 晋 148
視座 文学研究への反省	坂本 浩 163
近代文学研究が志向するもの —その方法についての雑感—	久保田 芳太郎 167
展望 近代文学学会の動向（一九六八年後期）	山崎 一 穎 172
書評 佐藤泰正著『日本近代詩とキリスト教』	佐藤 房 儀 187
岡 保生著『尾崎紅葉の生涯と文学』	伊 狩 章 193
岩永 昶著『自然主義文学における虚構の可能性』	榎本 隆 司 198

日本近代文学会会則

第一条 この会は日本近代文学会と称する。

第二条 この会は本部を東京都におく。また、別則により支部を設けることができる。

第三条 この会は日本近代文学の研究者相互の連絡を密にし、その調査研究の便宜をはかり、あわせて将来の日本文学の振興に資することを目的とする。

第四条 この会は前条の目的を達成するために左の事業を行なう

- 一、研究発表会、講演会、展覧会などの開催。
- 二、機関誌、会報、パンフレットなどの刊行。
- 三、会員の研究発表の斡旋。

四、海外における日本文学研究者との連絡。

五、その他、理事会において特に必要と認めたる事項。

第五条 会員 一、この会は広く日本近代文学の研究者、および研究に助力する者をもって組織する。会員は附則に定める会費を負担するものとする。

二、この会には維持会員を設ける。維持会員の権限、および会費については、附則に別途定める。

役員 一、この会に左の役員をおく。

代表理事 一名 理事 若干名
常任理事 若干名 監事 若干名

二、代表理事はこの会を代表し会務を総攬する。常任理事は、代表理事を常時補佐し、代表理事に事故があるとき、または代表理事が欠けたときは、あらかじめ定められた順序でこれを代理し、またその職務をおこなう。理事はこの会運営の責に任ずる。監事はこの会の財務を監査する。

三、理事、監事は総会における会員の互選により、代表

理事および常任理事は理事の互選により選出する。ただし、補欠の理事の選任は理事会の指名によって総会による選出にかえることができる。この指名は最も近い総会で承認されなければならない。

四、役員の内任期は次の通常総会が終了する日までとする。ただし、再選を妨げない。

第七条 理事会の推薦により総会の議を経て、顧問、名誉会長をおくことができる。

第八条 この会に評議員をおく。評議員はこの会の重要事項を審議する。評議員は理事会の議決を経て代表理事がこれを委嘱する。

第九条 会務を遂行するために事務局をおく。事務局に運営委員若干名をおく。運営委員は理事会がこれを委嘱する。

第十条 第六条第四項の規定は、顧問、名誉会長、評議員および運営委員にこれを準用する。

第十一条 会員の入会は会員二名以上の推薦と理事会の承認を要す。会員が定められた義務を果たさないうとき、またはこの会の目的にふさわしくない行為のあったときは、評議員会の議決によって除名する。

第十三条 この会は毎年一回通常総会を開催する。臨時総会は理事会が必要と認めるとき、あるいは会員の五分の一以上から会議の目的とする事項を示して要求があったとき、これを開催する。

第十四条 この会の経費は会費その他をもってあてる。

第十五条 この会の会計年度は毎年四月一日にはじまり、翌年三月三十一日におわる。

第十六条 会則の変更は総会の議決を経なければならない。

北村透谷における国民・民衆の問題

藪 楨 子

一

数年来、透谷論は新たな局面を見せて、展開、高潮してきている。この気運の中心に立ったものは、色川大吉氏の「明治精神史」(昭39・6)、平岡敏夫氏の「北村透谷研究」(昭42・6)などであったが、最近はまだ桶谷秀昭氏の「近代の奈落」(昭43・4)なども加わり、論議も多様化してきた。三著とも、所収の論文は、既に早くから雑誌等に発表されていたもので、単行本刊行の時点だけでこれを簡単に云々することはできないのだが、しかしそれぞれの透谷観が凝集的にあらわれ、またその意味で真価を問われたということでは、これらの出版がとにかく一期を刻む形になった。それぞれに顕著な問題意識が新たな争点をよび、批判、応酬も盛んである。中には小川勝美氏の最近の論文(「北村透谷像について」昭43・9「日本文学」)のごとく、三著を一括して取り上げ、比較論評しつつ、新たな観点を

提示しようとしたものもあるが、検討すべき部分はまだ多々あると思われる。

本稿では、「新透谷像の出現」⁽¹⁾ということで喧伝されている平岡氏の論文を主に取り上げ、問題を考えながら、その当否を問うて行くことにしたい。

平岡氏の透谷論の特色は、「国民」もしくは「民衆」の観念を、その中枢に据えたことにある。国民もしくは民衆といったが、これはひとまず平岡氏にならって言ってみただけにすぎない。この二語の意味するものは決して同じでなく、むしろそこを見極めて立つことこそが大切であるはずだと私は思うのだが、平岡氏の場合は、「国民にかけた」というその同じことが次には「民衆にかけた」と表現され、その反復、積み重ねの中に論述の効果が上げられる形になっているのである。この辺の概念のあいまいさについては、既に小沢氏も指摘しておられるが、これはやはり簡単に見過してよい問題では

ないと思われる。「国民」「民衆」のほか、平岡氏の用語は、「平民」「民族」「国民大衆」と、その場に応じて自在に変化し、それがいかにもあざやかに眼に映るのだが、しかしそこに、一種大ぶりの粗さを感じられることも事実なのである。それは単なる用語の問題では決してない。「国民こそ透谷の核である。」「国民にかけることで自己を定立しえたところに今日色あせぬ透谷の現実性が存在している。」と、いくら強調しても、その国民自体の闡明が十分でないなら、それは所詮概念的な言いぐさであることを免れないし、つまりは鍵であり、核であることをみずから否定して立つ形にもなりかねないのである。氏自身としては、これを、民権運動離脱と、実践的な民衆把握を軸にしてみ、だからこそ「国民」すなわち「民衆」であって、そこに毫も問題はないと考えておられるようだが、その辺の論述に、一種の観念化もしくは単一化がありはしまいかと私は考へる。

色川氏の場合も同様である。例えば「慈善事業の進歩を望む」

(明27・6「評論」、執筆は二十四・五年と推定される)について、氏は「勇敢で勉勵なる人民(貧民)こそすべての富の源泉、国家のあらゆる創造と力の源(一國の隆替を支配する者)、国民の眞の実体であるという認識の深まりがここにみられる。透谷のナシヨナリズムが、この地点に根底をおいていたということが、やがて、かれと羯南、蘇峰らのナシヨナリズムとを区別する。かつて、民権期に、素朴な「観念」としての民権論のもと、「実感—原体験」の域をでなかつた透谷の人民観は、明治二十年以降のキリスト教の洗礼をへて(生命の

尊嚴と平等の思想に媒介され)、いったんは近代ヒューマニズムの人間観のなかに解体された。しかし、今や現実の日本の階級矛盾を直視することによって「人民—国民」の観念として結晶されようとしていた。(傍点筆者)と解説されているのだが、傍点部分の語など、引用されている原文自体の解釈としても既にかなりされているのではないかという感じが私にはある。確かにこう整理すれば、色川氏自身の論理展開のためにはいいのだろうが、私はそこに自己流というか、読み過ぎというか、ともかく透谷自体からのずれを感ぜずにいられないのである。

透谷と「国民」透谷とナシヨナリズム、あるいは透谷と「民衆」、人民を、私ならやはりそう簡単につないで言い切る気になれない。「国民」をもつてただちに「透谷の核」としたり、魅力解明のための唯一の鍵とみたりすることもできない。「国民」の語の特別な強調にもかかわらず、平岡氏が言おうとしたところは、本質的には「民衆」ではなかつたかという読みが私にはまずあり、しかしその線で行くなら、私ならばもっと奥の「民族」のようなもの、それと「市民」意識の問題として見つめてみたいという考へがあるのだが、以下その線で検討を進めてみる。

二

「国民と思想」(明26・7)をはじめ、確かに透谷には「国民」を言ったものが多い。「明治文学管見」(明26・4)なども、その特に目立つ評論である。これらとほぼ同時期の「文界時事」(2)(明26・4)、

「偶思録」(明26・7)にもこれはある。平岡氏は、この線を形成するものとして、早い頃の「時勢に感あり」(明23・3)、「泣かん乎笑はん乎」(明23・4)、「文学史の第一着は出たり」(明23・5)、それに「一種の撰夷思想」(明25・6)、「徳川氏時代の平民的理想」(明25・7)のよななものもあげておられるが、これらはそう簡単に一括できないように思う。むしろ、これらと国民とをただちに一元的に結んでためらわなかったところに、平岡氏の性急さがあらわれているように私は感じる。

「文学は時代の鏡なり、国民の精神の反響なり」(明治文学管見)、「文学は純乎たる国民の声ならざるべからず。文学は時代の元気の注ぐところならざるべからず。文学は一国のプライドとして、国民独特の礎の上に立たざるべからず」(文界時事)、「願はくは我が文学をして一層、国民的思想に進ましめ、一層、一国の精神に係あるものたらしめん」(偶思録)などという語を並べてみると、透谷はなるほど国民を文学の核と考えていたようにも受け取れる。が、肝心なのは、これがどういう論理で、どういう風に説かれているかという問題である。国民ということば自体の頻用は必ずしも重要なことではない。これは当代ジャーナリズムのいわば流行語だったのであり、文学面に限ってみても、これを唱道するものは決して少なくなかったのである。透谷はむしろ、これに触発された形で「国民と文学」のテーマに切り込んで行ったのではないかと思われるふしもあるのだが、とにかくそれを最も具体的に論じたのが「国民と思想」であり、しかもそこで透谷は、「国民」が至上の命題ではなかった

ことをおのずからに示す形になっていると私は理解する。おそらく透谷は、彼のいわゆる「思想の聖殿」の中で、国民的契機なるものをどう捉えて行くかということをおの文のテーマとして意識していたに違いないのであり、それを何よりもみずからの課題としてつきつけているのだという風に私は読みとる。冒頭すでにそれはあきらかである。

「一国民の心性上の活動を支配する者三あり、曰く過去の勢力、曰く創造的勢力、曰く交通の勢力。今日の我國民が思想上に於ける地位を詳らかにせんとせば、少なくとも右の三勢力に訴へ、而して後明らかに、その關係を察せざる可からず。」

すなわち透谷は、「我國民が思想上に於ける地位」をあきらかにせんことを志したのであり、そのためにも「一国民の心性上の活動」の考察にかかったのである。そして、具体的にこれを分析し、あるべき方向を探っているわけだが、「国民の鞏固なる勢力は必ず一致したる心性の活動の上に宿るもの」だとの観点から、その結合をもたらしうべき「主義」「信条」として、「尤も多く並等を教ふるもの、尤も多く最多数の幸福を図るもの、尤も多くヒューマニチーを發育するもの、尤も多く人間の運命を示すもの」をあげているのである。つまり、透谷にあつては、「国民」は「国民」である以上、「民」更には「ヒューマニチー」、「人間」そのものとして思ひ描かれているわけである。「余はインデビジュアリズムの信者なり、デモクラシーの敬愛者なり」とみずから揚言するその立場こそ、実は透谷の最も本質的な部分だったことを見ずえておく必要が

ある。

「明治文学管見」もこの点で変わりない。「精神の自由を欲求するは人性の大法にして、最後に到着すべきところは、各個人の自由にあるのみ、政治上の組織に於ては、今日未だ此目的の半を得たるのみ、然れども思想界には制御なし、之より日本人の往かんと欲する希望いづれにかある、愚なるかな、今日に於て旧組織の遺物なる忠君愛国などの歧路に迷ふ学者、請ふ括目して百年の後を見ん。」と言ひ、「國民をして、出来得る文自由に其精神を發揮せしめん」と希望し、「之を要するに個人的精神は長大足の進歩を以て、狭き意味に於ける國家的の精神の領地を掠め去れり」と論断するその立場は、國民を高唱し、國民の思想を説く方向とは全く質を異にする。

しかし、もしこれだけであるならば、透谷における國民なり、國家なりは、ただ抽象的に思惟されただけの、内実の弱いものになつていたろう。思想は思想として眞の鍛錬を経ないまま、要するに浪漫的だとか、純粹だとか、偉大なる夢想だとか言われるだけのものに留まつていたろう。注意すべきは、透谷が、こうした理念としての國民のイメージの一方に、現にある國民のその牢固たる重さを感じたりと見据えていたところにある。平岡氏も実はそこを論点としておられるのだとは思ふのだが、しかしその實際の理解に私は決定的な違和を感じる。

結論的に言えば、「國民」という風な語ではもはや拗いようなもの、言うなれば「民族」などの語の方がよりふさわしいもの、

その意味では「民衆」そのものよりも根が深く、それだけかえって困難であるものを私はそこに感じるのである。「民衆」の更に芯にあるもの、「絶対主義体制」のそのまた底を貫くものに対する認識、自覚が、そこには確かにあると私はみる。透谷が、いわゆる國民を、その本質的な深さと、困難さにおいて意識していたという事実をこそ、私は重視したく思う。そしてそれに眞に対決することによつて、透谷は見事な現実性と同時に現代性を獲得できたのではないかと考へる。それは、ナショナリズムなどという語では、到底表出不能なものである。

「國民」について、透谷はおよそ次の如く言っている。「國民は必らず國民を成すべき文の精神」を有する。その精神とは、つまり「渠を囲める自然」からする「天然の性情」「特異の性格」であり、これこそ「幾千年の間その國民の活動の泉源」たりえてきたものである。この意味では、國民もまたそれ自身「一個の活人間」であり、みずからの「意志」を持ち、「自由」を希求し、「國家てふ制限の中に在つてその意志の独立を保つべき傾向」を有するのだ。――要するに「國民」とは、同じ自然環境のもと、おのずから醸成された「性情」「性格」を芯にとらえられているのであり、国そのものの「盛衰興亡」の奥にある本質的な実体として意識されているのである。これは「人民↓國民」などという形で整理できるものでは決してない。「國民の元気」ということばも、少なくとも透谷はこの観点から吐いている。「徳川氏時代の平民的理想」にいう「我邦の生命」、「地底の水脈」、さかのぼつて「一種の攘夷思想」中の「我

国固有の思想なる三千年來の長江」、更に早い頃の「文学史の第一着は出たり」で「真に日本なる一国を形成する原質」「其人民の性情」と言っているものの本質も私は同じに理解する。「詩人も亦た愛国家なり、詩人も亦た国民の中に生くるものなり」という場合の「愛国家」「国民の中に生くるもの」も同じ線で言われたものであり、詩人が「その国民を代表する」というのは、要するに「天賦の気稟」においてだと説かれていたのである。透谷が「思想の思想」「而して又たその思想の思想を支配しつべきもの」として国民を据えたのは、正にこういう意味においてであった。

もつとも、この観点だけに沿って言うなら、これは透谷だけに独自のものでは決してなかったと言えるかも知れぬ。政教社に代表される二十年代初頭の日本主義は、いわゆる国粹主義や国家主義とは違つた次元で、この面を自覚、強調したものである。「粹然たる靈秀の氣の萃る処、赤人が詠みし不尽の根は、八面玲瓏舊の如く、石山寺に紫女の天才を揚揮せし塩ならぬ海は、花より麗なる松の影依然たり……」とこの国の自然を賛え、「此に生れ此に養はるゝの日本人、其の理想の特色、礼文風尚、辞章美芸……」を説く三宅雪嶺の言辞などにこれはよくうかがえる。透谷もおそらく、これと無縁ではなかつたのであり、例えば「富嶽の詩神を思ふ」など、そうした所で共通の基盤に立っているような感もあるのだが、しかし透谷は決してそこだけに留まっていたのでなかつた。「優秀なり」「莊嚴美麗なり」とひたすらこれを賛美し、人類に対して崇高の任務あることを説く、そのいわば樂天的な論調とは根において異なるものが

透谷にはある。創造の源泉、命ある流れとしてももちろん把えてはいるのだが、一方では、みずからを足踏みさせ、迷わせ、時には奈落に引きずりこもうとするマイナスの要素としても意識されていた感があるのである。

日本人の性情、性格について、透谷は必ずしも具体的にふれているわけでない。が、「進歩的思想に与する」と言いながら、しかしそれも「自然の順序を履」まねばならぬ、「国民のデニウスは、退守と共に退かず、進歩と共に進まず、その根本の生命と共に、深く且つ牢き基礎を有」するものだからと説く時、透谷は、新たな生命の翹望の一方で、「思想」を「思想」として生かすことを容易には許さない、この国のいわば体質のようなものを、実は直観していたのではなかつたらうかと私は考える。

もちろんごく一般的に言つても、思想の現実化はそうたやすい問題ではない。それを透谷はよく自覚していた。しかもこれを特に痛切ならしめたものこそ、日本人の精神、国民の性情に対する認識ではなかつたかと私は考えるのである。例えば「一種の攘夷思想」中に、透谷は次の如く言っている。

「つらく思ふに、寂滅為樂の幽妙なる仏味と宗教的虚無思想が吾人の中に存して、吾人の生靈を支配せしこと久し、貴族的思想の族長制度と印度教との父母より生れて、堅く其地歩を占め、以て平民的共和思想の発達を妨げ居たる事も既に久し、空漠たる大空を理想とする理像に富める哲学者は多けれど、最後の円満なる大理想に思ひを馳する者はあらず、何事も消極的

に退縮して、人生の靈現なる実存を證することなく、徒に虚無
 縹渺の来世を頼む、斯の如くにして活気なき国民となり、萎縮
 しやすき民人となりて、今日の形勢には推し及びぬ。」

それがすなわち「東西兩大分割の未来の勝敗を算して、おもむろに
 邦家の為に熱血を灑ぐもの」なからしめ、「杳遠なる理想境を觀念
 して、危淵に臨める群盲の衆生を憂唸する者」なからしむるその根
 本の因ともなっているのだと透谷は説くのである。「国民と思想」
 で、どんな「蔽医術を以てし」ても、どんな「輕業師の理論を以
 て」しても、「國民は頑として之に従ふべからざるなり」と言わざ
 るをえなかつたそのことの裏には、名だけの進歩に対する安易な夢
 を排除する姿勢もさることながら、如上のようなものの実感がやは
 りあつたとみてよいのではなからうか。真に革新的な思想の達成、
 成就の困難さを、透谷はおそらくそこにみていたのである。みずか
 らの思想の確かさにもかかわらず、というよりそうであるがゆえに
 なおはつきり見透さざるを得なかつたというところが、透谷にはあ
 るのでなからうか。「アモクラシー（共和制）を以て、我國民に適
 用し、根本の改革をなさんとするが如きは、極めて雄壮なる思想上
 の大事なり、吾人は其の成功と不成功を論らはず、唯だ世人が如何
 に冷淡に此の題目を看過するかを怪訝しつゝあるものなり」ともら
 す何気ない口吻のうちにも私はそれを感ずる。

「透谷は革命民主主義的な人民像は構想しえなかつた」と色川氏
 が言われるのは、それはそれとして真実だが、そうあらしめたもの
 として、私はそこにかかる現実への直観みたいなものを読みとれる

気がするのである。小沢氏が、「彼の思想は、ある意味で幼いが故
 に、根本的な魅力と根源的な意味での革命への可能性をもっている
 のではなからうか」と言われているのなども、その可能性を透谷の
 中で疑わせたものは何だったのか、この点を見つめないで、安易に
 革命の観点を持ちこみ、論ずることは不遜であり、当を欠くことだ
 と私は考える。如上の点をあわせ眺めた時、「幼さ」のむしろ対極
 に立つ思想がはつきり見えてくるのではないかと私は考える。

透谷の世界は、もちろんこうした深みにのめり込むだけで終つて
 はいない。こういう直覚あつたればこそなお身を起し心を起して、
 創造につく事の要を透谷は説いたのである。「國民の生氣は、その
 創造的勢力によつてトするを得べし。尤も多く保守的になるとき、尤
 も多く固形的なる時、國民は自然に墳墓を眺めて進みつゝあるな
 り。創造的勢力は、潮水を動かして、前進せしむるもの、之なくては
 思想豈に円滑の流動あらんや、之なくては國民豈に、進歩的生氣あ
 らんや」と叫び、遂には潮水をも動かして前進せしむるものとして
 創造的なエネルギーを求めたのである。「翁鬱たる大樹の如き思想」
 樹立の為に「耐久の修養の力」に期待したのである。そこに私は、
 「歴史」に対する透谷の究極の信頼のようなものをもよみとる気がす
 る。一投手、一挙足の間に転移することはむしろ望めなくとも、歴
 史として思想そのものが定着する日を信じていたごとく思われる。
 「この世界には永久の桂冠あると共に、永久の義罰あり。この世界
 には曾つて沈静あることなく、時として運動を示さざるなく、日と
 して代謝を告げざるなし。主観的に之を見る時は、此の世界は一種

の自動機関なり、自ら死し、自ら生き、而して別に自ら其の永久の運命を支配しつづつあるものなり。」という思想の背景には、「明治文学管見」に、「真正の歴史の目的は、人間の精神を研究するにあるべし。人生実は無辺なり、然も意味なき無辺にあらず、畢竟するに精神の自由の為に砂漠を旅するものなり、希望爰に存し、進歩爰に萌すなり、之なくんば凡ての本皆な虚偽なり。」という信念があり、それが一つの希望として心中に掲げられていた事を私は注視しておきたく思う。透谷の文が持つ張り、充溢は、これが、既にみたような日本の奈落を内にひめることによって、なお一層つきつめられて出てきたものと理解することもできるのではないかと私は考える。

勝本氏が、「透谷の生涯に見えざる一線が画された」と言い、「一つの断層、追いつめられた者が絶体絶命の場で飛び越えた一つの質的飛躍」があると指摘される二十六年夏以降にも、これはテーマとして明瞭に持ちこされ、追求されていると私はみる。「思想の聖殿」(明26・9)、「漫罵」(明26・10)などは、如上の考察を、厚い壁の中でおお貫き通そうとした透谷ののっぴきならぬ道筋を示すものである。

「社会と名づけ、国家と呼ぶも、要するに個々人間の最上府が、自由の意志を以て相結托せる衆合躰に過ぎざるなり。帰着する所は一個の最上府なり、爰に総ての運命を形成せり、爰に総ての過去と、総ての未来とを注射せり、歴史は其過去を語り、約束は其の未来を談ず。而して真個に社会の、国家の、人間の精神たる此の最上府を圍繞し、其の運動を支配し、其の一是及

び一非を左右するもの彼の「思想」なりとせば、其の威力の壮大なる、得て名状すべからざるものあるなり。顧みて明治以後の歴史を見よ、如何に其政治社会が紛糾錯雑して、奇々怪々なる役者の乱舞跳梁を許したるか。如何に其の文学社会が、暴騰暴下して幾多の才子を送迎したるか。政治の如き文学の如き、実にこれ「思想」が正当に擁護せらるべき聖殿の築かれてあらざるべからざるところなるに、悲しいかな、未だ其の礎石さへも見る能はず。」「(思想の聖殿)

「国としての誇負、いづくにかある。人種としての尊大、何くにかある。民としての榮譽、何くにかある。適ま大声疾呼して、国を誇り民を負むものあれど、彼等は耳を閉ぢて之を聞かざるなり。彼等の中に一国としての共通の感情あらず。彼等の中に一民としての共通の花園あらず。彼等の中に一人種としての共通の意志あらず。」「(漫罵)

明治の現実、国民、民衆というより、更に根深い精神の構造、風土みたいなものにぶつかりつつ、しかしなおそこで、人間の精神、思想そのものの本格的な覚醒を促すべく、透谷は声をあげてよびかけているのである。前者は、それを「個」の自覚において期待し、後者は「場」、言いかえれば日本人の歴史として要望していると言えもするだろう。「自己の中に存在する使命」を思い、「一国としての共通の感情」「一民としての共通の花園」「一人種としての共通の意志」を言う時、透谷は、民族を、日本人を、つまりはわれわれみずからを、何よりも「心性」において近代的に開花せしめることを痛

切に希求していたのではなかつたらうか。

それは、人間精神の本来的なありように対する何よりも堅い信念からきたものであった。その場合、国民とは、避けて通らるべき課題ではなかつたけれども、こうした思想的命題の中に結局は大きく止揚されるものとなっているのである。国民は確かに透谷の世界の振幅を大きくした。そしてこれとの対決をみずからに課することによって、透谷は日本の近代の本質に迫り、そのまた歴史をいわば典型として生きたのだと思う。しかし、これは、平岡氏が思い描いたような線だけでは決して捕捉できるものでない。

三

「民衆」という語は、透谷の鍵として、少なくとも「国民」よりは有効であるがごとく思われる。平岡氏の論が、「国民」より「民衆」の強調に事実として行っているのも、つまりは透谷のありようからして自然であつたと言ふべきかもしれない。この「民衆」が必ずしも「民衆」という次元だけで考えられていいものでないことは、既に幾分分れてきた形になっているが、今一度じかにあつてみる。

この面を重視する透谷像については、色川氏がその「基礎構築の協力者」としてあるわけだが、その色川氏にして、次のような発言のあることがまず注意される。

「あれほどまで民衆が重視されていながら、平岡氏の著書ではその民衆が透谷の原像としてはつかまれていない。それは、

透谷にいかにか把握されているか、という把握のされ方、透谷との関係のしかたとしてしか入りこんでいないようにおもわれる。」³⁾

これは、透谷における民衆的なるものは何かという本質的なことが、平岡氏にあつては、遂に不問に付されているということの指摘ではないかと、私は私なりに理解する。透谷が民衆をいかにみていたかということは、なるほど色川氏の言われるごとく、「受動的な、悲惨な同情さるべきもの」という風な形でよみとれる。が、それはそれだけであつて、あとは「賭ける」という、きわめて魅力的ではあるが、しかし実体はいまいいな標語によって片付けられ、透谷理論の中核としてどうあるのかということについては、ほとんど有機的に説明されていない感があるのである。そこに私は、平岡氏の論の「息苦しさ」というより、むしろ「空白」を感じないではない。

色川氏の場合は、逆に「エネルギーにみちた生きいきした民衆群」を透谷の周辺にみ、「慈善事業の進歩を望む」などを例にして、「インターナショナルな勤労民衆への共感のイメージ」⁴⁾を強調されようとしている。しかし、透谷理解として、これは果してどれだけの普遍妥当性を持ちうるだろうか。平岡氏の民衆には共感しうるものも、ここまではついて行けないというのがむしろ自然ではあるまいか。とにかく、どこかで透谷についていながら、どこかで離れて、そこで理論が理論として組み立てられているといったようなある感じを私は拭いえないのである。

私達にとって大切なことは、ことば自体から更にその内部構造に分け入り、その本質と、本質が作用するところのものを見通すことであるはずである。こうみる時、「時勢に感あり」「泣かん平笑はん平」「慈善事業の進歩を望む」などにあらわれたもののみを以て、ただちに透谷像を構築することに私はやはり同じええないのである。透谷という個体、そのカオス、それが文字通りカオスとして発する一つの稀な円光、その魅力の本源を、ここを抑えることによつて一切解明できるとは私はどうしても思わない。平岡氏がこの面を強調したその一方で、別に観念的系列なるものをあげないではいられなかったこと自体に、平岡氏の立論のある破綻がのぞいているようにも私は思う。透谷にあつては、「観念は観念、現実¹は現実というふうに分裂」しており、「現実意識はその現実をのりこえるための観念をよび起こし、観念はふたたび現実意識を深めて行く」といった充分な往復運動、統一、発展ができていたかどうか問題だと平岡氏は言われるが、これは要するに平岡氏の観点がそう感じさせたのであつて、「民衆」も透谷に即してこれをつかみなおして行くなら、正にこれの緊張関係と、それを更に奥で支えているものに至りつくのではないかと私は思う。この緊張は、平岡氏自身も実は底において見ておられたと思うのだが、これを現実的²云々ということでもまず最初に固定化したところに、遂に分裂した形でしかこれを言ひえなかつたゆえんがあると私は考へる。

「過去の勢力と、外来の勢力とが、勢を較して、陣前馬頻りに嘶く³の声を聞く、戦士の意気甚だ昂揚して、而して民衆は就

く所を失へるが如き観なきにあらず。」(「國民と思想」²)
 「思想界には地平線⁴的思想と称すべき者あり、常に人世の境域にのみ心を注め、社会を改良すると曰ひ、国家の福利を増すと曰ひ、民衆の意向を率ゆと曰ひ、極めて尠雜なる目的と希望の中に働らきつつあり。國民は尤も多く此種の思想家を要す、凡そ此種の思想家なき所には何の活動もなく、何の生命もなし。」(「國民と思想」⁵)

これらなど、就く所を失つた民衆を真に率い、指向して立つべき思想を確かに強調し、待望してはいるのだが、しかし文は決してここで終つてゐるわけではないのだ。こうした「地平線⁴的思想」「俗物」の思想が最も多く必要であることは認めるが、しかしそののみをもつて自足してはいけないのだというその先にこそ、この論のポイント⁶はあつたと私はみる。いわゆる「高踏的思想」の唱道である。肝心なのは「真正のカルチャー」「ヒューマニチー」「人類の大目的」そのものなのであり、その為⁷にこそ高踏的思想が更に本質的な意味で要望されるのである。こうみていくと、その論調は、「人生に相渉るとは何の謂ぞ」「内部生命論」の論点とピタリ重なる。「國民」「民衆」の見地を表面に立てながら、しかし透谷はそれを越える観点をこそ、みずから提出してゐるわけである。現実には有効な思想も、手だても、それのみではしかし何物でもありえない、それを真に有効ならしめ、貫かしめるものこそ、「平坦」なる現実を超えて立つ思想なのだという積極的な主張がここにはある。要するに透谷は、本質的な思想のありようというものを結局は説く形になつ

ているのである。そしてそれは、挫折、屈折の線上にあるというより、その最もまっとうな展開、言うなれば弁証法的な充実として理解さるべき質のものであるように思う。「高踏」という風な、いわゆるマイナスの評価から身をよけず、これをむしろ積極的な意味に転用し、標榜しえたのは、自己の中からするそうした自信のゆえと私はみる。

「平民」の主張も同じ観点から進められている。「徳川氏時代の平民的理想」「明治文学管見」とともに、これを基調において文学史を志したものであることに異議はない。しかしそれだけなら、これまた当時の時代的標語、もしくはテーマを文学に持ちこんだという以上の何物でもありえなかつたろう。例えば前者をさして、平岡氏は、それを「鋭く、卓抜」ならしめているのは「当代まれな平民の把握」であると言ひ、「透谷を読んでここにつきあたるとき、私はもっとも透谷を感じるのである。」ともらされるのだが、「当代まれ」なのは、平民の把握そのものというよりその把握の仕方なのであり、それが我々に正に透谷を感じしめる因子になつていたのである。

私は、透谷のいわゆる「平民」とは、詮ずるところ「精神の自由」の体現者、もしくは希求者であり、その意味において中心の課題たりえたのだと理解する。蘇峰の平民主義のとらえ方にもそれはあらわれている。

「平民的の一字、近頃濫用せられる事となりて、民友子を諷する者多しと聞けり。文字の平易を貴ぶ余りに、平民的文章など言ひ出るものありとか。(中略)吾人は民友子が平民的の一語を

習用する所以のもの、貴族的の一語に對して云ふに過ぎざるを知るなり、而して平民的と云ふ言葉の底には、個人的の意味より外に何物も之なきを信ずるなり、(詳しくは明治文学管見の上にて言はしめよ。)(静思余録を註む) 明26・6)

これは、そのまま透谷における平民を示す語句だと言えるのではあるまいか。「余はインテリゲンチヤリズムの信者なり」の語が、ここでもあきらかに想起される。

「徳川氏時代の平民的理想」も、要するに上に示したような「精神の自由」の、徳川期の平民におけるあらわれ方と、その意味を考察した文なのである。例えば「粹」「俠」の分析の鋭さにしても、そのおかれた現実の暗さを抑えるだけでは可能でありえなかつたはずで、その中でなおあらがい続けた「人間天賦の靈性」としての「自由」の願望ということとで本質的に説かれえているのである。透谷にとつて唯一の内実は、人間における精神そして自由の問題であり、平岡氏流に言えば、その課題にこそ透谷はおのれを賭けたのだという風に私は理解する。それが一方では人間の実存そのものの領域に分け入り、一方では現実のありよう、もしくは歴史との対決に迫らせることになつたのである。平岡氏が、もう一つの系列としておかれた「蓬萊曲」なども、私はその意味で一元的に把握することが可能だと思ひ、もしそこに違いがあるとすれば、これは、ジャンル、それにもなう表現上の問題、更にはその面における透谷の資質の問題として考えらるべきことのように思う。

「明治文学管見」に躍如たるものも同じ精神の高唱である。「真正

の歴史の目的」を「人間精神の研究」におき、徳川期の平民文学に及んで、「読者の記憶を請んとすることは、斯の如く発達し来りたる平民的思想は、人間の精神が自由を追求する一表象にして、その帰着する処は、倫理と言はず放縦と言はず、実用と言はず快樂と言はず、最後の目的なる精神の自由を望んで馳せ出たる最始の思想の自由にして、遂に思想界の大革命を起すに至らざれば止まざるなり。」と説き、明治の思潮を「民権といふ名を以て起りたる個人的精神」と表現し、国民たるの「権義の発達は即ち個人的精神の発達」なのだとか明かして行くその線からは、平民的理想そのものは決して出てこない。平民は、それに特有な歴史性もしくは社会的性格をさしおいた所でむしろ語られているのである。これはただ自由の表象としてのみ説かれているのである。

平岡氏の場合は、透谷におけるこうした民衆の構造を軽くみて、ただあわれな同情さるべき対象としてのみイメージ化して行った感があり、そこに大きな偏りがあったことを私は感ぜざるを得ない。平岡氏は、透谷がみたまものこそ明治の革命の現実なのであり、だからこそ透谷は、民権運動離脱という負い目を打破して、真実そこにかけることで自己定立を果しえたと言われるのだろうか、それでは、徳川期の民衆の文字通り精神を、明治維新招来のエネルギーとして評価しえたその根拠も崩壊することになりはしないだろうか。「暗らきに棲み、暗らきに迷ふて、寒むく、食なく世を送るのみ」の民衆の認識だけでは、そうした民衆のどこに何をかけようというのか、透谷の言辭は、一切ただ空を奔っていたということにもなり

かねないのではないかと私は考える。透谷が、徳川期について認めたのは、現実変革の力にまでなりうるエネルギー源としての人間の精神であり、だからこそそれを、民権挫折後の状況の中で、あらためて根本から自覚し、更に確固たる「思想」として樹立することによびかけたのではなかつたらうか。透谷の諸評論は、全体この線で見るとれるのではないかと私は考えている。

以上みたような民衆像、もしくは平民像は、つまりは近代市民像の把握の確立を意味することになると言っていであらう。平岡氏が透谷にみいだされた民衆とは、要するに「庶民」でしかなかつた。透谷が説いたのは、そうした庶民をも遂には覚醒させる力として有効であるはずの「精神の自由」の自覚であり、それはつまり近代的市民への脱皮、内からする確立をよびかける声でもあったのである。この意味からするなら、「国民、民衆、平民」にかけたというよりは、つまりはその一切を収斂するものとして「市民」にかけたという方がはるかにふさわしいように私は思うし、そこに透谷の確かな歴史性をもみる気があるのである。「寒むき食なき」現実からの解放自体を志しえなかつたところに、透谷の限界のようなものを指摘すれば指摘できるであらうが、ともかくそうしたマイナス面をも含めて、透谷は正に近代市民の精神の風土に立っていたのだと言ふことができると思う。この点では、在来の透谷像の持つ妥当性も私は十分認めずにいられないのである。

四

平岡氏が、小田切氏の、いわゆる孤立せる透谷像に不満を覚えた心意はよくわかる。しかし、国民と公民衆にこだわるあまり、その弁明にもかかわらず、結局はアンチテーゼとしての意味しか持ちえないような透谷論を形造ってしまうことになったのではないかと私は考える。それは透谷の全体像の中に組み込まれて然るべき部分であるにしても、そしてそれが今までとかく軽視されていたことからすれば、やはり特別に強調さるべきところであったにしても、平岡氏流に行けば、かえって又一面的な固定化を招く危険は大きいと思う。平岡氏が、笹淵氏あたりとの対決を、むしろ意識的とも思われるほどの姿勢で避けたのは、この意味からしても、妥当でなかった。

小田切氏や笹淵氏の透谷像に賛同するといふのでは決してない。

「孤立」とか「絶望」とか「内面の世界」とかいう語では到底も切り切れない鬱勃たるエネルギーが透谷にあることは事実だし、キリスト教とか外国文学とかからの照射だけでは解き切れない渾沌がそこにあり、それが独自の緊張をはらんで人を魅するもの確かなのである。平岡氏が取り上げた諸評論など、そうした面ではやはり特徴的なものであった。その平岡氏すらが、もはや敗北的と言われる「漫罵」にしてさえ、なお「共通の場」を求めようとする悲痛なよびかけとして成り立っていることを、私達は十分認めねばならぬのである。例えばこのようなものを、平岡氏は「かける」ということばであらわされたのであつたらう。

ただし、ここでも透谷は、結局は本質的な「思想への渴望」を語り続けているのである。「汝を囲める現実」の悪を、透谷がここでこそ真にえぐりえているのは、その思想に殉ずるの究極の心意があったればこそだろうと私は思う。もちろん、これは、いらだちと苦渋に充ちたものではある。透谷が明光への信頼にもかかわらず遂に引きずらざるをえなかったその嘆きを、私は既に、透谷のいわゆる思想の思想を支配しつべきものとしての日本人の性情、体質の自覚にまで及んだものとして理解してきた。それは絶対主義体制などの戦いよりもはるかに強く透谷を内側からしめつけていたに違いないという風に私は考える。それは、決して外なる問題ではなく、ほかならぬみずからの問題でもあったのだった。これは透谷の諸評論、詩など、要するにそのすべてが如実に示しているところである。底へ底へと自分を引きずりこもうとするものを透谷はおそらく常に身内に意識していた。当初から現在に至るまで、人々が透谷に指摘する少からぬ問題点、たとえば汎神論的だとか寂滅的だとかいわれるものを、おそらく透谷は誰よりもよく自覚していたのであり、それと思想との対決を自己の存在の課題として追いつづけたのである。透谷の世界の息苦しい充盈感はそのに孕まれたものであり、そしてまたそれをかけがえのない代償として、透谷は日本の近代史に確たる思想と文学の礎を築いたのであった。

注

(一)(二)(三)(四)「新透谷像の出現—平岡敏夫氏の近業に寄せて—」色川大吉(思
想「昭42・12)

君死にたまふことなかれ

翁 久 美

一

日露戦争下の明治三十七年五月に、晶子は鉄幹との共著「毒草」、三十八年一月に山川登美子、増田まさ子との合著「恋ごろも」を刊行した。これらの詩歌集はいづれも戦時特色を全く帯びていず、純文芸的なロマンチズムの特色をもつ「明星」の従来のある方を誇示した作品が多く掲載されている。

「毒草」刊行にあたって、鉄幹は「明星」三十七年二月号に「今や軍国多事の際、一面に於て是等文芸趣味の新書を繙くも、まこと大国民の雅懐ならずや」と予告しているが、その「毒草」初版には、軍国唱歌「旅順口封鎖隊」「嗚呼広瀬中佐」が巻末に載せられていた。この二篇の詩は「明星」に見えず、いつどのような事情でつくられ、鉄幹がなぜこの二つの詩を「毒草」に収めたのか判然としない。ただ、日清戦争中は戦勝をほこる詩歌を多く発表していた

鉄幹であったが、戦後「心の華」(明31・11)に発表した「血写歌」(「鉄幹子」明34刊所収)では戦争を批判している。また日露戦争中の三十七年七月の「明星」には内藤鳴雪が「桃五句」の詞書に「鉄幹から文ありて文芸の士と戦争とは無関係なり」(以下傍点筆者)とかいており、さらに同年九月の「毒草」再版に当って前記二篇の軍国唱歌を削除していることから、日露戦争にあたっては、かつての日清戦争の時と違って、鉄幹は戦争そのものに批判的であったとみることができよう。

三十七年九月の「明星」に、晶子の「君死にたまふことなかれ」を鉄幹が載せたことは、このようにして理解できる。この年の十月の「太陽」に世を害する思想、大胆なわざと誹謗され、桂月からも二回に亘る酷評をうけた「君死にたまふことなかれ」を「恋ごろも」に収めたことも、また鉄幹の戦争をいとう気持ちが、はっきりしたものであったからである。

日清戦争の時には、その原因となつた朝鮮半島の三年ごしに亘る複雑な関係もあつて止むを得ず戦争に向い、一国を挙げて開戦を望んだが、日露戦争の時には、すでに戦争による被害、人命無視などの惨状、戦後の日本の政策などから戦争への批判は高まり、開戦、非戦両論が対立していた。

非戦論は社会主義とキリスト教の立場から論ぜられ、すでに日清戦争後、二十九年十一月の「六合雜誌」に大西祝の「社会主義の必要」が発表され、三十年一月には日本基督教青年会同盟が成立し、七月には労働組合期成会が設立し、三十一年十月には、幸徳秋水らによる社会主義研究が組織され、社会小説や反戦論がさかんに提唱され、戦争を罪悪視する思想が澎湃としていた。

三十六年十一月には、幸徳秋水、堺利彦による社会主義提唱の平民社が設立され、「平民新聞」が創刊された。そして同年四月には「都市社会主義」（片山潜）、七月には「社会主義神髓」（幸徳秋水）、「我社会主義」（片山潜）などの評論があり、この年の四月には大阪で日本社会主義者大会が開催され、五月号の「萬朝報」には、外人の手記による反戦記事など、同誌の六月号には内村鑑三の反戦論が掲載され、十月には社会主義協会や神田青年会館で、彼の非戦演説が講じられたのである。また開戦の月に戦争反対の社会主義演説も開かれた。このように「平民新聞」を中心とする社会主義運動は、反戦の拠点を作り、三十八年一月に禁止されるまで圧迫を受けながら戦つたのである。

かくして日露開戦を非とする思想が強かつたが、一方では軍部や

政府のやり方に賛成する対露同盟会もあり、また時の帝国大学教授であつた戸水寛人らの七博士が首相桂太郎を訪問して開戦意見を述べたという「日露開戦纂」もあり、日英同盟による提携から遂に開戦となつた。

二

開戦を賛成していた時の文芸批評家であつた大町桂月は国家主義を標榜する三十七年三月の「太陽」に「戦争観」と題して、人生は戦争なりとし、戦争によって人間の活動、進歩、幸福ありとし、宇宙の壮美は戦争から生じ、戦争の中で最も壮美を極めるものは兵と兵との戦いなりとし、さらに翌月の同誌に「戦時の文壇」と題し、「戦争は文壇に災せずして却つて幸せなる也」と書き「有害なる文学とは星と董とに涙をこぼす」文学であり、「恋愛の二字にのみ浮身をやつす一種の色狂」の文学だと指摘した、これは明らかに「明星」一派への批判であり、警告であつた。そして詩人たるものはこの戦により、我が国が世界一流の文明国、武強国となつた所以を発揮すべき「大文学」を生むべきと強調し、国民に戦争の重大性を説き、戦勝国としての矜持と抱負とをもつことを説き、皇室の尊厳を絶対としてゐる。

これほどまでに好戦的だつた桂月が晶子の詩「君死にたまふことなかれ」を読んで平静を失つたのも当然のことである。彼は「太陽」誌上に二回に亘つてこの詩を攻撃した。晶子のこの詩の成立には、そのころの非戦論の影響も考えられようが、何よりも晶子のもつ人

間尊重の強い意志が戦争によって肉親を奪われるという素朴な怒りとして爆発したものと見るべきであろう。それは人関のもつ愛情を大切に確保しようとする個人主義的な自我意識であり、忍従を美德として女を束縛して来た封建性への対抗意識であり——これこそまことの心を解放した「みだれ髪」の延長線上に再び開いた自我精神の發揮であり、覚醒であったと考えられる。

晶子にとって国家の犠牲となつて人命を奪つてゆく戦争こそ憎悪すべき罪惡であり、虚偽であつた。

三

晶子への桂月の攻撃の第一回目は、この詩の發表の翌十月の「太陽」で、国家的觀念を藐視したる危険な思想なりと論じたことである。晶子は翌十一月の「明星」に「ひらきぶみ」と題して、その詩を作つた動機と真意を明らかにした。

当節のやうに死ねよ／＼と申候事、又なき事にも忠君愛國などの文字や畏おほき教育勸語等を引ききて論ずる事の流行はこの方却て危険と申すものに候はずや

と反撥し、自分の好きな王朝ものにかように人を死ねと申す文章はなく、戦の事を多く書いた源平時代の本にもそのようなこととはな

いと書き、さらに
 長き／＼年長の後まで動かぬかはらぬまこと、のなきけ、まこと、の道理に私あこがれ候心もち居るかと思ひ候。この心を歌にて述べ候事は桂月様お許し下されたく候

と述べ、また文学博士でいらつしやる桂月様に比して曾孫⁽¹⁾ 幼稚園児に等しい自分に向つて「柄にもなき事をすな」と叱咤されるのも当然と謙虚に訴えているが、その逆に自分の真意が理解されなかつたことを悲しんでいる。

皇室絶対の論理からすれば、この詩は国家主義者の眼には不敬であるが、晶子は無事で帰れ、氣をつけよ……、万歳！と叫ぶこの氣持が自分のつたない歌の「君死にたまふことなかれ」であるといひ、自分には真の心、真の声より外に歌のよみ方を知らないと弁じている。

「君死にたまふことなかれ」に謳われた弟は晶子より二才年下の鳳籙三郎で、駿河屋三代目宗七である。彼は晶子より先に新派和歌唱導の波に乗せられた堺の浪華青年文学会同人になつており、また同会に於ける三十三年の新年会に晶子は始めて弟に伴われ、たった一人の女性として玄關先で二、三の同人らに挨拶だけして帰つたが、爾来、晶子は同好の文学青年らと文通し、やがて鉄幹とも接近するようになるのである。この弟は晶子にとって終生姉思いのよき理解者であり、兄弟中最愛の弟であつたのである。

晶子自身、この詩がこれほど大きく社会問題となり、彼女の真意が曲解されるとは予期しなかつたであろう。

注

(1) 桂月は明治二年生れで、晶子より九才年長であるが、年齢的差というより、当時文藝上第一人者だつた桂月に比べて自ら卑下していつている。

(2) 明30・4大阪で結成された浪華青年文学会の支部が明31・12に堺に設立された。

その支那名、この会の機関誌「よしあし草」の32年2月号に晶子は新体詩「春月」を始めて発表した。

四

桂月の第一回目の攻撃に対し、劍南も同年の十二月十一日の「読売新聞」紙上で「理情の弁」(大町桂月に与ふる)という論文を以て対抗し「この詩は理性未だ到らざる至情の声也……晶子の詩何ぞ咎むるを須みんや。桂月は国家主義に倣し、自ら非理に陥るを悟らざるものなり」と、この詩の真髓を世に問うた。

桂月はこの論に反撥して三十八年一月の「太陽」に「詩歌の骨髓」と題し、第二回目の攻撃文として五頁あまりの長論文を発表した。晶子の詩についてとくに「日本国民として許すべからざる悪口也、毒舌也、不敬也、危険也」と断じ、

此の如き詩を作れる作者は、乱臣也、賊子也、国家の刑罪を加ふべき罪人なり
と極言した。

執拗な桂月の反論に対し、新詩社と桂月との対立も紙上の論争では枝葉に陥り易く、論旨茫漠の虞ありとし、鉄幹は新詩社を代表して平出修とともに一月八日桂月宅を訪ね、一時間に亘る論談を交わした。この内容の要旨を、三十八年二月の「明星」に問答形式で「詩歌の骨髓」とは何ぞや」と題して鉄幹は発表したのである。

それによると、この詩を危険といったのは、国家や君を怨む怨嗟の声の極端なのと、歌の表示の露骨なところに悪意ありといつて非

難した。そしてさらに「死ぬるが名譽なりとおだてて、人の子を罵りて、人の血を流さしめ、獸の道に陥らしめ給ふ残虐無慈悲な御心根かな」と天皇に対する晶子の氣持を解釈したが、これに対し鉄幹は「陛下すらこの戦争を制し給ふことの難く、已むを得ず陛下の赤子を戦場に立たしめ給ふとは、何と云ふ悲しきあさましき今の世のありさまぞや」と解した。

これは双方の見解の相違であるが、晶子の真意を鉄幹の言が代弁しており、桂月は鉄幹の釈明を一方では肯定している。

晶子の詩と並称された大塚楠緒子の詩「お百度詣」は同年一月の「太陽」に掲載された。

ひとあし踏みて夫思ひ
ふたあし国を思へども
三足ふたたび夫おもふ
女心に咎ありや

朝日に匂ふ日の本の
国は世界に只一つ
妻と呼ばれて契りてし
人も此世に只ひとり

かくて御国と我夫と
いづれ重しとはれなば

ただ答へずに泣かむのみ
お百度詣あゝ答ありや

桂月は日露戦争下の最も国家主義的色彩の強い「太陽」に、晶子の詩と同じ女心を訴えたこの詩を同号に掲載し、晶子の詩には厳しい批判を下しながら、楠緒子の詩を是認し、最後の「只答へずに泣かむのみ」と詩を切ったところが善いといつたのは、この詩にみられるつつまじやかな女心を日本女性の美德として尊重した封建的観点からいってのはなからうか。また桂月はこの作には反語の意無しといっているが、これに反撥して鉄幹は問答形式の対話で「桂月は日本語を知らず」と小文字で書き添えている。「答ありや」の「や」を反語とみる鉄幹とこれを感じ嘆詞とみる桂月の解釈の相違である。また桂月は、晶子の詩は全体的に云えば女の愚痴、ダダを捏ねた姿と批判したが、鉄幹はこれに対し、

果して然らば何等の危険無きにあらずや。愚痴や駄々ならば、つまり理性の錯じらぬ純粹の感情の声なり。それを解して時勢に反抗するや、非国家主義を謡ふとか批難するは誣妄も亦甚しからずや

と反撥し、此詩を深く究める前に作者が非帝国を謡えるものと予断を下し、そのあとで自己流の解釈法を採つたのではないかと詰問した。これに対し桂月は「或は詮索に過ぎたる点もありたらむ」と返答に窮した。

桂月はこの詩は悪い感情を歌っていることが悪いといい、それは

聖徳を汚し、国家を咀^のう類だと指摘した。またこの詩を「乱臣、賊子云々」といった暴言に対し、桂月自身反省の言を吐き「文章上修辭の勢にて彼の如き文字を用ゐ、今思へば不穩の文字にして、晶子女史には氣の毒なり」と謝意を示している。

この問答に於て鉄幹は桂月の「詩歌の骨髓」に對する疑問十八ヶ条を挙げ、彼の論理の曖昧、矛盾、妄断、滅裂を難じ、無責任な批評家の口吻に憤り、論理は正しく、趣旨は明に、摯実に、公平に、能く作物の真諦に通じ、正鵠を得て誤なきを期すべきと警告し、桂月の批評家たる資格なきを如上により言明しており、桂月は文芸の士ではなく、断然文芸批評の筆を炙くべきを切望すと結んでいる。

二人の意見の対立は、根本的相違に基づいているからやむを得ぬが、桂月は自分の思想上の立場から晶子の詩をはかり、感情的に翻弄している嫌いもあり、鉄幹のいうように論理の一貫性に乏しく、むしろ鉄幹の言論の方が理路整然としており、文芸への正しい理解と批判力が感じられる。

しかし、この問答の記録は鉄幹によつて整理され、記述されたものであるから、鉄幹の観点に立つており、主観も加わり、自分らの立場を庇護しようとして純粹な客観性のある面では見失つたところもあると思う。よつて彼の意見はあく迄「明星」の指針として展開させたものである。

また一方では同二月の「新声」に於て「桂月対劍南」と題し、三つの意見を掲載した。その第一は桂月の誤れる国家主義を以て文学の傾向をたゞ頑迷な一辺に偏尚せしむことの罪をたゞし、第二は両

人の対立は国家対個人の問題で、劍南の弁明も平時に於て認めるべきだが、「今時の際に冗々しく云へる場合ではなからう」と、鉄幹、晶子の常識を逸していることを指摘した。第三は全面的に鉄幹、晶子を排斥し、桂月の評隲を穩健とした。この詩を無教育な女の練言也とし、詩壇の鑑賞に供すべきでなく、葬るべきとし、この詩の影響により、現行社会道德の壊乱を来たすことあらば断じて許容すべきでない、この詩を危険視し、擯拒すべきものとして鉄幹、晶子、劍南に降参すべきことを勧告している。

かように意見が展開され、賛否両論が湧き上ったが、一般的には非常時下だったので、第三説のような批判の声が高かった。夫々匿名を以て発表されたこの三つの意見は当時の輿論を代表するものであった。同号の「新声」にこの晶子の詩の全文を載せ、認識を新たにしていることも考えられる。それにしてもたとえ右のような議論によつて多方面から批判を仰ぎ、誹謗されても、鉄幹、晶子の弁明、劍南の支持などにより、これ以上に国家的権力によつて厳しく咎められたり、社会主義的見解からの激しい追求など敢て行われなかつたことは、一つには晶子がすでに「みだれ髪」において忌憚なく情意の解放を示しており、心情の自由の立場において前代未聞の女人の真情を披歴した観点に立つてこの詩が詠まれたことが当時の識者に認められていたことによるものであらう。

何れにせよ。「君死にたまふことなかれ」の背後に鉄幹のヒューマニズムがあり、「明星」の一貫した純粋な詩精神があつたことは認められよう。

注

(1) 角田浩々歌客のこと、文芸評論家

(2) 『詩歌の骨髄』とは何ぞや』|| 明星 38, 2

五

桂月は「東西南北」評（『帝國文学』巻 8 号 || 天地玄黄 末尾所収）に於て、鉄幹は万葉を学び、万葉の小児の片言的な幼稚と雄壯を吸収し、その露骨粗笨な中にも痛切な少年の感慨ありと評しているが、この評は桂月が晶子の詩を幼稚といつたことに通ずる。

しかしそのはじめ、桂月は鉄幹と同じ落合直文門下で、二十九年の新詩会成立以来とくに親密になり、鉄幹に好意的であつた。彼は「太陽」誌上（10 巻 3 号）で鉄幹のことを師直文より優れていると賞讃し、また同誌九卷十三号に於ても、日本短歌史上特筆すべき人として佐々木信綱、与謝野鉄幹を挙げ、彼の詩才を認めていた。桂月は鉄幹の歌に於ける雄渾な活力、清新な実感を讃え、彼の男性的気概を虎劍流として讚美していた。

鉄幹はかつて明治三十三年七月の「明星」の「文芸雑俎」に於て廿七、八年の日清戦争の時には僕が先頭に立つて軍歌を公にした。当時の二六新報に「雄たけび」の欄を設けて日毎に戦争及び時事に係した韻文を掲載したことは記憶して居る人があらう。

といい、また一國の民心を帰嚮せしめ、結合せしめ発揚せしむる如き作物も必要であり、日本人として東洋人として警むべき今日、

今後の一大覚悟を諭示するような作物も必要なりとし、また一兵士の勇敢、一軍艦の奮戦を讚美するような作品も書くべきで、メソメソと泣虫的な恋歌や単調な狹斜小説を書いて得意がっている場合でない、征戦の意気を刺戟するようにかいては。

そしてさらに英国詩人バイロンがギリシヤの戦争に従軍し瘴れた壮烈さを讚え、従来の日本の文士の従軍を勧告し、著名な小説家、美文家、韻文家諸氏に向つて渡清を要望し、跡形もなく消えてしまふ戦争文学は諸君の耻辱、だといつては。

これは確かに戦争文学を肯定した桂月に通ずる戦争礼讃の言辭である。桂月もまた日露戦争の時、前記の十巻五号の「太陽」の「戦時の文壇」では、文学は時勢に伴い、文学者は時勢と接触して国民を指導すべきとし、星董調の恋愛歌を攻撃し、

在來の文学は時勢をわすれ人情をよそにし、寢言もしくは愚痴を臚列するに過ぎずして、文学者は一世を指導すること能はざるは愚か、時勢にもはづれて国民に慳ぜられたり。否馬鹿にせられたり

また

雄健にして今の時勢人情に適し、日本の国是を発揮すべき大文学は今この世の希望するところにして、また今の時勢は、之を生み出すに最も都合よき時也

と論じている。ともに、日清、日露戦争下に於ける恋歌への攻撃であるが、それ／＼その内容を異にしている。

鉄幹が日清戦争の時にいつた泣虫的な恋歌とは、封建性の桎梏に封

じられた束縛を訴えた悲哀的な恋歌であるが、桂月が日露戦争の時にいつた星董調の恋歌とは明らかに「明星」一派の標榜する封建性への反撥、情意の解放を自由奔放に謳歌する青春の絶叫である。

同じ戦時下であっても十年の距りがあり、社会的条件も違つており、鉄幹は日清戦争のとき戦争文学に賛同し、戦勝唱歌を多く詠み、戦勝に陶醉し、歓喜し、士気を鼓舞する作品を作つては。その時の鉄幹は開戦三ヶ月前に渡鮮し、爾後計三回も往復し、朝鮮の動乱を現実に見て、近代国家として進展すべき日本のために活躍しようとしていたのであつた。

将来への絶大な冒険と期待をかけた雄壮活潑な鉄幹の気概に桂月は共鳴し、桂園派である旧派の歌への反抗として共に短歌革新運動に参与したが、その根底に於て鉄幹の自我を主張する個人主義思想と桂月の儒教的道義は互いに分裂せざるを得なかつた。

小島吉雄氏は「立命館文学」(2巻6号)の「桂月と鉄幹」に於て、桂月の一貫した国家主義思想に対して、鉄幹は主義思想をもたず、時勢に順応し、常に「新」を求めて意識し行動し、それが旧派和歌攻撃、新詩社創設、象徴歌を唱導せしめた素因となつた。といひ、さらに「国家主義的思想から非国家主義的思想に転向して行つたのも畢竟、新への誘惑に依じて行つたものに他ならない」といつては。しかし鉄幹の場合、桂月のように純粹な国家主義的理論として体系づけられるものではなく、賀茂真淵の万葉觀が基底となつた「ますらをぶり」の提唱が歌論、「亡国の音」(明27・5)「新戀」を生み、「東西南北」(明29・7刊)「天地玄黄」(明30・1刊)の詩歌を作らせた。

この間二十八年から三十一年にかけての渡韓により、特異で珍奇な生活体験を得た。たとえば第一回目は日本語教官としての目的に反し、朝鮮の政治的改革を目指した日本の志士らに共鳴し、親露派で排日的だった閔妃一族を親日派の韓人らと共に殺害しようとした計画にも鉄幹は加わったが、この乙未事変(閔妃殺害事件)の当夜参加しなかった理由で政治犯の難は逃れた。しかし政治犯と共に広島に護送され、暫らくそこに止まり再び朝鮮に行き、江原・咸道の峻峻な雪山を数人の韓人らと旅し、途中で暴徒に脅され、虎の吠える声におののき、恐怖と危険に曝された。また親露派のクーデターによって敗北した親日派のために鉄幹は仲間らと朝鮮王を日本公使館に奪い返そうと画策したが、遂に果されず、帰国した。こうした劇的な現実には幾度か遭遇し、いつの間にか自分自身の中に形成されて来た男性的気概が虎剣流を創始し、すでに万葉によって体得していた「ますらをぶり」と結びついて日清戦争の時には国家主義思想により、戦争を礼讃し、肯定した思想に近づいたかにみえたのである。

しかし彼自身は朝鮮での積極的だった自分の行動を通して、史上の英雄を回顧し、その闘士らの生き方に、無上の尊信と憧憬を寄せ、やがて凡俗な現実を超脱し、非凡な、高度なものへの強い追求となった。これはいうまでもなく人性開放に目覚めた個人主義にもとづくものであるが、彼のもつ英雄主義的な理想主義が朝鮮での活躍を通し、彼の文学の初期の作風を形成し、「ますらをぶり」を彼独特のものとなしたのである。

六

桂月と鉄幹とは、日清戦争のころには革新的気概に於てその雄健にして男性的だった点は通ずるが、桂月は道義的に文芸を批判し、理解しようとし、それが国家主義思想と結びつく時は個人を犠牲にした尽忠報国の精神に帰趨する。

しかし鉄幹の個に目覚めた人間尊重の精神は英雄の壮烈な死を男性の生き甲斐のように讚美し、「雄たけび」に於て、また「東西南北」に所収されている作品の中で、二十七年には「従軍行」(8月)、「軍中月」(9月)、「將軍不誇」(9月)、「朱祭亭」(10月)などで、戦勝のよろこびを謳っているが、この勝利の快報も現実と戦死者の家族を目前にみた時、彼は戦争による犠牲の悲しみを実感として二十八年五月の「凱旋門」に於て

いつととさまは帰ります
帰りますぞと問ふものを
帰りますぞと告げもせば
をさなき胸の裂けやせむ。

都の市の朝かぜに

旗のかづく打なびき

勝利をいはふ軍楽に

花火の音もまじるなり。

きくに心のいさまれて

人は見に行く凱旋門

大尉の家のその妻は

わざと我児を見にやらす

と歌い、戦後の悲惨な現状に直面し、遭族の悲傷と打撃を率直に訴えており、さらに三十年十一月作と「鉄幹子」に記されている「血写歌」では、もつと強烈に戦争への批判と憎悪に皮肉な眼を向けた。この詩には晶子の「君死にたまふことなかれ」に通ずる内容と措辞が多くみられるが、晶子の詩以上に構想の大きさを想わせる。

正義とは

悪魔が被ぶる仮面にて

功名は

死をよるこばす魔術かな

おなじ世界に生れ出で、

親もあり

妻もあり

名をつけて

勇しき名のチャンピオン

かはいやな

いくさにやれり遙々と

見もしらず

なれもせぬ

万里の空のひとの国

かしこしと

誇れる人の

西にあり

ひがしにもあり

なにほどの

かしこき人ぞ

むかしより

魔は魅入られて

今もなほ

まよひはさめず

あはれやな

人を殺して涙なく

おそろしや

生血いさちに飽きて懺悔せず

英雄と

われから誇り

豪傑と

一世を愚にす

骨を積んで

花はかざる金殿玉楼

血を塗つて

星はかゞやく勳章宝綬

あゝ百千の罪悪を

そこに一部の文明史

いたはしきかな

ちゝ母は

老いてたよりの

子にはなれ

あはれなるかな

たをやめは

二世のをつとに

わかれつつ

いちらしきかな

乳のみ兒は

まだ父親トモの

顔しらず

「忠義には猶かへがたし

あつばれ手柄したぞ」とは

あゝあゝ人を殺せよと

えせ聖人のをしへかな

鉄幹は戦争を悪魔、といい、晶子は獸の道、といった。晶子の詩は弟への哀願だが、鉄幹は一般的に銃後の家族の悲哀を謳い、「血写歌」の四節、八節はとくに晶子の詩に通ずるものがあり、晶子は三節目の「獸の道に死ねよとは大みこゝろの深ければ、もとよりいかでか思されむ」と天皇の御心中を推定する形で、天皇を持ち出す国家権力に反撥し、鉄幹は人を殺せよとはえせ聖人のをしへだというのである。

この鉄幹の二詩は日清戦争後の作であり、「明星」発刊以前で、「亡国の音」「東西南北」「天地玄黄」やその他雑誌新聞へ発表したものもあり、新派和歌唱導の姿勢は示していたが、この詩に関しては殆んど社会的に問題視されずに終った。

しかし、晶子の場合には戦時中で、国民は戦勝に陶醉し、歓喜に打興じているさ中であり、「明星」も一流誌として文壇に勢力をもつが、全く戦時色をもたず純文芸的矜持を公然と示していたため、世間的には批判されていた時であった。それを裏付けるようなこの詩は、当然国家主義者にとって反感と憤怒的となるものであった。

すでに晶子の詩以前に、同じ心で歌われていた鉄幹のこの詩が基底にあったことが忘れられて、晶子の「君死にたまふことなかれ」だけが今日もなお、重視されているが、その根底には鉄幹の文学精神や思想が脈打っていたことは否めない。

この他にも鉄幹は「明星」七号(明37・10)に

ひんがしに愚なる国ひとつありいくさに勝ちて世に侮らる
 大君の御民を死ににやる世なり他人のひきあふるいくさのなかへ
 剣を負ひて擔架のうへに子は笑みぬ嗚呼わざはひや人を殺す道
 と歌っている。如上の鉄幹の詩や歌に晶子は感化され、戦争への
 批判的な考えがすであつたところに弟の出征という実感を個人の
 悲しみとして受けとめ、天衣無縫に謳い上げたのが「君死にたまふ
 ことなかれ」であつた。

本稿校正副がでるころ偶然「与謝野鉄幹新論」(審美「昭42・2」赤塚行雄)中に
 ある「血写歌」をみて、いさゝか同一主旨であることを発見す。

七

非戦論の高まっていた三十六年六月の「万朝報」に発表された内
 村鑑三の「戦争廃止論」には、

戦争は人を殺すことである。爾うして大罪悪である。爾うし
 て大罪悪を犯して個人も国家も永久に利益を収め得やう筈はな
 い

といつて開戦論を強調するのは正気の沙汰でないと論じている。

また開戦直前の三十七年三月の「時代思潮」の社説では、戦争の名
 と人心の弱点に乗じて利を得ようとする便乗者を「際物師」と難
 じ、また同年二月十七日「読売新聞」掲載の「戦争と文学」では、

剣によつて得たるものは、時あつて失ふことあらん、然かも
 心あつて得たるものは永へに此の民生を照さん

と文芸の永遠性を説き、三十七年四月の「中央公論」では哲学者
 桑本巖翼は「戦争と文芸」の長論文の中で

今は学芸の士が徒らに俗と同じく戦勝に酔ひて居るべき時機
 でない

と学問の正しい態度と方向を言明した。また三十七年三月の「文
 芸倶楽部」の「予備兵」(小栗風葉)という小説では

不忠か知らんが、私は誓つて死には為ん! 死なれるもので
 すか、必ず生きて帰りますから、貴方も必ずお待ち下さい

という場面がある。以上一例をあげたのだが、こうして戦争を否
 定しようとする作品が戦時下であつても多く見られた。

また三十七年下の「明星」に於ても、開戦の前月、河井醉者は
 あゝ野に戦ふ者は禍なる哉

と書き、四月に、浩々歌客は

世に戦時の時となりぬ。人は皆血を流し肉を刻みたる犠牲を
 捧げて得たる勝軍を祝するに狂はんばかり

と批判し、六月には「明星」同人の批評家平出修は「所謂戦争文
 学を排す」に於て、戦争とは何の理想もなく、軽薄な国民の好尚に投
 じて、書肆無砲の欲に資せんとする際物文学の好標本なりとし、戦
 争を謳歌せざる文士に対して反逆の徒と冷嘲悪罵する一派に向い、

戦争、文学、愛国、趣味は其職分を異にし……文士に戦争を
 以て強ふる無くんば、真の述作、世上に頭出するを得んか

と攻撃している。また四月には滝沢秋暁が、文学は戦鬪の祭壇に
 供する犠牲となすべきでなく、何者にも捕捉されぬ純粹のものとし、

軍神の威徳を媚び称へて何等の利益を得んやと厳しく戦争を批判している。また短歌に於ても

五月号では

みいくさに罷るは恋のもぬけがら死なむにさても心やすけき

(池本奇奏)

七月号では

詩に恋に穢たにささげし君なるを何のみとがに銃とらしませ

(林のぶ子)

みいくさにこよひ誰が死ぬさびしみと髪ふく風の行方見まも

る(ゆきちどり)石上藤子のこと

八月号に

みいくさに黒ぎぬおほひ星すゑて我世なりぬと夜の神立つ

これらの歌には戦時下の緊迫感や滅私奉公的な軍国精神は微塵だになく、戦争の空虚さ、不吉さ、痛手を赤裸々に歌っている。この中のゆきちどりの歌を評して同号の「最近の短歌」では

戦争を謡うて、斯の如く真摯に斯の如く悽愴なるもの、他に其比を見ざる処、我はほこりにかに世に示して文学の本旨なるものを説明してみたい

といっている。戦勝に酔う国民の歓喜の裏には、如上の作品によって示された国民の苦しみを披歴したものが社会的土壌として培われており、晶子の詩だけが特異な存在として挙げるべきでなく、危険を犯してまでも世相に反抗して人道の正しい生き方を誇示した作品が風靡しており、晶子もこれらの思想をすでに吸収しており、実

感として率直に作品化したまでである。

同じ年の四月の「太陽」において姉崎嘲風は「永遠の女性」と題し、戦時にあつて平和の源泉、調和の光明を与えるものこそ女性の徳とし、女性は戦争否定者であり、憎悪者だと云っているが、晶子もまた桂月への「ひらきぶみ」の中で、乙女というものは戦争嫌いだといっている。これは銃後に残された女性の不安と寂寥からくる告白で、全女性にとつて普遍的感情の吐露ともいえよう。

しかし忍従を美德として来た日本女性の本心をたちわつて、大胆不敵に自らの愛情をぶちまけたこの勇氣と確信こそ自我解放の詩精神であつた。このほかにも女性と平和問題は論議されたが、晶子や楠緒子のように、女性の性情を憚りなく謳いあげた作品は、女人解放、人間覚醒の第一歩として歴史上重要な意義をもつものである。

これらとは逆に同じ年の「明星」で戦争を取材したものは僅かに五月号に

みいくさの艦ふねの帆ほ綱ななに鉤かぎ綱ななに召よせや千すらの魔まも擲なむ髪

(山川登美子)

四月号に

日を負ひて立てる日本のますらをの軍いくさなればか海もなごみぬ

(内田桔竹)

五月号に

道なきをせむる日本のいくさ船この我のせよ我もますらを

(池本奇奏)

などにすぎず、それも大きく戦争を肯定したものとは考えられな

い。

八

日本に於ける非戦論と同じようにロシアの文豪トルストイもまたキリスト教の立場から、三十七年六月二十七日の「ロンドンタイムス」紙上に *Bethink Yourselves!* (爾曹悔改めよ) という英文の論文を載せ、それが世界中の国々に伝わった。これが日本にも一月半近くで翻訳され、八月七日の「平民新聞」39号にその全文が掲載された。これは「爾曹悔改めよ」の増大号として刊行され、九月には「日露戦争論」の題名で公刊された。

原文は十二章から成る長文で、非戦というより「人間が人間同志で殺戮しあふべからず」という純粹なキリスト教的立場から戦争を否定したものである。

晶子の詩とトルストイの論文が非常に共通する点があるところから、晶子はこの論文からもあるヒントを得たのではないかと考えられる。

三十七年の「明星」を調べてみると、締切日は前月の十八、九日と記されてある。九月一日発行の「明星」に晶子の「君死にたまふことなかれ」が掲載され、九月号締切日以前である八月七日に発表されたトルストイの論文を晶子は読む余猶はあつたはずである。晶子が必らず読んだという確実な資料はないが、「ひらきぶみ」の中で「平民新聞とやらの人達の御論議などひと言ききて身ぶるひ致し候」とあり、「平民新聞」に関心のあつたことも分るし、読んでい

たようにも考えられる。同じ九月号の「帝国文学」に斎藤信策が「トルストイ伯の日露戦争論を読み現代の文明に対する彼が使命を懐ふ」という論文を発表している一例からみても、トルストイの論文には当時少なからぬ反響と刺戟があつて賛否両論を捲起したと思われ。

そこで今こゝに晶子の「君死にたまふことなかれ」とトルストイの論文中共通する用語と発想を検討し、照合してみたいと思う。

晶子の詩の中の第三節の

かたみに人の血を流し

獣の道に死ねよとて

とトルストイの

互ひに残害殺戮を逞しくせんがために、陸に海に野、獣の如く相逐ひつゝあり、嗚呼是れ何事ぞ、……

戦争が極めて陋劣なる獣慾を推進して、人をして殺伐残忍ならしむるは万人の知れる所なり

が似ており、また晶子の

君死にたまふことなかれ

が、トルストイの

戦争―即ち人類の屠殺―は「汝殺す勿れ」てふ訓戒と一致せ

ざるものなり

に通じ、晶子の詩の四節にある

すぎにし秋を父ぎみに

おくれたまへる母ぎみは

なげきの中にいたましく
わが子を召され家を守り

や五節目の

あえかにわかき新妻を

.....

十月も添はでわかれたる

少女ごろを思ひみよ

この世ひとり君ならで

あゝまた難をたのむべき

とトルストイの

試みに彼の老親に別れ妻、子を棄て去りし兵士……

人の父、人の良人を取り去り、一家より其稼ぎ人を奪ひ去り

て以て屠戮を準備せしむ

に通じている。

これらにみられる戦争を獣の道、殺人行為とし、最愛の肉親を掠奪する非人道的行為としたトルストイの思想は、これほど明確な形はとらなくてもすでに鉄幹も謳っており、三十七年下の思想界、文学作品にもみられていたことで、トルストイのこの論文のみが戦争否定論であったわけでない。

しかし世界の文豪のこの論文に晶子が注目しないはずがない。晶子は「雑誌帖」⁽¹⁾に、十八、九才のころトルストイの翻訳物をよんでおり、十二、三才ごろから「柵草紙」などに載せられた翻訳物に親しんで、⁽²⁾古典と平行して外国文学も早くから耽読していた。

晶子の詩とトルストイの論文との関聯性について、この詩を戦争否定詩と断定づけ、その見地から共通点を挙げ、その影響を端的に彼女自身の中に受け入れたとする説と、またこれは偶然の一致で晶子の独想で、実際には読んでいなかったのではなからうかと推定する説があるようだが、前者のように戦争否定詩と決定づけることは晶子の本心を無視しており、後者のように全くの独想とみるのも時代的な背景や作品などを考慮していないようにも考えられる。

何れにせよ、「君死にたまふことなかれ」は今迄述べたような非戦的な諸作品の影響を多面にうけとめ、晶子の実感から卒然として湧出した愛情の発露であり、披歴であった。こうした感情の高揚を思想のみで拘束することはゆきすぎで、実際に晶子が思想的評論を発表するようになったのは大正期に入ってからで、ヨーロッパからの帰朝後である。

晶子が「ひらきぶみ」で桂月に対抗して発した語も彼女の真情であり、決して身の危険を擁護するために弁解したものではない。「ひらきぶみ」には、晶子が弟出征の留守見舞に堺に行き、母や弟の嫁を力づけ、

私が弟への手紙のはしに書きつけやり候歌、なになれば悪ろく候にや。あれは歌に候。この国に生れ候私は、私等は、この国を愛で候こと誰にか劣り候べき。物堅き家の両親は私に何を教へ候ひし。堺の街にて亡き父ほど天子様を思ひ、御上の御用に自分を忘れし商家のあるじは無かりしに候

と死して国に報いるより、生きて国のために尽したいという赤誠

を示し、決して皇室をないがしろにしていけない。戦争によって人命が無惨に奪われてゆく国民の哀しみを天皇に分つて頂きたいとの気持があったのである。前記の「平民新聞とやら云々」により、戦争嫌いの点では平民新聞の非戦論には通じていた晶子も、皇室の絶対權威を無視し、階級無差別を提唱する平民社の社会主義には強く嫌悪を感じたのではないだろうか。晶子の気持は「このいくさに勝てり」と祈り、勝ちて早く済めと祈る」とある「ひらきぶみ」に書かれた愛国、憂国の誠心に外ならない。そして人間生活を不幸に陥れて

ゆく戦争を憎悪する気持が如実に率直に謳われている点において我々に深い共感と感銘を与え、詩そのものの芸術性より、人類共通の普遍的哀感を赤裸々に捉えた点において永遠の不朽性をもつ作品といえよう。

注

(1) 大正4—5刊、隨筆集

(2) 「ひらきぶみ」

参考資料Ⅱ 続明治文学史下巻（本間久雄）

『発展』『毒薬を飲む女』(岩野泡鳴)試論

伴

悦

一

岩野泡鳴が、五部作の二番手として「断橋」を「東京日日新聞」に連載しおわたとき、「小説家としての島崎藤村氏」という一文を公表した。それはかれにとつて記念すべき事件であつた。「断橋」はたしかに傑作であつた。が「毎日電報」と「東京日日新聞」とに分載されたせいもあつて、かきおろし出版であつた『放浪』ほどの世評をもちえなかつた。そうした世評はともかく、『放浪』をかき、いまや「断橋」をかきおわたつた泡鳴の心中には、なにかといへば比較され、いわば目の上のたんこぶにも似た当時文壇一の実力者藤村に、一泡ふかせることができるといつた、ほのかなはればれしさが秘められていたのではなかつたか。小説を書く心持ちは、自然主義的表象詩を作っていた時と同じでいけるという自信と、その理論づけのためにも「小説家としての島崎藤村氏」はかかれなければなら

なかつた。だから一篇の藤村論をかくと同時に自己のあたらしい長篇に対する意義の一端を強調せんがための一石二鳥の論でもあつたのである。しかしすくなくとも、当時「発展」に手をそめはじめようとしていた明治四十四年頃のかれは、まだ詩人、小説家としてより評論家として知られていたといつた方がよかつた。そうした彼をとりまく文壇の風潮は、もはや自然派文芸全盛の反動として錯雑混沌、未分化の状態にあつた。明治四十三年を契機に文壇は大きく回転しつゝあつた。「スバル」のあとをうけた「三田文学」、さらには「白樺」、第二次「新思潮」のそれぞれの創刊は、すべて四十三年であつたことはいうまでもない。この三つに代表される反自然主義文学が、でそろつたといつてもそれがそのまま反自然主義文学の成立をものがるというわけではもとよりなかつた。当時、石坂養平のことばをかりれば、四十四年の後半期に入つてようやく八一つの方角Vがみえてきたといつていどであつた。それは漠然ながら八草葉

ていた。

そして五部作の一つ「発展」をかいたとき、後年かれ自らがいいたように、『放浪』や『断橋』とはことなり、 \wedge 徹頭徹尾一元的に \vee （二元描写論の實際証明、「新潮」大正8・3）描破したものであり、 \wedge 『発展』並に『毒薬を飲む女』以来は全く写実主義を深めたものである上に、今一つすべて作中の主人公が第一人称で物を云つてる程に渠を中心として書いてある。 \vee （内部的写実主義の立脚地、「日本主義」大正6・8）という創作上の進展がみられることであつた。しかしそれは客観的具体的にいつてどのような開展をしめしえていたものであつたか。それは単にその間、花袋や中村星湖とのあいだになされた描写論争の意味のみならず、もっと大きく泡鳴五部作の文学的意味をもふくめて追尋されなければならない側面を担っていたのである。

二

「発展」が「大阪新報」に百回にわたつて連載されおわたつたのは、四十五年三月であつたが、それから二カ月後いちはやくこれをとらえたのが田山花袋であつたことは注目される。主に例の描写論上の観点からで「近頃読んだ小説についての感想」（『文章世界』明治45・5）と銘うたれていた。実をいうと花袋の「発展」に対する視角はかつて「描写論」（『福田文学』明治44・4）で『放浪』にふれたときと少しもかわつてはいなかつた。 \wedge 「発展」には作者と主人公との間に一膜をも置いてゐない。 \vee \wedge だから主人公に密接な女とは烈しい感情だの、苦しい悶えだのがよく現はれてゐるが、それは作者

の触れただけの感情や苦悶であつて、普通の「苦しかった」「辛かった」といふ程度に留まつてゐる。広い人間を見渡した——好悪を絶した程度にはまだなつてゐない。従つて芸術品としての価値には十分でない処がある。 \vee というものであつた。『放浪』にふれた「描写論」の方でいうと \wedge 人生派に近い泡鳴君は、まだ好悪是非などといふ処を離れて居ない、現象を現象として見るといふ氣分に達して居ない。その証拠には作中の人物に対して、作者は恐ろしい判断の斧を振つてゐる。 \vee ということになり、視角の差異を殆どそこに認めることができない。主人公以外の作中人物に恐ろしい判断の斧を振えるのならそれと同じようにどうして主人公にも振えないのかという論拠にもとづいている。この『放浪』評に対して応酬するところがあつた泡鳴だけに、「発展」はまた一段と花袋の平面描写論に火をそそぐ結果になつていくのは当然であつた。逆に泡鳴の立場でいえば、こうしたかたちで『放浪』や『断橋』よりもいつそう一元描写論の衣をまとつた作品「発展」、「毒薬を飲む女」をかかねばならなかつたのではないだろうか。なおこの意味で花袋と泡鳴の平行線の遠因をたどればすでに「インキ壺」（明治42・11）の「心持と書き方」の項にも典型的にあらわれていたのである。これを別の観点からみれば \wedge 実行と芸術 \vee の問題でもあつた。花袋はまず泡鳴の靈肉一致、刹那主義を一応認めながらも、実行の点について疑義があるというのである。 \wedge 其の実行の巴渦（うずまき）の中に身を投入して、普通の人々が違つて居るやうに、眼も開かずに其実行の中に居ては、其実際の真相が解らないのもまた事実である。吾々は鋭敏な感覺を持

つて居つても、猶ほ且つある時日を経過するか、ある説明を持たなければ、其時の心的状態乃至外面事実を即座に明かに知り得ることの出来ないものである。V つまりここには花袋のA主観の修養V論と、それからまる平面描写論がよじつに語られている。けつきよく大變消極的な傍觀的待望論なのである。あくまで花袋は、頭から泡鳴の実行論にまつわる主客一致や靈肉一致などを年若くして説くことについて信じていないのである。(インキ藍、「文章世界」大正一・11参照)

しかしこのような花袋の泡鳴觀は、ひとりかれのみではなかつた。泡鳴のA破壊的主觀が果して客觀的事物をそのまゝに写し得るかどうかVという前田晃などの疑惑。「春季文壇の一瞥」(「文章世界」明治44・4)また中村星湖の「今年前半期の好きな作」(「早稲田文学」明治45・6)などでのみかたなども、作中の主人公の身丈にあつた独断へのチェックにおいて花袋と同然であつた。またこれらの評にくわえて同じ『文章世界』(大正一・9)にのつた安倍能成の「岩野泡鳴氏の『發展』と相馬御風の「文壇の近事を報ずる書」をあげておけば、当時の「發展」評はほぼでそろはらずである。相馬御風は特に明治四十五年になつて批評壇の一部に從來の諸作家のつてきたA客觀的態度Vに対する非難の聲が高かまつている状況をふまえて、花袋、泡鳴の描写論から論じている。現文壇の弱点が、A徒らに態度問題の形式的考案にのみ走つて、生活の内容問題の考案を忘れて居るVとすれば、花袋や泡鳴が執拗に追求してやまない表現や描写問題などは、そうした弱点の範疇に入るべきものではないかとい

うのである。にもかかわらず御風は花袋の描写論の側にあつた。それはつぎの「發展」評をみれば歴然としている。A『發展』の如きは、部分的に意味ある人生の一角を捉へた所が少しばかりあるだけで、全体として何等深き人生の意義を暗示するものではない。作者自身が一個の表徵的人格であるが如く云つて居る主人公の生活の如きも、吾々にとりては単に一個の滑稽人物としか見えない。V A局外者たる吾々にすら明らかに想像の出来るやうな事実を、当局者たる作者自身が見のがして居るやうな所がいくらかもある。Vこれは花袋ならずともいわば御風の平面描写論ではないかと思われるほどのものではなかつたか。ただ花袋と多少ちがひがあるとすれば、批判するにしてもA表象的人格Vの問題について、ひつかかつているぐらゐのものであつた。それに比して安倍能成の指摘は、御風とはその発想においてかなり異質なものがあつたかもしれない。まず泡鳴の生活の真實さをあげ、他の作者のようにとりつくりつた小賢しい修飾のない点について、一種の強さと真實の力というものを率直に認める。思想と実行とが作者の生活において完全に一元化されてはいないが、一元化しようとする努力や情熱を一応買つて居る。しかし虚飾を排した小説にしては、随分と整理されておらず無駄のある点も指摘せずにはおれない。そしてその核心に一步ふみこみながら、A作者が自己に対して懷疑のないといふことには、要するに自己に対する深刻な省察がないといふことに基づく。V作者は自分のみじめさや下らなさを、飾らずにかくが、それに対するA煩悶Vが一向見あたらずに、逆にA粗笨な自信に安心して、下らぬ所で随分得意

がり、そして自己の生活の独特な優越を色んな機会を利用して揚言しやうとする。Vと指摘した。どちらかといえば極端にいつて木で鼻を括る類の御風評にくらべれば、能成評は作品評プロバであるだけに、一応親切な評にはなっていたとは思われる。しかし考えてみれば、能成のいうA自己に對する深刻な省察VやA煩悶Vの欠落の指摘は、御風のいう作者の生活の内容に関する自覚の有無の一件とそう大きいへだたりを感じさせない性質のものではなかったかと考えられる。

諸氏によってなされた批判に對して泡鳴は逐一こたえていかねばならなかった。花袋に對しては単行本『小發展』(明治46・7実業之世界社刊、大正元年八月八日出版法第十九条により發禁禁止)の「はしがき」で反論することになる。花袋のA広い人間を見渡した——好悪を絶した程度にはまだなつてゐない。Vという指摘をとらえて、A徹底した自然に似た主観Vが、かえつて物質的な感傷であることを強調し、物質的範圍にとらわれない自由流動融和の文学であることを主張したのである。さらに泡鳴は、A深刻な省察Vを欠いているという安倍能成の論への反論として書かれたのが「批評の省察」(新潮、大正1・11)であつた。泡鳴におくられた省察をそのまま安倍能成の批評そのものの省察としておかえしをするという体のものであつた。Aあの主人公は事々物々に自己の全力を以つて當るから、理論上に懷疑的方面の煩悶は出ないやうになつてゐるが、全力を注ぐことその事に懷疑以上の生か死かと云ふ苦悶をしつづけてゐる。人が懷疑に由つて反省苦悶するところを、全人全力的実行に由つて反省苦悶してゐる。

Vとして、評者はとかく空想的、抽象的に苦悶の形式を發見しようとするからそれが見えないのだという。評家に對してそうした特殊な人生をみるだけの省察が足りないなどというのは、みかたによつてはたいへん身勝手な話だといえなくもない。しかし泡鳴はあくまで安倍能成のみかたに對して、A創作中の實際を描出したのではなく、ただ評家自身の拵らへた抽象的理論Vだといひはつてゆずらなかつたのである。そのようにゆずらうとしない泡鳴の真意は一体なんであつたのだらうか。

三

なるほど御風のいう生活の内容問題についての自覚、考案や、能成のいう深刻な省察の問題に關していえば、表面的にそのまま泡鳴自身の現実的生き方の中に發見することは、こと欠かなかつたはずである。『放浪』以来やつと自分のベースのりかかつた「断橋」もそれほどの評価をうることなく、「發展」もようやく単行本として出版されたかと思ふ間もなく發禁のうきめにあつたという事態は、それを傍証するに十分であつた。そして一面で花袋をはじめ、御風、能成などの意見をそのままきいていたのでは、消極的傍觀的態度論か、御風のいうような宗教的待望論かにおちつかざるをえなかつたし、それではみもふたもない泡鳴が存在するばかりであつたらう。

ところで泡鳴が生活上の一件で下阪、府下池田の借家住いをするようになったのは、明治四十四年四月三十日であつた。そこから三

十分大阪新報社に通うことになる。翌年四十五年九月二日新報社との間に条件のくいちがいが生じ、その不満から退社するまでの間に「発展」はかかれ、「新報」に連載されていたことになる。かれの「池田日記」によれば、四十四年十二月九日より書き初めていることが判明する。

八月二十日。昨夜より、新報掲載の小説『発展』を書き始めた。十六日から掲載の筈だ。これは『放浪』の前篇に当るものだ。V
 ところで掲載初日が十六日の筈が、そのまま確定づけられているむきがほとんどである。だが「大阪新報」にあたると実際は一日早く十五日からになっている。北野恒富絵、樋口五葉刀の挿絵で一の(第一回)より二十二の六(百回)まで、四十五年三月二十六日でおわっている。その間十二月二十九日、四十五年三月十七日、二十三日の計三日間が休載となっている。大正九年七月、新潮社版で『泡鳴五部作』として改削出版されたとき、二十の(第九十回)から以降『毒薬女』叢書へ繰りこまれることになる。発禁本『小発展』と初出連載小説との間には、ほとんど句読点、ルビなどの点を除き、内容的には変動はない。が新潮社版との間にはかなりの異同がある。各回ごとの詳細にわたっての比較検討は後日にゆずるとして、ここではめだって改削、語句訂正等のなされている回のいくつかをあげておく程度にしたい。三の五(第十六回)多少、六の四(第三十二回)多少、六の五(第三十三回)最後の部分を除く全部、七の二(第三十五回)僅少、七の三(第三十六回)初めを除き全部、十一の三(第五十一回)多少、十二の一(第五十六回)と十二の二(第五十七回)は殆ど全部、十五の四(第七十三回)

の中間部全体の三分の一程度、十七の三(第七十九回)中間部多少以上削除の目立つ回、二十二の五(第九十九回)、二十二の六(百回)は語句の訂正等がめだつ。

もとに戻るが「発展」をかきおえたのは明治四十五年の二月十八日であった。「池田日記」によると八月十八日。(参) 去年の十二月中旬から筆を取り出した小説「発展」は、第九拾八回を以って、今夜、前篇を書き終へた。来月の二十日頃迄新聞に続く分だ。今回は東京の友人間にも評判がいいやうだし、大阪でも社中のみならず、読者にも受けられてゐるやうだ。後篇は東京の新聞に書きたい。就舞、午前三時半。Vとある。三月二十六日の「池田日記」にも同じように大阪と東京で評判のよかつたことを記し八月漸く百回で終りを告げた。Vとみえる。昨日といえは二十五日でおわつたということになるが、「新報」の最終掲載日は二十六日で一日のずれがある。『小発展』の発禁は八月八日で、出版後一カ月後であった。その発禁を泡鳴が初めて知つたのは、十一日である。発禁のきまつた当日泡鳴は、猪名川で友人と網打ちをして鮎やかじかなどを捕つたりしている。その後直ちにかかれは、総理大臣西園寺侯と内務大臣原敬にあてて「文芸の発売禁止に関する建白書」を、そしてその写しを読売、国民新聞にそれぞれ送つたが返され、東京朝日新聞に全文の一部がのることになる。

四

さてこの発禁になつた『小発展』に、私なりにちかづいてみなく

てはならない。「発展」の筋を追うと父親に死なれた商業学校の教師であり哲理家でもある主人公田村義雄が、下宿屋であるわが家を継ぐが、妻との生活に倦怠を生じ、家や子供からも離れ若い愛人清水鳥との関係に耽溺し、まさに表面的には飢餓と色欲とに悲惨な努力をばらばら、あたらしい人間として発展すべく樺太へ渡る前の物語である。この舞台はつぎの『毒菓を飲む女』についても共通している。だがA家Vの形骸化を試み、死滅させ、現実生活の破壊、波瀾を臆面もなく敢行していく表姿だけを人間獣の衣を借りてうたいあげたのではないと思う。それはたしかに旧来の自然主義作家のとおり扱ったA家Vとの対決、拘執の問題の範囲外のものであったろう。しかし範囲外に顔をのけざらせていくものには、それなりのあたらしい拘執や対決は必然的になくはならない筈であった。思えば藤村、花袋、白鳥等他の自然主義作家より一段とA家V意識にからまるモラルに対する徹底した破壊であっただけに、その強烈な表面化に当時の人々が眼をうばわれ過ぎていたのも理由なしとはしない。刮目するがゆえにその分だけ反対に、衝動的な反射心情さえ働かせながら、主人公の抱懐する煩悶、失敗の活動の事実を眼を塞ぐ結果になっていたのではないか。主人公の抱懐する煩悶が、もしあるならばそれなりにしおらしく描出していけばよいではないかというのが一般の声ではなかったかと考えられる。泡鳴文学の評価の誤解や不人気の一件もこのへんの問題であったと思われる。ほんとうは明治以後発的に民衆の日常生活のなかに土足のまま入りこんできた家の理念からの限らない脱出の姿勢にほかならなかった。

特異な日本家族国家の理念を前提とし、日本の国民形成の一角をしめるA家Vに対する利己的の抗争の記録ともいえよう。巨視的にみればもちろんそれは岩野泡鳴の思想の対象となる世界の一つにすぎない。国家、現代文芸界、政治、社会といったものを対象とする世界への遠心的拡大をも構想としたものが、五部作全体をつらぬくものとして内存していく筈であったと考えられる。とにかくいま五部作の「発展」、「毒菓を飲む女」を対象にするにあたって、在来眼を塞いできた部分にこそ、固執する必要がある。でなければ五部作のかかれた真相に測深錘をおろすことは不可能だからである。

十六年間も一緒にいて六人の父親である義雄は、妻子や家をかえりみない。Aあの家は息子さんでは持つて行けますまいよ。Vという風評を耳にする妻は、夫の名誉を恥かしめまいとして家をもりたてようとする。ところがもとより義雄のよろこぶところではない。よろこばないどころか、武士の家に生まれ、教育をうけた妻の道学者的教訓が、現代になんの名誉にも効用にもならないことを指弾せずにはおれない。A家Vの理念に内在する封鎖的円満性や物質的蓄積への唾棄である。A子供と教訓とが手ぬへの墓の裝飾だ！Vということにもなる。またそれだけに父に死なれた義雄は、いよいよ絶体的自我のふかみにしずんでいくばかりだ。日露戦争から第一次世界大戦への国家的発展の途上に、浮動化する自我媒体のあたらしきA家Vの創造への苦悶の様相でもある。その苦悶の内面をよくつたえているのは、「緑日」（『早稲田文学』明治41・7）や「庭の刈り込み」

〔文章世界〕明治41・8）、〔ハンモク〕（早稲田文学）明治41・9）等の一連の散文詩である。この後の二作が「発展」の中に引用され、作品としての緊密度をたかめている。この注目される用法は、すでに『放浪』の中でも「何の為に僕」という散文詩がもちいられたのと同じで、すでに実験済みであった。ここでも成功していると考えられる。

「庭の刈り込み」などは、勿論ただ引用するというだけではなく、完全に散文形態として融解してしまっている。この詩の風景はこうである。某出版社の編集員が雑誌にのせるべく、義雄一家を写真に撮りに訪れる場面からはじまる。義雄がA家Vで生きられる唯一の世界―書齋の半分が光線の工合で真黒になるときいて、義雄はにわか死の色を連想する。がとっさに義雄はその黒い部分に文壇に多少名の知れてきたのをよるこんでいた亡父の顔を楕円形の輪郭で出してもらおうと思ったりする。A物質的報酬Vで父に報いることをしなかつた義雄の無限欲望のA精神的事業Vの一端が、妖しくも表白されている。が、この書齋をつつむぶきみな暗さは、現時点の義雄の心境をそのまま具現するものである。そしてその原因をつきとめるとき、それが庭木の繁茂であることがわかる。義雄の庭木の刈り込みはそのためである。刈り込もうとする庭に立ちながら樹かげに亡父の死の影がちらついたりして、かれをおびやかす。それもA義雄が多年生活に疲れ、奔走に疲れ、放浪に疲れ、生の苦しみ―それが生命であった―を味はって来た今、父の建てた家を譲り受けた気持ち

やうであると思へたからである。Vということに基づいている。A無責任なる死VとA新しい発展Vや自由は背中あわせにある。A無責任なる死Vとほんとうにむかいあわないとき、あたらしきA家Vの創造は不可能である。そんなときとすればA無責任なる死Vに呑みこまれがちな義雄は、A枝にかかかってぐらくするはしごを半ば攀ち登った時、渠はあたまがふらくして目まひを感じVなければならぬ。この瞬間的眩暈は、筋の上からすると『放浪』の帯広から帰札する途中、旭川から紅葉で有名な神居古潭、石狩川の絶景に懸る釣橋の前で、義雄が突如異常な緊張感とめまいにおそわれる場面につながっている。先きの安倍能成への反論「批評の省察」中におけるA懷疑V以上のA全人全力的実行Vの苦悶を挙げるとしたら、このへんが白眉だといえなくはない。A哲理が時々刻々にぶち毀れるのを、時々刻々に建設する実生活Vの様態がそこにはある。かれはめまいにひきずられながら、安心を求めて熟睡してみたいとおもおう。A然し又死人の安住は得たくはない―睡いやうでも、いつも覚めてゐる自分の神経の働らきが、地上を離れては、一層自分の目前にちらついて見える。Vよわい人間だけにひびわれるイリュージョンを繕いつづけなければならぬ。厳密にいえば単に繕うというより想像力をふるに發揮してあたらしいイリュージョンのとりこになっていかざるをえない。庭木の刈り込みは、死人が自分のり移って自分を刈りこませているのだとも思わないではいられない。A家Vからの執拗な逃走でありながらも狐疑逡遁の震幅が、このようになかたちでつたわってくるのである。

孤独な哲學家義雄の苦境を、なお的確に表白しているのは「ハンモク」である。

自分のからだの か、何だか 分らない 重みが、左右に 揺れて、

ありもしない 風を 待つてゐる。

と思つたら 突然 自分は 百万年 以前 高い 木の 枝に

睡る 猿で あつた といふ 考へが 浮んだ。

きのふは 既に 前世界だ――

ゆふべ 高い ところ から 落ちる 夢を 見た のは、

夢 では なく 実際 おほ昔、

生繁つた 深林 の

枝 から 枝へ 渡る 時に あやまつて

すべり落ちた 記憶で あらう。

今 落ちない のは 不思議だと、

仰向いて 空を 見た。

浅い ひさし と それに かぶさつてゐる

庭の 松の木の 間 から、

熱した おほ空 の 広がり が 迫つて 来て、

僕の 呼吸が 苦しく なつた。

前世界 から 生活に 疲れて 来た からだが、

ハンモク の 中で 揺られて ゐる 様だ。

自分の 身が おもた過ぎて、

何にも する 勇気が ない。

このまま 死ぬる なら 死んでも いいが、

さりとして、又未練の ある この人生。

(中略)

ああ 金が 欲しい！

女が 恋しい！

大事業が したい！

いい 句を 得たい！

さまざま の 考へが 一時に 浮んで 来て、

蟬の 声に 不安の 和声（わせい）を 添へた。

(下略)

この詩はのちの自然主義的表徴詩としての散文詩の珠玉の一篇「何の爲めに僕」の前奏曲にあたつてゐる。浅いひさしと八庭の松の木Vの内外からせめられてゐる義雄が、そのわずかはかりの透間から顔をのぞかしてゐる八熟した おほ空Vのひろがりからさえ圧迫をうけそれに堪えてゐる。このことは在来の八家V意識とそれに垂直にまじわる当時の国力発展をたてまゑとする政治的圧力への抗争のただすまいでさえあつたといつていい。直接的に政治的圧力の具体的なあらわれは、発禁というかたちでふりかかつてゐる。そしてこの一連の散文詩は、当時御風、露風の口語詩の勃興の

氣運とは別に、対置されていた歴史の意味をもっている。大事なことは散文「耽溺」の執筆の時期に重なり、散文詩を書くと同様に散文をかくという独自の同時性として存在していたことはやはり注目されていい。排技巧の苦悶と表象の統一美を企てる自然主義的表象詩の詩想散文化である。

一方発禁については「文芸の発売禁止に関する建白書」が、書かれたことは先述したとおりである。いわゆる風俗壊乱で禁止されたことへの抗議である。この発禁を機縁としてそのあと当局の反動弾圧にそなえて、強固な著作家協会組織の運動化に関する提唱をやっている。（「文芸家の団体的武装」参照）また「付言——当局者を戒む」

「付言二——禁止を抑制に代へよ」などが、つぎつぎにかかれていく。△現代の最も危険なことは旧思想的が新思想的を解し得ないで、徒らに圧迫する点にある。▽ことをあきらかにし、前年の大逆事件も△落首▽の最も極端な出現とみなしている。△新思想を了解して、峻酷なミリタリズムと苛税とを撤せよ、▽という自覚は、なによりも△観照派▽の旧自然主義の文芸のありかたとのちがいを明示したものであり、のみならず発禁を直接の契機として△社会的、政治的根本問題▽に依拠した評論『近代思想と実生活』（大正2・12、東亜堂書房）や『近代生活の解剖』（大正4・1、広文堂）を、かかした意味はまことに大きいものがあつたといわざるをえない。それはやはり自然主義勃興期において、藤村、花袋などちがって、『神秘的半獣主義』をかいて文学的出発した姿勢に呼応している。

やがて義雄は△家▽と愛人お鳥との二重生活の窮乏と精神的ない

たみから、われを救うために、いままでの△精神的事業▽を△有形的事業▽に発展転回を計ろうとする。しかし転換しえたとしても、しよせん自然主義者泡鳴のつかまえどころのない欲望を前にした考案のひとつであつたにすぎない。なによりも新しい社会的立場の樹立が急務なのだ。△何をしたって、自己の発展なら、おのれの主義と主張とはとほる筈だ——早く一つ書き割りなどよりもずつと有形的事業をして、名譽と金錢とを自分の内容的実力と共に両得して見たい。▽と思慮燥急のおもいにかられていかざるをえない。

五

こうした「発展」のあとをうけた「毒薬を飲む女」は、大正三年二月二十日に脱稿し、「中央公論」六月号に発表された。（初めの表題は「未練」とされていたが、「中央公論」の編集者滝田樗陰によって改題される。）「大阪新報」連載の「発展」の結末が、新潮社版『泡鳴五部作叢書』の三章までくいでいるので、初出の「中央公論」にのつた「毒薬を飲む女」のかきははじめは、新版の四章からになっている。初出では新版と登場人物の姓名がちがっている。田村が吉野、千代子が寿美子、清水が清田、加集が加能といったようにである。内容にはかわりはない。なおこの「毒薬を飲む女」が単行本としてはじめて出版されたのは、鈴木三重吉編、津田青楓画によるものであつた。『現代名作集』（第五編）として上篇（大正3・12）と（第八編）として下篇（大正4・12）の二分冊の小冊子で出版されたのである。「上篇」に鈴木三重吉の「序」が付され、△本年の小説では最

多くの論評と注目を促した作品で、種々の意味に於て近來稀に与へられた傑作として定評あるものである。V その傑作なる理由として、A 簡勁な直截的な叙写の力は、すべての人物の性格と氏の求めたすべての効果とを自由に活現し尽してゐる。V 点をあげている。多少溢美の言といえる点もないではない。が、これをみても大正三年度の問題作であるには相違なかつた。と同時に泡鳴文学につきもののいくつかの批判も投げかけられていたことも事実で、むしろこの方が問題であつたのである。そしてそれらの批判の中から同種異形の評価を抽出することが可能なのである。

ハ一本調子で貫かれてV いてこれだけ男女の關係が語られてゐるのに心持が読者につたわつてこない。(正宗白鳥 二日一信、「読売新聞」大正3・6・2) また主人公は鐘話事業に熱中していようが、いまいが、この作には何の關係もないこと、そんなになぜ熱中しなければならぬかわからない点、A 此作は一篇の纏まつた作品と云ふよりも、或期間に於ける主人公の伝記と思はれるやうな嫌ひがなくもない。V 読者は別に作者の伝記など知りたくはないだろう。(森田草平、「毒菓を飲む女」上、「時事新報」大正3・6・9・10・11) 熱っぽい筆力によつてある程度と深さまではいくが、それ以上はいかない、一様の高さでどこまでも同じ程度の緊張の継続に根負けする(中)。心理描写の欠落、A 貞夫(義雄)の内部に、最少し深酷な倫理的葛藤の起るべき管で有る。V (下)。さらにA 寧ろ醜惡に対する憎惡と悔恨の苦痛の少しも伴はないのを不思議に思ふ。V (徳田秋声、二つの作品、「読売新聞」大正3・6・11) 主人公がA 豪放不羈V A 放肆V であるわりには、さつぱ

りしてあまりにあつけない。(山田權徳、六月の文芸、「帝國文芸」大正3・7) A 作者の生活の底に裏付けられた自満自足の冷たさ固さの反撥性を思はせる点に於て、兎角芸術的魅力の乏しさを思はせるのである。岩野氏は要するに芸術そのものを造る人ではなくして、芸術の材料を供給する人である。V (相馬御風、「大正文壇概観」、「中央公論」大正3・12) といったぐあいであつた。一方これらの批判に対して、いつものように泡鳴はおおむ返しに「反省の余地多き批評」(上、「毒菓を飲む女」)に就て、「徳田秋声と森田草平の批評について」(下)を、それぞれ「読売新聞」(大正3・6・25・26)にかいたがこれは先述の「発展」についての応酬「批評の省察」のくりかえしにすぎなかつた。

たしかに森田草平の心理的描写主張論の理由はそれなりにあつた。冗長とさえ思える構成力の不整備、振幅のせまい平板な舞台装置に対する一読者の不満のあらわれとしてなら、それなりに肯けるはずであつたからだ。しかし同じA 主人公の伝記V とみるみかたに接近してゐた御風のA 芸術の材料V の供給者の視点ないし白鳥のA 人生の記録V としてのみかたには共通のものがあつながら、白鳥はその醜惡露骨な描写の中にも、案外微細な心理を發見してゐる。草平などはちがつてゐる。秋江のような情味こそないが、心理的記述においては十分秋江などにはまさつてゐる点を鋭く指摘する。(文芸時評、「読後の雜感」、「中央公論」大正4・12) たまたま近松秋江との対比の中にかかれてゐるが、秋江を対比するまでもなく、このA 情味V にこそ欠けるが、泡鳴なりの心理描写は存在してゐたとする指摘は重要であつた。いわゆるA 情味V に欠けるがために、草平

の眼には心理描写の必要が説かれ、また御風の心内には造形力の必要が、より強調されていただけではなかったかとも考えられる。

この白鳥の鋭い分析的指摘にみられる人情味Vのなさは、異様な渴望といいかえてもいいかもしれない。そしてこの異様な渴望の問題は、泡鳴文学評価の一つの大きな窮極的なアポリアなのである。

これにまつわる先行文をあげれば、古くは先きの森田草平の鐘詰事業への必然性とその内容の不明確性、また矢崎弾のへかれの小説の表現から、その生きた社会諸関係のふかい歴史的、客観性をながめることはできぬV(『近代自我の日本的形成』、寺田透のへかれは全社会を対決の相手として選びながら、その社会についてはほとんど何も書いていない。V(『岩罅泡鳴』)、さらには荒正人のへ泡鳴は戦うべき社会の実体を、もつと丹念に描くべきであったかもしれない。だが、それは殆どしていない。最も熱心に描いたのは、生命の焰のきらめきだけであった。V(『人と文学』)等々である。

『神秘的半獣主義』や『新自然主義』をあらわし、さらには発禁などを契機としてせっかく書かれた『近代思想と実生活』や『近代生活の解剖』という大著の反映が、ほとんど小説にみられないことの奇妙さといいかえていいかもしれない。そしてこの問題の水脈としてかれ本来のへ個人主義的国家主義Vを考慮にいれる必要があることはむろんのことである。ここではその問題についてこれ以上たちらるわけにはいかないが、このへ個人主義的国家主義Vが、歴史的にいつて第一次世界大戦を機に、古神道の思考への顕在化としてむすびつき、日本主義への架橋の役割を果していることは重要であ

る。

さきにいきすぎたきらいがある。がただ大事なことは泡鳴の小説のなかに、社会的なひろがりを見ることができないという事実によって、その事実を固定化していくことには反対なのである。少くとも固定化の現象があるとすれば考え直されていい段階にきているのではないかと思われるだけである。むしろなぜそういう事実を彼を追いこんでいったのかという問題にこそ固執すべきだろう。

『発展』の「庭の刈り込み」場面のみたかれをとりまく暗黒な死の世界は、そのまま「毒薬を飲む女」で夜、血の気のなくなった妻千代子にひかれ、義雄が家につれもどされるところで、公園のふちを歩きながら桜川町の大きな溝の中の黒い水たまりをのぞく場面に転写されていく。この二人の夜の歩行は、千代子を愛人お鳥にかえれば、あの「断橋」で豊平川の鉄橋にむかって黙々として歩く二人と同じである。ところでこの黒い水たまりの上に、亡母のおはぐろをつけているぶきみな心象風景が重なっていく。ここにもへ自分の内部生活なる幻影上の風景Vがみられる。義雄はなんだか溝から発散するかな臭いにおいから、へ母が新しく生き返って来さうに見える。Vこの場合妻千代子をつらぬいて亡母は黒い溝からはいあがっているといえる。しかし義雄はその死の黒さを一挙にはねかえすために、
 \(\forall\) All or nothing——生でなけりやア、死だ——この間に譲歩はない！妥協はない！人間その物の破壊は本統の改造だ——改造はそして新建設だ。ぶッ倒されるか、ぶッ倒すか——そこに本統の新しい自己が生れてゐる！Vと自分にいきかせずにはおれない。そ

う思いかえしながら死骸同然の妻に引っぱられている現実には立ちかえるのだ。生か死かにまたがって生きねばならない苦悶の表象が、一元描写的手法でいかに描破されている。八溝の黒い水のおもてが暗くなった。——そのまたうへが闇になった。——自己の周囲がすべて真ッ暗になって——自己も、尖った嗅覚のさきをどみの垢がくツ付き、からだ中がひやりとしたと思った。√この黒一色の死の世界は、そのまま「断橋」の心中の舞台豊平川にふりつもる白い雪の世界に落ちいく死から生への置換固執の情景を想起させる。過去にほろびさった筈の実八家√の残滓に、現在を生きんとするものの独自の心象風景がかさなりあいながら、不在の自己を未来にむかって指示せずにはおれない。

以上をまとめてこの「発展」、「毒薬を飲む女」をふくむ五部作全体についていえることは、つぎのようなことではなかつたかと思われる。旧来の八観照派√的自然主義ないし現代文芸界や、伝統的日本の八家√に對置した破壊的主観は、それなりの反措定たりえたものとして、泡鳴の内部的現実認識に在ったとき、同時性として日本独占資本近代化の線上に古神道、日本主義、帝國主義、侵略主義のなるがままの思想の反映でもあった。そうした矛盾の相が実は二重構造的乾板上に、泡鳴文学独自の幻影の像をえがきだしていったと

みられる。やぶれかかる幻影はそれを跳躍台として利那的妄動をくりかえし、疾走しつづけてやまなかつた。思慮燥急な疾走のなかに、むしろ比類のない実行家を措定しながら、その実践の根拠になる幻影は、ついに幻視にまでいたらずじまいであった。幻視にまでいきつきえなかつた泡鳴の背後に佐藤信淵を媒体とする古神道的国学思想が、それ自体のもつ非政治性をかこちながら、八個人主義的國家主義√としてはたらいっていたことは事実である。しかしまたこの非政治的な優強的八個人主義的國家主義√が、当時の上昇的官僚軍閥の政治体制に対する反措定の方向にあったこともあらそえない事実であった。それが五部作というかれ最大の小説の中で十分に発揮できえなかつた欠陥は欠陥としてみなければならぬ。その欠陥は認めながらも泡鳴の半生をかけて、そだてあげた思想と世界との對置のなかで、現実世界の幻影の産物として五部作があつたことだけは少くとも確認しておいていいだろう。泡鳴独自の無類の実践の根拠が、幻影という制約のなかで、さらにはかれ自身が認識しえない巨大な世界的發展の潮流の渦中で、雲間に湧いた一点の晴れ間のように幻視への志向を内包しながらも、いかに未来の歴史の全体化にかかわりあい、それなりの効率をしめしえたかをほんとうに問うのはこれからなのである。

一高の青春

——折蘆を中心に——

助川徳是

本稿は、「第一高等学校六十年史」⁽¹⁾、「向陵誌」⁽²⁾及び「校友会雑誌」⁽³⁾に基づき、それらの資料のうち、主に明治末年に焦点を合わせて当時の青春像を求め、それを通じて大正文学発生の一基盤を検討しようとするものである。本稿で一高と略称するのは、今日、旧制の第一高等学校と通称されているものをさすのであるが、それは、明治二十三年二月、東西二寮の落成と共に寄宿寮設立以降の第一高等学校をも含むものとする。⁽⁴⁾

注

(1) 昭和十四年三月、第一高等学校発行。

(2) 本稿は大正十四年十一月発行の「向陵誌」(第一高等学校寄宿寮発行)に拠った。

他に大正二年刊の二冊本、昭和五年刊、昭和十五年刊があるが未見。

(3) 「一高の「校友会雑誌」の祖型、回覧誌「文のその」は二号より活版となり教号出

たのち、改めて明治三十一年四月から「文のその」第一号が出独乙部の「青年学叢」に対抗して、その二号を「文園」と改題、第十二号が筆禍に会い、二十二年十二月から「筆華」となり、これは五号まで出た。二十三年九月、校友会が成立、その十一月二十六日「校友会雑誌」が出た。大正十三年末まで三百号を数えたが、発行は必ずしも定期的ではない。右の由来に関しては、第百十五号、大森金五郎「校友会雑誌刊行の由来と其表題」が最も詳しい。

(4) 明治十九年四月、中学校令公布と共に、それまでの東京大学予備門が第一高等学校と改称された。これが第一高等学校と改称されたのは、明治二十七年六月、高等学校令の公布による。大正七年十二月、新高等学校令発令により、大正八年四月以降制度の変化があった。

二

一高校長たちの教育理念はどのようなものであったか。前記の時点から大正改元まで、校長は七代を経たが、⁽¹⁾一高生に与えた影響の点から重んじなければならぬのは、木下廣次⁽²⁾(明22・5・26・6)、狩野享吉(31・11・39・7)及び新渡戸稲造(39・9・大2・4)の三校長であろう。

木下校長はいわゆる四綱領と籠城主義を標榜した自治寮の創設者として、一高の精神的支柱として、その遺風の感化を少くとも二十年の後に伝えた人格であった。⁽³⁾ 彼が籠城主義を主唱したのは、当代日本を「風俗漸く壊敗して礼義將に地に墜ち」⁽⁴⁾ たものと視る、世俗への道義的な怒りに基づく。四綱領における廉恥、公共心、辭讓、摂生といった徳義の強調はその結果である。この世俗に抗するため、「宜しく此風俗に遠ざかり」、寮をもって「世俗の惡風を遮斷」する「金城鉄壁」⁽⁵⁾ としようとした籠城主義は、教育方法としてそれ自体高踏的であり消極的であった。しかし、彼の怒りの原点には、二十年代のナショナリズムが響いていたのであって、そのことは學生が一高の出発点に「日本古武士の氣魄と香陵の孤城に苦守して歐化と文弱の時弊に戦ひし当年の氣節」⁽⁶⁾ を認めていることから窺えよう。「校長が鉄血主義」から「勤儉尚武」の標語や弊衣破帽の風俗が生まれるのは自然であった。

狩野校長は、「教育の主眼は徳育にあり」⁽⁸⁾ という明確な朱子学理念に立った。彼はその「徳育に就きて」において、教育勸語によって徳育問題の理論的側面は解決されたとした。残る実際の問題は精神修養の具体的方法だが、勸善と懲惡を平行して行う以外にないと断定し、方法的な差異よりも、その方法を決定する精神において誤ることがなければ良いとして、細心に「便利主義」「競争主義」「得手勝手主義」⁽⁹⁾ を排している。彼は言う。「苟くも理の存することこそを明にし之に服従することなくは誠の道に發す」。つまり「理」を窮めることは「誠の道」に達する手段としてのみ意義があり、学

問する者の職分は、人に本来備わっている「性命の原に遡り、義理の微を闡き世道を振興するの策」を立てることにあるという。この信条が、明治三十四年、皆寄宿制度の施行に発展するや、その「專制」に抗する声は、早くも同年の全寮茶話会における黒田英雄の追究となり、「莞爾として」⁽¹⁰⁾ 登壇した校長は、「青年時代は是れ修養の好時機なり、決して便利自由を考ふ可きに非ざる也」⁽¹¹⁾ と断じて彼の道徳主義を明らかにした。

京大から転じた新渡戸校長は、その広い視野から、すでに形骸化した籠城主義を明確に批判して、新に「Sociality」を主唱した。彼は旧幣を分析して、その排他性と Intimacy を欠く Crowding、又その高慢と生活の単調を指摘し、籠城主義は Means であつて End ではないと述べた。「真個の道徳は己の欲する所之を人に施せぬならざるべからず」⁽¹²⁾ とするその姿勢の積極性は、一高の物神化された旧思想をつき動かし、反動は起つた。「向陵誌」が伝える第十九回記念茶話会の事件がその一例であり、結局反対者は、「新渡戸先生が世界の日本としての國民を教養せらるゝに当りて、人物の理想が日本の古武士よりは寧ろアングロサクソンのゼンツルメンなるを觀て、日本主義により固守保守を堤として欧化の潮流を堰き止めし、性年の一高生の（略）旧風の慕はれたれば」⁽¹³⁾ という心情に立ち、新渡戸が、その校風の眞精神を容れて美風の維持を説くに至つたと解して、これに服したのである。

この三校長の理念を學生はどう受容したか。一つの答。「木下校長の下に紅燃ゆるが如き武士的氣概を養ひ、狩野校長の下に沈毅篤

学の風起りし我校生徒は今や新渡戸校長の下に精神的積極的に性格を修養せんとす。⁽¹⁴⁾「この些か苦しい答は、要するに彼等が、校長らが道徳修養を以て学問教養の上位に置いたと見て三校長を受け容れたことを物語る。「一高たる所以は実に学府たるに非ずして修養の道場たるにある」といふ彼等の一高観が、その受容の原型を物語っている。

すでに触れたように一高生たちはこれらの「名校長」を戴いてその言行に全く心服したのではない。校長不信任は屢々その面前で唱えられ、青年たちは面を冒して校長に直言した。⁽¹⁶⁾しかし常に彼等は校長の熱誠あふれる説得に対して不明を恥じ、「満堂歎歎」して相互の理解が深まったと感じている。この相互信頼が一つのパターンを模倣していることは見易い。たとえ相互の論理的対立が解決されなくとも、彼等はそのパターンに身を置いたと感じる時、対立を枝葉末節にすぎぬとして放擲する。次にあげるのは、師弟のまどいという一つのパターンである。「高橋博士ひとり留りて人々と共に椅子をストローヴの傍に移しつゝ、平田氏が琅々玉を転すが如き美声を以て塩谷先生の新作を朗吟せらるゝあり、薩摩琵琶をまなぶものあり、博士が破袴弊衣の昔に立ち返りて、『北辰直下立銅標』と高吟せらるゝあり。……」⁽¹⁷⁾

このような指導者の下に、一高生たちは、学校や寮や彼等自身をどう観ていたか。「校友会雑誌」に夥しく見られる一高讃歌のうち、典型と目される一例を挙げよう。

「悲風滔々として地を払ひ、淫風泪々として砂をまくの時、一代の

道徳廢類に帰して未だ起らず。当代の権化悪に化して虐忍心を震はすの時、自ら毅然、高く一城を劃別⁽¹⁷⁾。橘の香薰粉として清淨の氣自ら溢れ、白雲静に靨鬱いて悠々の情掬すべきの所、そこに美しき一大標榜を樹て、悠々清適の夢を契れる抑も、いかばかりの幸ぞ。」⁽¹⁸⁾「こうした空疎誇大の妄想から、エリート意識や儒教的道義観を抽出してもはじまらない。この朗誦する他はない一字一句は、この青年たちにおいて揺がすべからざる思惟—もし思惟とそれが呼べれば—の型を、枠を作っているのである。この発想から、自治寮が家に類推され、家族が家憲によつて成立する家風に従うのが当然であるように、寮生は必ず寮風に服すべきであり、その寮風の主義方針を決める根幹は四大綱領であり、「若し之れに違反する者あらば、之れ大いに制裁して可なり。」という結論が導き出される。彼等が籠城主義を頌して「溷濁の波瀾も此自治の堅城を襲ふに由なく、アポロの征矢も此至楽の境に入るに由なく」と言う時、はからずも世俗と等置された学芸は、「行有余力則以学文」(学而篇)の徂徠以前の理解を踏襲して軽視されている。彼等にあつては、「向陵の聖地」を除く一切は「悪魔の軍門」⁽²¹⁾なのであつて、通学生という異端は、「狗々焉々たる」もので、「要するに校風の日蔭者」⁽²²⁾であるに過ぎないのである。又かれらは、「我が校は天下英俊の雲聚する処」⁽²³⁾と

いう明確な選良意識に立ち、「一高は八高等学校中最大難関」という規定を、明暮、先生や上級生から鼓吹され、⁽²⁵⁾学才の卓抜が直ちに徳性の豊饒に通じるものとの仮説の実証を強いられた。選良の自覚の過熱は事大主義に通じる。「あゝ一切衆生を濟度し給ふらん仏陀

の、仮に姿を真如の月とあらはして吾を導き給ひけん。」⁽²⁶⁾とは、病気が直った時の感慨なのである。かれら、平均的一高生が校風の真髓と目した籠城主義や勤儉尚武は、只運動の振興においてのみ維持されると唱えられた時もあり、「弁論の如きは軽薄、校風を害ふ者」とされたり、当初の寮内規約に「自習室ニ於テハ狼狽ニ渉ル稗史小説ヲ読マズ」の一項を設けさせたりした。又、その籠城主義は、「武士道の如き復古的精神」ではなく、「世界の大勢を觀破し、五大州の氣運を指磨して、雄飛を未來に試みん」との意義を担うものとも説かれた。一高や一高生の美点を彼等は、「武士の氣魄」、「霸氣」、「小兒の至純の心」、「自立の精神」等々に言いかえたが要するにそれを以て他に冠絶するもの飽くことなき探求であった。「校友會雜誌」には、第三号(明・24)の野田兵次郎の「校風論」以来、多様の校風論が主唱され批判されたが、そもそも校風というものが、「内に存せる者の外に表はれし形にして、外にありて内を律する者にあらざるなり。我等は校風を作る可き者なり。我等は校風に作らる可きにあらざるなり。」⁽²⁹⁾という自明の理が説かれる迄には、借すに十五年の歳月を要したのである。

だが、一高校風の物神化の呪縛を解いたのは、決して前記新渡戸校長の演説ではない。それより先、一高生は、かれら自身の力で、率直に実状を凝視し懷疑して、新しい視点を獲得して行ったのである。

注

- (1) 後記三人の他に、嘉納治五郎(明26・6・26・9)、久原弼弦(明26・10・31・7)、沢柳政太郎(明31・7・31・11)、今村有隣(明39・9)がいる。
- (2) 在任期間、明は明治、大は正、数字の前に、明、大がないのはすべて明治。
- (3) 22・5は二十二年五月、本稿の表示はこれに準じる。
- (4) 「向陵誌」によれば、明43・9、木の卦音に接して「一高は「追弔の典」を嚆喙堂にあげた。天暗うして堂下悲愁の念に充つ」と記されている。
- (5) 「向陵誌」の記録に基づく明23・2・24の木下校長の告示。
- (6) 「校友會雜誌」(以下「校」と略記) 明40・百六十九号、田中徹「新來諸君の使命を論じて突貫主義に及ぶ」
- (7) 「校」明33・九十五号、片山鏡勝「死馬の骨」
- (8) 「校」明32・八十五、八十九号、狩野享吉「德育に就きて」但し八十九号は「德育につき」
- (9) この二つが順に、功利主義、進化論思想、個人主義を指していることは明らかだろう。
- (10) 「校」明40・百六十三号、新渡戸稲造「籠城主義の Sociality」
- (11) 「校」明34・百五号「寮報」
- (12) 「校」明40・百六十三号、新渡戸稲造「籠城主義の Sociality」
- (13) (10)と同じ。
- (14) 「向陵誌」の「弁論部部史」より。
- (15) (6)と同じ。
- (16) 第十九回記念茶話会における新橋戸校長不信任、大3・11の全寮茶話会における橋戸校長不信任など、その例は枚挙するいとまがない。
- (17) 「校」明35・百十四号、「文芸部懇會記事」
- (18) 「校」明35・百十三号、枯木郎「編輯(我本能願)」
- (19) 「校」明35・百十五号、「興風会校風談話會記事」中の齋藤良衛の演説抄記。
- (20) 「校」明35・百十九号、山内冬彦「籠城主義を論ず」
- (21) 「校」明35・百二十号、荒井恒雄「再び禁酒主義を論ず」
- (22) 「校」明35・百二十号、勝山勝司「追察の辞」
- (23) 「校」明35・百十六号、凌雲生「前号批評」
- (24) 「校」明35・百十九号、筆者名ナン「新入生諸氏を迎ふ」
- (25) 入学率の実態の一例は次頁表の如くである。
- (26) 「校」明35・百十七号、一病客「枕頭の月」
- (27) 「向陵誌」の「弁論部部史」より。

(28) (20)と同じ。
 (29) 「校」明38・百五十二号、安倍能成「校風論」

年次	入学志願者 全国合計	高校入学者 全国合計	一高入学者数
明35	四、四五六	一、五八九	三二七
36	四、二一四	一、六一二	三三一
37	四、〇七六	一、四八〇	三〇五
38	四、七九四	一、五三八	三三七
39	五、一五一	一、四七五	二九五
40	六、〇〇四	一、八四七	三五三

三

「向陵誌」の「文芸部部史」は、明治三十四年より、個人主義に對する批難が現われたこと、それにより当時一部に或る意味における個人主義が現れたことが知れると述べている。或る意味とは、「頃者自修室に苦茗を啜り、煎餅を噛ることあるも、談論風発簿書を投ずるに至るものなし」や、「読書に急に⁽¹⁾して、野球場裏に撰手諸君が苦心惨憺の労を見るもの如き寥々として稀なり」の嗟嘆から推察できるように、単に寮生の覇氣の低迷を指すものも含まらしい。

「部史」には一言も触れられてはいないが、私の調査の及ぶ限りでは、一高における前節に述べたような全体主義に對して、その内部にある現実の暗黒面を直視し、個人の自覚の風潮を導いたものとして、この年度の初号に載った、木山熊次郎の「疑察の自治寮」がま

ず挙げられよう。

木山はこの一文で、「我校は諸君を遇するに大人君子を以てし諸君に許すに自治を以てす」という木下校長以来の監督者と寮生の相互信頼という前提―ひいては一高の自治それ自体―に疑いの目をむけた。土浦行軍を終えて校長は「諸君の非行に對する職員の決心を示せるに由つて諸君恙なきを得たり」と言つたではないか。又、試験の点数を我々に伝えない理由を、注意点の者は進級運動を起し、良いものは怠ける恐れがあるからだと言つたではないか。どこに信頼があるか。更に寮生間に相互信頼は実在するだろうか。冬休みに寮に戻つてみれば、寮中の窓は新聞紙で密閉されているではないか。花柳の巷に出入する者を鉄拳制裁するのは良しとしても、「少年談」は何の制裁も加えられてはいないではないか。諸君は「校風の修養」といへば普通の青年の修養と「反対或は別義」を有するかの如く言うが「校風の修養は人道の究明にして青年的修養は然らざるか。」一高の現状とは何か。「誠に治者に信なく被治者に信なく、上は下を欺き、下は上を信せず、活力ある信義之を求むるに由なく互に偽善と欺満を以て相交る」というのが真相ではないか。

私は「部史」が説くように、「輝ける楊牛氏」や「ニイチエの本能論」のみが、一高における個人主義思想を誘発したとは見ない。青年を動かすのは何よりも青年思想である。前章に於て校風讚美論を全て明治三十五年の資料から取つたのは、「部史」のこの記述に對する反証をあげた積りである。「部史」は言う。三十五年には校風論漸く衰え、人生問題が盛に論じられ初めた。三十六年には陳套

な校風論衰えて宗教的、文芸的趣味に移らんとした。三十七年から革新の時代は訪れ、その「中心思想を個人主義とする。」これは頂点の精神史にうまく符節を合わせた答案でありすぎる。そのような摸解で済むなら、本稿のような底辺の探索は不要であろう。教養派グループがこの新潮流の主導者となったことは厳密な意味で言えるのか。一高に胚胎した個人主義思想は、形骸化した思考形式を一步踏みだす勇氣が、その形式の只中にそれを敵として激烈に戦いつゝ形成していった思弁である限り本質的に「教養」派であることを要しない。従つてその原型は例えれば次のような情念であつても良かったのである。

「顧みれば実に社会は滑稽なるかな。道德の声は徒に喧びすくして、其実盛々廢頽し、教育の謳歌は滋くして、其美益々破る。(魯)為政家は天下の青年を集めて鑄型的教育を施さんとす。(魯)鑄型的なるが故に、個人が権能を没却するの愚を敢てして、而して、天下万人を円鑄型の型にいれんとす。」

この期の個人主義から三種の型を析出した。一は荒井恒雄に見られる型であり、一は安倍能成や阿部次郎に見られる型であり、一は魚住影雄に見られる型である。

荒井恒雄はその「個人主義を論ず」(4)に於て、おゝよそ次の如く思索した。

人間は情慾の動物である。情慾の望む氣持が希望となり、そこに自我の觀念がうまれる。この自我の觀念あるが故に人は活動する。この自我の慾望を大切にしようとする主義が個人主義である。とす

れば個人主義とは社会的活動の源泉ではないか。

しかし一方、個人は社会の単位であるから、社会に対する道德と個人の道德とが矛盾してはならない。人は社会の単位として存在する以上、公共の重んずべきこと、互に一致すべきことは言うをまたない。社会の活動と相容れない個人主義は利己主義にすぎない。この利己主義は確かに自治寮の「パチルス」だが、何らの主義も節操もなく盲動する者よりも、持する所があるだけ救い易い。「吾人の個人主義なるものは、(魯)個人の理性と嗜好とに因り社会道德に戻らざる範圍に於て高く自己の標的を掲げあらゆる経験と遺蹟とに鑑みて自己の志望に向ひ勇往邁進する意志に外なら」ない。今やフランス革命後の自由平等主義から、共和の熱冷えて国家社会主義を生じ、更に社会主義、帝国主義と次々に種々の主義を産んでいるが、それらの思想が今も尚対立し、主唱されるのは、「是れ其各存在の理由を有するが故に、換言すれば各皆存在せざるべからざる真理なるが故に、然るにあらざや。」とすれば究極の真理は「是等幾多の思想の精を抜き粹を集めて合成せるもの」に於て初めて求められるのではないか。その前提にはどうしても個人の主義||「真正なる個人主義」が喧伝され互に切磋することが必要である。

荒井の右のような思索は、見るように、ついに帝国主義も貴族主義も、すべて個人主義として包摂してしまつたし、多くの対立する主義思想の盛んな發生を社会の活動力の証左として寿ぐばかりか、それらの大調和を夢想するというオプティミズムに墮つてしまつた。しかし、青年思想の追尋にあつたて、そのように明白な背理を

拾い歩いて、無効であろう。私は、この青年の発想の出発点にあった人間観が、明治期アカデミー哲学の指導理念である進化論的人間観を踏まえていること、及びその適者生存の法則の適用によつて、一切の既成を適者として合理化している点を指摘しておこう。

彼は個人主義というものがある以上、それは「固より社会の要求に応じて然るにあらざればならず」と前提して、この論を導いた。存在即合理である。従つて利己主義がなぜ不合理かという問の答は困難になる筈だ。窮地に陥つた彼は飛躍を試みる。人が集つて社会を形成している以上、互に相譲る所あつて初めて円満なる社会ができるということとは「人道の大綱の明らかに」正しいと示す所だと彼は言う。もし、懐疑がその「人道の大綱」に向けられれば、このオプティミズムはたちまち崩れ去つてしまふ。

明治末年、産業資本主義が浸透し、自由主義がそれに伴つて進展した結果、自由主義の徹底を求める要求が高まり、そういう新しい精神的志向がもつ破壊的エネルギーが、直ちにその基盤である資本主義的産業主義を突きくずす批判と懐疑に向けられた時、閉ざされた帝国主義的体制下の社会情況にさえざられた眼が内に向い、知識層にそれまでかれらを支えていた功利的人生観を棄て、内省的な自我凝視に向つたという解説は、あくまで一つの図式であるにすぎない。荒井に見られるようなダーヴィニズムと東洋倫理思想の奇妙な混淆は、日露戦争前夜の高揚する国民感情を支柱に幅広い社会層に、とりわけ青年層に醸成していた。かれらを宗教的、内観的方向に導くには、明らかに他の現実的与件が必要だった。そこに一高生藤村

操の自裁が意義を担つて現われる。彼によつて「何のオーソリテイに値するものぞ」と痛烈に問われたものは、井上哲次郎以来のアカデミー哲学、とりわけその人間観であり、別の人間観の要請の切実さこそ、操事件を大正教養派の原点たらしめた基本的エネルギーであつたと私は見る。

巨視的に見れば、そもそもダーヴィンの生物学的進化論の影響下に逍遙が人間を「情慾的存在」と規定し、写実の方向を「百八煩惱」の描写に向けて以来、その継承としての硯友社文学を力を注いで克服しようとした自然派にあつても、その主流の論客は、「吾が身と猿とをエックス光線に照合すれば同型の髓骨現はれて転た浅まし」という人間観を抜けなかつた。教養派の後の母胎となつた「朝日文芸欄」にあつては、その「態度は、決して自然主義に対する反動ではなかつた。(略)少くとも文芸上の主義主張は、自己の性向なり信念なりに根ざすものでなければならぬと主張する所にあつた」と草平も書いたが、その自己への誠実の主唱こそ、抱月の「自己といふ其の内容は何と何とだ。自己の生を追ふた行き止りは何うなるのだ」という焦慮と諦観を克えねば発せられなかつたろう。そういう人間観の変革をかれらに要請させたものは、早稲田の自然主義思想の行詰りというより、赤門派であるかれらにより親密なダーヴィン、スペンサー的人間観の行詰りであつた。操の死は教養派世代に人間観変革のもつとも切実な現実的契機となつた。この世代の一人、藤井武は書いている。操事件は「新時代の到来を告げる鐘のやうに日本中にひびきわたつた」――この死は終りだつたのではない。

始めだったのだ。

操の事件についての論壇、教学界の論調はすでに些か細かに検証した。次に、一高の青春のこの事件の受容に触れつゝ、残る二つの個人主義思想の原型を検覈したい。

安倍能成は「我が友を憶ふ」⁽¹⁰⁾に於て、操に対する論壇の偽善的論調をあげき、一人として操の死の「至誠」を解しないのを嘆じているが、自殺を肯定するか否かの問は回避した。阿部次郎や能成の個人主義については、前者の「理想眞想の態度」⁽¹¹⁾及び後者の「個人主義を論ず」⁽¹²⁾、「我が校風観」⁽¹³⁾に於て見ることが出来る。彼等は次のように思索した。

我々は幼きころ、父母や教師の保護の下に彼等を唯一の權威として疑うことがなかった。しかし、一度び自我の自覚に達するや、この權威に依ることは不能になった。かくて我々は、一切に對する是非の判断の基準を自己の内心に求める他に道がなくなつた。しかも、「我が心其自身矛盾せる欲求に充滿せるの事実」(次郎)に気づけば、自己の泉を深く掘つて統一した原理を求めねばならない。我々はそのために、まず自己の心中の「至深の要求」(能成、次郎)に耳を傾けねばならない。

もし、歴史の教えるところが「吾人が全人格の要求」(次郎)と矛盾するならば、我々は歴史の權威に抗しよう。国家社会の權威についても自由に討究しよう。それらに根本的批評を許さぬものは、それらを形骸化して信奉するもので、「畢竟社会及生存の敵」なのだ。

(次郎)個人主義は国家社会を否定するものとする者の陋愚はあわれ

むべきものだ。「個人主義の一嘘に崩壊するが如き、国家と社会と教權と歴史と、我等何ぞ其存在を徳とせんや」(能成)我々はこれら歴史、国家、社会、教權のいずれに對しても、超越的な態度で、我々の理想をさぐらう。

我こそ我にとって、まず最高の価値たるものだ。我に理想信仰を与えるものは我であつて、一切の他は従だ。個人とは即ち人だ。しかし人といつては「やゝ意味の茫漠たる感」がある。(能成)人というも、自我、個性、個人というもすべて意味は同じだ。主義は理想ではなく出発点だ。この出発点からどういう方法で理想に向うべきだろうか。

第一に内観して自我の至深の要求を明らかにすることだ。第二にその要求を充すべき実在を探ることだ。第三にこの実在と融合一致するように努めることだ。

いかにして至深の要求を明らかにし、いかにして全心を托すべき実在を求めようか。我々は単に論理の徹底によつてそれをしようとする者ではない。我等の内心に矛盾がなくなれば不安も煩悶もなくなるだろうが、我々は価値なき平安や歓喜なき解決を欲しない。

「我等は如何に不安煩悶なしと雖も淺彩平調の凡庸境に久しく留ることを欲せず」(次郎)我々はまた単に感情の満足によつてそれをしようとする者ではない。内心の深い要求が、ある客觀的事実の存在を必要とする時、これを証明するものは理性でなければならぬ。我々は理性にも感情にも偏らず我等の全心の要求において理想を求めよう。

個人を問わずして普遍はない。我々は個人の客観性を信ずる。キリストや孔子の思想から我れを取り去れば何が残るか。これを以て見ても「なほ個人心霊の偉大と尊厳とを感知せざる者は、我れ之を人といふを恥づ。」(能成)理想に向つて我を進ませるものは何であらう。その涯に何があるのだらう。「我等個人主義の極致を遙かに無我無意識の境に憧憬す。」(能成)

右に詳記したように、大正教養派が一高の青春に於て明治末年の思想界から―梶牛、新カント派、ショウペンハウエル、ニイチエラを流行思想としたそれから―感受した個人主義的思想ないし心性は、彼等が人生や社会に対して下す判断の統一的原理として自覚されたのではなく、逆に彼等がその原理に到達するための不可欠な前提として自覚されたものであった。彼等は自己の内部を無媒介に深く、観ずることによって真の自己を把握できると信じた。この内観が深い、か浅い、かという判断は到達した哲理が非凡であるか平凡であるかによってのみ決定される。次郎がのちに、「なるべく難解の言語を用いて、野次馬と俗人とを文芸の堂外に駆逐したい」と希望し、民衆を俗衆として把握し、それへの限らない悔蔑を注いだ心情的要因は主にここにある。

彼等はまた真の自己Ⅱ個を、他Ⅱ他者に対立するものとしてではなく外なる自己Ⅱ偽なる自己に對立するものとして捉えた。このような自我観は、かつて述べたように、個を「自我」Ⅱ自己の中の自己として捉える二重構造を持つのみでなく、そこに完結した世界を見出す反面、一切の外界から自己を遮断する。彼等に取つて人とい

う概念が個人という概念よりも把握し難いものであった理由は主として右に基づく。

又、彼等は主義を認識された思想上の立ち場として自ら継続性をもつものとしてでなく、むしろ認識の出发点として自ら可変的性格をもつものと捉えることを通じて、彼等の言う「理想」Ⅱ窮極的な思想をいわば久遠の彼方に追いやつた。又、一方において第一原理追究の手段を理智と情念という互に矛盾するとかれらに信じられた機能の統合に求めて、その手段をいわば神秘化した。乃ち、その手段は、本来手段として無効であり得た。ということとは逆に、いかなる手段も第一原理の追究に用いられてもよいという無限定な許容を彼等に許すことになった。精神の世界はこの許容にたえ得るものⅡ何らの制約もない内的王国であると彼等は信じた。彼等をして多種多様な教養を無原則に求めしめた論理的ないし心理的メカニズムは主としてここにある。教養派の右の一高時代の思弁において、国家主義も亦個人主義と両立し得るものであることがいかに奇妙な迂路を通じて暗示されていることか。自我を内観して、その要求を充たすべき實在を外に探らうとする背理がいかに盲目であることか。しかも、彼等が最後に予定する理想がいかに東洋的であることか。このような個人主義が現実問題に対して、戦闘性を全く欠くことは自明であろう。そこに彼等教養派といわば教養派左派である魚住折蘆とが異質である点がある。多くの折蘆論者に反するこの観点を最近私は詳述したが、一高期における彼等と彼の径庭の甚しさを示す左の資料も、ここで記しておく。

「我等は魚住君に倣ひて絶対的に籠城主義なる者を否定する者にあらず。思ふに社会風潮の理想ある我等青年の意に満たざる者あるは今も猶昔の如きなり。この心を持つる者相集まり互に志氣を砥礪して、当世才子の世に媚び俗に阿るを嘲笑するあらば我等も亦喜んで其群に入るを辞せず。」¹⁷⁾

のちの折蘆、魚住影雄は操自裁の直後、「新人」(明36・6)に「藤村操君の死を悼みて」を草し、特にその追記において、操の葬儀に寄せられた弔辞を痛罵し、「君が至誠」を強調しながら、真のキリスト教徒は君の如き消極的なものではないと言ひ放つた。常識への痛憤は両刃の剣となつてキリスト教に向う。キリスト教徒の偽善性を激しく衝く彼によれば、今日の殉教とは智腦の酷使を避けぬことである。当代の知識人として、どうして信仰の内容を研究しないで居れよう。「今日猶理性を压抑し目前安慰の情感を満し不合理陳腐の教義を固守し、廿世紀の朝歌を見て猶ユダヤ人の神を拝するが如きは予の与せざる所也。」これが、宗教から哲学へという彼の變遷の文脈において読まるべきこと、正統の福音信仰とは遠いこと、いずれも言うをまたぬが、より彼の心性のフアナティックな響きに耳を籍したい。序でに言えは現在までの折蘆研究の基本的欠陥は、(第一資料の探索を怠っていることだ。それを言うほどの調査の及ばぬのを遺憾とするが、「折蘆遺稿」に洩れている「羊の足跡」¹⁸⁾によつて、三十四年六月にはじまる魚住におけるキリスト教が、いかに惨酷な煩悶懷疑の上に成立しているかが知れることだけ記しておく。それは「予は懷疑を経ざる信仰を耻づ」とこの追記で彼に言わ

しめる根拠であり、「曖昧と虚偽とは予の身を震わせて嫌ふもの」という告白は彼の基底にある心性であり些かも誇張ではない。

翌年五月、魚住は「我趣味を冥想す」や「我が来世観と信仰観」²⁰⁾の思索を経て、「自殺論」を動揺する一高に投じた。友の死を負つて伝習道德の虚偽と剔決しようとするモチーフがその論理を沈痛かつ激越に彩る。明治新聞雑誌文庫には、真摯な一人の一高生によつて怒りと共に抹消されたと見られる「自殺論」所載の「校友会雑誌」の一冊がある。その部分を「折蘆遺稿」によつて掘り起してみる。「」が墨で消された部分である。

(自殺は、至誠の人が此世界の虚偽を断ずる所に生まれるもので、彼は自殺を自ら殺すものと見ず、宇宙を粉碎したと思惟するのだ)

此覺了成る。「其前に君国何かあらん、親と兄弟と朋友と何かあらん。我れ豈父母に乞ひて生れ来らんや、君国に誓ひて生れ来らんや。君国の恩は我等が無垢の児心に小学校教員が刻み込みたる迷信に非ずや。此迷信を脱却して自家本然の純なる中心の声を聞かんがために要せし苦心はそも幾何なりけん。人道の盛大と人物の尊貴とは乞ふ我れの此天地の意義あるを認めたる後に聞かん。道德や人格や畢竟人界の一事実は決して意義それ自身たる能はざるを如何せんや。つらつら観ずるに我や母胎を出づるに先ちて道德の實行を約したることあるを記憶せざる也。豈加之ならんや。よし一億年の昔に溯るとも我や生れんことをすら希ひたることあらざる也。誰か猶君父の空名を備ひ來つて死の一念を翻さしめんとするや。」

自殺の肯定という飛躍をてこととして、忠孝道德の神権は拒否され

た。もはや彼の前にあらゆる既成への懷疑を阻むものはない。

「唯神経過敏の浅人、自己の薄弱なる基礎を震撼せられて狼狽し、直に流言を放つて風教に害ありと号す、乃ち訓へて君国の為めに貴重すべきの身を以て可惜私情の奴隸となせりと。何等の愚言ぞや。斯の如きの言は一切無意義也。」⁽²¹⁾借問す、風教とは抑も何の謂ぞや、之れ今日の国家社会輿論なるものが定むる所の所謂安寧利益なるものに阿附する死法なるか。多謝す、倫理先生足下⁽²²⁾、吾人に自己を外にして云ふところの人生意義あるなし。

現在の国家と今日の社会とは、過去の歴史が伝え来りし政治組織の一形式にすぎず、之を变革するのは「現代後人の特権に非ずや」と呼号する魚住の個人主義が、国家社会への变革の契機を含む点において、反権力の姿勢の過熱において、能成、次郎らのそれと異質であることは明らかである。私はこの平行線が、「朝日文芸欄」の魚住の五つの論文と例えば「影と声」⁽²³⁾の教養派の諸論との質の差となつて保たれたと見る。又、私は彼の達成の総括というべき「自己主張の思想としての自然主義」⁽²⁴⁾において明治社会主義者の「政府」という人格的な捉え方を克えて、彼が「国家」を組織として捉え、それを「敵」だと断じたことは、啄木の折蘆批判にもかゝらず、

啄木に依つてのみ継承された反権力思想だと見る。その啄木の「時代閉塞の現状」の二章末尾にある「笑ふべき『羅馬帝国』的妄想」とは、折蘆の「自然主義は窮せしや」⁽²⁵⁾の末尾近くの「今日と雖も羅馬の滅亡前の如くに、快樂に対する嫌惡の声を聞かぬでもないが、羅馬人のやうな豊満の情は今日何処にも見出すことが出来ぬ」に基

き、ここにおける折蘆の反自然主義的発想からくる理想やロマンチズムの要請を、回顧趣味と受け取ることによつて折蘆批判の武器とされた評語ではないか。それは「時代閉塞の現状」がすでにそうであるように、啄木のなみなみならぬ折蘆への関心を証明していないであらうか。

又、かつて小田切秀雄氏が書いたように⁽²⁶⁾、折蘆の「穩健なる自由思想家」を「欽楽を追はざる心」との関連に於て視、換言すれば後者を彼の思想的嘗易の最終的帰結に置いて前者や「自己主張の思想としての自然主義」の思想性を割引いて見ることは寧ろ折蘆研究の専門家といへべき人々に見られる傾向であるが、私は同調できぬ。

「折蘆遺稿」所載の諸論文の末尾に編者が付記した年月日を執筆年月日と見ることにも一沫の疑いが残る⁽²⁷⁾。かりにその疑いを無用のものとしていへば、「穩健なる自由思想家」は四十三年九月十六日の執筆、「朝日文芸欄」への初出は十月二十、二十二日である。「欽楽を追はざる心」は四十三年十月六日の執筆、初出は前者に先立つ十月九日及び十日である。僅か一ヶ月程度の時間の幅にあるこの両論の間に、転移を見ようとすることは理解できない。まして、後者は、「文芸欄」の能成の「欽楽を追ふ心」への批判として単に觀念的思弁ではない意義を担うものであることも、他稿で論証を試みた通りである。「遺稿」の四十一年五月四日、宿南昌吉宛書簡に始まり批判からやがて傾斜に至る西田天香との交渉が、彼の死の直前の時期に急速に思想性を失わしめるのは事実だが、「日本美術」の折蘆追悼号の天香の証言―魚住の思想的挫折の―に対しても同号伊藤

吉之助の追悼文はその反証となるものだ。いささか折蘆論に入り込みすぎたが、折蘆論の問題点として後考を換ちたい。

「自殺論」以後に戻れば、「個人主義に就て」⁽²⁹⁾に於て、日露戦争下の日本を見すえながら、今日の如く個人の自由が没却されて、「滑稽なる犠牲の福音」が説かれる時代には特に個人の自由を強調せねばならぬと説いた魚住が、「我個人主義は個性主義也」という形で、くりかえし「個性」という語彙を用いているのが注目される。「個性」といへば本来的に他を予定し、「自我」の重苦しい二重構造を破る、人間観変革の契機を含むからである。官僚養成機関である一高において、思想の戦闘性を獲得して行く過程を注意された。

三十八年十月、「個人主義の見地に立ちて方今の校風問題を解釈し、進んで皆寄宿制度の廃止に論及す」という長題を持つ彼の一文は、校風神聖論と新思潮にざわめく一高に激発した。従來の一高の形式的校風論を罵っては之を、最も浅薄な経世論と断じ、全校の誇りとする籠城主義を斥けて、之を思想の落武者の隠所とあざけり、個人の心霊の深き要求を認め、あくまでもその自由を主張して、最後に、皆寄宿制度は速かにこれを全廃すべきであると結んだ。果然論議は沸騰した。「エゴイスト、犬、獅子身中の虫、あらゆる悪名は彼の頭に浴せかけられ」、⁽³⁰⁾魚住亦応えて立った。我々は十一月十日の全寮茶話会における激論と同二十五日の第一大教場における校風問題演説会を記録した「向陵誌」の「弁論部部史」に他ならぬ一高の青春を見る。

後者で登壇した一高生は鶴見祐輔、水野武太郎、山下清、翠川潔、加福均三、大井静雄、左海猪平、宮崎一、江木定男、石橋茂、内田考蔵、安倍能成の多きを教え、更に先輩として大学から阿部次郎、吉村謙一郎、丸山鶴吉、青木得三、前田多門が加わった。そのハイライトともいふべきは次の場面であった。青木は、自我心霊絶対の權威とする魚住の要求は本能にすぎぬとし、本能の満足、何ぞ自治と両立するやと断じた。魚住は躍つて壇に上り、「肉体的本能と精神的本能には明確なる区劃あるにあらざるや、詭弁を廢せよ、須らく自己の心霊の自由を帰れ」と「ウォルムス議会のルーテル」⁽³¹⁾の如く叱咤して、冷凄の感を伝えた。

矢内原忠雄は左の演説会を詳記したのち、「たゞ真摯至誠自己の信ずる所を直截に表白すれば勇者の事は足る。時こそ最後の審判者なれ」と評した。だが、現実の問題として皆寄宿制度は微動だにしなかつたし、個人主義対団体主義の対決は論議を深めたとは言えぬ。明治末年に於ては、論壇の知識人と共にこの青年たちは、現実の機構制度を言論が動かし得るものとは、かけても信じていなかった。思想と行動の分離という前提の確立の上でのみ言論は過激にもなり得たのである。又彼等は主張そのものの論理的当否を問うよりも、それを論ずる態度の美醜によって論理の当否を測ろうとした。至誠と真摯さえあれば、凡そいかなる教義といえども受容するにやぶさかではなかつたのである。

「ピューリタン可なり、日蓮宗可なり、儒教可なり、メソヂスト可なり、ヒユース嬢可なり、苟くも道義の光明を摂取して、一条の白

道、自家の靈性を養はんとするものは何人も来りて我党の士たる可⁽³²⁾し」。

人格修養を以て学理教養よりも重んずる傾向は、大正教養派の青春に於ても、管見の及ぶ所では変りがなかつたのである。追従を正、反逆を影響の負の契機と呼ぶならば、ここでも負数は負の負までを含めて考察されねばならないであろう。

注

- (1) 「校」明34・百十一号、荒井恒雄「個人主義を論ず」の引用部分。
- (2) 「校」明34・百三号。
- (3) 「校」明35・百十三号、枯木郎「偏観」
- (4) (1)と同じ。
- (5) 長谷川天濤「幻滅時代の芸術」
- (6) 森田草平「自然主義に演ぜられた『朝日文芸欄』の役目」
- (7) 島村抱月「序に代へて人生観上の自然主義を論ず」
- (8) 「旧約と新約」九十号、昭2・12
- (9) 拙稿「魚住折蘆」・「国語と国文学」昭39・7
- (10) 「校」明37・百三十七号
- (11) 「校」明37・百三十八号
- (12) 「校」明38・百四十五号
- (13) 「校」明38・百五十二号
- (14) 「通俗と難解」・「朝日文芸欄」明43・9・14、「影と声」及び角川版全集2所収
- (15) (9)と同じ。
- (16) 拙稿「啄木と折蘆」、「文芸と思想」三十二号、昭43・11、尚、熊坂敦子氏に「折蘆は明治期の重みを内にしっかり蔵しながら、能成、次郎と同じ大正期の教養派の地点に立つひとなのであった」(同氏「漱石と朝日文芸欄」・日本女子大学紀要・昭41・3のうち「明治文学全集」43卷所収)という見解がある。
- (17) 「校」明38・百五十二号、安倍能成、「我が校風観」但し目次は「校風論」
- (18) 現在までに発見した「折蘆遺稿」以外の資料を摘記すれば、至の足跡(明37・

- 1 「新人」五巻一号、「人語」(「遺稿」にある問題のものと違ふ。明37「新人」五号)九号、「露伴の『心』のあと」を評す。(「校」明38・百四十四号)、『漫言』(「校」明37・百三十三号)百四十二号殆ど毎号、「美術上の基督」(「ホトトギス」明43・2)「九月の小説」(「十月の小説」(「十一月の評論」(「ホトトギス」明43・10)12)等の他、少々の訳文もある。私は「遺稿」の序にある「日記數十冊」も、能成が二度の戦災を受けていることを考慮に入れても尚、発見の可能性は残されていると思つてゐる。

(19) (18)参照。

(20) 「新人」明36・8及び36・9。兩者とも「折蘆遺稿」に所収。

(21) 能成、次郎、豊隆、草平の合著。明44・3・春陽堂刊。

(22) 明43・8・22及び23「東京朝日」、「現代文学論大系」2及び「現代日本文学全集」94に所収。

(23) 明43・6・3及び4「東京朝日」、「現代日本文学全集」94に所収。

(24) 「現代日本文学全集」94の「解説」に、小田切氏は「ここでは論(私註・歓楽を追はざる心)は感慨と思弁に傾き」とある。又「ここで『穩健なる自由思想家』を四

十三年九月、「同紙に発表」とあるのは十月に改めるべきだ。

(25) 前記熊坂氏の他、坂上博一氏(昭37・3)中山和子氏(昭39・5)の折蘆論参照。森山重雄氏(昭42・7)も折蘆に触れている。()内の年月はいずれも「文学」。

(26) 「折蘆遺稿」の「凡例」の「各文章の終にその年月」を記したという不明確さが原因である。尚、注(16)の後記での約束は本稿の以下の記述で果したものとす。

(27) (16)と同じ。

(28) 百四十三号、西田天香の「人知らざりし魚住君の後生涯」他友人三人の追悼文を収める。「帝國文学」明44・2にも黒田颯心の追悼文がある。

(29) 「校」明37・百四十二号

(30) (8)と同じ。

(31) (8)と同じ。

(32) 「校」明35・百十九号、山内冬彦「龍城主義を論ず」

四

行動は未発の思想を窺う契機であるという意味に於て、前章で

も、藤村操事件と皆寄宿制度に対する一高生の行動に些か触れた。ここで南北寮分割問題と蘆花の謀反論講演に対するそれに触れて些か補おう。

明治三十七年に起つた南北寮分割問題とは大凡そ次の如きものである。当時、一高は東西南北の四寮を有していた。このうち南北寮は借家で多額の借料を一高は支出していたが、すでに破損して大修繕する経費に困っていた。東西二寮のみでも、一室定員を旧に復せば、在寮三百余名を収容できる状態にあった。このとき、高等師範が教員養成所を求めていたため、一高側から頼み、分割を契約した。

七月四日、この報を受けた吉田熊次は、折しも学年末の休養中のため、大津水泳場に走って校友と議した。彼等は、この分割は自治寮の前途に災を招くものであり、その維持を歎願するのは先輩に対する責任であるとした。又、「学風の維持振興」は学生の責務であるならば、その維持を願うことが「孰ぞ学生の自分を越えんや」と考えた。

彼等は直ちに上京し、当時の校長久原躬弦をはじめ、前校長、先輩らの間を東奔西走する。更に大臣次官に面会を重ねる。二十九日に至り転機が来た。校長は「諸子の為に全力を漕がん」と約した。八月六日、已に工事に着手しようとしていた高師との契約を破棄して、南北寮を回復することを校長は告げた。この間維持運動に狂奔した一高生たちは、市民道徳への背反も特権意識そのものの所在すらも些かも自覚せず、「積雲散じて月皎々、只見る東西南北寮相呼応し、並立し、依然旧に抛り巍々乎として碧落に迫るを」(向藤誌)。

以下引用は同じと謳歌し、「熱誠の迸る所山をも揺かす」という教義を再認した。明治四十年の記念祭の夕べの全寮茶話会に、この事件の記事朗読が纒々尽きなかったという一事を見ても、この事件は愛寮精神の象徴として神話化されていたことがわかる。「熱誠」は「栄華の巷」を踏み潰して横行したのである。

明治四十四年二月一日、弁論部の大会は、徳富健次郎の「謀反論」演説となつて物議を醸すところとなつた。彼は四十一年の一月にも、来校して「勝の哀」を談じて、一高生の感動を誘っていた。

「謀反論」を一高生はどう受容したか。「窓にすがり、壇上弁士の後方にまで踞坐せる満堂の聴衆をして咳嗽一つ発せしめず、演説終りて数秒始めて迅雷の如き拍手第一大教場の薄暗を破りぬ。吾人未だ嘗て斯の如き雄弁を聞かず。」校内外の批難に対しては「先生は自らその血管中に勤王の血滔々たるを明言せり。而して国に諫言なきを憂ふるは支那の古聖と雖も然かせざりしならんや。(略)死刑廃止を唱へられしはこれトルストイの同じく唱ふる説にあらずや。」と弁護し、「心情摯実にして健全なる判断力を有する吾人これが為めに人格に火こそ燃やされたれ。皇室に対し国家に対し不敬無秩序の念を起す余地存せざるなり。」と誓った。事は文部省に聞え、新渡戸校長は「我輩は既に取るべき手続きをなしたり。諸君は安心して勉強し給へ」と告げ、畔柳都太郎部長と共に譴責に処された。従来から名士を呼ぶに官吏とか官学の学者等「所謂安全なる人」でなくては許されなかつたことに、「弁論部部史」は「一高生はしかく判断力を缺かざる也」、「思想はしかく型にはむべからざる也」と抗議

している。この経緯にも論評を加えることは易いであろう。しかし自由の「火」は、これら真率で柔軟な心につがれ、自ら大正期文学の底流をなしたことを疑うことはできない。

谷崎潤一郎、芥川龍之介、川端康成、久米正雄、堀辰雄―ここで一高という一文化圏から文壇に巣立っていった名を数えるべきだ

ろうか。それらの人々は右に瞥見したような青春に反撥し抵抗し拒否する所に彼等の文学を見いだしていったに違いはないであろう。だが例え無視したとしても一高という文化圏は、無視する対象の一つであったことは疑を容れる余地がない。

『それから』論

熊坂敦子

一

武者小路実篤氏は、『それから』（朝日新聞）明治四十二年六月二十七日（一月四日）について、

『それから』に頤はれたる思想を、自然の力、社会の力、及び二つの力の個人に及ぼす力に就ての漱石氏の考の発表と見ることが出来ると思ふ。自然の命に背くものは内に慰安を得ず、社会に背くものは物質的に慰安を得ない。人は自然の命に従はなければならぬ。しかし社会の掟にそむくものは滅亡する。さうして多くの場合、自然に従ふものは自然から内面的に迫害される、人の子はどうしたらいいのだらう。⁽¹⁾

と云っている。『それから』は、「自然の力」と「社会の力」が代助に働きかけ、それによって代助が動いてゆく道程を追うことにあるが、漱石がそのどちらを強く打ち出すように表わしているのか、

疑問の意を呈している。結局「自然の力」と「社会の力」の二つのうちで、どちらかに比重を置いて考えることによって、『それから』評価の規準が、異なってくるのである。「自然の力」を重視し、代助が「自然の児」になり得たことを認めた場合、「この小説は何よりもまず、日本近代小説中まれにみる、純乎とした一篇の恋愛小説である。」⁽²⁾という恋愛小説としての見方が成立つ。一方、代助の「社会の力」を重視して文明批評家としての面を重く認めるなら、その行動は社会への批判的観念を肉体化したものとして、『文明批評乃至は文明論』⁽³⁾の「性格」が、強く泛かび上ってくる。その両者いずれをとるにしても、『それから』の結末は、代助の現実生活の喪失で終わっているようであるし、恋愛も文明批判も、ほとんど崩壊のかたちで示されている。

冒頭には、夢から目覚めた代助が、「八重の椿」(一)の「落ちる音」を聞いて、「急に思ひ出した様に、寝ながら胸の上に手を当て

、又心臓の鼓動を検し始め」「此鼓動の下に、温かい紅の血潮の緩く流れる様を想像して見た。是が命であると考へた」(一)という流れる生命の自らの認識にはじまる。そして終結の「仕舞には世の中が真赤になった。さうして、代助の頭を中心としてくるりくるりと簾の息を吹いて回転した」(十七)という「真赤」に吹いている狂おしい生命の確認に終わっている。『それから』にまぎれもなく底流しているのは、この代助の生命の認識と自覚であり、『それから』はその重くのしかかっている生命の血脈が、「自然の力」「社会の力」のいづれかに通路を見つけて、新しく燃え出ることを追跡してゆくことであつた。しかし冒頭と終結の生命の奥ゆきの宿すニュアンスは、微妙な相違を示している。「椿」によつて「流れる命」を感じる代助は、生活に余裕のあるブルジョワジイのエピキュリアンの面を示しているが、最後の代助は、現実社会と接近し、接近することによつて現実社会から圧倒され、妙に昂揚し逼迫した生命を自覚している。破滅すらも予想させるという意味で、意外にも「自然」からの乖離感さえ漂わせているのである。前半の代助と後半の代助は、その生命感の自覚ということにおいてまったく異なつた視点をもっている。

中村光夫氏は「作者の分析的な手法の当然の結果として、まづ主人公の肉体に寄り沿ひ、彼の日常生活の観念を解析し、それによつて彼の観念の姿を明瞭に示した後、このあらゆる良識を嘲笑する観念に動かされる彼が、現実社会の良識との交渉に如何に弄ばれるかを描く。」と述べている。前半の代助は、「日常生活の観念」の解析

であり、後半の代助は「あらゆる良識を嘲笑する観念」の展開であり、結局は「社会の良識」についてゆけない社会と個人の分裂を描いたものとしてゐる。後半の代助は、たしかに前半の代助の観念を潰してゆく否定的な行為に駆られ、その行為の効果は明示されていない。前半と後半の代助は、外側から眺めれば大きな転換がある。阿部次郎によれば、「読者の心は代助や三千代と共に急転直下する事件の奔潭に捲込まれてクルリ……と渦を巻いて流れ行く」と表現しているように、「急転直下」という云い方が、ここではふさわしいのである。しかし代助なりの内的必然性はあつたわけで、そこに漱石の『それから』のモチーフが潜んでいる筈である。観念的存在であつた代助が、社会的な日常性に接近しようと、果敢に身を起してゆく認識や行動を支えていたのは、何であつたらうか。ここでは、文明批評家として高等遊民的性格をもつた代助と、「自然の力」の意味を問題とし、その關係を考へてみたい。

二

「生きたがる男」(一)代助は、生きていることを「殆んど奇蹟の如き僥倖」(一)と感じている生命尊重者で、その生命の特権にふさわしく「肉体に誇を置く」(二)ナルシズムの精神の持主である。彼は学生時代から「rather elegantiarum」(十四)と仇名され、自らを「特殊人」(七)と自認し、なにもものにもめげず、確信をもつてその主義を押しとおしてきたひとでもある。彼の生活は「熱い紅茶を啜りながら焼麴麩に牛酪」(一)を付け、「一日本を読んだり、音

樂を聞きに行ったりして暮(一)しているようなハイカラな日々を過し、いわゆる「旧時代の日本を乗り超え」(二)て、高尚な趣味人として明け暮れするものであった。云うまでもなく彼は、「細緻な思索力と、鋭敏な感性性」をもったインテリゲンチヤで、「天爵的」「貴族」として設定される。

したがって代助は、「月に一度は必ず金へ金を貰ひに行」(三)き、代助の生活の経済的基礎は、すべて実業家である父の財産に依存している。生活の実体をもたない代助は、「臆病で恥づかしいといふ氣」(四)を起さないのみか、観念的な生活者として、若いのに既に「nil admirari」に達している。実際の生活者として不安定であるべき代助を強く支えていたのは、「処世上の経験程愚なものはない」(五)という形而下的な経験を、即座に軽蔑する観念である。「人間の甲斐」は「麵麩を離れ水を離れた贅沢な経験」(六)に在ると、実生活と遊離した高尚な理想を掲げ、観念に身を固めて、その身の安定をはかるうとしている。

彼のこうした態度は、社会生活との微妙な対応によって生活している人間が、「世の中が悪い」と判断して、個人の意志の発展を断念しているところから由来している。それは「日本対西洋の関係が駄目」で、「道徳の敗退も一所に來てゐる。日本国中何所を見渡したつて、輝いてる断面は一寸四方も無いぢやないか、悉く暗黒だ。」(六)という、文明の運命を予知しての結果から來ている。日本は経済面・道徳面において、もはや進歩が阻まれてゆきづまつており、その文明の影響をまぬがれない人間は、絶望的にならざるを得ない。

い。目的意識を失なつた代助は、「人間はある目的を以て生れたものではな」いと自覚し、「進んで外の人を此方の考へ通りにするなんて、到底出來た話ぢやありやしない」(七)と、意志の遂行を断念する。ついに「文明は我等をして孤立せしむる」(八)という代助の孤立感への確認は、「凡そ何が氣障だつて、思はせ振りの、涙や、煩悶や、真面目や、熱誠ほど氣障なものはない」(五)と、個人の真面目や熱誠の道徳的要素すら疑つて、拒もうとするのである。

代助と反対の生活者平岡は、社会と実生活との順応を考へて、次のように代助に反撥する。「僕は僕の意志を現実社会に働き掛けて、其現実社会が、僕の意志の為に、幾分でも、僕の思ひ通りになつたと云ふ確証を握らなくつちや、生きてゐられないね。そこに僕と云ふものゝ存在の価値を認めるんだ。」(九)平岡は社会に働きかけ、その幾分かの効果を見届けることによって、存在の価値を認めようとする。平岡は積極的に社会に働きかけ、代助は働きかける意志を放棄してしまつてゐるが、両者とも個人と社会とは不即不離の關係に存在するといふ考へである。しかし代助の方が、社会から刺衝されるものが強く、疎外感がふかい。代助の立場は、文明病といふべき犠牲者の姿なのであつて、「殆んど縁故のない自家特有の世界の中で、もう是程に進化——進化の裏面を見ると、何時でも退化であるのは、古今を通じて悲しむべき現象だが——してゐた。」(二)ように、進化実は退化の相対的な現象を表わしている。代助は、高い立場から社会・國家を批判して呪詛し、その懷疑の暗雲にさらされてゐるうち、いつの間にか実生活の荒廢を招いてしまつてゐるのであ

る。代助は批判に耐えているうちに、自我を阻害し、退化を招き、いつしかニヒリズムにとらわれるようになる。しかし、代助の頭でっかちな批判者としての眼は、文明批評家としての優秀な資格をそなえていることは、云うまでもない。

「現代日本の開化」(明治四四年二月〇日)の中で「開化と云ふものが如何に進歩しても、案外其開化の賜として吾々から受くる安心の度は微弱なもの」と述べた漱石は、社会と個人の幸福は表裏一体化して、ぬきさしならぬ密接な関係にあるが、社会が進歩してもそれに比例して、個人の幸福は増進しないことを断言した。その微妙な連関の下に文明の支配を受けている個人は、その影響を鋭く受けて「神経衰弱」にかかるばかりであり、その状態は「氣の毒と云はんか憐れと云はんか、誠に言語道断の窮状」と、悲觀的な想いを語っている。漱石の文明批判は鋭く、鋭いなりに未来を透視して、暗澹とした想いを強めたのである。この漱石の文明批評の尖端に、代助の思想が胚胎した。いわば代助は、漱石の尖鋭な思想を伝え、觀念をまとった人間であつたのである。

三

こうした代助の生き方の第一の批判者は、代助の父長井得である。父から「三十になつて遊民として、のらくらしてゐるのは、如何にも不体裁だな」(三)と云われる。しかし代助は「決してのらくらして居ると思はない。たゞ職業の為に汚されぬ内容の多い時を有する、上等人種と自分を考へ」父のことを認めるところ

か、「かく有意義に月日を利用しつゝある結果が、自己の思想情操の上に、結晶して吹き出してゐる。」(三)という自負心と自恃心をもっている。むしろ代助が父に反抗しているのは、自分の生き方に自信をもっているからである。ここで「遊民」ということばが使われているように、代助はまさしく、高等遊民たる資格を余すところなく備えている高等遊民である。高等遊民とは、当時の社会現象から生じたタイプをさして云つたことばである。桑木嚴翼によると、結局高等中学を卒業した者が、大学に入学を制限されたために落第し、就職ができなくなつて、社会を呪うようになったものであるといつている。しかし一面、「職業的専門学者の思ひつかぬやうな大発見大發明」をなして、「一社会一国家の文明の程度は一に此の高等遊民の多寡に由つて得らるる」と云っている。高等遊民は、身の不遇と生の不安から社会を呪詛し、いつの間にか批判にすりかえて、自由な立場から文明推進者になり得たことを、明かしている。

また安倍能成も、高等遊民が現実的な利益にかかわることなく、純粹に自己の生命のために文芸を愛好し創造して、理想的生活を送っているひとと規定している。そして高等遊民こそ「芸術の保護者」になつてほしいと訴え、学術・芸術を媒体として、白権派の同人にもそういう努力を望みたいと要望している。安倍能成の脳裡には、高等遊民の趣味人としての生活者の姿勢から、白権派の同人たちに接近し、高等遊民から白権派への系譜が拵がっていったのである。

『それから』の代助において注目すべきことは、代助は漱石によつて、社会に存在した高等遊民のタイプから造型されたということ

であり、『それから』の意図は高等遊民的な代助に、青春の劇を演じさせることであつたといふことである。青春の劇さながらに、その生命的葛藤を展開することにあつた。漱石は高等遊民について、「小説をやめて高等遊民として存在する工夫色々考中に候へども名案もなく」（『龍川臨風宛書簡 明治四五年二月三日』）と記し、自ら高等遊民であることを願つたが、云うまでもなく漱石は高等遊民ではなかつた。つまり、云われているように代助は、漱石の自画像ではないといふことである。

高等遊民であつた代助は、その実生活とかけ離れた趣味的な生き方、生命尊重の生き方から考えて、白権派に接近した白権派的人間であつたとも云い得るのであろう。後に武者小路実篤が、『それから』の中に「自然崇拜」の思想を抽出して、その生き方を白権派の精神に自在にくみ入れていつたことは、注目されていい。そうしたタイプの代助が、社会になにもも期待できず、「神経衰弱」になるばかりだとすれば、社会から遮断された密室に向かつて歩み出す外ない。そこにあるのは、「自己の生命」であり、自己の生命を煮つめて、自己自身を探索し、回帰する道が残されてあるばかりである。安倍能成は「自己の生命の爲めに」と述べたが、代助も「自己の生命の爲めに」自己の生命の呼声に耳を傾けてゆくことしかない。代助が「自然の児」に赴いてゆかざるを得ない道が、用意されていたのである。

四

漱石は、代助をして「自然の児」に赴いてゆくことを、恋愛を契機として、次第に生命のたかぶりを積重ね、いきなり行為に導いてゆく。三年前、代助は三千代との間に「燃える愛を見出さないう事はなかつた」（十三）にも拘わらず、自分の「未来を犠牲」にしても、平岡のために泣いて三千代を周旋するのが「友達の本分」だと思ひ、「義侠心」にかられて身をひいたのである。それは「僕は君より前から三千代さんを愛してゐた。」（十六）という代助の告白を信じれば、自己の真実を偽わつたヒロイズムに心酔しての行為であり、自然に背いた他我本位の行為でもあつた。云いかえると、「鉾金」を「鉾金」で通用させた道徳であつた。ひとのために喜んで尽くした代助にとつて、その行為が自己の真実に背反するものであつたために、その時から自己の真実を閉ざす生き方をするようになったのである。

それが三四年経つた代助をして「何処かしらで、何故三千代を周旋したかと云ふ声」（八）を聞き、「あの時は何うかしてゐたんだ」（四）という一気な悔恨が甦える。「三四年の間」に代助は、「大分変化」してしまつたのである。「平岡に接近してゐた時分の代助は、人の為泣く事の好きな男であつた。それが次第々々に泣けなくなつた。泣かない方が現代的だからと云ふのではなかつた。事實は寧ろ之を逆にして、泣かないから現代的だと云ひたかつた。」（八）のである。ここに代助の自己矛盾というか、自己背信の相対性が示されているのであるが、そこにまた『それから』の矛盾も提起されている。漱石は、およそ純粹や誠実に遠い代助をして、愛の感傷と追憶にしめ

らせているのであって、代助が反対の行為につきすすんで、人間回復をめざしてゆくことの意味は、問われなければならないのである。

歴史的・社会的存在である人間は、たしかに過去を背負っており、それが纏綿として現在につながっている。代助の場合、過去の偽わりが現在に働きかけているわけで、過去は消失するよりもむしろ拡大されてゆく。そこには時間の正確な推積と、人生の成熟の実体がみられる。その間にながれているのは、むしろ意識の連鎖作用である。現在の代助は、過去の偽わりを訂正しなければ「自己に對して無能無力」であり、真に生きることはできないと悟るに至る。この過去を重くひきずるために、過去を掘り起さなければならぬというモチーフは、その後の作品『門』『こゝろ』『明暗』等にひきつがれ、過去を掘り下げるとき、必ず三角関係のもつれた姿もからまってくるように設定されている。時間のながれと、人生の成熟とは、密接な関係に置かれているのである。「生きたがる男」代助は、ながれゆく生命の連続を意識し、その意識の選択した理想を、具体的にとり戻さなければならなくなる。時間と空間を縮め、三年前の時点に立帰って、真の存在意識を呼び戻さなければならぬのである。

こうした意識の連続したながれの観念には、ウイリアム・ジェームスの考えに負うところが多い。漱石はジェームスの「心理学原理」「宗教的経験の諸相」「多元的宇宙」を愛読し、「文学論」や「日記及断片」において、ジェームスのことに言及している。殊に明治四十年に行なつた講演の「文芸の哲學的基礎」や、四十一年に行なつ

た「創作家の態度」も、ジェームスを下敷にしている。ジェームスは「抽象的な先驗主義」ではなく、「飽くまで変化と流動と自由とをもつた」具体的な直接経験を主とする考えで、人生を流動する形どとらえようとする。漱石はこの思想にふかく傾倒したとみられ、人生に確実存在するのは、意識であると考えた。その意識は連続し、断絶を好まず、選択して理想を必要とし、時間・空間の概念をつくるものであると想定した。

代助の過去の掘り起しには、先ずこの意識は連続しているということをも、根強くもつたことがあげられる。その意識の選択において、三千代の姿が焼き付けられ、離れ難くなる。それは皆過去から出立した姿であり、年月と共に積重ねられて濃厚になつてくる種類のものである。具体的に三千代の結婚に夫婦の「疎隔」が起り、それが三千代の「病氣」「子供の死亡」や、平岡の「遊蕩」「失敗」に依るものであつたにしても、三千代はたしかに不幸な状態にあり、経済的にも精神的にも代助をよりどころとし、代助の同情をこそつたことが、両者の絆を強くしていったことも、否むことができない。物心両面において頼られた代助は、三千代の面倒をみるにつけて三千代の姿が、意識の網の目にぬきさし難く突き入ってくる。現在の三千代を意識の上で強くとらえた代助は、ながれる意識をたぐり寄せて、時間・空間を超越して過去の意識をもう一度ゆりもどし、その上に立つて未来を生きてゆかねばならなくなる。

五

漱石は「断片」(明治四三年)に「最後ノ權威ハ自己ニアリ」と記したが、代助が三千代との恋を成就させるべく「自然の児」になるか、「意志の人」になるかと迷いはじめ、賽を投げたのは、その「断片」にあるように、「最後の權威は自己にある」(十四)という考え方である。何ものにも支配せられず、最後に決定し權威をもつのは、自分であるという考え方によって、今までの社会との関係における自己、家との関係における自己、友達との関係における自己を拒否する。真に生きるということは、他者との人間関係を排除して、自己の真実に徹しきることに外ならない。そこには「現代の社会は孤立した人間の集合体」(八)であるという認識が裏づけられている。代助は「孤立」に徹することで、三千代の「孤立」が見えてきて、その存在の「孤立」にかかわろうとしたのである。そして「孤立」の自覚が、自己に「權威」を樹立させる。そこにおいてはじめて、意識を根源として生命を尊重した自由と解放の精神が生じるのである。賽を投げ、決定をくだした代助が、「今日始めて自然の昔に帰るんだ」(十四)と云い得た時、「安慰」を総身に覚える。そして自然に帰り得た生命の境涯を、「純一無雑な生命」と表現する。「其生命の裏にも表にも、慾得はなかつた。利害はなかつた。自己を圧迫する道徳はなかつた。雲の様な自由と、水の如き自然とがあつた。さうして凡てが美しかった」(十四)と、至上の状態を説明する。いわば心の高鳴りに似た愛のしずかな絶唱が、ここにはある。行雲流水、本来的な自然な生命に立ち帰ったことが、美しいのである。いうならば生命の純粹さによって、「自由」と「幸福」に光り輝いていること

ができたのである。

漱石は「断片」(明治四三年)の中で、

「Experience 生ノ内容ハ experience ナリ。故二人ノ experience ヲ単調ニスルハ人ノ生ヲ奪フナリ。自カラ experience ノ範圍ヲ狭クスルハ自カラ命ヲ縮ムルナリ。

愛ノ experience ナキ者ヲ想像セヨ。非常ニ短命ナル感アラシ。(中略)人情ハ一刻ニシテ生ノ内容ヲ急ニ豊富ナラシム。此一刻ヲ味ツテ死スル者ハ真ノ長寿ナリ。」

と述べた。この愛の体験こそ生の最高の状態であるという精神が、代助の胸のおくかに自覚されている。「激すると云ふ心的状態は、死に近づき得る自然の段階で、激するたびに死に易くなる」(四)というのは、生の激しい体験の充実を求めての謂である。人生は体験であり、体験をもつともゆたかにするのは愛であるという激しい愛への喝きに支えられて、生命をゆすぶられ、果敢に代助は身を起してゆかなければならない。

その意味で、代助が「自然の児」になるという「自然」は、生命的な緊張と解放を知らせるものであっても、本能的、衝動的なもの意味しない。生命の中に本能と靈魂を分類すると、精神の確立をめざしたことにおいて、靈魂に属するものである。漱石はまた「断片」(明治四十二年)の中で、

「○Secret 靈ノ活動スル時、ワレ我ヲ知ル能ハズ。之ヲ Secret ト云フ。此 Secret ヲ捕ヘテ人ニ示スヲ十年ニ一度ノ機会アリトモ百年ニ一度ノ機会アリトモ云ヒ難シ、之ヲ捕ヘ得

ル人八万人ニ一人ナリ、文學者ノアルモノノ書キタル、アルモノノ価値アルハ之ガ為ナリ」

と云っている。「靈」は「Secret」に連なり、それは十年か百年に一度烈しい起伏をもつて活躍することを暗示している。その「靈」は胸中ふかく蔵され、内在的に云えば、理想界への志向と考えられる。瀬沼茂樹氏は「自然」ということについて、第一に「一種の自然法的、それ故に原初的で無垢な人間関係」、第二に「ある種の理想的な可能態」、第三に「さらにその奥にある人間の『真実』」と、分析している。代助が、三千代に純粹に接したことにより、生命的な「靈」が活動し、自己の奥ふかく蔵していた真実が見えはじめ、その生命を發展せしめることが、代助にとつて自然な状態になるのである。代助においては、その「靈」を働かせ、自己に忠実に心情の真実を追究してゆくことが、理想的な状態となる。それは愛を契機としてとらえられた「Secret」であり、日常の代助においては、きわめて貴い啓示であった。

六

この「Secret」はまた、反現実的で理想的な世界であることにおいて、夢の世界につながっている。『それから』には、ことさらに意識と無意識、現実と夢の問題に触れ、ジエームス流の考え方が織込まれている。代助が「やがて、夢から覚めた」(十四)という現実立ち帰る描写があり、「此一刻の幸ラッキーから生ずる永久の苦痛が其時卒然として、代助の頭を貫し」(十四)てくると説明する。「夢」の

中では「幸ラッキー」であるが、現実にめざめた時、その夢は「苦痛」を強いるものになり、現実に「復讐」されなければならぬ。とすればその愛は、代助の内面の劇として生かされるものであったにしても、現実に生存する根をもたないということでもある。あるいは、「夢」のように美しくあつても、現実には儂い力しか持ち得ぬ日常性のない観念的な愛ということを意味している。

「夢」の描写は、『それから』の至るところで散見される。冒頭では狙下駄のぶら下っている夢を見るころからはじまる。そして代助は、もともと「三四年前、平生の自分が如何にして夢に入るかと云ふ問題を解決しやうと試みた事があつた。(中略)正気の自己の一部分を切り放して、其儘の姿として、知らぬ間に夢の中へ譲り渡す方が趣があると思つたからである。同時に、此作用は氣狂になる時の状態と似て居はせぬかと考へ付いた。」(五) というように、夢の状態に異常な関心をもつ男である。そしてその夢の状態は、「氣狂になる」という異常な状態に通じている。ある日代助は、鈴蘭の「香を嗅ぎながら仮寝をした。——枕元の花が、次第に夢の方へ、蹀ぐ意識を吹いて行く。是が成功すると、代助の神経が生れ代つた様に落ち付いて、世間との連絡が、前よりは比較的楽に取れる。」(十)境地に誘われる間に、三千代がいつの間にか現われるのである。そして代助は「これほど寝入つた自分の意識を強烈にする」(十一)ために三千代に逢うことを、決意するに至る。『それから』には、無意識としての夢の世界に意識的であり、そこに代助が自己をつなぎとめ、次第に愛と交錯させようと努力している傾向がある。「愛に関

しては代助の明晰な意識の領略できぬ部分があるらしい」という説も成り立つ。代助の愛は、自己の再発見であり、自己の確立のためにあるものであった。しかしその愛は、次第に「明晰な意識」ではとらえ得ない、夢のような色合いを帯びたものへ上昇する。それは高等遊民である代助が、「Secret」を現実に敷衍する方法を、もたなかったということも意味するのである。

だいたい近代における精神の自由と独立は、近代社会から立出する種類のものである。「凡ては社会的現実から出発」していた代助である。それが三千代に愛を告げ終わったとき、「万事終る」(十四)と宣言しなければならなかったのである。終わったのは、現実生活のつながりとしての自己存在である。愛を獲得すべき積極的な行為でありながら、その行手には生活の喪失が暗示され、愛も奪略の運命が示唆される。「黒く恐ろしい」「運命の流」(十五)にながされて、未来においてどこへ運んでゆかれるのかわからない。存在していることの不安は倍加される。「自己が自己に自然な因果を發展させながら、其因果の重みを背中に背つて、高い絶壁の端迄押し出された様な心持」(十六)であったのだ。自己の存在意識は、それを獲得しようとして、否定されるような危機感を伴ったものに、ひきかえられるのである。

代助が満足であったのは、「彼自身に正常な道を歩んだといふ自信」(十七)だけである。多分にひとりよがりの点があり、他者への配慮、連帯意識は存在しない。彼自身以外は、却って人間関係の対立意識をふかめるだけになる。「三千代以外には、父も兄も、社会

も人間も悉く敵であった。彼等は赫々たる炎火の裡に、二人を包んで焼き殺さうとしてゐる。代助は無言の儘、三千代と抱き合つて、此箴の風に早く己れを焼き尽すのを、此上もない本望とした」(十七)である。愛は次第に浮き上つて現実感を薄めてくる。「社会も人間」も敵に廻し、愛の箴に「焼き尽すのを、此上もない本望」とする精神は、夢想的な浪漫のただ中に身を置くことに外ならなかったのである。

七

むしろ「箴」にみられる赤は、原罪的な愛の不安感を表わしている。

漱石は「断片」(明治四十二年)の中で、

「Uncertainty——人事不安ナリ。今日ノ愛人モ明日は変ルト思ヘバ不安ナリ。名譽財産悉ク不安ナリ、老ノ人ニ逼ルテ愈不安ナリ。此不安ノ念ヲ切実ニ感ジタル者ハ道ヲ求ム」

と記した。生きてゆく人生の予定調和を約束させられない未来は、悉く不安である、厭世的な考えを披瀝している。これは、生きてゆくこと自体避けられない不安感が、現実とまじわる接点として、常に実感としてあるという考えである。『それから』に扱われる不安感は、生存を脅かす暗いものとして底流しているが、代助が生きてゆくことを自覚するときに、必らず当面し突き動かすものとして存在した。猪野謙二氏は「大きな八重樫の花の色は、恋愛を中心とする根源的な生の不安の、また同時に『学校騒動』がいいあら

わす社会的な不安の象徴として扱はれ、ここに、はやくもこの作品全体を貫く主題が開示される。」と、みごとに指摘され、その不安感

は恋愛におけるものと、社会におけるものと二様に使い分けている。代助がはじめて不安を感じるのは、三年前に自己の真実を背いて、偽善の行爲を行なったときである。それからは「代助の頭も胸も段々組織が變つて来る様に感ぜられ」て、不安や苦痛を感じないようになる。「丁度天へ向つて石を抛げた様」に、びたりと留つて自分を抑えてしまふのである。そのころの人々が「流行語の様に人が使ふ、現代的とか不安とか言ふ言葉」に対して代助は、「現代的であるがために、必ずしも、不安になる必要がないと、自分丈で信じて居た。」(六)のである。しかし代助はこの間、「漠然たる未来の不安」(四)は感じてゐる。一度不安の洗礼を受けている代助は、その不安を克服して脱皮できないままに、不安を誤魔化して生きていくのである。だから代助の不安は旋回し、他人の不安を批判することができる。文学者が、「好んで不安と云ふ側からのみ社会を描き出すのを、舶来の唐物」(六)のように考へて軽蔑し、「煤烟」の主人公たちが、「誠の愛で、己むなく社会の外に押し流されて行く様子が見えない。彼等を動かす内面の力は何であらうと考へると、代助は不審である。あゝいふ境遇に居て、あゝ云ふ事を断行し得る主人公は、恐らく不安ぢやあるまい。」と批判する。「誠の愛」で「社会の外に押し流されて行く」「内面の力」には、不安感が充滿していなければならぬと見抜いてゐる。不安感のない愛は、人工的なパッションにすぎず、真剣な愛ではないというのである。これは、後

の代助の運命をよみとつて見ると見ることが出来る。可能であろう。

要するに代助は、偽善の仮面をかぶつていた時は、実存の不安感から身をそらせて生きていくことができた。しかし偽善の鋳金(めつき)をはぎとつたとき、不安感に向き合わせにならざるを得なくなる。不幸にも代助は、生存の孤絶にかかわつたとき、真に生きようとする自覚についたのである。「現代の日本に特有なる一種の不安」に襲われるようになった。代助は、その社会における不安からの脱皮と、人間的な成熟をみるべく、愛の世界へ押しやられてゆくのである。

実は愛の啓示は、生存の疑惑と不信を埋め、不安感を癒すべきものであつた筈なのである。およそ「渝らざる愛」を信じ難くあつた代助が、人生觀を変え、社会の道德を踏み越えて三千代への愛に身を起してゆくことは、いわば社会にむかつてのすこやかな挑戦であり、自己への忠実と信頼に根ざしている行動において、高等遊民的な性格の脱出を意味してゐた。愛を信じることによって、高等遊民的なまぬぬい、余裕のある生活と、訣別しようとした。

しかし代助の選択した愛は、「天意には叶ふが、人の掟に背く恋は、其恋の死によつて、始めて社会から認められる」ような悲劇的なものであつた。告白後の代助が、三千代との恋愛の貫徹のために、はじめて職業を求めるに當つて考へたことは、「如何なる職業を想ひ浮かべて見ても、只其上を上滑りに滑つて行く中で、中に踏み込んで内部から考へる事は到底出来なかつた。」ような上滑りな現実感のないものであつた。そして漂泊者のような姿を想定して、「生活の墮落は精神の自由を殺す点に於て」「尤も苦痛とする所」

で、「如何に落魄するだらうと考へて、ぞつと身振ひ」したりするのである。「富が三千代に対する責任の一つ」(十)と考へている代助にとっては、自分の経済力の資格のなさについての動揺をかくすことができない。生の実質をしかと確認できないままに、三千代に向つて詫びてみたり、「我慢しますか」とか「漂泊——」と云つてみて、戦慄しているのである。最後に代助は仕送りを断たれ、現実生活のつながりを失ない、三千代の死骸を渡されるかもしれない妄想におののいている。その恋は「三千代と抱き合つて、此後の風に早く己れを焼き尽す」ような現実と遊離し、背反したものであった。これが代助の恋愛の決算として、現実にはまじわる限界点であり。現実を根をおろそうとする接点すら見出すことのできないものであった。そこにたしかめられたのは、人間への懷疑と不信と、狂気のよるな孤独感である。もはや代助の主體的な真実とかかわりなくはりめぐらされた隔絶感が、残されているのみである。代助の心の奥には、一歩すすめられた深刻な不安感の分裂が、みられる。それは物質的な現実生活の喪失による不安感と、恋愛の崩壊による不安感を意味している。彼は愛の刑罰に対して施す術をもたず、二重の重く不安感のみ、現実に対応しなければならなかつたのである。

八

一方、三千代の方はどう対応したのであろうか。「色の白い割に髪の毛の黒い、細面に眉毛の判然映る女」で、「美しい線を綺麗に重ねた鮮やかな二重險」(四)をもっている三千代を、漱石は好んだタイプの

一人として、きわめて理想的に描いたと思われる。代助が三千代の愛を遂行するに當つて、幾多の障害に直面し困却していることに對して、「今貴方の御父様の御話を伺つて見ると、斯うなるのは始めから解つてるぢやありませんか。貴方だつて、其位な事は疾うから気が付いて入らつしやる筈だと思ひますわ。」(十)と云う。これは小宮豊隆が『近代人』的ではないのかも知れないが、しかしこれは三千代がすぐれた直覚を持つてもあれば、また一面事理に明るい頭脳を持つてゐることを、はっきり示す言葉である。(10)と指摘したように、三千代は代助に対するもつとも身近な批判者としても登場する。こうした位置での発言は、また代助の信念に對して「何だか厭世の様な呑氣の様な妙なね。私よく分らないわ。けれど、少し胡麻化して入らつしやる様よ」ということばも、高等遊民としての代助を「胡麻化して」いるという分析で、よく理解していることを実証している。経済生活の断たれた代助が、「是から先まだ変化がありますよ」と云つたのに對し、「何んな変化があつたつて構やしません。私はこの間から、——この間から私は、若しもの事があれば、死ぬ積りで覚悟を極めてゐるんですもの。」と、最後の覚悟を決めている悲愴な決心を悟り、「漂泊でも好いわ。死ぬと仰しやれば死ぬわ。」という壮美の激情をぶちまけている。その激情を示した後は、落着きをとり戻し、「微笑と平和」に輝いているのである。

こうした三千代の態度は、結局代助の愛を受入れた痛切な体験にもとづくものであり、その愛に生きようとするけなげな姿勢を示し

ている。三千代は、代助の出会いからして、代助を受入れようとする態度をもっていたのだ。三千代が昔代助から貰った百合を覚えていて、その花を携えてゆくこと(十七)や、代助との記念の指環を生活費の方へ廻してしまつて「仕方がないんだから、堪忍して頂戴」と云うこと(十)や、「貴方は羨ましいのね」「何だつて、まだ奥さんを御貰ひなさらないの」の切り込んでゆくところ(十三)や、告白後の代助に対して、昔「打ち明けて下さらなくつても可いから、何故」「何故棄て、仕舞つたんです」と泣き、「私だつて、貴方が左様云つて下さらなければ、生きてゐられなくなつたかも知れませんか」と云うところ(十四)等から推して、三千代は代助と再会したときから代助との歳月をゆりもどして、その愛を暗に待ち焦れていたようにさえ受取れる。つまり三千代は愛に魅つて、愛に生き得るような女性なのであつて、その地点に立つて「漂泊」をも「死」をもいとわなないと、云いきることができたのである。代助を信じ、生命を賭けて悔いようとする。そこには不倫の愛の原罪的不安も見出すことができない。このことは、代助との連帯感があつても、代助と共に現状の打開に向かうという積極的な姿勢を示していない。三千代には、愛における不安も、現実社会の不安からも、まぬかかれてゐる。三千代は代助を信じ、代助の懐の中で勇氣を持ち得る女性である。三千代は個人として生存の不安に身をさらすより、代助に従つてゆこうとする女性なのであつた。

漱石は『それから』について、『それから』の主人公は小生だとの御断定拜承、所があつた代助なるものが姦通を致さうにて弱り候。小生もそんな趣味があれば別段抗議を申入るゝ勇氣も無之候。」(群柳太郎宛書簡 明治四二年七月二六日)と述べ、代助の姦通そのものを描こうとする趣味がなかつたことを、明らかにしている。代助の恋愛はひと妻に寄せる熱いものであつたにしても、はげしい緊張を湛えた生命的なものなのであつた。「彼は三千代に対する自己の責任を夫程深く重いものと信じてゐた。彼の信念は半ば頭の判断から来た。半ば心の憧憬から来た」という描写があるように、その恋は知性と心の憧憬の総体としての精神的燃焼であつたのである。

また漱石は『それから』の書かれる二年前に「家庭と文学」(明治四〇年二月一日)の中でも、「自分の考では恋愛は強ち排斥するには及ばぬ。熱烈なる恋愛の表現にでも強ち之を避くるには及ばぬ。また恋愛を他の感情即ち忠孝などの感情に従属せしむるの必要があるとも限るまい。たゞ作家の方に充分の手腕あり、其表現をして純潔ならしめ、無害ならしむると云ふことだけが肝要である。」と、恋愛を高く評価しているのだが、その表現は「純潔」で「無害」であることを旨としている。

「純潔」にして熱い恋なればこそ、代助の負う苦痛も甚だしいものがあつた。愛の「刑」と「齎」(たまひ)と同時に受けて、三千代の分も含めて、不安感の中にゆれ動いていなければならぬ。『それから』は、「仕舞には世の中が真赤になつた。さうして、代助の頭を中心としてくるりくるりと縁の息を吹いて回転した。代助は自分の頭が焼

け尽きる迄電車に乗って行かうと決心した。」という狂えるような実存の不安を漂わせて終わっている。こうした高等遊民たる代助の一変して深刻な立場の著しい変化については、二様の説が出されている。山室静氏によると、「彼の生活の全的な変革であるばかりか、彼の最も誇りをもって高く持して来たその思想・観念の全的な破産を示すものであることを否定できない。この見地に立つてみれば、作者が最初から代助を全的な肯定において描いているのではないことは自明である」と、代助の人間変革がなしとげられず、ましてその思想・観念も破壊されたと、否定的な見解を明らかにしている。これに対し相馬庸郎氏は、『自然の児』たることを決意し、行動する代助の運命自体が、代助の言にあらわれた明治文明のゆがみの小説的表現になっているととられなければならない」と、代助のたどる運命そのものが、そのころの文明のゆがみを映したもので、最後まで代助が、文明批評的態度を持っていたことを主張している。

結局高等遊民であった代助が、「自然の児」に赴いてゆくことは、真正なる意味において人間回復、あるいは人間新生をめざすことであつた。後半における代助の行動は、高等遊民というタイプからの微妙な背離を示し、代助の行動をとおして漱石は、高等遊民でありながら真の人間の生命感の回復を試みようとした。高等遊民がもつニヒルの払拭への努力を払おうとしたのである。倦怠からの脱出と云つてもいい。しかし生命の呼声によつてつらぬこうとした恋愛は、現実生活への定着をみないままに終わり、結果はまことに惨憺たるものであつた。それは文明批評家代助が、日本の文明開化によ

つて受けた不安感により、この不安感に満ち充ちている現実には、恋愛を定着する勇氣と意志をもち得なかつたことも意味している。恋愛は夢であり、社会は絶望であり、憧憬と恐怖はまじわることなく分裂し、愛はさわやかな喜びにうたい上げられることなく、現実に突き当たったとき、むしろ沈鬱な不安感を底にもつたものとして、拡がっていったのである。それが「自然の復讐」であつた。そのため代助の最後を、山室静氏のいうように「思想・観念の全的な破産」とは考えられない。現実に対する認識が強まってきたために成就されない恋愛であり、夢からさめた現実、くろくろと代助の前にたちはだかつていたのである。いうならば、最後まで高等遊民としての運命から逃れられない恋愛であつた。代助は、やはり高等遊民であり、高等遊民的生き方しかできなかった。それゆえ代助は、「自分の頭が焼け尽きる迄電車に乗って行かうと決心」するのである。そのため漱石に残された課題は、高等遊民ではない生活者として、現実には定着された恋愛の行方を見守ることであり、ここから「門」への道がながつているのである。

注

- (1) 武者小路実篤『それかと』に就て、『白樺』明治四三・一一
- (2) 猪野謙二『日本文学の鑑賞のために』(岩波講座日本文学の創造と鑑賞) 岩波書店昭和一九・一一
- (3) 江藤淳『夏目漱石』(東京ライフ社昭和三・一一)
- (4) 中村光夫『漱石私感』「それから」について、『思想』昭和一〇・一一
- (5) 筆者「高等遊民の意味」、『解釈と鑑賞』昭和四三・一一
- (6) 桑木敬異「高等遊民」、『太陽』明治四四・八

- (7) 安倍能成「文壇の高等遊民」(上)(下)〔朝日文芸欄〕『東京朝日新聞』明治四
四・八・三〇・三二)
- (8) 瀬沼茂樹『夏目漱石』(東京大学出版会昭和三七・三)
- (9) 越智治雄『それから』論〔日本近代文学〕第5集昭四一・一一)
- (10) 小宮豊隆「解説」〔漱石全集〕第八卷岩波書店昭三一・七)
- (11) 山室静「漱石の『それから』と『門』」〔夏目漱石全集〕第二卷創芸社昭二九・
八)
- (12) 相馬庸郎「それから」〔国文学〕昭和四〇・八)

大正期のロシア文学と朔太郎

久保忠夫

日本語で、『カラマーゾフの兄弟』が完訳されたのは大正七年になつてからである。大正六年六月に上巻が、同年九月に中巻が、そして、翌七年一月に下巻が、という順序で、逐次出版された。この翻訳は、米川正夫による、ロシア語からの直接訳で、出版社は、新潮社であった。

上巻が出ると、「早稲田文学」（八月号）は次のように紹介した。

中型六七四頁定価一円三十銭、『カラマーゾフの兄弟』はドストエフスキ一の最長編で又その最傑作として許されてゐるもの、トルストイの『戦争と平和』と共に実に十九世紀に於ける世界的大作の随一である。さきに森田草平氏の訳もあつて広く行はれてゐるやうであるが、それはこの翻訳のやうに露文からの直接訳ではなかつたやうである。（下略）

また、同じ月の「新潮」の裏表紙にある広告は、『カラマーゾフの兄弟』の全訳は、本書によりて始めて公にせらる。果して盛んに迎へられつつあり。中巻既に印刷に着手、九月に出版。本年十一月迄に全部三巻完了の予定也。」とつけており、同じ号の「出版部から」は、これに呼応して、『カラマーゾフの兄弟』は全訳がはじめて出たので大歓迎です。真面目な芸術品で、こんな面白いものはないと云ふことを申しましたが、果して中編の催促が盛んに参ります。上編をお読みになった人は、一日も早く中編を手にしたいと云ふ考が出ずには居られません。訳者は此の暑さに閉戸客を謝して訳筆を急いで居られます。もう印刷が進みだしましたから、九月には大丈夫中編が公にされます。」という、七月二十五日づけのたよりが出てゐる。もちろん、このような文章は出版社が手前味噌をならべたものにはすぎない、と一蹴してしまえないこともないが、のちに、訳者みずからが、「その時の『カラマーゾフ』は三巻に分けて

出すことになり、第一巻が発売されたのは、たしかに五月頃だったと思う。非常な好評で、新潮社も第二巻の原稿のために、毎日つかいをよこして、居催促で持つて帰らせるようにした。」(『純・根・才』、昭三七・二)と回想している、当時の模様を伝える資料と見るべきではあるまいか。

中巻は、予定通り九月に出版された。上巻・中巻をあわせ読んだ武者小路実篤は深い感銘をうけた。それはやがて、大正七年一月の「文章世界」に『ロダンの言葉』と『カラマゾフ兄弟』となつてあらわれ、読書界に一大センセーションをまきおこした。『ロダンの言葉』と『カラマゾフ兄弟』は、「手帳の内より」の総題のもとに発表された、六項目からなる感想の一つであるが、そこで実篤はまず、「大正六年にはいろいろのものが出た。自分の読んだものはごく少しいだが、その内で一番感心したものは、高村君によつて訳し集められた『ロダンの言葉』と米川氏訳の『カラマゾフ兄弟』だ。」と書き、『カラマゾフの兄弟』について、「米川氏訳の『カラマゾフ兄弟』は上と中切りまだ出てゐないが、之は又驚くべき本だ。世界にこんな本は又とあるかと云ひたい。ないにきまつてゐる。之に比敵する小説は世界に十とはあるまい。五つもあるまい。そんな気する本だ。驚く、驚く。ドストエフスキーはこゝで自分が一生で得たものを、のこりなく表現した、情熱と愛と信仰とをもつて。この本がなければ人類は救はれる、一人のこらず救はれる、救つて見せる、さう思つてかゝられたものにちがひない。(下略)と、感激の限りをぶちまけてゐる。

この文章を読んだ萩原朔太郎は——のちに『青猫』に収められた「鶏」は「手帳の内より」のすぐ前に掲載されていたというめぐりあわせだったのだが——翌二月の「感情」(七号)の「詩壇時感」で、これをとりあげ、次のように書いた。

一月の文章世界で武者小路実篤氏が、ドストイエフスキーの「カラマゾフの兄弟」を評して「世界にこんな本はまたとあるまい。驚く。驚く。」と言つてゐるのは、丁度少し以前に私が始めてこの本に接して驚嘆のあまり、「救はれた、救はれた」と叫んだのと、同じやうな奇蹟的驚異を語つてゐるものだ。

実際、この書物はいくら読んでもいくら深く考へても、底が知れないといふ恐ろしさをもつた書物だ。あの傲慢な哲人ニイチエをして、自分の嫌ひな基督教的センチメンタリストではあるが、しかも自分の最も愛敬する第一人者だとまで言はせた大ドストイエフスキーの神秘思想の全部は、殆んどこの「カラマゾフの兄弟」の一卷に尽されてゐると言つてもいい。

少なくとも此の書物を手にしてその重さが感じられるほどの人でなければ、私の言ふ神秘主義や、感傷主義のほんとの精神は解るまいと思ふ。(いつか日本に遊びに来たロシヤの象徴詩人バリモンツ氏なども、その愛読書の第一にこの「カラマゾフ兄弟」をあげてゐたのは流石だと思つた。)(下略)

実篤の文章は、単に、朔太郎をして上の感想を書かしたただけでなく、米川訳「カラマゾフの兄弟」の普及に絶大な寄与をしたやうである。米川ものちに、「武者小路実篤氏が絶讃を呈したので、

『カラマーゾフ』はベストセラーをつづけた。『鈍・根・オ』と回想している。もっとも、実篤の評を誰も「文章世界」で読んだはずはなく、出版社が広告に引用したものによって、大方は知ったのであつたらう。たとえば、大正八年六月に新潮社から刊行された、生田長江訳『ツアラトウストラ』第九版に付された『カラマーゾフの兄弟』の広告に、「武者小路実篤氏曰く。米川正夫氏訳の『カラマーゾフ兄弟』は、驚く可き本だ。世界にこんな本は又とあるかと云ひたい。無いにきまつてゐる。驚く、驚く。ドストエーフスキイは茲で自分が一生で得たものを残りなく表現した、情熱と愛と信仰とをもつて。此本が出れば人類は救はれる、さう思つて書かれたものに違ひない。」とかかれている。

下巻は、実篤の評が「文章世界」にのつたと同じ一月に世に出た。これで、『カラマーゾフの兄弟』の全訳が示されたわけである。室生犀星の『第二愛の詩集』(大八・五)の巻頭の詩「永久に」には、

「永久にさうして行きませう！」

一生涯手をとりあつて行きませう！」

カラマーゾフ兄弟の終りの

コリーヤの此の言葉をよみ進んだとき

自分はほんとに涙を感じた

たとへ悪い人間になつても

善い人間に生長しても

おたがひ慍うして遊んだ少年時代を忘れないで

たったこれだけを忘れないで居よう

みんな少年等が誓ひ合ふところで

自分は何も彼も忘れて泣き出した

ああ、「永久にさうして行きませう！」

一生涯手をとり合つて行きませう！」

と歌われているが、これが犀星の『カラマーゾフの兄弟』を読み終つた時の姿であり、犀星の読んだ『カラマーゾフ』は、米川訳の全訳であつたのである。

ところで、ここで、ことわつておかなければならないことがある。それは、『カラマーゾフの兄弟』全三冊のうち、下巻は米川正夫の訳でない、ということである。

米川は、中巻の訳が進行しているころ、大蔵省に入り、それが刊行された翌十月、ロシアにわたつた。渡露にさきだつて新潮社に、『カラマーゾフ』の翻訳については「ペトログラードへ赴任後、公務の余暇に翻訳をつづけて、稿なるに従つて送るから、しばらくの遅滞を我慢してほしい」(『鈍・根・オ』)との申し入れをしたが、新潮社は頑として応ぜず、「社の翻訳書の中でもっとも好評を博した出版物を、一時中絶するということは、営業上どうてい考えられない話である。誰かの下訳で刊行をすすめさせてくれ」(同上)という意向であつた。米川は、「大局から判断して、この譲歩を肯んぜざるをえなかつた。」(同上)

米川の在露期間は極めて短く、下巻が出版されたのと前後して、帰朝している。が、下巻が彼の手になつたものでなく、帰朝に先だつて出版されていたことにも変りはない。米川はこう書いている。

日本へ帰ってみると、『カラマゾフ』の第三巻はすでに出ていた。昇さんの推薦で、やはりニコライ神学校出の山内封介君が、その翻訳に当たったのである。が、その出来ばえは？ 私
の不安は杞憂でなかった。どのページもどのページも、訳誤の
ないところはなかった。しかし、一般読者はそれにほとんど気
がつかず、不審をいだく人もなかったらしい。もっとも、それ
には一つの理由がある。当時、新潮社の編集次長をしていた故
加藤武雄氏が、私の訳した部分を熟読して、文章だけは前二
巻と調子を合わせながら、筆を入れたからである。(『鈍・根・才』
だから、犀星が涙をながした、「カラマゾフ兄弟の終り」の訳は、
米川訳ではなかったわけである。米川は、上につづけて、「私はこ
ういう翻訳に自分の名を冠しておくに忍びなかったので、第三巻は
ぜひ改訳さしてくれ、と申し込んだところ、新潮社も『いざれ機を
見て改版します』と快諾してくれた。しかし、それが実現したの
は、数年後のことであった。」と書いているが、「それが実現し」
て、『改訳カラマゾフの兄弟』が出たのは大正十四年十月のこと
である(正しくは、十月に出たのは全三冊のはじめの一巻。翌十一月の「日本
詩人」(新潮社発行)巻末の広告は、「米川氏の『カラマゾフの兄弟』
は稀有の名訳として定評の存するものであるが、更にその完璧を期
する為め新たに改訳する事となり、全三巻三千枚の雄篇、これを精
細に原文と対照して厳密なる改削を施された。真に是れ『理想的完
訳』として誇り得べきものである。」とうたっている。ここに、真
の意味での米川訳『カラマゾフの兄弟』が出現したのである。

(下巻の、両訳の異同をみることは興味あることだがはぶく。)
以上、米川訳『カラマゾフの兄弟』があらわれるまでの過程
を、広告や、書評や、回想やをてがかりとしてたどってみたのであ
るが、次に、米川訳が出はじめる以前の、『カラマゾフの兄弟』
について考察してみたい。

二

百田宗治は『路次ぐらし』(昭九・九の「ドストイエフスキイ思ひ
出」にこう書いている。

『カラマゾフ』と云へばその前(筆者注、大正六年六月に米川訳の出る
前)だったか後だったかに、森田草平氏の訳本が一つ、それか
らもう一冊、訳者の名は忘れたが、菊判の分冊で完結はしな
ったが、『カラマゾフの兄弟』といふ題で出てゐたのを憶へて
ゐる。後の方の本も無論読んだが、詳しいことはおぼえてゐな
いし、妙に癖のあるあまりいゝ翻訳ではなかった。森田氏の訳
本もたしかこれは完本の原作によつたものでなかったやうに記
憶する。(ジイドが『カラマゾフ兄弟』論の中で言及してゐる、
最初の『カラマゾフ』の仏訳本、たしか早熟プレコクといふ題のついた
小型の抄訳本を、その当時私も読んだが、外国にはさういふ種
類の名作の再構成本が沢山出てゐるものらしい。)

ここに、「森田草平氏の訳本」というのが出てくるが、これは、
はじめに引いた「早稲田文学」(大六・八)に、「さきに森田草平氏の
訳もあつて広く行はれてゐるやうである」とあるものと同一物であ

ろう。草平とドストエーフスキイの関係については、すでにふれて
いるものもあるので——とくに、夏目漱石とドストエーフスキイを
結びつける媒体として——はぶくが、この訳本というのは、大正四
年四月に日月社から刊行された森田草平訳『カラマゾフ兄弟』のこ
とと考えられる。この本は、のちに、出版社を、越山堂、三星社と
変えながらも、大正十一年八月には二十版を重ね、さらに、大正十
三年二月には、復興第一版と銘うって石渡正文堂から出、昭和二年
六月に復興第四版が出るというふうで、大正のはじめから、昭和初
年にかけて、かなり読まれたものである。この本が拠ったテキスト
について宗治は、何か外国の名作の再構成本を想定しているが、そ
れは「森田草平訳」とあることにとらわれすぎた結果で、正しくな
い推定であろう。わたしは、むしろ、ガーネット女史の英訳が原文
で、その邦語のダイジェスト版が『カラマゾフ兄弟』である、と
考えている。その根拠は、同書に付された「ドストイエフスキイ小
伝」は「フョドル・ミハイロギッチ・ドストイエフスキイ、露西
亜語では何う綴るか知らないが、英語でも書物に依っていろ／＼綴
字が違ふ。」という文章ではじまるが、これによって、英語臭を強
く感じさせられるし、また、『カラマゾフ兄弟』よりやや遅れて大正
四年七月に出た『悪霊』では凡例でテキストにふれて「此書はメレ
シニコーフスキイ監修の独逸訳とコンスタンス・ガアネットの英吉
利訳とを対照重訳したものである。只独逸訳の方は理義明白、透徹
した文章ではあるが、間々省略して大体の意味を取ったところ、が有
る。で、邦訳は大体英吉利訳に拠ることにして、余りに文章のごた

ごたした怪しげな箇所だけ独逸訳に拠ることにした。」と主として
ガーネット女史の英訳によったことをあきらかにしていることであ
る。もともと、米川訳の中巻が出たとき、「帝国文学」(大六・二二)
にのつた新刊紹介で、「森田草平氏もかつてガアネット女史の英訳
から『カラマゾフ』を訳さうした。すると、米川氏の訳が出たの
で手に取って見ると、『むしろ米川氏の方がガアネット女史の英訳
より好い位だ、こんな好い訳が出たのに今更英訳から重訳する必
要はない』と云って翻訳を見合せたと云ふ話」を披露しているの
で、大正三年ころにはまだ、ガーネット女史の訳を手に入れている
かったと考えることも出来る。

ともあれ、『カラマゾフ兄弟』は、ダイジェストであるが、ダイ
ジェストながら、広く読まれて、多くの人の心の糧となった。佐藤
春夫はこれを読んで、大正四年六月十五・十六の両日、「『カラマ
ゾフの兄弟』——草平氏に対する感謝の為に——」を「読売新聞」に掲
載した。

ダイジェストといえば、米川正夫も、これよりさき、大正三年十
月に、ダスタエフスキイ作・米川正夫編『梗概・カラマゾフの兄
弟』を出している。次はその回想である。

新潮社が、『カラマゾフの兄弟』の物語、すなわちダイジ
ェストを、新しく企画された叢書のために書いてほしい、と依
頼して来た。こちらからの持ち込みでなく、書肆からの依頼を
受けたのは、これが初めてなので、私は勇躍して仕事に取りか
かった。一と月あまりで、二百五十枚の原稿を書き上げ、数か

月のち(大正三年十月)、型は文庫版をひとまわり大きくしたようなものだったが、クロースの表紙の立派な本が現われた。この大作の内容が具体的に日本の読者に知られたのは、私のダイジェストの功であるといっても、空虚な自負ではないと思う。若くして逝った天才彫刻家の中原悌二郎は、この本を読んで讚嘆し、「じつにすばらしい、原作はずっとずっとすばらしいに相違ないだろうが、これ以上にすばらしく書けるとは、相像ができない!」と叫んだことを記憶する。(鮎・根・才) ちなみに、この叢書には、ほかに、ユーゴー作・徳田秋声編『梗概・哀史(レシセラブル)』、トルストイ作・島村抱月編『梗概・戦争と平和』などがある。

順序からいえば、次には、宗治が「菊版の分冊で」出た、と書いているものについて述べるべきだが、そのままに、ガーネット女史の英訳について書いておきたい。

千葉掬香に、大正二年三月二十六日の序をもつ『泰西思潮(第一輯)』という著がある。その中に、「昨年ロンドンの書肆ハイネマンよりドストエフスキ全集の英訳の第一巻として『The Brothers Karamzov』を出した。訳者は先にツルゲネイフの全集を英訳したシス・コンスタンス・ガネットである。」との記載がある。シス・コンスタンス・ガネットは Constance Clara Garnett (1861—1946) のことだ。「ドストエフスキ全集の英訳」とあるのは、一九二二(明四五六)から一九二〇(大正)にかけて刊行された『The Novels of Dostoevsky (全十二巻)』をさすものであろう。掬香のいう

ように、この第一巻として『カラマゾフの兄弟』が一九二二年(日本では明治廿五年と改元された年)に海彼の国で出版され、すぐに舶来されて、大正初期の文学青年たちによるごび迎えられたのである。(ガーネットの英訳はいまエブリマンズ・ライブラリーに二冊本としておさめられている。)たとえば、大正三年四月の「新潮」に発表された江馬修の「祈り」と題する小説の結びは、まず

“My brother asked the birds to forgive him; that sounds senseless, but it is right; for all is like an ocean, all is flowing and blending; a touch in one place sets up movement at the other end of the earth. It may be senseless to bey forgiveness of the birds, but birds would be happier at your side — a little happier, anyway — and children and all animals, if you yourself were nobler than you are now. It's all like an ocean, I tell you. Then you would pray to the birds too, consumed by an allembacing love, in a sort of transport, and pray that they too will forgive you your sin. Treasure this ecstasy, however senseless it may seem to men.”

と、ガーネットの英訳によって、第六編ロシアの僧侶・第三シマ長老の説話と教訓の中より「祈禱、愛、他界との接触」の一節を引いて、つぎのように述べている。

この一節をドストエフスキの「カラマゾフ兄弟」の中に見出したのは、それから間も無い事であった。このロシアの大天

才は、イエスよりも先に自分の霊を目醒まして呉れた人である。(中略)

自分はもう自分の苦痛や悲哀を恐れはしない。何故と云つて、自分は祈る事を知ったから。さうして今この心の秘密を明らかに表はした事に依つて、傷の痛みの薄らぎはしなないと、非常に恐れてゐる。

さらば、神よ、わが胸に祈りの火の消えざるやう、絶えず苦痛の油を注がせ給へ!

邦訳が出て、多くの人々を感激させるにさきだつて、ガーネットの英訳がこのような深い感銘を与えたのである。このような感激の記録は、さがせばまだいくらかもある。ここには、いま一つ、方面をかえて、宇野浩二が、『文学的散歩』(昭一七・六)にかいてゐる、若き日の三上於菟吉の挿話を挙げよう。

三上は、不思議な青年で、粕壁から浅草まで汽車で三往復する間に、ガアネットの訳の、ドストイエフスキイの、『カラマゾフの兄弟』を讀了するやうな読書家でありながら、その『カラマゾフの兄弟』を小脇に抱へなどして、上京する毎に、よか楼に立ち寄つたのは、よか楼万竜に露骨に(密かにの反対に)思ひを寄せてゐたからである。

さて、宗治が「ドストイエフスキイ思ひ出」であげてゐる、「菊版の分冊」で出たという翻訳について述べたい。わたしはまえに「朔太郎とドストエフスキイ」(昭三三・四「比較文学」)という小論を書いたことがあるが——そして本稿は多分にその補遺・訂正的な意味があ

るが——、その前後から、朔太郎がどのテキストで『カラマゾフの兄弟』を讀んだかということを追求めていた。朔太郎は、「初めてドストエフスキイを讀んだ頃」という回想の中で、「僕が初めて讀んだD氏の小説は、例の『カラマゾフの兄弟』であつた。勿論翻訳であつたが、僕はすっかりこれに打たれてしまった。あの歴大な小説を、二昼夜もかかつて一気に読み了り、夢から醒めたやうにぼんやりした。当時僕がどんなに深く感動したかは、その時讀んだ本の各頁に、鉛筆で無数の書き入れや朱線がしてあるので、今でもその古い本を見る毎に、新しい追憶の感銘が起るほどだ。」といつており、これは、大正五年六月の、高橋元吉あての書簡に、「私は『カラマゾフの兄弟』をいちばん愛讀しました、それにラインをつけておきましたから、是非兄にも御通読を願ひます」とあるのに符合するので、大正五年六月以前に出た、つまり米川訳以前に出た翻訳と見当をつけ、米川正夫に教を乞うたところ、『カラマゾフ』の邦訳は小生訳が出る三四年前、三浦閑造なる人が金尾文淵(?)から訳出しました、恐らく英訳からだつたと思ひますが確かな記憶はありません、但しこの翻訳は最初(の)二・三篇を二分冊にして出ただけでその儘未完結に終りました、(昭三三・七・三〇つけ)とのことであつた。宗治のいう、菊版の分冊で出た『カラマゾフの兄弟』というのは三浦閑造訳にちがひない、とそのとき思つた。そして、三浦訳の『カラマゾフ』というのは、矢野峰人が、その著『去年の雪』に「その(筆者注、上田敏が文芸講座で『カラマゾフ』を賞讃した二三年後には「ドストエフスキイも喧しく言はれるやうになり、

メレジュユースキー著『人及び芸術家としてのドストエーフスキ』の翻訳も出たり、『カラマゾフ』の三浦関造訳も出るやうになりなどした」と書いているものであった。(ちなみに、国立国会図書館編の『明治大正昭和翻訳文学目録』には三浦訳はのっていない。)しかし、その後もしばらくは、三浦訳にも三浦関造にも出あわなかった。三浦関造に手紙を書くことが出来たのは、昭和三十五年に入ってからで、手紙の返事は長女の田中恵美子から二月十一日づけでもらった。そのころ三浦は病床にあり、三月三十日には世を去った。田中書簡の伝える聞き書によると、テキストは「英訳のみ申しまして、英訳者の名前を記憶して居りません」、出版社は「金尾文淵堂」、「二巻まで出版」、「全体の三分の二程訳したと申して居り、あと一巻出す予定だったと申します。」とのことであった。そして、間もなく菊版二分冊の『カラマゾフの兄弟』を送ってもらった。第一巻は大正三年十月三日、第二巻は十月十八日発行。分量は、大体、岩波文庫本のはじめの二冊分——くわしくは、第六編まで——である。完結しなかったことが惜しまれるが、この本こそ、重訳であるにしろ、日本における『カラマゾフの兄弟』の最初の翻訳なのである。三浦訳の原本が、ガーネット訳であることは、その時期からいって、両者の照合によって、疑いない。次に江馬修の「祈り」に引用された英訳にあたる三浦訳によって示す。宗治が、「妙に癖のあるあまりいゝ翻訳ではなかった」といっていることの当否も見ていただきたい。

私の兄は小鳥に許してお呉れと云って居ました。没常識わが常識の様

ですが、いやいや、正しい事です。凡てのものは大洋の様で流動し混同して居ます、だから地の一端に触るれば、忽ち地の果が動きます。小鳥に許を乞ふのは没常識でせうが、小鳥はあなたの側にあつて幸福を感じます。小鳥でも牛馬でも、あなた達が今よりもっと貴い人であつたららもつと幸福を覚へます。今凡ては大洋のやうだと云ひましたが、凡ての物を抱擁する愛に燃されて小鳥の爲めに祈つてご覧なさい。彼等に私の罪を許して呉れと訴へてご覧なさい。人には没常識のやうですが、これ実に法悦三昧の宝です。

三

朔太郎の讀んだ『カラマゾフ兄弟』のテキストは、想像通り三浦訳であつた。わたしが三浦家に所蔵されているものを借覧したころ、それとは無関係に、当時前橋市立図書館長であつた渋谷国忠が、朔太郎の生家に住む、妹の津久井幸子から図書館に保管をたのまれた一連の朔太郎蔵書の中にこの翻訳書を発見した。まぎれもなく、上に引いた「初めてドストエーフスキを讀んだ頃」や高橋元吉あて書簡に出てくる「無数の書き入れや朱線がしてある」本であつた。この翻訳を、朔太郎が如何にして知り、如何なる機縁で手に入れたかわからないが、朔太郎も「雲雀料理」や「天景」の詩を発表している、大正三年十一月の「地上巡礼」に、この本の紹介が出てはする。

著者巽にロマン・ロオランがジャン・クリストフの一部を訳

出して（筆者註、大正三年六月四日刊行の『聞を破って』、偉大なる仏蘭西の小説家を先づ我國に紹介せられたり。今又筆を改めて近代露西亜の文豪ドストイエフスキイがカラマゾフ兄弟二巻を訳出せらる。顧に近來ドストイエフスキイの小説の翻訳せられたるもの二三ありと雖も、ドストイエフスキイが最後の大作カラマゾフ兄弟を遺せり。則ち今や三浦氏の翻訳を得て、ドストイエフスキイが邦訳完備せりといふべし。（菊版全三冊。総六八〇頁。定価各巻円參拾錢。東京麹町金尾文淵堂。）

もちろん、この紹介文を朔太郎が見たという可能性はある。けれども、見たという確証はどこにもなく、ましてや、見て買ひもめたという証拠はどこにもない。それどころか、渋谷国忠によれば、朔太郎所蔵本には古本屋のふちようが打つてあるという。それでわたしは、朔太郎がこの本をもとめたのは、大正七年二月の「感情」の「詩壇時感」に「少し以前に私が始めてこの本に接して驚嘆のあまり、『救はれた、救はれた』と書かれた事件のあった、大正五年四月十九日をそう遠くさかのぼらない時点においてであつたらうと思う。あるいは、買ひもとめる時に、かつて読んだ「地上巡礼」の新聞紹介のことが、脳裡によみがえつてくるということがあつたかも知れないが。

ところで、煩雜になるが、次に、傍線の個所を抜書し、書き込みを挙げておこう。（書きこみは、黒インキ、エンピツ、赤エンピツでなされている。引用文のおわりに括弧して示してあるのは、岩波文庫本の米川訳の該当する個所である。）

書きこみはまず、第一巻の、訳者自序のおわりの半頁ほどの余白からはじまり、その裏面の裏白の一頁一面にわたつて、読後の感想が箇条書にされている。

○何人も必ず読まねばならぬ書物、

○世界第一の書物はこれである、

○聖書の近代的、解説である。キリストの眞の精神はこゝに説明される、こゝから新しい道徳と人類の新しい歴史が始まる。

○この書物をよんだ人は、一晚の中で急に賢人になることができる。

○神と人間と悪魔との歴史をかいたもの、

○小説ではない事実である、恐ろしい事実である、

○この書物さへよめば他のあらゆる書物はよまないでもいい。人の一生の中に、

○この書物を読んで恐ろしいと思はないものは世界最大の勇者か。然らざれば馬鹿である、

○この書物をよんで感動しないものはどんな書物をもみても感動することのできない人である、

○眞理と幸福とを求める人々の福音書、

○キリストに至るの道はこれである、

「詩壇時感」(大七・二「感情」)に「かつて私が『世界第一の書物』と言つた、『カラマゾフの兄弟』うんぬん」のことはがあるが、このことばは、ここで、おそらくは、はじめてこの本を読んだときに吐かれたのである。「世界にこんな本は又とあるか」といつた実篤

の感激ぶりにかよふといえよう。

▽第一巻の三七頁 世界中で、只一人、お前ばかりが俺を悪人だと思つて呉れ無い。俺はさういふ感じがする。胸の中から、其ういふ感じがおさへきれぬ程湧いて来る。(第一巻五八頁二行—四行)(赤・傍)

▽第一巻三八—三九頁 使徒トマスは「見る迄は信じない」と云つたが、見たら、「吾が主よ、吾が神よ」と云うた。其は奇蹟が彼に迫つて信ぜしめたのであらうか? そうではあるまい、只彼は信じたいと思つて居つたから信じたのである。或は、「見る迄吾は信ぜず」と云つた時已に、自分の心の奥底では充分信じて居つたかも知れない。(第一巻五九頁八一—一行)(エンピツ・傍)

この天の余白に「求むるものはかくの如し」とエンピツで書き込んでゐる。大正五年十一月に高橋元吉にあてた書簡の内容と関係がある。

▽第一巻四〇頁 一体社会主義は単に労働問題ばかりでは無く、先づ何より先に無神論の問題である。……神無くして建てむとするパアルの塔である。しかも地から天へ登らうとするのでは無く、地の上に天を引き下さうとするのである。(第一巻六〇頁一一—四行)

天にエンピツで「不徹底なる社会主義を啖(喰)ふ、/社会主義者とは何ぞ、空中に種をまかんとする痴人の夢のみ」という書き込みがある。「社会主義の悪徳」「感情」31)や「掌上の種」(月に吠え

る)と関係がある。

▽第一巻八五—八六頁 只々懺悔して、恐怖おそなさるな。貴婦かたが思ひもよらぬ程、神様は、罪と共にある。(第一巻一〇三頁—行)

この次のセンチンスは「天に於ては十人の義者よきものよりは、一人の悔改かへむる者に多くの喜びあらむと昔基督は仰せられました。」である。

▽第一巻九六頁 じつと斯う眼をつぶつて、若し茲に人が信仰を持って居るならば、其は何処から来たのだらうと考へて見ます。人は自然の現象に對する恐怖から信仰が湧くと申します。其では有り難くはありません。一生涯信じて、死んで仕舞へば何も無く、墓の上には茫茫と山牛蒡が生へるばかりで御座います。(第一巻一一六頁一一—一六行)

天にエンピツで「詩とはかくの如きものか」のかきこみ。その左に、「愛を求むる心は神を求むる心」とあり、さらにその左には「求めんとして求めざるもの、その感情」とのかきこみ。

▽第一巻九七頁 「何うしましたら?」「生ける愛の経験で悟が開かれます。自ら進んで、挽ひまずに人々を愛してあげなさい。慈愛の心が進めば進む程、貴婦あなたは神の實在と、貴婦の魂の不死とが一層心に明かになって来ます。全く吾が身を忘れて人を愛すれば、疑無く信ずるやうになります。きつと心に平安が得られます。此れは実験された事、確かな事でありませぬ。」(第一巻一一七頁一一—一五行)

天に、エンピツで「詩より科学に/空想より実行に」のかきこみ

がある。前頁の「愛を求むる心は神を求むる心」のかきこみもこの個所への感想であろう。

▽第一卷九八—九九頁 例へて申しますれば、私は雇はれ人です。直ぐに賃金を貰ひたいのであります。愛を以って仕へますから、愛を以って払って貰ひたいのであります。でなければ私は誰も愛する事が出来ません。(第一卷一一八頁一七一—一九頁一行)

天にエンピツで「何たる真実ぞや」と書いている。有償の愛と無償の愛と。コリント前書十三章の「愛は……おのれの利を求めず」のことが浮んでくる。

▽第一卷九九頁 私は一般にヒューマニティーを愛します。でも愛すれば愛する程特別に人を愛しなくなりません。私は屢々熱心にヒューマニティーに仕へて居ると云ふ幻想を感じまして、突差の必要あらば人のために十字架につけられてもよいと思つて居ますが、さてく本場になると、さう云ふ段が、二日程人と一緒に同じ室に居る事も出来ません。人が私に近よつて来ますと、もう直ぐ其の人の人格が私の自己愉悅を掻き乱して、私の自由を束縛致します。二十四時間の中には最善最良な人でも悪くなりません。何う云ふ処から厭味が差して来るかと云ふと、飯食ふのが永かつたり、風邪を引いて鼻をズウく云はせる様な事からです。人が近づいて来た(第一卷一九頁六一—三行)

天に、赤エンピツで「驚くべきもの」とかきつけてある。その左にエンピツで「所謂ヒューマニティーとはかくの如きものか」とあ

り、さらに、その左に「人道的ロマンチックの幻滅」とある。

▽第一卷一〇〇頁(承前)瞬間、私は其の人を敵視する様になります。けれ共何時でも、私は箇人的に人が悪くなればなる程、ヒューマニティーに對する愛情が熱心になります。……「でも何うしたら宜しゅう御座いますせう? 斯う云ふ場合には何うしたら宜しゅう御座いますせう? 絶望しなければなりませんでせうか?」否。其を悲しみなさるので充分であります。出来る丈の事をなされませ。其程深く真実に貴婦が御自分を知つて居られる事が、已に大きな仕事です。(第一卷一九頁一三行—二〇頁三行)

「愛情が熱心になります」までの天にエンピツで「この真実、この感情を如何せん?」とかきつけている。これと、大正五年四月の、高橋元吉あて書簡にあるN(奈良)に對する仕打の告白との關係。

▽第一卷一〇一頁 幸福が得られなければ、何時も正しい道にあると思ひなされ、而して其から隔れてはなりません。其から虚偽を棄てなさい、一切の虚偽を棄てなさい。特に自分を偽つてはなりません、自分には虚偽は無いかと始終其に御氣をつけなさい。嘲る事を止めなさい。人を侮つてもなりません、自己を嘲つてもなりません。自分の心の中に悪いものがある様だつたら、自分で確かに其を知れば、其れで貴婦は清まります、恐怖を棄てなさい。恐怖は虚偽の結果に過ぎません。愛しようとする心の足り無い事をも恐れなざるな。悪い事を仕出かしても

余り心を痛めなざるな。私はもう此れ以上に貴婦を慰むる言葉の無いのを悲しみます。(筆者注、ここに『のしるしがある』) 夢想の愛に較ぶれば、生ける愛はつらい、痛ましいもので御座います。

夢想の愛は人々の前に直ぐ現はれむとする死真似のやうなものです。死に真似た事なら何でもない事です。役(第一巻一二〇頁一四行—一二二頁八行)

「恐怖を棄てなさい。恐怖は虚偽の結果に過ぎません。」の個所の傍線はとくに二本で、その天にエンピツで「神経は良心に非ず、」とかきこんである。「悪い事を仕出かしても余り心を痛めなざるな。」の個所の傍線も二本。余白に、「夢想の愛と生ける愛との區別」「詩と科学との區別」「詩の愛は楽しく、生ける愛は苦し」とエンピツでかきこみ。

▽第一巻一〇二頁(承前)者が死に真似すると見物人が手を拍いて喜びます。然し、真の愛は労働であります。堅忍不拔であります。或る人にとつては完全なる科学であります。けれ共私は予言して置きます。貴婦が何麼とんまに努力しても、目的に近づく事が出来無いで、反つて遠ざかり行く恐怖と苦痛とを経験なざるならば——其の瞬間、貴婦は目的に達しなざる。そして永遠に貴婦を愛し、神秘的に貴婦を導いて下さる主基督キリストの不思議な力を明かに見とめなざる。……婦人は泣いて居った。(第一巻一二二頁八一—一五五行)

天に「ああ、何等の言ぞ、驚くべき理解、驚くべき信仰(仰)。たれか、泣かざるものぞ。」とエンピツでかきこみ。「貴婦は目的に

達しなざる。」には傍線が二本、これに対する感想であろう、地にエンピツで「愛の奇蹟を信ず」とのかきこみ。

▽第一巻一一五頁 唯一つ真の効果を表はすもの、唯一つ、真に罪を止め、罪を柔らぐる者は、良心で罪を認識する事であります。……凡て過激な労働を課して追放を宣告したり、

又は昔の如く鞭撻したりするのは人間の革新は出来ず、加ふるに犯罪を停止させる事も仲々出来ず、犯罪の数が減ずるところか絶えず増加して行くのであります。それで、遂には社会の安寧を維持する事が出来ず、憎む(第一巻一三三頁四—二二行)

▽第一巻一一六頁(承前)べき人間は機械的に追放されて、見えなくなるけれど、他の犯罪者が陸續として急ち現はれるのです。屢々二倍の犯罪者が出て来るのであります。現代に於ても、社会の安寧を維持し、犯罪人を復活変化せしむるものがあるとすれば、其は只々犯罪人の良心に私語ひそごとき給ふ基督の法則ばかりであります。(第一巻一三三頁二—二六行)

左端の余白に黒インキで「良心とは何? 感情とは何?」とかきこみ。「犯罪人を復活変化せしむるもの」以下は傍線二本。

▽第一巻一二二頁 此の星は東方に登ります!(第一巻一三六頁一〇行)

朗太郎には「光は東方より」といった思想への共感がある(たとえば「愛国詩論」)。

▽第一巻一二二頁 神を信ずる基督教信者で同時に社会主義者が居ります。是等の人々は私共に最も怖ろしいものです! 基督教

社会主義者は、無神論的社会主義者よりもっと怖ろしいのであります。(第一卷一三七頁一四一—一七行)

天に黒インキで「トルストヒの輩」とかきこみ。この時点における朔太郎のトルストイ観がうかがえる。このような観方は「社会主義の悪徳」(「感情」31)をへて、『新しき欲情』の「非文明への感情」などに展開して行く。

(未完)
〔補注〕 森田草平訳『カラマゾフ兄弟』は、「帝国文学」の「新刊

批評」によって考えると、はじめ、大正三年から四年にかけて、上中下三分冊で出たものであったらしい。それを四年四月に合冊にして出したものと考えられる。テキストは、「中」に抄訳とあるところからすると、やはりガーネット訳の英訳と思われる。

〔付記〕 首尾ととのわないが、すでに指定の紙幅がつかたので、また、第二編の第五までおわたたので、筆をおくことにする。書きつぐとすれば、ほぼ同じ分量があとにつつきそうである。

「田園の憂鬱」の文体

山 敷 和 男

「田園の憂鬱」は論じつくされているようで論じつくされていない、と私は思う。まだかなり解明されない部分をのこしたまま、佐藤春夫の代表作ということで文学史上に一つの地位を占めてしまっている。私の当面の課題はもう少しこの作品の内包している問題をひきだしてやることにある。それでとりあえずかねてから気になっていたこの作品の文体の問題にとりこんでみることにした。

周知のようにこの作品は、大正五年四月から十二月までの間の、作者自身の神奈川県都筑郡中里村字鉄での生活が材料にされている。もちろん実生活から材料がとられたとはいっても、作者自身の表現をかりていえばそこに彼が住まなければならなかつたところのある世界のアトモスフィアの再現がこころみられたのである（改作田園の憂鬱の後に）。そして作品ははじめ「病める薔薇」と題されその腹案は大正五年九月、中里村での生活の中になった。実際にその第一稿が書かれたのは翌年の五月でそれから書き加えられたり加筆訂正

されたりして、満三年の日子を費して完成された。定本完成までに発表された未定稿は三つになるが、それを次のように名づけて論をすすめたいとおもふ。

○大正六年六月「病める薔薇」（雑誌『黒潮』に発表）|| 第一稿

○大正七年九月「田園の憂鬱」（雑誌『中外』に発表）|| 第二稿

○大正七年十一月「病める薔薇」（短篇集「病める薔薇」天佑社刊所収。第一稿と第二稿をあわせ、加筆訂正したもの。第一稿にあたる部分には大幅な加筆訂正がある。第二稿にあたる部分についてはそれが少ないことその他からみて、第二稿完成のときに第一稿も書きなおされたと考えられる。）|| 第三稿

○大正八年六月「田園の憂鬱」（単行本として新潮社より刊）|| 定本

* 目次には「病める薔薇」「田園の憂鬱」の二つが掲げられ、ともに一七頁よりはじまることになっている。一七頁の中扉の題は「病める薔薇」、副題に『或は「田園の憂鬱」とあり、一八頁に（一九一七年五月作同年十二月改作。統篇「田園の憂鬱」

一九一八年二月作をも含む、未定稿」とあり、一九頁の内題は「病める番歌」である。
 ＊＊ 本の扉は「一枚あり、二枚とも「改作」と角書があり、作品の扉にはやはり「或は病める番歌」と副題があるが、「改作田園の憂鬱の後に」では「本書をもつて定本としようとする」とある。
 以上のことが暗示している様々な問題についてはこの稿では必要最少限にしかふれないことにする。

このように完成までに長い日子がかかり、かつ改稿に改稿がかさねられたのは一つには文体の問題がからんでいたからではないかとおもわれる。「田園の憂鬱」の文体は華麗で装飾的なかわりには練りに練ってゆかないと仕上がらないものであるから、才人春夫もはじめてそういう文体をこころみした場合、かなり難渋したであろうとおもわれる。しかし、私が文体の問題というのは、そればかりをさしているのではない。より本質的な、彼の文学と生き方にかかわる問題につながるかたちで春夫が文体に苦しんだということがあったと思うからである。

「田園の憂鬱」執筆当時の文体上の悩みを知る材料はかなり残されているが、まとまったものとしては「詩文半世紀」がある。それによると文体の摸索は大正三年の『我等』創刊頃からのことらしい。春夫はその頃詩を書きながらも散文に対する志をすてず、一方自分の求めている結晶した文体（ドライでかつちりした文字の結晶）は、国語の性質にあわなないと思つてるところへ、武者小路の自由画のような文体が現われたので、結晶体のスタイルはあきらめて、流動体のスタイルに転向した、という。同じ本でまた、後年芥

川は、もう少し頑張るべきであるといつたが、二十五歳（大正五）までに出世作を書かなければいけないと誓つていたので、腰をすえて文体を探求するゆとりもなかった、といつてゐる。（『青春期の自画像』によると、父からの生活費の仕送りが二十五歳でうちきられてしまふという生活の方の事情もあった。）

ここには大別して二つのことがいわれている。一つは詩と散文の問題。他は文体の問題。

詩と散文の問題については、春夫がこの時期に詩を書きながら散文に対する志をすてなかつたと、「詩文半世紀」の文章どおりを考えるべきなのか、それとも詩から散文へうつろうとしていたと考えるべきなのか、そのところはなお一考を要するが、これは後日の課題としたい。今は文体の問題に焦点をしぼることにする。

まず結晶体のような文体とはどんな文体なのか。それがなぜ国語の性質にあわなないのか。

かつてこの文体の問題について、私は春夫に直接たずねたことがあった。（講談社版「日本現代文学全集」の「佐藤春夫集」年譜作製のとき、中村完氏と訪問した際）そのときのノートからこれに關係したことを摘録してみると、――

明治四四～五年頃、武者の文体に感じた。

結晶体のような文体というのは、法律文のような、ドライな文体で、自分の作品にはそうしたものはない。漢文の文体のようなもので、一度いったことはくりかえさないもの。鷗外のものなどその一例だが（註。「詩文半世紀」「青春期の自画像」によると「十人十話」

「諸国物語」をよんでいる。)自分の考えるものよりはなお文学的な文である。(ここで私は、では心理描写はできないのではないですかと質問したところ、「そうそう」とうなずいて)心理描写は不可能と理解した。

「西班牙犬の家」を書いたときは、結晶体をあきらめていた。これは流動体、つまり書き放しの文体である。自分はいつもちがったことをしたくなる。

流動体の文体の作品は私のすべての作品がそうである。しかし「田園の憂鬱」も「或る女の幻想」もともに流動体まで行っていない。「田園の憂鬱」に用いたのはデコラティブな文体で、この文体はこれでもう十分書いたので、かきたくなくなつた。デコラをとりのぞいた文体でかいたのが「都会の憂鬱」である。これが緒に附いた。――

「詩文半世紀」の記述と右のノートをつきあわせてみると結晶体のような文体がどんなものかはほぼ理解できる。それは純然たる事実直叙式の文体である。したがって微妙な心理のあやなどはまったく表現できない。ところが国語は主語が少なく、代名詞の用い方もルーズで、重複の区別も厳密なところがなく、その上、文章で表現する際明確なイメージをつくることを意識的にさける傾向(臙化法など)すらある。したがって春夫が、結晶体のような文体を志していくら悪戦苦闘しても、到底完成しえなかつたとおもわれる。だからそこに気がついてあきらめたというのは賢明なやり方であつたといえる。(春夫が、国語といい、漢文といつたときどんなものをさして

云つたのかはわからない。国語＝国文とすればそのころ愛読してゐたという伊勢物語であろうか。漢文は唐詩、韓非子かも知れない。そうするとわりあい説明がつくようにおもわれる。芥川がもう少し頑張るべきであつた、といつたのには、芥川なりの理由があつた。これはまた別個の問題である。)たまたまそこへ武者があらわれて、思いきつて自由な文体をつかつたので、結晶体をなけばあきらめかけていた春夫が、それとは全く逆の傾向にとびついて行つたことは当然であつた。

春夫の記憶には多少の混乱がある。「詩文半世紀」では、文体の摸索は大正三年ころからになるが、私のきいたときは明治四四～五年頃ということであつた。どちらが正しいにしろ、彼が結晶体をあきらめてから書いた作品「西班牙犬の家」(大六・一「星座」?)まではかなりの年月がたつている。文体の意識的な変革はこの間におこなわれたわけである。

結晶体から流動体への変革後、流動体のスタイルが完成されるまでに、つまり「都会の憂鬱」がかかれるまでに、春夫には文体上まだ課題があつた。春夫は私に、「西班牙犬の家」は「書き放しのもの」、つまり流動体の文体であるといつたあと、「田園の憂鬱」は「デコラティブな文体で、「或る女の幻想」とともに、まだ流動体まで行っていない、とのべているから、結局「西班牙犬の家」もまだ流動体まではいっていないわけである。すると結晶体から完全な流動体に至る間の、試みに終つた流動体に二種類があつたことになる。

「西班牙犬の家」「或る女の幻想」の系統
試みに終った流動体

「田園の憂鬱」||「デコラティブなもの」

||書き放しのもの

このうち「西班牙犬の家」の系統の「書き放しのもの」は、のちの「しやべるやうに書く文体」に発展してゆくもの、「田園の憂鬱」の方のデコラティブなものは変質しなければたとえ流動体であつても「しやべるやうに書く文体」にはなつてゆかないものである。デコラティブな文体というものは、たしかに入念に、説明に説明を加えてゆかなければならない文体であり、結晶体の一つの対極と考えられないこともない。しかし「書き放しの文体」ならば表現内容を一回意識にのぼらせて普通の言語秩序にくみこめばすむところを、デコラティブな文体でかくためには、さらにもう一度それ（普通の言語秩序にくみこまれたもの）を対象化して加工しなければならぬ。だから流動体の本来の姿はむしろ「書き放しの文体」に求められるといわなければならない。

この問題をよりはつきりさせるために、もう少し具体的に作品にあつて考えてみたい。

「田園の憂鬱」の完成されるまでの主要な作品で、かつ、春夫がそれとの対比でいった作品は「西班牙犬の家」と「或る女の幻想」である。この二作のうち「田園の憂鬱」との比較にどちらがより適切かという点前者である。というのは前者の方が「病める薔薇」の腹案ができたその翌月にかかれてゐる上に、その成立事情が詳しくわかつてゐるので文体の性質が正確につかめるし、なによりも作者自

身がこの二作の文体をはつきり區別して考へてゐる証拠の文章をのこしてゐるからである。

旧三巻本（改造社刊）全集の、各作品のあとの日付は制作年月を示してゐるとおもわれるが、それによれば「西班牙犬の家」は大正五年十月にかかれてゐる。しかしもつともよく作品の成立事情を語つてゐるのは「思ひ出と感謝と」（大二三・四『新潮』）である。その一節に
いう、――

ひとり田舎の家の長火鉢の片わきに寝ころんで私は、退屈のあまり書き出したのだ。思ふやうに原稿紙を買へないから、私は「人間悲劇」の書きつくしをうら返してそこへそれも小さな字で走り書きた。一時間ほどで書いたのは十二三枚だつた。つづいてすぐに新しい紙へ書き直すと、それが十九枚あつた。久しぶりであつたし、すらくと出来たし、実際自分でも何がどんな風に出てゐるのだから知らなかつた。そのなげやりの気持こそかへつてうれしかつた。もとより自信も何もなかつたのだ。

ちよつと長く引用したのは、この作品がかかれた時の、作者の、人生にも芸術にもあきあきしてしまつていた様子がよくわかるからである。そして右の文中の「なげやりの気持」というのが、よく「西班牙犬の家」の特色をものがたつてゐる。退屈のあまり書き出して仕上がりについてもなげやりの気持でいられるというのは、退屈||倦怠自身を自然に言語秩序にのせて表現して、それをそれ以上対象化することをあきらめた態度である。これはもちろん作者が、

無意識のうちに流動体、しかも「書き放しの文体」への道をたどりはじめていたことを意味する。春夫が、この作品を書いたときは結晶体をあきらめていた、と私にいったのは、あるいはあとから回顧して話したからではないか。(この点、「詩文半世紀」その他の記述もそう考えられる。)

「田園の憂鬱」の執筆事情をもっともよく伝えているのは「詩文半世紀」である。やはりやや長くなるが、次に引用してみる。

秋の夜長になると田園の家はさびかた。それでも、わたくしはこの生活をどう表現すべきかを考えつづけて、楽しみが無いはなかった。構想はほゞまとまったように思われた。しかし、筆をとってみると、それが容易に書けない。これは「西班牙犬の家」や「公治長と燕」のように、ペンがひとりて書くものではなく、わたくしがペンに書かせなければならぬのに、そのわたくしが、これを思いどおりには書けないのである。ただ同じ構想を幾度でもこねかえして、ぼんやりしてしまっただけである。(昭三八・八 読売新聞社刊による。)

「思ひ出と感謝と」にくらべるとはるかに後年の文なので、はたしてどこまで実情に正確かということになると問題ではあるが、構想のたつたころの雰囲気は伝わってくるようにおもふ。「西班牙犬の家」の執筆の時といちじるしくちがうのは、まず作者が「この生活をどう表現すべきかを考えつづけた」ということである。これは「退屈のあまり書き出し」て「一時間」ほどで「十二三枚」古原稿のうらに書いたのとは大変なちがいである。しかし、単に「この生

活をどう表現すべきかを考えつづけた」だけのことなら、作者が非常な意気込みでいたというだけのことである。この場合それを「わたくしがペンに書かせなければならぬ」という文章と組み合わせてよまなければならない。「ペンに書かせる」という表現は、書くのに苦労したというのと同じにもとれるが、しかし「意識的に文章を構成する」といった方がより適切なのではないか。「西班牙犬の家」の方は「ペンがひとりて」書いたというが、それが前述のように、退屈を自然の言語秩序にのせて表現したものとすれば、「ペンに書かせる」というのはその言語秩序にくみこまれたものを、さらにもう一度対象化することを意味しているのではないだろうか。つまり、以上二つの文章は「西班牙犬の家」と「田園の憂鬱」との文体の相違をかたつていとみてよいのではないだろうか。「思ひ出と感謝と」ではこのことがさらにつきぎのようにも表現されている。

その一年半後(註。「西班牙犬の家」の一年半後)に書いた「病める薔薇」——「田園の憂鬱」の第一稿の前半——の身構へに充ちた嫌みな文章と「西班牙犬の家」とは好一對をなしてゐる。

ところで、実際に作品の上で、文体はどうちがっているであろうか。

はじめに「西班牙犬の家」の冒頭を引いてみる。

フラテ(犬の名)は急に駆け出して、蹄銀治屋の横に折れる岐路のところで、私を待つて居る。この犬は非常に賢い犬で、私の年来の友達であるが、私の妻などは勿論大多数の人間などより

よほど賢い、と私は信じて居る。で、いつでも散歩に出る時にはきつとフラテを連れて出る。

右の文にはほとんど彫琢の跡がない。「この犬は非常に賢い犬で、私の年来の友達であるが、」というあたりは、思いつくままに書きついでいった痕跡をのこしているし、「で、いつでも……」というところは日常の会話に近い感じをあたえる。後に春夫が主張するようになる「しやべるやうに書く」文体の萌芽とみてよいであろう。つぎに「田園の憂鬱」の第一稿「病める薔薇」の冒頭を掲げてみる。

その家は、今、彼等の目の前に現はれた。

初めのうちは、大変な元気で沙埃を立てながら、主人の後に
なり前になりして、飛びまはり、まっはりついて居た彼の二匹
の若い犬が、やうやう柔しくなつて、彼のうしろに二つ並ん
で、そろそろと随いて来るやうになつた頃である。

これをよむとまず、「その家は、今、彼等の目の前に現はれた。」
という気負つたかきかたにすぐ気がつく。そのつぎはかなり長い文
で、一息によませるように書かれている。それだけでもこれが決し
て日常の会話に使えるものでないことがわかるが、さらに気をつけ
てみると、主語「犬」がでてくるまでかなり形容の句がつつぎ、そ
れをうける「なつた」という語は二つある。そしてそれ全体を「頃
である」でくくっている。これは意識的に「文章」として書かれたも
のである。

しかし、春夫がデコラティブといったのは、そのすぐあとの、次

のようなところにこそびつたりあてはまるであろう。

その男のやうな太い指の尖から、彼等は各各の瞳に、黒い緑
のなかに埋れた、ささやかな萱ぶきの草根屋が、鈍くどつしり
と光つて居るのを見出したのが、彼のこの家を見た最初だつ
た。彼と彼の妻とは、各この草屋根の上に置いて居た瞳を、互
に相手のそれに向けて、瞳と瞳とで黙つて会話した——(下略)

淡彩ではなく、絵具を幾重にも上からぬりつけて描いてゆく油絵
の方法——春夫自身でどこかでそうたとえていたが——で書かれて
いる。「萱ぶきの草屋根」と一口でいっていいところを「ささやか
な……」と形容することですまず一度装飾し、それを更に「黒い緑の
なかに埋れた」と丁寧と説明し、それでも不十分と感じてその草屋
根が彼等の「各各の瞳に」「鈍くどつしりと光つて居る」のを彼等
が「見出した」としたのである。そしてこういうデコラティブな文
体には、「彼と彼の妻とは」というような欧文直訳式の、主語、代
名詞などを省略しないかきかたが、いかにもびつたりしている。そ
の意味で、「田園の憂鬱」の文体の特色とされている 欧文直訳体と
いうのは、この作品に必須のものだったといえる。

私は前に「書き放しの文体」は表現内容を一回意識にのぼらせて
普通の言語秩序にくみこんだもの、「デコラティブな文体」はそれを
さらにもう一度対象化して加工したものと説明した。今、上に引用
した二種類の文を比較してみると、「西班牙犬の家」の方は、いくら
「書き放し」といっても、話しことばそのままにしたものでない
ことは明らかである。例えば、「私の妻などは勿論大多数の人間など

よりよほど賢い、と私は信じて居る」という部分でいえば、「私の妻などは勿論大多数の人間などより」というところに、話しことがそのまゝ文章にかかれたのではなく、意識的に文章化されたあとがのこっている。が、この場合、書き手はそれ以上この文に加工を施していない。ところが「田園の憂鬱」の方をみると、「萱ぶきの草屋根」あるいは「ささやかな萱ぶきの草屋根」までは表現内容を普通の言語秩序にくみこんだ表現である。(話しことばであれば「草屋根。萱ぶきの。」といつてもさしつかえない。)しかし、その「草屋根」に「黒い緑のなかに埋れた」という形容のこぼをつけ、さらにそれが「鈍くどつしりと光つて居る」という具合に説明するためには、さきの表現を客体化してこれに人為的な加工を施して二重三重に表現をぬりかさねていかなければならない。こうしてできあがるのが「デコラティブな文体」なのである。

「田園の憂鬱」の成立史は一面はこの「デコラティブな文体」の完成史でもあるがそれは成立史を考察する機会にまとめたので今はすべて省略する。ここではこの文体をなぜ春夫がつかつたのか、またどうしてそれほど努力して完成したこの文体をこの一作だけでやめてしまったのかという問題について考えてみたい。

一体、一般的な意味での「デコラティブな文体」というのは必ずしも春夫の創始したものでもなければまた彼の占有物でもない。紅葉の文体も鏡花の文体も、あるいはもつと新しく木下李太郎の文体なども、やはりデコラティブというべきであろう。春夫の場合、とにこの文体が問題になるのは、彼が「田園の憂鬱」一作にしかつ

かわなかつたというところにある。上の二つの問題は結局一つの問題——なぜ春夫が「田園の憂鬱」に「デコラティブな文体」をつかつたのか、というのに帰する。

『黒潮』にのつた第一稿には長い前書きがついているが、いまそこから問題になる箇所をひきだして検討してみたいとおもう。

まず春夫は

言ひ得べくんば、これは小説に於ける「新ロココ風」の試みの一つである。

といつて居る。「新ロココ風」とはつまり「デコラティブ」ということであろう。それにつづいて春夫は意外なことをいつて居る。

僕が、今、芸術に於て「野蠻派」と「新ロココ」と、この一見相背馳した二つのものに、同じ程度の熱情をもつて奉仕して居ることは、先夜、君(註。三上於菟吉をさす)と語つたところである。

ここで春夫は自分の芸術のなかに——ということとは人生の中にと同義と私はとりたいたのだが——「野蠻派」と「新ロココ」という二元の対立があることを語つて居る。この「野蠻派」は多分「野獸派」をさすとおもわれるが、のちにのべるようにちよつと疑問なふしがある。さらにつづけて春夫はいう、

僕はロココ風のスタイルを単に愛して居るのではない。寧ろ、反つて嫌つて居るのである。それにも不係、僕はそれらの euphuisme 或は euphemisme に依らねば表現出来ないやうなもの、僕自身のなかに可なり多量に発見するのである。

ここでは「新ロココ」『デコラティブ』は嫌いなもの、そこからぬけだしたいものとして語られている。すると彼は二元の対立のうち「新ロココ」をすてて、「野蠻派」にうつりたいという希望をこのときにもつていたことになる。しかしその当時の春夫自身は「新ロココ」=euphuisme 或は euphemisme によらなければ表現できないものをもつていた。「デコラティブな文体」はそのあるものを表現するために必須な文体であつたのだ。そのあるものとはなにが。引用は前の文からすぐつづくが、それについて、

真に耽つらくは、それらのものは、少し病的な、大分退屈な感傷主義を基調とした、伝統的な人工性からきた。

といっている。春夫はこれに対して「野蠻派」の説明にあたる部分で、

金属性の美と、天真爛漫な意志とを、僕がどれほど切に希求するか、それは君も知つてくれやうけれども……（下略）

という表現をしているから、これと比較しながら考えてみたい。もつともこの「野蠻派」の説明にはよくわからないところがある。「金属性の美」と「天真爛漫な意志」とは別々なものとしてならすらすらとわかるが、これを等質なものと考えるのはむりである。「金属性の美」は結晶性の硬質の美であるが、「天真爛漫な意志」は結晶するよりもむしろ自由奔放にのびひろがってゆく性質のものである。それは硬質ではあるが必ずしも結晶性のもではない。あるいは、春夫は長江の影響でニイチエをよんでいたから、「野蠻派」の説明をする時に、ニイチエの超人の思想を頭においていたのであ

ろうか。それではその対極にある「少し病的な、大分退屈な感傷主義を基調とした、伝統的な人工性」に由来するものは一体何だろうか。

「少し病的な、大分退屈な感傷主義」の、「病的な」を「世紀末的な」の意味にとり、「退屈」をとるならば、「多少世紀末的な倦怠感をともなった感傷主義」ということになる。「伝統的な人工性」は理解しにくい表現であるが、「人工性」が「伝統的」なのではなく、これは一まとまりの語で、「古風な美意識が近代耽美派の洗練をうけて知的に加工しなおされたもの」ととるべきではないか。というのは、この第一稿は全体が三章から成り、各章に題がつけられているが、その「二」が「雨月草舎」（秋成の「雨月物語」からヒントをえた命名）となっているからである。してみるとこの句全体は「多少世紀末的な倦怠感をともなった感傷主義を基調した、近代耽美派風の伝統的美意識」という意味になり、そして近代耽美派は伝統的なものと決して無縁ではなかったし、日本においてはそこに自然主義の反動としてその見棄てたものを発掘したという事情があるから、一口でいえば、近代耽美派の精神ということになる。ところで春夫はこうした近代耽美派の精神をきらい、「金属性の美と、天真爛漫な意志」とを希求して「野蠻派」の精神に生きるために逆に前者に「耽り尽」⁽¹⁾ そうとした。

……すべてのものから脱脚⁽²⁾する唯一の道はその脱脚⁽²⁾しやうとするものに一先づ耽りて、耽り尽す外にはないといふのが、僕の信仰簡条の一つであるからして、僕は僕に宿つたこの芸術的衝

動の一を敢て圧潰さうとはしなかつた。

この「耽り尽す」のは、「新ロココ」風の芸術・文体からの脱却、近代耽美派の精神からの脱却のためであるが、この逆療法の過程で春夫にとって意外なことがおこつたらしい。「耽り尽す」過程、つまり具体的にはこの作品の執筆の過程で、彼は「少し病的な、大分退屈な感傷主義を基調とした、伝統的な人工性」||近代耽美派の精神とおもっていたものが、「憂鬱」であること、その「憂鬱」も普通近代耽美派の作家のもつそれよりもあまりに彼独自の、生活に根ざしたものであり、したがってそれから脱却するために耽り尽くすにはあまりに過度に病的な「憂鬱」であることに気づいたのである。それは第二編が「田園の憂鬱」という題になつてゐることからも察せられるとおもふが、今、定本までのいろいろな曲折をとばして第一稿と定本とを比較してみることにする。

第一稿の統篇五十枚は書かれはしたが次号にのらなかつたため破棄されたといういきさつがあるので、現在は第一稿は全体の半分しかみられないわけであるが、その範囲では「少し病的な、大分退屈な感傷主義を基調とした、伝統的な人工性」を、たしかに指摘できると。前述のように第二章は「雨月草舎」という題で、これは「伝統性」にあたるし、また第三章の題は「魔園の夏」でそこに「病的な」ところが感じられる。その他、蟬が殻を破つて生れてくる様子をみながら「見よ、こんな小さなものが生れるためにも、これだけの苦しみがあるではないか。」と感激して「この虫は己だ、どうぞ、蟬よ、早く飛立てるやうになつてくれ！」と祈るあたりに「少し病的な、

大分退屈な感傷主義」をよみとることができよう。そしてそれら全体を「デコラティブな文体」で表現したところに「人工性」もみいだせる。

もちろん「病める薔薇」の主人公||作者と考えることは危険である。だが、そこには単に材料が作者の実生活からとられたという以上の、作者の感情移入があつたとおもふ。だからこそ作者はこれを書くことによつて自己の嫌うものに「耽り尽す」こともできるし、そこから脱却できると考えたのだ。

ところで、定本のあとがき「改作田園の憂鬱の後に」では、この作品について次のように言つてゐる。

……自ら省みて、(中略)心ゆくまでにそれを書き遂げる機会を逸して、自ら親しく体験し、且つ比較的久しく心にあつた作品としては、その或る世界——それは争ふべくもなくつ、まらぬ、が併し、そこに暫く私が住まなければならなかつたところの或る世界のアトモスフィアは、この作品で再現された時には、情けないほど稀薄な、こくの無いものになつて居るのを感じる。

私の *Anatomy of Hypochondria* は到底ものにはなつて居ない。(傍点原)

ここでは二つのことがあきらかにされている。一つはこの作品に描かれた憂鬱なアトモスフィアは、かつて作者自身が住んだ世界のそれであるということ、他は作者はこの作品で憂鬱症の解剖をこころみたとのことである。これを第一稿の前書きと比較してみよう。第一稿の方のべられていた新ロココと野蠻派との対立は勿

論、定本の方では跡方もなくなっている。また第一稿の方で「少し病的な、大分退屈な感傷主義を基調とした、伝統的な人工性」に由来するものに耽り尽すことが企図されていたのに、こちらではそれが憂鬱症の解剖にかかわっている。そして定本の方で作品のもつ雰囲気は作者のかつて体験したものであることが明かにされた。このうち最後の一つは第一稿の前書きでは暗黙のうちに前提とされていたのであるから、結局両者の相違は二点になる。その二点も新ロココに「耽り尽す」のは、それから脱却して野蠻派に移行するためであったのだから、結局、「新ロココに耽り尽す」のが「憂鬱症の解剖」にかわり、そして「野蠻派」への志向がきえた、という具合に整理できるであろう。新ロコココロタイプな文体というものが世紀末耽美派の美意識を基調とするものであることは第一稿の前書きで春夫自身がいつていることだが（この因果関係についてはさらに追求してみる必要があるであろう）それに耽り尽して脱却することと憂鬱症の解剖との間には質の深化と変化とがあると考えられる。「少し病的な、大分退屈な感傷主義を基調とした、伝統的な人工性」が、Hypochondria という整理された一語で表現されたというのは、前者から後者への病状の進行ぬきには考えられない。その進行は「耽り尽す」という作者の意識的な努力と並行していたであろう。しかし、「耽り尽す」ことが Anatomy になるためには質的な転化が必要である。「耽り尽す」だけならばびたむきな意志的な努力ですむが、Anatomy となれば病状を対象化してとらえる知的操作が必要となる。また事実、定本をしらべてみると、憂鬱症の悪

化してゆく過程が秩序正しく書かれていることがわかる。「耽り尽す」がままに書きつらねていったら、おそらくもっと乱雑になったことはまちがいない。

例えば定本の、途中一行ずつあいているところを目安に区切り、一区切りを一章とすると、これは全体で二十章から成っている。

第一章は転居の場面、主人公は都会の喧騒のがれて田園へく。第二章が新居、第三章新居の来歴、第四章新居の庭、第五章で初めて問題の薔薇が出る。ここまでは、第一稿として発表された部分に相当する。第六章以下は、「中外」発表の第二稿に、多少手を入れ増補したもの。第七章は新居での新秋の生活。転居が一応気分転換をもたらして主人公の気持も平静になってくるが、重苦しい困憊しきった退屈が心の奥底にあるためまた「生氣のない無聊」におそわれることが書いてある。第九章で主人公は第五章の薔薇を自分の生活の象徴とみるようになる。長くつづく秋雨が降りはじめた田園生活も単調になる時である。このあと憂鬱症にかかった主人公の病状が詳細にしろされている。まず、不安・脅迫観念におそわれる。病的なものに感じ易くなる。恐怖。自分の病的な意識をさらに意識の対象として綿密にしらべるといふ意識の分裂。自意識過剰。幻視。今の自分は本当の自分でないという感じ。離魂病にかかったような錯覚におちいる。全体的に第十三章（『雄弁』大八・六「或」、第十四章になると病気はかなり進んでいる。殺してもく同じ蛾に襲われるという恐怖。不眠。病的過敏。幻聴。幻視。幻感。精神の衰弱虚。脱感。孤独と無為。夢。つい昨日のことよりも、はるか幼い日のこ

とがありありとおもいうかべられるという追憶の異常。注意力散漫。異常昂奮。絶望。不安妄想。暗合。幻視。憂鬱。そして最後に第二十章は、すでに秋深く、一時的に気分が平静になったところからはじまる。しかしその気分も妻とのささやかないさかいから再び乱れはじめる。その上、妻に切らせた切りたての薔薇の枝を火の上にとりおとした途端、パツと青いものが一面にひろがったのを見る。もちろん幻視である。「おお、薔薇、汝病めり」ということばがその時彼の口から出る。しかし、それは彼の耳には、自分以外の声にきこえた。その言葉がいつまでも彼を追っかけてくる。

これが春夫の *Anatomy of Hypochondria* の記録の仕方、順序である。病理学的にはかなり疑問の多い記録であろうが、文学的には見事なものである。

ところで *Anatomy* をするためには、まず病状の正確な記録をつくること、つまりそれを一応病人以外の第三者にもわかるように秩序をもったものにすると同時に、その客観的秩序にくみこんだものを対象化して検討してゆくという、二重の知的操作が意識的に行なわれなければならない。ここで問題ははじめにもどるのであるが、春夫は第一稿をかくときから、デコラティブな文体をつかった。このデコラティブな文体でかくためには、一度表現すべき内容を普通の言語秩序にくみこんで、さらにそれを対象化して人為的に加工するという二重の知的操作が必要だといった。だから、意識の活動の面からみれば、実は定本で意図された *Anatomy of Hypochondria* と、第一稿から用いられたデコラティブな文体とは、その働

らきかける面が病状の分析とその表現というようにちがっているだけで、同質のものであったと考えられるのである。これがデコラティブな文体が「田園の憂鬱」に必須であった理由である。

私がこの小論のはじめで「西班牙犬の家」は、憂鬱がそのまま言語秩序にくみこまれて表現されたもの、「田園の憂鬱」のそれはそのくみこまれたものがさらに対象化された上で表現されたものと書いたときは、この *Anatomy of Hypochondria* を念頭においていたのである。というのは、憂鬱に耽り尽してそれから脱却するためには、どうしても *Anatomy* にまですすまなければならないからである。そうして大体精神病理学の教えるとおり、彼はヒポコンデリーを自己解剖することでそれからの脱却に成功した。(したがって私見によれば、春夫の両憂鬱篇の憂鬱は性質がちがっている。)

ヒポコンデリー＝新ロココからの脱却に成功した春夫は、しかし作品の上でみてもまた彼の回想録を調べても、野蛮派に向った痕跡はない。(彼が野蛮派という語をつかったのは、管見に入ったかぎりではこの第一稿の前書きのみである。)そして文体の面では「デコラティブ」から「書き放し」へと移ってしまった。野蛮派の実体がはつきりしないのでこの間の事情がつかみにくいのであるが、私はおそらく野蛮派は若き春夫のほんの一時の気まぐれから生じたあこがれ、あるいは新ロココをきらって漠然とそれの対極にあるものとして想定してみただけのものではなかったかとおもう。それよりも問題はむしろ春夫が、文体上、「デコラティブ」から「書き放し」へ移ってしまったことにあるのではないかとおもっている。

たしかにヒポコンデリー||新ロココから脱却してしまえば「デコラティブな文体」もまた必要なくなるわけである。それに書く姿勢としても「書き放し」の方がはるかに楽であるから、彼のように感覺的なものを重んじる傾向（「風流論」など）の強い作家には、「書き放し」の方が自由で、書き易いということもある。しかし、どうも私には「書き放し」の文体に移る際に、春夫は、非常に重要なものを、作品を書く上でも生きてゆく上でも非常に重要なものを、一つ落してしまつたようにおもわれる。それは、彼が「デコラティブな文体」で書くときに、豊富に用いたとおもわれる、意識を意欲する精神である。

一度言語秩序にくみこんで表現したものをもう一度対象化して考へるとか、ヒポコンデリーを一度第三者にわかるように秩序づけ、それを分析の対象とするとか、いろいろに説明したけれども、要す

るにそこには、すべて意識されたものを再度意識の対象とする、という意識の特殊な活動が前提とされる。この小論では憂鬱の性質そのものを特にとりあげて考えなかつたが、もともと憂鬱そのものが意識を意識する、しすぎるところから発生するとおもわれる面がある以上、そこからの脱却が意識を意欲する精神を切りすてることにつながつてゆくのは当然なのであるが、春夫は意識自体までも無意味のように錯覚したのではないかとおもわれる。それは「書き放し」とか「しやべるやうに書く」といったいいまわしにもあらわれているが、この錯覚が彼独特の芸術観・人生観に発展して、彼の芸術上、人生上のあらゆるプラス、マイナスを生むことになつた。そういう意味で「デコラティブな文体」から「書き放しの文体」への移行は彼の生涯を決定したとおもわれる。

「あにいもうと」の成立

— その一側面 —

—

いかなる作家にとっても文学は必然であるはずだが、室生犀星ほどその苛酷な宿命を振じ伏せて生きるために文学が生への必然であった作家はない。犀星はその不幸な出生と生い立ちを逆手にとって文学的養分とし、書くことよってのみ生きぬいた。たとえば「泥雀の歌」(昭一七)には屈辱に充ちた忌まわしい少年時代を送らねばならなかった犀星にとって文学(俳句)は「一度失った例の名誉と地位」の回復手段であったことが語られている。「作家の手記」(昭一三)では「私が文学でもやらなければならぬ事情も、また小説を書いて生きなければならぬやうに押し付けられたのも、かういふ母(註・生母)を持つたからである」と云へよう。小説を書かないで外の職業を持ったとしたら、全く碌な人間にならなかつたであらう」といつている。犀星の文学は出発においてすでに宿命的な「屈辱」を

東 郷 克 美

「復讐」に逆転する方法だったのである。

ところで犀星の作家活動は大ざっぱに大正八年の「幼年時代」に始まる抒情的・官能的作風の前期、昭和九年の「あにいもうと」を起爆点とする市井鬼ものの中期、昭和三十年の「女ひと」を契機に奇跡的な復活と豊饒をみせた後期にわけることができる。そして犀星の場合、前期と中期の間(大正末から昭和八年まで)、中期と後期の間(昭和十年代末から昭和二十年代まで)にそれぞれ長い低迷と摸索の時期を挟んでいることが特徴的である。周知のように犀星の小説家としての処女作は滝田禰蔭の推輓によって大正八年八月の「中央公論」に発表した「幼年時代」であり、続いて十月号に「性に眼覚める頃」、十一月号に「或る少女の死まで」が掲載されるに及んで作家としての地位を確立した。これら抒情的な自伝小説は犀星文学の傑作であるばかりでなく、大正文学の代表的收穫であることは動かない。しかし後年の犀星はこれらの作品に対する否定的

言辞をくりかえし語った。すでに昭和初年には「叙情的な軽蔑に値すべき描写」(「弄獅子」昭二)と呼び、晩年には「初めて書いた小説に巧みさがある訣の筈のものではない、描写にいたつては取るに足りないものだ」(「私の履歴書」昭三六)と述べている。後年の犀星にとって初期作品は現実を抒情的に美化したものの、「抒情小曲集」の世界の拡大再生産と映つたのであろう。犀星が真の意味での散文作家として自己変革をとげたのは中期のいわゆる市井鬼ものにおいてであることは自他ともに認めるところである。とりわけ「あにいもうと」(文芸春秋・昭九・七)は犀星全作品中でも完成度の高い代表作のひとつであり、犀星に散文作家としての開眼をもたらした自己発見の書であることは定説としてよからう。川師赤座一家の激しい愛憎劇を長女もんを中心に抒情を排したダイナミックな文体で描いた作品であるが、主人公もんに養母ハツのイメージがあることがすでに多くの人によって指摘されている。しかし、この作品は従来の犀星の自伝小説とは全くその性格を異にしている。つまりもんとハツとは単純なモデル関係ではない。時代も場所も、背景となつた事実もハツのそれとは異っていて、事実の上での確かなモデル関係はほとんどない。(もつともハツの義弟には「あにいもうと」の伊之を思わせるような不身持の石工がいたらしい。また「作家の手記」にはハツの父は川師であつたと書かれているが、後述するように、新保千代子の調査によればその事実はない。)

しかしこの指摘は一面でやはり正しい。

この作の二ヶ月あとに発表された「神々のへど」(文芸春秋・のち「続あにいもうと」と改題)

題)という作品は「あにいもうと」後日談で、もんは二人の成長した子供の母親として登場する。この小説のもんには犀星が憎みぬいた養母の姿が色濃く影を落している。もんの実子裕と正は義兄真道と犀星の関係をそのまま下敷にしたものであり、もんの夫唐沢は職業こそ僧侶でなく小役人であるが、ハツの内縁の夫で、犀星の養父室生真乗をまがうかたなく想起させる。おとなしい父をめぐって、それにつらくあたる母、その母を激しく憎む弟、母弟の間になつて冷静に双方をたしなめる兄裕など、少年時代の犀星一家そのままであることは少しでも犀星の自伝的作品を読んだものにはすぐそれとわかる。以上の続篇の性格から逆に「あにいもうと」のもんには養母ハツをなぞらせることはたやすいが、「あにいもうと」は決してそのようなストレートなモデル小説ではない。事実から離れて自立したフィクション的な芸術作品であつて、他の自伝的作品にあらわれるような養母の直接的な影を指摘することはむずかしい。そこにこの作品が散文としてすぐれた芸術性を獲得しえた理由もあるのだが、にもかかわらず依然としてもんを描く犀星の脳裡に養母の若い日の姿があつたことも確かである。つまり、ここにおいてハツは単なる犀星の養母としてでなく、ひとりの無知な市井の女として虚構化・普遍化されたといふべきであろう。今まで憎悪の対象でしかなかった母を「市井鬼」として普遍化する視点の獲得こそ犀星におけるフィクション的な散文の確立の前提であつたのだ。犀星は「幼年時代」などで生母への慕情をくりかえし語っているが、彼にとつて母とは彼が「月のごとき母」と呼んだ生母などではなく、このハツ

以外になかったのであり、よくも悪くもその圧倒的影響のもとに性格形成をとげた人である。ハツは貰い子の犀星ら兄弟をいわば食いものにした女であるが、犀星も逆に母を文学的に食いものにして肥って来たといえるので、ここにみる凄惨な母子のたたかいはきわめてドラマチックである。犀星の前半生は母とのたたかい、そのコンプレックスの克服に費されたといっても過言ではない。この養母との対決は近代日本の作家に共通する「家」の問題にほぼ匹敵する。

この文章では犀星における養母ハツへの意識の推移をたどりながら、彼がその宿命をいかに文学化していったかを考え、「あにいうと」成立の前景の素描を試みようとする。

二

犀星にとって宿命そのものであった養母赤井ハツは嘉永四年（六五）の生まれで昭和三年（二五）七十九歳で亡くなっている。元加賀藩士小島弥左衛門とその女中ハルの間に生まれた犀星（本名照道）を貰い上げる明治二十二年には三十九歳の女盛りであった。知られているようにハツは兩宝院住職・室生真乘の内縁の妻であった。新保千代子の調査によれば赤井家は漢方医として知られた家で、母親すへは夫の死後、医業を継ぎ、派手な乱脈をきわめた生活を送ったという。ハツの転落の原因もその母にあつたであろうが、兩宝院に来るまでの前身、そしていつごろから真乗と同棲するようになったかは、新保の「室生犀星ききがき抄」（昭三七）も明らかに

していない。飲屋女のハツが真乗の美貌にひかれて近づき、小さな貧乏寺をその才覚で大きくしたことは犀星もしばしば書いている（作家の手記）他。そして「父は何処までも母の奴隷以外の生活はしてゐなかつた」（「弄獅子」）のである。犀星の幼少年時代の養母は馬方ハツの異名をもち、肌ぬぎして大酒をのみ、役者買いをする名うての莫連女であつた。犀星には義姉おてい、義兄真道、義妹おきんがあつた。いずれも養育費目当てのハツの貰い子で、おていだけが実弟の子すなわち姪にあたる。これらの貰い子たちに与えたハツの虐待の数々はほとんど言語に絶するものがあつた。自叙伝「弄獅子」には子供たちにあくことなき悪罵と打擲を加える悪鬼のようなハツの姿と、その折檻に対して「殺人的な考へ」を抱きながら耐える少年犀星が描かれる。血はつながらぬ他人の集まりだが、まさにそれは「カラマーズフの兄弟」のフォードルとその子供たちを想起させる。そしてハツこそは悪徳の権化フォードルである。

犀星はのち「自分は養母を愛したことはなかつた。寧ろ自分は母を恐れる為に生きてゐたやうなものだつた」（「弄獅子」といふ）が、しかし、ほかならぬこの母が犀星を作つたのだ。この母なしには犀星も犀星文学も生まれなかつた。犀星文学について生母への憧憬がしばしばいわれるが、養母ハツはそれよりはるかに重要であると思う。のちの犀星はたとえ「杏つ子」（昭三）の中でハツについて「いまになると、生みの母よりその生涯に偉いものを持つてゐたやうな気がした。この人に叩きのめされなかつたら、今日の平四郎（註・犀星）は出来上らなかつたかも知れない、つまり何事も突きこ

んで来てをしへた不滅の教師みたいなものだ」と回想するようになるのだが、実証ぬきの仮説をいえば、幼年期のハツによる抑圧が犀星抒情詩の源泉であり、「抒情小曲集」は養母の抑圧からの解放によって生み出されたうたではないか。集中の詩の多くは母のいる家から離れた地点で生まれている。すなわち二十歳で金沢の家を出て金石に行き、海辺の寺に住むころから抒情は流露しはじめ、八年間の裁判所勤めをやめて三國、福井、京都を放浪することによって犀星の中で真の意味での抒情詩人が誕生した、といえるのではないか。現実の桎梏からの解放と感覚上の解放とが重ね合わされて初めて歌声は流れはじめるのだ。しかし犀星にとって叛逆すべき対象が社会・秩序・理性の象徴としての父でなく、義理の関係とはいへ、感覚や生理の根源としての母であったことはおそらくその文学を根深いところで規定したはずである。犀星が自己の宿命を凝視する作家としてでなく、それを「遠くにありて」「悲しくうたふ」抒情詩人として出発したのも、彼が終生「感情」詩派であり、知的認識者でなかったのも以上のことにかかわる。

ところで処女作「幼年時代」においては養母は小言はいうが、やさしいところのある人として描かれている。美しくやさしい姉は身売り先からでなく、越中の嫁ぎ先から戻っている人として設定され、やがて再び嫁いで行く。血縁上は伯母に当たる養母によって遊廓から遊廓へと売りとばされていた事實は全く捨象されている。また主人公の少年はやがて隣家の和尚に貰われて、寺に移ることになっているが、ハツと真乗はすでに内縁関係にあつて同家族として暮し

ていたはずだから事実と異なる。父に対する愛情（「愛の詩集」はこの養父に捧げられている）が犀星をして父を嫌悪すべき母と関係のない隣人として描かせたのだろう。（犀星・照道は最初赤井ハツの私生児として届出され、七歳のとき真乗の養子になるが、これは単なる戸籍上の異動である。）続く「性に眼覚める頃」において注目すべきは十七歳の主人公は七十近い老僧の父と二人暮しのようになっているが、母は全く登場しないことだ。十七歳の犀星は当然養母や他の兄弟と同居し、金沢地方裁判所の給仕であったはずだが、作品では「学校をやめてから、いつも奥の院で自分の好きな書物を対手にくらしつゝ」とある。つまり初期自伝小説においては醜い現実を拭い去られ、抒情的美化が加えられている。犀星における詩から散文への移行には少なくとも藤村のそれにおけるような内的必然に基づく「歌のわかれ」があったとは思えない。初期三部作は抒情詩の散文化といった面が強く、たとえば「抒情小曲集」との共通性を指摘するのはそう困難なことではあるまい。もともと「抒情小曲集」から「愛の詩集」への移行行きの中に題材・表現の上で散文への傾斜をうらなうことは可能だし、犀星自身は「弄獅子」の中で結婚によって経験した「嫉妬」の感情を通して人間認識がひろがったことが散文移行の原因だとしているが、今は深入りしない。

勿論、作品世界における養母の捨象と、少年犀星の世界を養母の存在が圧倒的におおいつくしていたこととは矛盾しないばかりか、互いに対応関係にある。その影響は単に否定的媒介としての意味だけではない。犀星文学における官能的なもの、野性的なもの、性欲

的なものもこのハツから多くうけついだものだとしてもそう不当ではあるまい。「弄獅子」などの自伝を読んでも四人の義兄弟のうち、犀星とハツの性格は実の母子のように近似しており、それゆえにまた激しく反発しあう。そして人間性の醜悪をむき出しにしたようなこの強烈な母の像とのたたかいがやがて犀星の文学的主题とならぬはずはない。奥野健男なども指摘するように犀星文学における「女ひと」は生母や義姉おていのイメージに連なる清純で優しい女の系列と、官能的であららしい養母の系譜をひく女とに分裂している（『養生犀星論』文学。『界』昭三五・四一五）。従来どちらかといえば生母への憧憬に力点をおく論が多かったが、むしろフォードル・カラマーゾフのようなハツの人間像がまず圧倒的なものとしてあって、それへの反動として美化された生母や妹のイメージが求められたとすべきだろう。だが単に現実からの逃避として清く美しい女性の夢を追っていたのでは、美醜を超えて現実を対象化する散文は成立しない。

「幼年時代」からはほぼ一年たつて養母そのものを主題とする「古き毒草園」（中央公論・大九・六）が発表される。ここでは東京から来た役者中村千鶴に狂うお里という中年女がほぼ養母の実際を思わせるように描かれる。おとなしい父を愚弄しつつ、酒と男に乱れる養母の姿が十八歳の少年の目からとらえられ、年代的にいつてもほぼ「性に眼覚める頃」の陰画にあたる作品である。主人公は母を憎み、父に同情するが、兄慎一は感情を押し殺して母のいいつけに黙々として従う。養母、兄、養父、弟の關係は「続あにいもうと」のそれに近い。ただし「続あにいもうと」が第三人称で客観的・多元的に描

かれているのに対し、「古き毒草園」は一人称の主人公「私」の目で情緒的・一元的に書かれている。こうした外面的な相違をみただけでも「続あにいもうと」の方がより客観的な散文になっていることがわかるのだが、何よりも「古き毒草園」には淫蕩で放縱な母を「毒草」とみる憎悪があり、「続あにいもうと」におけるごとく、一人の女としての養母の内部世界を客観的に描き、「養母の持つてい

るどろどろしたものを、あたたかく抱きとる」（井上靖・中央公論社版『本の文学』35解説・昭四一三）ように書かれていない。

しかしこの年から作風の上である展開をとげたことも確かであった、そのきっかけになったのは「結婚者の手記」（中央公論・大九・二）であると思われる。二年前にはじめた結婚生活——そしておそらく初めて体験した「家庭」——に取材したこの作品によって、犀星は過去を美しく抒情的に回想することから現実の中に一步ふみこんだのだ。それは自分の知らない妻の過去へのいわれない嫉妬の地獄が「妻の中から凡ゆる『女』を引摺り出し、それが自分の狭小な人生的な稽古台に」（『弄獅子』）なったことでもたらされたものであった。女性コンプレックスとうらはらの少年のような女性崇拜から脱け出て「女ひと」への洞察を深めて行くひとつの転換点になったという意味で、この作品は犀星における散文移行の、ひいては「あにいもうと」成立前史の重要なひとこまをなすものである。

「結婚者の手記」に続く「古き毒草園」においては抒情的作風は一変して官能のむせかえるような母の姿が毒々しい原色の絵具を塗りつけるような筆致で嫌悪を込めて描かれる。前年の自伝的作品で

は完全に抹殺されていた養母がともかくも作品の中心人物としてと
りあげられるに至ったのである。しかし抒情的美化による抹殺とい
い、嫌悪をこめた官能的描出といい、実は同じコンプレックスの裏
がえしだともいえる。

大正十年一月の「おれん」(中央公論)は離別された兄嫁をモデルに
した作品である。ここでも母は次々に嫁をいびり出す悪女である。
反対におれんは犀星好みの純心無垢の人であり、おそらくは生母の
イメージが重ねられている。大正十二年四月刊の詩集「青き魚を釣
る人」は「抒情小曲集」の拾遺詩集ともいうべきものであるが、犀
星はその跋文として「青き魚を釣る人——序に代へて——」とい
うかなり長い自伝的文章を書いている。出生から大正六年の養父の死
に至るまでを書いたこの文章には生母への憧憬は語られているが、
養母についての記述は全くない。これは「二十歳ころから二十二歳
くらゐまで」に書かれたという詩集の抒情的内実と見合っているはず
で、犀星の抒情小曲が養母の抑圧からの解放の願いと生母への憧
憬を根底にもっていることを象徴的に示している。「六歳のときよ
りその家にやられ、十三歳でその家から、ある寺に養子にされた」
とあり、「三度母をかへた」とあるのも事実には反している。小説と
ちがって事実を書くことがたてでまえであるはずの詩集跋文において
さえ、おそらく故意に事実をまげている。

三

大正九年からの犀星は芥川や滝田楊蔭の憂慮・忠告をよそに「原

稿料の誘惑と有名の取入れ」(私の履歴書)に憑かれたように途方も
ない濫作家になって行く。新潮社版全集の年譜によれば、九年には
小説三十篇以上を、十年には四十篇以上を発表しているという。こ
の多作は十二年の大震災まで続き、前半は主として自己の周辺に、後
半は史実にそれぞれ材を得て、官能的といわれる作品を書
く。身辺を書いた作品には結婚以前の根津・浅草放浪時代に取材し
たものが多いが、この伝説的な放浪時代はやがて昭和九年以降の市
井鬼ものの材源にもなるであろう。これらの作品群における犀星の
方法はひとくちに感覚主義と概括してよからう。現実を全て感覚に
還元してしまう方法である。作者自身のちに「新感覚派だった名著
を記憶してゐる者である」とこの時期をふりかえっている(室生犀星
論—自画像—昭四)。この時代の特色をよく示している作品としてたと
えば「香炉を盗む」(中央公論 大九・五)「幻影の都市」(雄弁・大一〇・二)
などをあげることができる。

しかしその感覚主義的方法も「蒼白い蛇の皮膚とでも形容した
よささうなねちねちした感覚描写はたしかに冴えて行くやうだが、
もつと深いところにある、人間性の測り知れない心象の記録となる
と、もう氏の神経細胞の感触する以外の世界らしい」という千葉亀
雄の批評(解放・大九・二)が最も鋭くその弱点を射ていた。芥川龍
之介も「二本の毒草」(雄弁・大九・四)にふれて「室生氏の感覚描写は
佐藤春夫氏のそれと共に、殆んどユニークだといつて差支へない
(態)が、時々氏がその感覚描写に沈湎すると、反つて折角の印象が
全体の鮮かさを失つてしまふ」という批判をなげかけた(大正九年四
月の文壇新

九・六。作品世界を構築する理念や世界観を持たない単なる感覚の乱射は、早晚、想像力の枯竭を招く。大正十年の後半ごろからは犀星のいわゆる「史実小説」が目立つようになり、十二年まで続く。おそらく芥川の歴史小説に触発されるところがあつたろうが、何よりも自己の周辺の現実を「神経細胞が感触する」ように描く方法に行き詰まったとみるべきだろう。そこで史実の枠をかりて、それを自己の感覚を盛る器にすることによってわざかに作品世界を支えつつ、濫作を続ける。犀星は前・中・後期にそれぞれ歴史に材を求めた作品を書くが、前期のものが最も劣っており、ほとんど見るべきものがない。

十一年には愛児・豹太郎を失ない、続いて十二年には関東大震災にあう。「震災はこんな私をいくらかたすけてくれた」(私の履歴書)と自ら回想しているように、郷里金沢に一年余り滞在してその自然の中で荒んだ文学精神を癒す。転機はやつて来ようとしていた。この金沢滞在は養母ハツを見直す機会ともなつた。ところで、少年期から青年期にかけての養母に対する感情の推移は十分詳らかにしないが、たとえば大正七年二月の浅川とみ子との結婚式は金沢の生家小島家で挙げられたにもかかわらず、犀星はあえて母を招かなかつた。その間の事情について「母に、この結婚を知らせることは様々な意味で面倒だつた。自分は母の家に泊りながら母に結婚の話はしなかつた。女の実家の方でも母の出席を希望しなかつたのは、母が姑として評判がよくない為だつた」(弄獅子)と書いている。少なくとも大正七、八年の時点では犀星とハツの間は十分の和解ができ

ていたのではなかつた。それは初期の自伝的作品における養母の抹殺と対応しているはずだ。それから五年たった今、久し振りに会う母はすっかり変つていた。「故郷でもつとも私を歓迎してくれたいのは例の母親であつた」(泥雀の歌)という。母は兄と犀星から等分に送金を受け、寺のひと間を借り、小女を使って何不自由のない生活をしていた。犀星一家は金沢で別に家を借りて住んだが、当時の日記をみるとハツはほとんど毎日のように犀星の家を訪れている。大正十三年二月十八日の日記には「午前母むかしよりありし古雛の内裏姫を持つて来る。(母)母がこのやうに重きものを提げ来りしかと思へば、その寺町よりの長き雪道の程思ひやられ、炬燵より出でてねぎらふ。鮎屋よりうなぎ取りよせ酒すこし昼餉に熱くして膳にそなへたり。母このごろ退屈すること甚だしく大概隔日くらゐに来るやうになり。来るごとに手に何か手みやげ持たざることなし。老いたる人の心づくしも愛づべきものなるかな」などとある。これがあのように罵り合い、憎みぬいた親子であろうか。かつては犀星を恐怖させたハツであつたが、今や「母はむしろ私を怖がり、あまり私と口を利かずに、妻とばかり話をして行つた」(泥雀の歌)のである。彼女はもう七十の半ばに達しようとしていたはずであるが、すでに二児(一人死亡)の父となつた犀星は彼女の「おのづからな皺は皺自身で温かい老母の像を美しいまでに彫り上げ、眼尻の皺は光背のやうな細い線をあつめ、そこに、不断の笑みさへたたへてゐるのを見るのだった(同前)。作家犀星が母をひとりの女として客観的にみるようになる端緒が開かれたといえよう。

一方、犀星は同じころの金沢での日記に「予の小説はもう一度芸術的良心と潔癖の上に立たざるべからずを思ふ」(大正三・二・二二)と書きついたりする。そのような反省を当時の彼に強い、かつその存在自体が犀星への批判になっていたのはやはり芥川龍之介だろう。かくて犀星にながしい低迷と摸索の時代が訪れるのである。

四

犀星最後の自叙伝「私の履歴書」の中に「或る八年間」という章がある。それは「殆んどめぼしい物を書かないで過した」大正十四年頃から昭和八年までの不振の時代をさしている。そこに大正十三年十一月末のある日の挿話がある。田端駅前で会った芥川から新年号の原稿は書いたかときかれ、昨日原稿を渡したと答えたところ、芥川はこれから書くのだといって帰って行った。そのとき犀星は芥川の「金箔を打つやうに」して書く彫心鏤骨と自分の「仕事のぞんざいさとか、いい加減に書きまくつてある」態度が思われ、散歩をやめて帰った。このことはよほどショックであったとみえ、戦後、「文学の秘密・芥川龍之介回想」(文芸春秋、昭二四・二三)の中でも同じエピソードを記したのち、「鏤刻の境を通らない文章は彼の認めなかつたものであり、文章で彼に褒められたことは一度もない、だからお互の小説に就ては一言も触れずにゐた。そこに芥川君の友情とは別に文学批判も存在してゐて、そこでは頑固に彼を彼自身をゆがめたりなぞしなかつた」といつている。

それを契機に犀星はしだいに沈潜した生活を送るようになる。造

庭に没頭し、のち「庭を造る人」(昭三)「芭蕉襟記」(昭三)にまとめられるエッセイを書き、俳句・短歌を作るなど日本の風流の世界に接近し、小説は少なくなる。「期するところなく私の文学周辺の雑草が、刈り取られ精神風景の清掃が行はれた」時期(私の履歴書)に相当する。

あらためていうまでもなく芥川は犀星にとっていわば年少の師ともいうべき重要な存在だった。萩原朔太郎は生涯にわたって「二人とない人」(新潮社版「萩原朔太郎全集」月報・昭三四)であり、佐藤春夫にはつねにライバル意識を燃やしたが、芥川に対しては出会い以来一種のコンプレックスがあった。芥川との邂逅が小説を書くひとつの契機になったことも犀星がくりかえし語っているところである。一周忌になって初めて書いた芥川追悼文の中でも「自分は芥川君に会ふ毎に最初の五分間は毎時も圧迫を感じてゐた。芥川君の仕事や為人、偉さが自分に影響してゐた。自分はそれを完全に自分と同君との間に退治したのは最近二年位の間だった。(略)全く同君は自分に取つて苦しい友人であり、その苦しさは自分によい結果となり今までに影響して来たのである」(芥川龍之介を憶ふ、文芸春秋・昭三七)と告白している。

犀星は芥川より三歳年長であったが、二人の交友の始まった大正七年初頭には一方は「愛の詩集」(大七・二)の詩人であり、一方はすでに「羅生門」(大六・五)、「煙草と悪魔」(大六・二二)の二つの創作集をもつ新進作家であった。単に知性派と感覚派、都会派と地方出身という図式的な相違だけでなく、全てにわたってこれほど対照的な人格も珍しい。それだけに運命的な邂逅であったといえる。芥

川はその生い立ち、才能、教養、学歴、更には容貌に至るまで犀星に欠けていて、その劣等感を形成した全てのものを持っていたといつても過言ではない。したがって芥川は犀星にとつてほとんど憧憬の対象であつたはずで、それは犀星の中で芥川コンプレックスともいうべきものを形成したと思う。この犀星内部の「芥川」の克服こそは養母ハツを含めた自己の生い立ちのコンプレックスの超克とともに犀星前半生の最大の文学的課題であつたろう。そしてこの二つの課題を乗り越えた果てに「あにいもうと」をはじめとする市井鬼ものの成立を眺めることができる。私は考える。

その芥川の死によって激しい衝撃を受けた犀星は追悼文を一切拒否して「殆んど毎日気持の中で追悼文を書いてゐた」(天の梯、文五)のだった。そして一周忌の昭和三年七月になつて初めて、すでに引いた「芥川龍之介を憶ふ」を発表する。その中で犀星はこういう。

自分は此の友の死後、窻かに文章を丹念する誓を感じ、それを自ら生活の上に行つた。同君の死の影響を取入れ自分の中に漂はすことに後世を托す気持に自分はあるのである。同君に見てもらひたいのは今日の自分であり、交友濃かだつたあの頃の如き比例ではない。同君も今日の建て直された自分を見てくれたら、別な気持で交際つてくれると思ふ。今日の自分は微かに同君が自分に不満足を感じ、軽蔑すべきものを軽蔑してゐた気が解ると思ふ。

ここには犀星が芥川の「軽蔑」を感じていたという事実と、その

死が自分の文学的起死回生の端緒となつたことが率直なことばで語られていて感動的である。たとえば生前の芥川が「室生犀星はちやんと出来上つた人である。(略)ざつと見渡した所、僕の知つてゐる連中でも大抵は何かを恐れてゐる。(略)この恐怖の有無になると、室生犀星は頗る強い。世間に気も使はなければ、気を使はれようとも思つてゐない」(室生犀星氏日本)と書いたことなどにさえ、あるいは犀星は芥川の「軽蔑」を感じていたかも知れない。「何かを恐れてゐる」自意識家芥川は犀星の「出来上つた」野性的な強さを羨むとともにそれを欠いたために自裁せねばならなかつたともいえるであろうのに。その意味でも犀星は芥川の死の真の意味を十分には理解できなかったのだが、それは芥川の自殺が犀星に測り知れないほどの衝撃を与えたことと矛盾しない。つねに劣等感の対象であつた芥川のような生き方が死に至らざるを得なかつたことを知るとともに、芥川によって「軽蔑」さるべき自己を認識し、むしろその「軽蔑」に値する自己を生かす以外に自分の文学を建て直す方法はないと考える。ここには透谷の死をみつめ、「私のやうなものでもどうかして生きたい」と願つた藤村のそれを思わせる再生の祈りがある。こうして犀星は自己に固有な散文的方法を確立すべく、困難な道を歩みはじめる。

五

芥川の「死の影響を取入れ、自分の中に漂はす」という文学的決意はどのように具体化されたであろうか。前掲「天上の梯子」の中

で次のようにいう。

芥川君の死は自分の何物かを蹶散らした。彼は彼の風流の仮面を肉のついた儘、引つpegがしたのだつた。彼は僕の如き者を一二期に於ては軽蔑したであらう。自分は漸く友の温容の中に一寸じ烈しい軽蔑を感じることに依つて、一層この友に親しみを感じた。自分は自分自身に役立たせるために此の友の死をも撰取せねばならぬ。何といつても彼が作の上にはないもの、僕自身が勝手に考へ、耽るものを僕の中に惹き入れることに拠つて彼自身を闇魔の庁から引き摺り出さねばならぬのだ。(傍点・東郷)

芥川の死の影響を生かして自分の「文芸的危機」を脱出すべく、芥川の「作の上にはない」固有の主題を、「僕自身が勝手に考へ耽る」固有の方法で描き出すことを目ざすのだ。芥川にない犀星固有の文学的主题といえは、その宿命——出生と生い立ちの問題でなければならぬ。これまでもそれを文学化しては来たが、それは全て抒情的美化・感覺的歪曲が加えられており、真にそれと対決する作品は書いていない。

養母ハツも昭和三年四月には破乱にみちた七十九年の生涯を終えた。芥川の死とそれに続く養母の死を契機に犀星は客観的な自己凝視をめざして本格的自叙伝の執筆を決意する。それは生活者としての課題と文学者としての課題を一挙に解決しようとする起死回生の試みであつたといつても過言ではない。いみじくも芥川一周忌二日前の昭和三年七月二十二日軽井沢での日記に「自叙伝起稿」のことが見える。同八月十五日には「自叙伝の続篇を書きはじむ。自叙伝

を完成することは、何か安心に似たるものを感じ」とあり、かなり意欲的な仕事と知れる。同月十九日にも「自叙伝」続稿を書くこと例のごとし」、同二十三日には「自叙伝進行す。まともりたる後一卷とせん望を持って」とある。同年十一月二十四日、二十七日、十二月三日、四日の金沢での日記にも自叙伝執筆の記事が散見し、同十二月七日には「自叙伝小説脱稿」と見える。一方、同年八月二十七日付の軽井沢から新潮社の中根駒十郎に宛てての書簡には「先般来小生執筆(新潮その他)いたし候自叙伝、三百枚程に達し一卷と致度希望これあり、佐藤氏と御相談の上首尾お聞かせ下されずや、右は十一月頃原稿出来いたすべく予定にこれあり、命題は『我が自叙伝』と致度、御多忙中乍御返事たまはりたく待入申候」とある。犀星には「我が自叙伝」と題する本はない。おそらくこの企画は昭和五年五月に新潮文庫第一八篇として出版された「生ひ立ちの記」となつて実現するものであろう。この創作集は「生ひ立ちの記」「私の『白い牙』」と附録「幼年時代」「性に眼覚める頃」「或る少女の死まで」からなる。「生ひ立ちの記」についてはその「序」の中で「三年間自分が自叙伝の完成を慮つて折々に書いた所謂『昨日の風景』の凡てである。自分はこれらの作品と相当に格闘したつもりである」と書いている。この四十一章からなる「生ひ立ちの記」が昭和三年執筆の仮称「我が自叙伝」とみてまちがいあるまい。そのうちの後半二十四章は「新潮」昭和三年八、九、十一月号に「自叙伝的な風景」と題して発表されたものであり、また一部は「サンデー毎日」「文芸春秋」などに発表されたものと推定できる

が、その他の章の初出については未詳である。ところで「生ひ立ちの記」の中の「兄」という章に「第二の母は自分が此の自叙伝を書いてゐるうちに、七十九で逝去した」とある。ハツは昭和三年四月二十八日に死去しているので、この記事は「生ひ立ちの記」が昭和三年執筆であることを裏づけるが、しかし先に引いた昭和三年七月二十二日の日記の「自叙伝起稿」と「此の自叙伝を書いゐるうちに……」との間にはずれが生じることになる。犀星の記憶違いだろうか。もつとも「自叙伝起稿」を「自叙伝の続篇起稿」と読みかえれば「我が自叙伝」すなわち「生ひ立ちの記」の一部はすでに四月下旬以前に書きはじめられていたことになり、その方が相当な量のこの作品が七月末から十二月上旬にかけての四月余りの間に一挙に成立したとみるより自然かも知れない。(だとすれば先に芥川と「養母の死を契機に」自叙伝執筆を決意したと書いたのは勿論不正確になるが、論旨に大きな影響はない。)

ところで、この「生ひ立ちの記」に、昭和十年一月から六月まで「早稲田文学」に「弄獅子」と題して発表された六章と、他に初出未詳の二章を加えて、自叙伝「弄獅子」全四十八章が昭和十一年六月「純粹小説全集」の一冊として有光社から刊行されるのである。したがって、新潮社版全集の「弄獅子」の解題に『早稲田文学』昭和十年一月—六月号とのみあるのは不正確である。また奥野健男がこの長篇「弄獅子」を昭和十年に成立したものという前提に立ち、『あにいもうと』を突破口にして『チンドン世界』『女の図』『弄獅子』をはじめ市井鬼ものと称する作品を怒濤のごとく

書きはじめる」(集英社「日本文学全」)といった意味のことをくりかえし書いているのは誤りである。「あにいもうと」は「弄獅子」という前提があつて出現した作品である。また市井鬼ものと称される作品は全て虚構による散文であつて「弄獅子」のような自伝は一作もない。

「弄獅子」の大半が芥川の死を契機に昭和三年に執筆されたものであることは以上の考察で十分だろう。犀星はこの作品において初めて生母、養母をはじめ、養父、義理の姉・兄・妹など自己の出世と育ち方にまつわる人々をまともに対象化したのである。

生母についても「幼年時代」における描写とは全く逆に「母が僕に抱きついて可愛がつてくれたとか、僕があまえて何かおねだりしたとかいふことなぞ一遍もなかった」し、同じ町内に住む母に愛情をもつたこともなかったといきつてゐる(この部分は昭和十年発表)。

「幼年時代」には父の死後、父の弟が生母を「殆んど一枚の着物も持ちものも与へずに追放してしまつた」とあるが、「弄獅子」では「生家を出てゆく際に金になるやうな掛物や陶器、刀剣類を持ち出し、それを売り減らしにして食べてゐたさうであつた」と書かれ、感傷的美化が拭い去られている。また「自叙伝(註：幼年時代)を書かなかつたら母を思い出す機会もなかつたであらう」と回想し、「幼年時代」についても「自分は処女作の中で気の毒げな少年が母を求めてゐる、叙情的な軽蔑すべき描写を繰り返してゐるが、それは、あれ(母)を慕ふ発作に違ひなかつた」と嫌悪を込めた否定的評価をしている。

養母についての描写は凄絶というほかない。その筆致は仮借がなく、虐待され続けて来た母への筆による「復讐」という感じさえする。母というかわりに「残酷な四十女」「四十女の腹の汚なさ」というふうを書く。またハツは豊満な白い肌を持った淫蕩放埒な女として描かれるが、これはのちの市井鬼もの世界の官能的な女性の原型といつてよい。しかし四十一章「後の日の母」になると、母の晩年が描かれ、「彼女は既に大なる老年期の終りに近づき、その顔容には何か仙薬のやうな表情を持ち、その皺と老いに自分は初めて懐しいものを感じた」といい、上京した母が入浴するときに、若いころの白く肥った「放埒」な肉体とは別な「一本の裯ヒラのやうな強直な感じをもつた」瘠軀を見て、ある感慨にうたれるのである。こうして犀星はしだいに母の生を一人の市井の女の生涯として客観的に眺めうる視点を獲得しつつあった。結末に近い四十七章は「餓鬼」と題され、母の死に集まった血のつながらぬ四人の兄弟が全く無感動な表情で「よく死に即いてくれたといふ念入りの露骨な気持で、死人に微妙な対立をしてゐる」情景が描かれる。そして犀星自身の心境はこう説明されている。

弟(註・犀星)自身もこれほど冷淡に死に対うたことがなかつた。普通の知己の死に会うても何か死の内容について気持の影響されるものを其の折々には感じたものであるが、今彼の中にあるものは酷薄な見せしめ懲らしめの烈しい感情が、苛立つて仏の上に跨つてゐることを知つてゐた。それについての少しの反省をもたなかつた。(註・昭和十二年に非凡閣版全集ではこの部分が削除され、

母に対する感情の推移を暗示している)

続いて超現実的な手法であの世からの使いの天使たちが死者の枕許でする会話を描き、「この女の精神は神でさへしつ尾ビを巻いてしまふだらう」といわせ、また死者の母の子供たちへのことばとして「お前方はわたしといふ女を考へて見れば大概この世の女のお分りでせう。わたしはお前方にお手本を示してゐたやうなものですね」ともいわせている。

しかし、最も注目すべきは作者が想像の場面で養母をして地獄を素通りして極楽に行かせていることだ。すなわち、犀星はこの養母告発の書ともいふべき作品の最後に至つて母に地獄のかわりに極楽を、復讐のかわりに救いを与えているのである。そして「完結」の章では「残酷で無学な母のあらゆる嫉は年をとるとともに、私の心の皮のやうなものになつてゐた。一種の精神的なかさぶたのやうなものかも知れない」と書き、齡不惑になつて初めて、自己を自己たらしめたのは結局この母以外でないという認識に至りついでこの作品は結ばれるのだ。

つねに女中の子と罵り、虐待することによつてのみ犀星を育て、そのコンプレックスの象徴的存在であつた母、犀星流にいえば悍馬のやうな母に「またがる」ことによつてそれと対決し、そこに単なる憎悪の対象としてでなく、本能の命ずるままに生きた一人の「残酷で無学な」市井の「鬼」の生涯をみる。そして彼女も結局自分と同じく不幸な星の下に生きた人であることに思い至つて初めて母を許すのである。更にまた、自己の野性的な感性、その無頼性を初め

とする性格がほかならぬ養母によって与えられたものであることを認識することで自己の内部の母をも発見する。ついで母への復讐心のかわりに、逆に自己を母に仮託・同化することで市井の鬼もんを造型し、現実には復讐しようとするに至るのである。それはやがて「恥」の意識を克服し、むしろその「恥」の底に居直ることであり、そのとき「復讐」ははじめて意識的な犀星固有の文学的方法になるのである。「あにいもうと」成立の前提として右のような内面のドラマが演ぜられたとみるべきだ。それは犀星の文学的生涯で画期的な事件であったはずで、その結果、犀星は抒情的・感覺的作家から眞の散文作家に脱皮するための前提をなしたとげた。そのきっかけをなしたという意味で「弄獅子」はきわめて重要な作品だ。

しかし「弄獅子」によって、養母を客観的に対象化し、生い立ちのコンプレックスを克服したとしても、その母の像を普遍化する市井鬼ものの世界のフィクショナルな方法がただちに生まれて来るはずもなかった。方法上の摸索はまだ続くのである。

六

昭和初年頃の作品について犀星は「私の小説はみな拙く、みな硬く、もうどうにも身動きの出来ないやうに重苦しいものばかりだった。何度も行き詰り、何度も切り抜けて出たところが最後の大きに行き詰りの口が待ち伏せてゐて、そこに転がり込んだ私は容易に起き上れなかつた」(『泥雀の歌』)と回想している。時悪しくプロレタリア文学全盛の時にあつてゐた。大正十二年頃から自分の身辺に集

まつていた「驢馬」同人のほとんどは左傾していった。これらの青年たちの思想や感受性が犀星に与えた影響も決して小さくはなかつたはずだ。「愛の詩集」以来、つねに底辺の庶民に同情を寄せて来た犀星はプロレタリア文学運動が投げかけた問題に無関心ではいらなかつた。昭和三年八月三日の日記には「堀辰雄君に打電し、

『戦旗』送附方托す。中野の小説見たきためなり」という一節も見え、おそらくこれは同年八月の「戦旗」にのつた「春さきの風」のことであつて、犀星は同月十七日の読売新聞に「中野重治氏の『春さきの風』を批評す」を書いてその「プロレタリアの美」を推賞している。晩年の犀星は同人の入党について「私とその仲間の一人でなかつたことは、私が原稿を書いてゐて食へたからであり、食へずにあたら容易に仲間にはいつてゐたかも知らなかつた」といつている(『驢馬』の「人達」文)。昭和三、四年には「新潮」「文芸春秋」などに多くの文芸時評を書いているが、そこで「驢馬」同人を推賞し、また「今度の選挙で自分も労働党のM氏に一票を投じた」(『新潮』昭三・四)と書きつけたりもしている。中野らにとつても「教師としての室生犀星」(河出版『現代日本小説大』)であつたのだが、所詮、犀星はその文学的資質・現実認識の上からいつてもプロレタリア文学運動の世界観とは無縁の人であつた。しかし社会の底辺に生きる人々を描いた「あにいもうと」以下の市井鬼ものが犀星なりにプロレタリア文学運動をくぐりぬけた結果出て来たものであるという側面も見落してはならぬ。その意味では犀星は芥川を超えたともいえる。

一方、昭和四年頃からの犀星は自称「新感覺派」の資質からいつ

でも、手法上はむしろモダニズムの影響下にあった。「浮気な文明」私の『白い牙』(以上昭四)「ハト・ハナ」「ユキ子は食はねばならぬ」(以上昭五)「バ丹杏と市民」「足・デパート・女」「肘と命令」(以上昭五)「コナ・ダイヤ」「出発した軍隊」「白い蛆と勇士」「化粧した交際法」「内気な讚美歌」(以上昭六)など主な作品名をあげただけでもその形跡は歴然としている。このモダニズムの作品については岡田三郎が「五十女の粉黛」を見るようだ(新潮・昭五・九)のに対し、犀星は「時評に抗議」(同・一〇月)を書いて「『浮気な文明』や『私の白い牙』あたりから僕は明確に立体的手法を試みてゐたものであつて、今更に僕がわざとらしい構成を揮つてゐる訳ではないのだ」と反駁しているが、方法的な実験・摸索にもかかわらず、それは成功しなかつた。ただし、たとえば「ハト・ハナ」「出発した軍隊」などはしたたかな市井の人間たちが描かれている点で市井鬼ものもの先駆けとみられなくもない。

昭和六年には「青い猿」を都新聞に連載する(六・二一・八・三三)。久々の新聞小説であり、相当の意欲をもつて書かれているが、失敗作である。テーマに分裂があり、作家の主観的な愛憎の感情があまりにあらわであつて作品としての自律性を弱めている。主人公は作者自身とおぼしき作家・松平隼太。その友人で自殺する作家の秋川龍之(芥川)、詩人の織本貞一(萩原朔太郎)、画家の小野信一(小穴隆一)、作家の雪野進之(宇野浩二)、作家の行宗さん(正宗白鳥)、翻訳家の秋村みね子(松村みね子)、秋川の親友久留米(久米正雄)、秋川の治療医霜島(下島勲)、詩人の旗(多田不二?)など名前か

らだけでもすぐモデルがわかるような小説で、作者自身もモデル小説として読まれることを予想して書いた、したがってかなり事実に近い作品とみてよい(芥川の書簡、犀星の日記などと符合する個所もある)。まず作者は「またとない」よい友であり、「最後には軽蔑されてゐたかも知れぬ」秋川の晩年と死を冷静に客観化する。それには犀星の芥川への愛憎がこめられていて、それなりの感動を呼ぶ。一方、それと並行して主人公にまわりつき、彼を苦しめる悪女の典型のような人妻礼子と、織本の妻で、やがて若い青年と姦通して離別される劉子が描かれる。犀星は作品の構成・バランス・客観性にもかまわず、主観のあらわな憎悪や嫌悪を込めてこの二人の女を描く。「青い猿」とは作者が礼子に投げつけた憎しみの名である。この二人の女の描写はこの作品の第一のテーマと思われる秋川の静的な死とは無関係であり、むしろちぐはぐな分裂感を与えている。この女たちは階級こそちがえ、肉体の命ずるまま何らの倫理感もなしに生きる点ではのちの市井鬼の女たちに通ずる性格を持つてゐる。この作品は佳作ではないが、次の二点において重要であると思う。まず強い衝撃のあまり、追悼文さえ書けなかつた芥川の死を犀星なりにではあるが、ともかくも冷静に凝視しているといふこと。第二は「弄獅子」で客観的にみつめた養母の中の悪女を中流階級の女・礼子や劉子にも見出し、やがてそれを市井鬼ものとして普遍化・虚構化して行くひとつのステップになつたであらうこと。

昭和八年になると市井鬼ものの前兆をなす作品が出て来る。この時期の犀星の復活はいわゆる文芸復興期の機運とも無関係ではない

だらう。「デパートの熊」(新潮・四月・のち「熊」と改題)には屋上の檻の熊に異常な執着をみせる奔放な女店員が描かれる。「貴族」(経済往来・六月)は官能の求むるまま無倫理に生きる侯爵未亡人の秘められた私生活をあばく一種の「復讐」の文学。「ハト」(中央公論・六月)と「哀猿記」(改造・六月)は運命に翻弄されるどん底の女を描いているが、彼女らはいわゆる市井鬼となつて現実に復讐するには至らない。早くからその傾向はあつたが、特にこの頃より小説は多くの生き生きした会話文からなり、わけでも「ハト」は会話文のみである。これはやがて「あにいもうと」におけるもと伊之の壮絶・ダイナミックな罵り合いに結実する。九年に入ると「鶴千代」(新潮・一月・のち「山犬」と改題)を発表する。これはジャック・ロンドンの「荒野の呼び声」を思わせる佳作だ。野性的で誇り高く、狷介な山犬鶴千代は犀星自身の精神のあり方に重なり、その反抗は市井鬼の世界に通ずるものを持っている。五月に「洞庭記」(中央公論)を書いた犀星は「文芸春秋」七月号にいよいよ「あにいもうと」を発表する。

七

後期の犀星は「あにいもうと」について「私の好きな作品ではない」(私の履歴書)といい、それが「代表的作品のやうに思はれてゐることは哀しい」(「文士の悲しみ」昭三)など語っているが、犀星文学の「代表的」傑作のひとつであることはまちがいない。東京に出ていて学生にだまされ、身をもちくずした長女もんを中心に、父の多摩川の川師赤座、やさしい母親りき、やはりぐれている石工の

兄伊之、それに妹のさんを配した一家の愛憎のドラマをもんの相手の学生がたずねて来たのをきっかけに描く作品である。伊之の愛憎いりまじった妹もんへの心理、兄妹の凄絶な罵り合いと父赤座の悲しみや怒りをおさえた無言の表情との対照、背景としての川場の的確な描写、そして犀星作品には珍しい緊密な構成などきわめてすぐれた芸術的完成品である。

養母の像をモチーフとしながら、事実から独立した全くフィクションナルなもんを創造したとき、犀星は真に自己に固有な散文的方法を所有することになつた。「弄獅子」における自己とその周辺の疑視によつて発見したものを虚構の世界に「移転」(伊藤整)して普遍化することに成功した犀星の内部からはやがて市井鬼ものといわれる作品群が噴出する。「さういふ広い世界に出たときに私は臆気ながら復讐の観念に辿り着いて、再び私自身の、幼少にして、抱いた遠い観念をも回顧したのであつた」(「復讐の文学に就いて」昭三)。犀星は自己内面の怨念を市井の虐げられた女たち、どん底に生き、悪徳のかぎりをつくす「鬼」たちに定着させようとする。「あにいもうと」が単なる素材の発見であつた以上に方法的自己確立であつた所以である。「あにいもうと」を発表した翌月には「詩よ君とお別れする」(文芸)を書く。もちろんこれが詩との真の訣別にはならなかつたが、この時期の犀星の内部で散文精神が詩精神を圧倒していたことを端的に物語るものである。それは「詩に抛つて胡魔化してゐた文章をも出来るだけ洗ひ落し、好みに依つて人生を摸索することを抛棄した」(前掲「復讐の文学に就いて」)結果もたらされた。

都市底辺にうごめく人間たちはすでに「愛の詩集」(大七)著白き巢窟」(解放・大九・三)「幻影の都市」(大二〇)ら前期諸作品に描かれたのだが、今や、同じ素材を広く人間の普通のなかで見直すことで現実認識を深化させ、新しい表現世界に至りついたのである。もちろん以上のことは犀星が「感情」詩派でなくなったことを意味しない。犀星は生涯「感情」で認識する作家であった。ただ前期においては感情は感情そのままの直接的表出であったが、ここに至って感情は意識化され、方法化されたといふべきだろうか。勿論、この時期の文体も知的・分析的散文ではなく、誤解を恐れずにいえばどろどろした生命そのものを表現する「感情」的散文とでもいうべきものである。

続いて「神かをんなか」(九月)「チンドン世界」(九月)「神々のへど」(十一月)を書いて翌十年に入ると、「女の囚」「人間街」(のち「復讐」と改題)「聖処女」らの長篇をはじめ市井鬼ものの作品を阿修羅のごとく書く。しかし今度の多作は前期の濫作とちがって真に内的必然に基づくもので、「凡そどういふ作品でも書きなぐるといふことはしなかつた。どれにも力と刻を加へた」(泥雀の歌)のである。そして自己の文学をはじめ「復讐の文学」(改造・昭一〇・六)と規定するに至る。この「復讐の文学」についてはいちはやく広津和郎が「復讐」の対象が明らかでないところに犀星の弱点が存すると批判した(「復讐の文学」について(報知新)。まさにその通りなのだが、復讐の情念は燃えていてもそれを向けるべき対象を認識しえないところに無知無学な市井鬼の市井鬼たる所以があるともいえるのではないか。

犀星自身「何のために、何の理由で、何の報いによつて真向から慕らに斬り込んでゐるかも、よくは分つてゐない」(前掲「復讐の文学」に就いて)のであった。どこに向かつて抗議すべくもない宿命的な逆境に育つた犀星は市井の徒の向けどころのない反抗・復讐に自己仮託することに文学的営為をかけるのだ。つまり、どろどろした自己の怨念の文学的形象化によつて宿命的な「屈辱」を「復讐」に逆転する。自らの実感を託すべき階級の発見、つまりは自己の再発見、それこそがあの爆発的な創作欲を生み出すのである。

こうして宿命を武器、あるいは特権と化することで完全に文学的再生をとげた犀星は昭和十一年に「母を思ふの記」(「蕃椒の羹」所収)を書いてゐるが、その「母」が生母でなくて養母ハツであるのはもはや当然であらう。

小説を書いてからもう十余年になるが(略)母のことは様々に描き尽くし、もう何物をも残さずに彼女を虐待してしまつた。母は恥と酷い侮辱のなかに寒々と裸になり、その脊軀を何時も自分の行手に踞踏させてゐた。実際、母を思ふ時に自分は彼女の瘠せた骨を穿つために苛酷な鑿の手を弛めることはなかつた。(略)自分は母のことを殆んど書き尽くした。だが、今、自分の眼に映る母は決して小説に書かれてゐる彼女ではない、何か新鮮な愛情と接触を感じさせる母親である。

かつてのコンプレックスなどみじんもなく、愛情といたわりをもつて母を思い起すのである。

また、いみじくも「再生の文学」と題された文章(「東京日日新聞」昭和

一五)には次のようにある。

自殺する作家はするが好い、それも実によく分るがしかしいのちを投げ出してしまへばそれまでではないか、それは人生へも自分自身に対しても無責任ではないか、他の職業の人ならばか

まはない、文学を食ひ散らす人間は最後まで生きのびて、ひよつとしたら人生のおしまひに捷てるかも知れないのだ。

私はこれを犀星なりの芥川超克の完成をひそかに告げることばと読む。

伊東静雄論

——「小さい手帖から」をめぐって——

川 口 朗

1

詩集『反響』に「小さい手帖から」の章題で集められている十篇の作品は、伊東のいわば戦後の第一作である。まず一応その題名と発表の誌名、年月を詩集の配列順に列記しておく。

野の夜（『座右宝』昭和二十一年九月）

夕映（『座右宝』二一・九）

雲雀（『午前』二二・二）

訪問者（『女性展望』二一・九）

詩作の後（『光耀』二一・一〇）

中心に燃える（『舞踏』二一・一一）

夏の終り（『文化展望』二一・一〇）

帰路（『舞踏』二一・三）

路上（『改造』二一・一〇）

都会の慰め（『光耀』二一・一〇）

これらの作品を書いた事情については、「近況」（『詩人』二三・二）という短文で伊東自ら次のように伝えている。

自分の詩作 六月末日に近く、ふいに書きたい心持がおこり
——二年間書かなかつた——八月四日までに六篇書いた。ここの田舎の風物を意匠にした自問自答の、憐れに小さい詩ばかり。
（『改訂版全集』二四八ページ以下）
（下引用はすべて同全集による）

八月四日は「夏の終り」を書いた日である。これらの詩作が二年ぶりのものであると言っているが、十八年九月に第三詩集『春のいそぎ』を出して以来伊東の詩作は絶え、わずかに十九年二月『新女苑』に「うたげ」の一篇を掲げたのみである。そのような中断の後に「ふいに書きたい心持」に駆られて書き始めたものであるけれども、結果は「……憐れに小さい詩ばかり。」と認めなければならなかった。この文章からほぼ一年後の二十二年八月三日に執筆した

『小さい手帖から』はしがき『詩人』三二二 全集三五〇ページにもある痛切な思ひから書き出したものであつたが出来上つたものをみると、「田園風物詩」とでも副題してふさはしいやうなものになつた。

と、同じような気持をしるすのである。

「小さい手帖から」の十篇のなかで、「路上」と「都会の慰め」の二篇は「田園風物詩」に対して仮に言えば「都会風物詩」である。この二篇を「小さい手帖から」の最後に配列しているのは、自分の詩作の次の段階を告げる意向であらうし、他の八篇とは区別する気持があつたと考えてよいと思われる。それに対して「野の夜」「夕映」「雲雀」「詩作の後」「夏の終り」「帰路」はたしかに「田園風物詩」と副題してふさわしいものであり、いずれも「憐れ」「小さい」かどうかはともかく、「この田舎の風物を意匠にした自問自答の」詩である。たとえば「帰路」は、自分の詩に対するこのよくな評価をそのまま詩にしたような作品である。

自分の歩みにつれてゆれる懐中電燈の黄色い小さな光の輪が、荒れた街道の石ころの上をにぶく照す時、「私」はその光の輪を「よるの家の路のしんみりした伴侶」と思う。そしてそれに導かれてある時、「あはれなわが視力」は、その黄色い小さな光の輪がにぶく照らす以上には届かないのである。そういう「もどかしい周囲の闇」に向つて、しかし「やさしくお前の輪の内に囚はれて」やすらぎつ「私」はつぶやく。

——この手の中のともしびは

あゝ僕らの「詩」にそつくりだ

自問にたいして自答して……それつきりの……

そして「意匠」である田舎の風物、この夜の野道のイメージは色彩感まで伴つて視覚的にあざやかであるのみならず、聴覚的さえある。

光の輪のなかにうかぶ轍は

昼まより一層かげ深くきざまれてあり

妖精めくあざやかな緑いろして

草むらの色はわが通行をささやきあつた

ここにあるのは、そして他の五篇にもあるのは、つつましやかにへりくだつた人なつっこさを思わせる心情であり、それとともに、何かに打ちひしがれたような孤独の心と一種の諦念の境地である。それは悲しみに濾過された静かに安らかな心を思わせ、単純といつてもいいような素直な気持を感じさせる。ひと口に言つて平明な詩、自然の中に溶けこんでやすらぐおだやかな心情を単純に素直な用語、修辭で表現した抒情詩である。

「訪問者」は、「意匠」からみれば右の「田園風物詩」とは言えない。しかし

やつと目覚めたばかりの愛が

まだ朧とした目あてを見つける以前に

はやげしい喪失の身悶えから神を呼んでゐる

そして自分で課した絶望で懸命に拒絶し防禦してゐる

ああ純潔な何か

この少女の姿勢は、かつての伊東の姿勢と重なるものがあるのではないか。『わがひとに与ふる哀歌』の作品こそ自分の内部の拒絶の意志そのものであつたはずである。しかし今の伊東には、その姿勢と意志、それを自己に要求する「純潔」はも早過ぎ去つたもの、なお過ぎ去りつつあるものでしかない。少女の生涯をいたわること、自分の過ぎ去つた半生を詠嘆するのである。

出されたまゝ触れられなかつたお茶に

もう小さい蛾が浮んでゐる

生涯を詩に捧げたいと

少女は言つたつけ

この世での仕事の意味もまだ知らずに

以上のような田園の自然に素直に安らぎを見出すささやかな孤独の心情を、単純平明に表現する田園風物詩、抒情詩を、伊東はなぜ「憐れに小さい詩ばかり」と不満に思わねばならなかつたのであろうか。それはむしろ伊東が求めてきたものではなかつたのか。ともかく、長い中断の後によみがえつた詩作の結果に対して伊東は満足できなかったようであり、そこには失望感、もつと言えはほとんど挫折感に近いものがあつたのではないかと思われるのである。とすれば、ここに始まつた戦後の詩作の前途はどうなるのだろうか。もうしばらく後になつて伊東は「私もいよいよ本格的に詩を書けぬやうになつて参つたやうです。又詩を書くには大へんな時代でもありませんね。」(『奮闘三三三・三三・七・四 田中光子宛』)と言わなければならなくなる。再度の中断が始まろうとするのである。恐らく戦時中の中断

からの脱却、自己回復の念願が「ふいに書きたい心持」「ある痛切な思ひ」を喚び起したのであらう。しかもその詩作が田園風物詩に終つたことは、自己回復の切実な念願がついに不毛に終ること、かつての中断のくり返しを告げるものであることを伊東は予感せずにはいられなかつたのではなからうか。だから不満であり、失望感、挫折感を抱くほかはなかつたのではなからうか。そうでなければ田園風物詩は伊東にとってむしろ順当なコースであり、不満を抱く理由は必ずしもなかつたはずである。

2

『わがひとに与ふる哀歌』から『夏花』、『春のいそぎ』の三つの詩集の間には、すぐ目につく変化がある。『哀歌』の作品には風景描写が皆無であり、自然はほとんど具象性実在性をもたない。「伊東の詩的イメージが、自然的な実在性や風土的土着性の払拭、ないしは剝離のうえに形成されているという一般的傾向」と指摘される^(註)ところである。現実の自然、故郷ははげしく拒否されているのである。そして伊東が自然にやすらぎを得るのは、それが死のイメージと結びつく時であり、その自然、風景は当然のことながら荒涼たるたたずまいを示すのである。

わが死せむ美しき日のために

連嶺の夢想よ！ 汝が白雪を

消さずあれ

息ぐるしい稀薄のこれの曠野に

非時の木の実熟るる
隠れたる場しよを過ぎ

われの播種く花のしるし

近づく日わが屍骸を曳かむ馬を

この道標はいざなひ還さむ

あゝかくてわが永久の帰郷を

高貴なる汝が白き光見送り

木の実照り 泉はわらひ……

わが痛き夢よこの時ぞ遂に

休らはむもの!

(原野の歌)

これが『夏花』になるとかなり趣きが變つてくる。伊東の心は現実の自然に著しく傾斜していること、現実の自然のなかに安らかに身を置いていることが思われるのである。

(注) 浅井清ほか「わがひとに与ふる哀歌」(『国文学』昭和四四・二)

門の外の ひかりまぶしき 高きところに 在りて 一羽

燕ぞ鳴く

単調にして するどく 翳なく

あゝ いまこの国に 到り着きし 最初の燕ぞ 鳴く

と歌い出し、そしてほぼ同じ詞句で結ぶリズムカルな「燕」の一篇は『夏花』の詩境、伊東の心情を最もよく示すものであり、この一篇が冒頭に置かれていることは、『夏花』の基調をいかに象徴するようである。ただそうした中にも「八月の石にすがりて」「水中花」の二篇が示すように、『哀歌』の世界、現実を拒否し死に傾斜

する心情もいく分は揺曳するのである。

さらに『春のいそぎ』に見られるのは戦争の詩と、よき良人、よき父としての生活人のつつましく健全な心情を、折々の自然に托した抒情詩である。『哀歌』とは対照的に風景描写が多く見られ、自然は具象性実在性を得ていると言えそうである。もちろん詩人の胸にはあるはげしいものがなくなつたわけではない。しかし自然の中に身をおくとき、それもなごみ、詩人はやすらぎを得るのである。戦時中の一日を静かな山村に遊んだ時

あゝいかにひさしき かかる村にぞかかる人らと

世をあり経なむわが夢

あゝいかにひさしき 黄いろき塵の舞ひあがる

巷に辛くいきつきて

あはれめや

わが歌は漠たる憤りとするとき悲しみをかくしたり

なつな花さける道たどりつつ

家の戸口にはられしるしを見れば

若者らいさましくみ戦に出で立ちてここたくも命ちりける

手にふるるはな摘みゆきわがころるなほかり

(山村遊行)

と歌うのである。つね日ごろその歌に「漠たる憤りとするとき悲しみ」をかくさずにはいられない詩人であつてみれば、今日この山村

でも多くの戦死者を出していることを目にした時、その心はただではいられないはずであるのに、「手にふるるはな摘みゆきわがころなほかり」とその思いも自然のなかに溶解されて詩人はやすらぎを得ているのである。

あるいは故郷に妻子を伴い、その自然、風景をなつかしむ。

新妻に見すべかりし

わがふるさとに

汝を伴ひけふ来れば

十歳を経たり

いまははや 汝が傍らの

童さび愛しきものに

わが指さしていふ

なつかしき山と河の名

走り出る吾子に後れて

夏草の道往く なれとわれ

歳月は過ぎてののちに

ただ老の思に似たり

故郷の自然のなかに安らかに身を置くことができるようになった時に、かつては故郷を拒否したはげしい精神と引き換えのように、詩人の胸には「老の思に似」たものが過ぎるのである。

現実の自然の拒否から、現実の自然への傾斜、さらに調和没入に

よる安らぎまでの過程は、「伊東がかれの内部の拒絶と反抗の意志を喪失してゆく過程」、そして辛うじて「庶民的生活者へ遁走する」^(注)姿勢を端的に示すものであろう。そして、『春のいそぎ』とともに伊東の詩作が絶える理由もここに求められるものであろう。ひと口にいえば、現実の自然への調和没入は、かれの詩作を支える「拒絶と反抗の意志」、現実に対する牙、そういう主体性を解消溶解する毒素として作用し、しかもそれは堅固に根を下していったと思われるのである。

(注) 桶谷秀昭「伊東静雄論」『文学』三九・四

『哀歌』から『夏花』について、伊東は次のように説明する。『哀歌』の時は、「当時の激した心持を」、できなくて、順序をかまわず何もかも投げ出してみたかったのであり、その頃の伊東は「実生活の上では、非常に危険な時期であつたやうな気がする。詩と同じ程度に、いつもその頃は故知らず激してゐて、家の中に居ても、並外れた言動をしてゐた。」それに対して『夏花』は

それからいくらか年月は経てゐない。それにもかかはらず、大へん時が過ぎてゐるやうに感ぜられる。『詩集夏花』が、「哀歌」とは又別趣味なところがあるとすれば作者自身のこの茫漠・脱落の気持のせいであらうと思ふ。しかし、それは一時にやつて来たのではない。四歳半を閲してゐる。(中略)又、茫漠・脱落と言つたが、それだけで詩が書けるものではない。その中には、又別種の力を得て来たところもなくはない。それがどんなものかは、人の見るところによつて異なると思はれる。

(「夏花」『コギト』一五・五 全集三二―二ページ)

伊東の中に起った「茫漠・脱落」から生まれている「夏花」の作品に、自然への傾斜が見られることは意味が深いように思われる。これに関して注目されるのは、十四年九月一日の日記に次のようにしていることである。

自分の詩の発想はゆきづまつてゐる。いや、ゆきづまつてゐるといふより、ゆきづまつたところからやつとしぼり出されるやうな詩である。自分はそれを改めるやう努力したい。(全集二六二ページ)

これは、伊東が『哀歌』以来の発想、詩境を苦渋にみちたものと、それを脱却しようとするある思いつめた志向であろう。つまり伊東の自然への傾斜には、自己の脱皮を目ざす積極的な志向、そういうある意味ではげしきさによって行われたのである。そのことが自然への傾斜を「別種の力」にしていたのである。

3

それに対して戦時中の『春のいそぎ』までと、その後の詩作の消滅は伊東が自然によってむしばまれていった経過であろう。伊東の積極的な志向が静止していった時、伊東は「茫漠・脱落」のゆえに自然と調和し、自然へ没入し、というよりは自然の中に吸収され溶解されてゆくのである。しかも一方では年齢を重ね、生活人として円熟してゆくにつれて、詩においても、実生活の上でも伊東の「激した心持」はやわらぎ、調和的になつていた。そうした過程の一時

期にできる詩は、和歌や俳句と実質的には大差のない自然諷詠に終るほかはないであろう。自然の吸収溶解が進む一方、戦争のために自然を求められなくなるか、少なくとも自然を求めものが精一ぱいになった時、伊東の詩作は停止するほかはなかったのである。

そのような自然への没入は、開戦によって飛躍的決定的になつたように思われる。それを考える上で十七年三月六日付の頼原退蔵あてのながきはおもしろい。

私も忙しい勤務のなかにも、大詔を拝して以後のびやかに暮してをります。今年梅見のやうなもの生れて始めてしてみましたなどと考へてをります。(一九七)

伊東のこの恩師に対する日ごろの敬愛と信頼を考えれば、ここには伊東の最もまじめな、いつわりのない本音が吐かれてみるとみるべきであろう。伊東はここで開戦の大詔を拝して一種の解放感を得て喜んでいように見える。しかしこれは、戦争中の通念からすればおかしいとも言えそうである。「のびやかに」は「大詔を拝して以後」ではちよつと工合がわるくないか。緊張して暮してこそしかるべきであろう。その上今年はどうして「梅見」などを目ろんだりするのであるか。戦争中にはもつてのほかではないか、そんなふうに見えるか。戦中にしてみれば、開戦の大詔によって完全自己を放棄し得たのであり、そのつつましい気持から梅の花のつつましい心を持って梅見をすることを考えるのである。そこに「草莽に隠れた臣」の感を抱いているのであり、「梅の花」『コギト』一六・四 全集三六二ページの感慨が今や一段と高まっているのである。

梅見を思うことは、伊東がすっかり自己を放棄したことの表白にほかならない。この文章にある解放感の源もそこにある。伊東は『哀歌』以来の自分のはげしい心持、「拒絶と反抗の意志」を脱却しようとして努力し、その過程に『夏花』が得られたのである。その後も伊東の望む方向はそこにあつたのであり、たとえば次のように言う。

こんな、心の鈍り方を自分では好んでゐるのです。今迄に覺えのない心氣の鈍りです。出来るだけ自分だけの心は呆やりすることを——たのしみにしてゐます。（談話のかはりに『天性』一

六・三 全集三五ページ）

伊東の求めてきた「心氣の鈍り」すなわち『哀歌』以来の「激した心持」の脱却は、開戦による自己放棄によつて一きよに実現されたのである。その際、脱却の努力が苦しかつただけに、伊東には解放感がよび起されるのである。自己を放棄したつつましい心によつて伊東の自然への没入は容易になり、その過程で伊東は故郷とのいわば和解もしたのである。しかしこの解放は完全な「茫漠・脱落」、自己の放棄あるいは喪失であることを注意しなければならぬ。

十七年の夏、伊東は氣持の上で何の無理もなしに久々に故郷に帰る氣になつてゐる。その変化は自分でも注目すべきものであつた。

何だか、自然にそんな（注、故郷に妻子をつれて帰る）氣持になつたのです。このことは何か文章にして残しておきたい氣分がします。（二二六 一七・八・八 池田勉宛）

私は今度あらためて故郷の風景つくづく眺め、やはりうづ

くしいと感じました。（二二一 一七・九・二三 池田勉宛）
この時の静かにおだやかな氣持をうたつたのが「なれとわれ」である。そして

九州旅行からかへつたら、絶えず身体動かしてゐたい氣持になつて、休み毎に、あちらこちらあるいてゐます。静かな変化と推移とを味つてをります。（二二五 一七・一〇・二四 小高根二郎宛）

と、帰郷の旅によつて心身が活動的になり、充実感の自覺を告げるのである。この時の伊東の喜びは故郷とその自然に充されている喜びであり、その喜びの再現を求めてささやかな旅をくり返すのである。いわば戦争は伊東を故郷、自然の中に解放したのである。しかしこれは自己の放棄、喪失を代償にしている以上、も早詩は作れないであらうし、また作る必要もないはずである。自己を無にして自然に調和没入することがいわば一種の詩的快感であるから。あるいは詩ができるとしても、それは自然に托した抒情詩、ないしは自然にひたつた喜びの追憶の詩に止まるであらう。ともかく、『春のいそぎ』を得た時には、伊東の詩作は止つていたのみならず、伊東の内面の荒廢を思わせるものさえあらわれてくるのである。

『春のいそぎ』の作品が作られたのは十五年から十八年の上半期にかけてである。主として、開戦前夜から、まだ必ずしも敗色をあらわにしていなかった時期にあたる。したがつて一般国民の日常生活は窮屈一方でもなかつた。伊東も自然を求めてそれにひたることができ、それによつてもかく一つの充実感が得られ、和歌俳句と大差のない抒情詩にせよ、追憶の詩にせよ、詩作も得られたのであ

る。しかし『春のいそぎ』が刊行され、詩作の上で伊東の心が一段落し、緊張が去ったようにそのころから戦局は緊迫し、国民の生活も逼迫してくる。伊東の身辺も勤務は多忙を加え、家庭の雑事は多くなり、自然を訪ねる小旅行などとも早思いもよらなくなっていた。当然、勉強、詩作も思うに任せないようになる反面では、伊東の心は散文に傾いてゆく。戦争によって自然への没入の道が断たれようとしている時、伊東は、自分の自然に托する抒情詩を断念して散文を考えるほかにはなかつたのである。しかし、自然への調和没入に自己の詩境を見出していた詩人には、現実、生々しい人事の世界に立ち向う牙は喪われているのである。

長い長い文章書きたい。といつても何を書けばいいかわからない。気持が安定を欠くのも原因の一半はそこにあるのではないか。(日記 一八・一〇・一四)

と書かねばならないのは当然になってくる。結局詩の道はふさがり、散文の方向も思うだけで見当もつかない状態になる。そのため時には、広い庭のある田舎の家に住んで仕事に専念したいなどと焦燥に駆られるようにもならざるを得ない。(一八・九・二七) その時は、仕事よりも、広い庭のある田舎の家に住みたいことの方により本音がある。もし田舎の家に住むことができたとしても、恐らく仕事はしないか、少なくとも散文は書かない、書けないのではなからうか。あるいは「興ざめの実生活」の中で詩作がとだえ、詩を思うこともなくなり、そういう自分に対する自己嫌悪、自棄に陥る。

何といふ低俗な日記。もう四ヶ月詩を思はぬ生活。(一九・四・

二)

他方その間には時に自然との束の間の接触に自分が静穏、調和の世界に在ることを確め(一八・一〇・二二)あるいは息を抜いているように見えるが(二六二・一九・五・一 田中光子宛 二六三・一九・五・九 頼原宛)その先には進まない。また時には自然との接触によってかえって気力の消磨を嘆き、自棄のような気持を抱くのである(二六九・一九・一〇・七 田中宛)。結局、戦時下の世相に埋没しつつ不毛の生活を重ね、疲労を蓄積してゆくほかにはなかつた。そして敗戦を迎えたのである。

4

伊東が『哀歌』の自己を脱却して調和的な心境、「心気の鈍り」に到達しようとする努力は、「茫漠・脱落」という自己放棄、思考の放棄の努力であり、それは自然への傾斜没入が相関的に一体となつて行われる。その際戦争は、伊東が求めていた自己放棄を一挙に可能にし、伊東はそれによって自己の脱皮するのである。伊東にとつて開戦の報は自己の解放を意味したのである。また自然への没入融合は容易になり飛躍的決定的になる。そして自然への没入融合とそれのもたらす快感は、自己放棄によるものであるという点で、伊東にかれの戦争に対する忠誠、「草莽に隠れた臣」の微衷を感ぜしめるのである。自己を空しうしてその中に没入できる、またその中に没入することによっておのれを空しくできるところとして、伊東にとつて自然と戦争はいわば一体のようなものになる。そのため

に、敗戦を知った直後、敗戦に呆然自失すると同時に、自然がなお健在であることに呆然自失せざるを得ないのである。

十五日陛下の御放送を拝した直後。

太陽の光は少しもかはらず、透明に強く田と畑の面と木々とを照し、白い雲は静かに浮び、家々からは炊煙がのぼつてゐる。それなのに、戦は敗れたのだ。何の異変も自然におこらないのが信ぜられない。(二〇・八・三二)

自己放棄、思考の放棄、自然への没入は、伊東の壮年期に平行していた。その間、伊東は解放感をもって迎えたけれども、戦争は自己放棄をつねにきびしさを加えつつ強制していた。やがて伊東から自然を奪い、「茫漠・脱落」だけしか残っていない伊東の内外両面を蹂躪し、荒廃せしめていたのである。そして戦争の強制力が消滅した時は伊東の壮年期のほぼ終わった時である。だれもが多少なりとも調和的な気持になり、「心気の鈍り」に達する年齢である。それを伊東は自ら求めて努力し、同時に戦争に強制されてすでに身につけていた。ということは、敗戦を迎えて、伊東が、かつて放棄した自己を取りもどして立ち直るのは疲労のみならず年齢の上からも容易でないことを思わせ、あるいは不可能に近いのではないかと予感させるのである。

二十年末から二十一年初頭にかけて、伊東は長崎移住とそこでの小説の執筆をもくろんで自己の文学的な恢復をはかろうとしているがそれは実現されない。そして「何もかも転機で、ちよつとやそつとでは立直れないのでせうと観念」(二七七 二二・二三四 斎田昭吉宛)

せざるを得なかった。結局大阪近郊の農村に住居を得、すでに引いたように六月の末に「ふいに書きたい心持がおこり」「ある痛切な思ひ」に駆られて、八月四日までに「夏の終り」等六篇の詩が書かれることになる。

伊東は、これらの作品が田園風物詩になってしまったことに不満を抱くが、そのことは今後の伊東を考えるための足がかりになりそうである。第一に、戦後の最初の作である一群が田園風物詩になったことはほとんど当然というほかはない。田園風物詩はすでに『春のいそぎ』で身につけたところであり、その後の詩作の中断のため、伊東には新しい詩境、詩風を開拓する機会もなかった。手なれた詩風が継続するのはまず当然であろう。その上、昨二十年七月十日の罹災以来の疲れた心身は、ようやく田舎に住居を得て「安楽な気持で一年ぶりに自由な生活が出来喜んでゐるところ」(二七八 二一・五三三 酒井ゆり子宛)であり、伊東の置かれた環境からみても田園風物詩になったのは当然であろう。あるいは、長崎移住を考えた時に冗談のようにもしている「それとも、あまり故郷でのんびりすぎで文学も昔の夢といふ風になつてしまふ恐れなきにしもあらずです」(二七三 二二・一一・三三 亀山太一宛)といったようなことにならず、田園風物詩ができただけでもよしとしなければならぬとも言える。戦後の生活の苦しさから「文学も昔の夢」になつてしまふ危険もあつたはずである。

自然への傾斜没入が自分にとってどのような意味があつたか、何をもちらしたか、それが自分をむしばむ毒素であつたことを伊東は

敗戦によって痛感せざるを得なかったであろう。(伝えられる戦後の伊東の怒りの言動は、戦争中の自分の姿勢に対する忿懣に発しているとも思われる。)伊東の「ふいに書きたい心持」、その時の「ある痛切な思ひ」という、敗戦から立ち直り、詩人としての自己を恢復しようとする欲求、喪われた自己に対する痛恨に衝かれて詩作に向った時、伊東が求めていたのは当然田園風物詩以外のものではある。そして喪われた自己の恢復をきびしく求めるなら、それは『春のいそぎ』『夏花』以前の発想と詩境、「茫漠・脱落」以前までさかのぼらねばならないはずである。にもかかわらず今また『春のいそぎ』のほぼ延長線上にあるような田園風物詩ができてしまったことは、マンネリズムに対する不満というより、自分の内部に喰いこんだ毒素の深さ、したがって自己恢復の困難を伊東に思わせずにはおかないであろう。そして『春のいそぎ』と同じような詩風をくり返し、それによる同じような詩的生命の退潮の予感もかすめなかつたであろうか。「憐れに小さい詩ばかり」には単に自作のできばえに対する不満以上に、再起第一歩の自己に対する伊東の失望、挫折感を思わないわけにはゆかないのである。

(注)小高根二郎『詩人、その生涯と運命』七七〇ページ

伊東のこのような志向はまことに当然であり、そのひたむきさは雄々しいものさえ感じられる。しかし、その実現は客観的には恐らくは無理であり困難であろう。一たん放棄され喪われた自己は容

易には恢復されないであろうし、まず何よりも伊東の壮年期が終ろうとしているのである。とすれば、今後の詩作は多く「田園風物詩」にならざるを得ないということにもなるかもしれない。その際、伊東が「路上」特に「都会の慰め」に自信をもちこの方向にみずから非常な抱負を感じていたことが思い合わされる。しかし、遭されたわずかな作品からうかがわれる限りでは、それは大へんおもしろいし、何となく市井人としての伊東の素顔も感じられそうである。しかしかれの田園風物詩とどれだけの違いがあるか、しよせんそれは田園風物詩に対する都会風物詩に過ぎないのではないかと思われる。また、伊東自らやがては市井に没入し、そこに詩的快感を抱いて安んじるのではないかと懸念されるのである。

伊東の志向が多分に無理であり困難であること、何としても自分の壮年期が終ってしまったということを伊東はやがて自認し、それを次のようにいわばまとめている。

私は最近の自分の作を、初期のもの「解説」といふ風に考へてをります。しかし昔に帰ることは、到底無理なやうに思われます。あの頃のやうな、意識の暗黒部との必死な格闘は、すっかり炎を消して平明な思索に移らうとしてゐるやうに自分では考へてをります。(三一・二三・二・一三 桑原武夫宛)

そしてここまで自分を見極めていた時、他方ではやはり詩作はとだえはじめていたのである。

横光利一の思考と現実

— 新感覚派時代にみる可能性 —

佐藤 昭夫

1

戦後文学の風土にあつて、長い間横光文学に対する評価は低く、誹謗と拒絶と無視との部厚い障壁によつて囲繞された感さえあつた。戦前△新感覚派の驍将▽△文学の神祿▽と名指され偶像化された賞讃を光背に、作家的名声をほしのままにした横光にとつて、戦後の冷遇の数々は避け難い代償であつたのかもしれない。そこでは新奇な現象のみを追尋し、表現上の実験への没入や形式偏重の歪んだ思考が結果させる文学的実体の不毛性を衝き、あるいは時流への浮薄な迎合がもたらした作家主体の荒廢の悲劇が指摘されるならわしにある。たしかに横光には、文学的生命にかかわる極めて本質的な部分に、それが時流への迎合や形式偏重に由来するかどうかはともかく、或る致命的な脆弱さを包懐している事実は否定できぬところであろう。率直にいつて、以下、横光再評価の一文を記そうとす

る私としても、彼の文学的営為の全幅を評価の対象に据えるつもりはない。ここに、△新感覚派時代にみる可能性▽と副題したのはむしろ紙幅の関係にもよるが、評価の対象がおおむね横光のいわゆる△新感覚派時代▽の諸作が含みもつた或る可能性に對してであり、彼の作家的行程の出発点にほど近い一時期を中心にしたとの意図からである。それも言われるような横光の「作家的野望」にかかわる積極的な一面ではなく、たとえば「彼ほど徹底的に受身な作家は「居ない」(中島健蔵『現代作家』昭和一六)との判断にもとづいたうえで指摘されうる或る可能性についてである。いかえれば、誹謗と拒絶の応接をもちらした横光文学の負質、その強度の觀念性やイロジスムや混迷をほぼそのまま承認しつつ、そこに含み込まれたものを評価する一つの視座を提示したいというのが、本稿に寄せる私の目論見なのである。

ところで、横光の広汎な影響力はほぼ△表現上▽のものであつた

し、いわゆる「新感覺的表現」Vに対する追究は各方面から行われて成果をあげ、現在ほとんど難解の驕りを残してはいない。その感覺的な手法の内実——大胆な擬人法や思い切った隱喩、生硬な語彙や歐文脈にならった文体、断片的な感覺と非連続な觀念の飛躍、相對的な認識法と力学的な表象等々は、横光自ら言うところの「自然の外相を剝奪し、物自体に躍り込む主觀の直感的觸発物」(「新感覺論」大正二二)として、ほぼ字義通りのものであることが確認されているといえる。しかしながら横光「一個の人間精神」とその思想的な実体は今日必ずしも明るみに出されているとはいえず、従つて十全な評價の條件が準備されたとはいいきれないのではあるまいか。再評價のための試みがなされつつ、依然としてそれは難解の驕りを拭かれてはいないように思われる。では精神的思想的構造が曖昧さの中に置かれているのは何故であろうか。その原因の由来するところは相當に複雑なものと想像されるが、ここでは二つの面を通してごくおおまかに触れておきたい。一つは、戦前の讃辭を支える評價の内実を、横光文学の具体像にそくして捉えかえすことが困難であること。二つに、傳統的リアリズムに定位された文学觀のもつ限界という点である。

はじめに述べたように、横光に対する戦後の評價は底流としてきわめて低く、それは戦前の誇大な賞讃に対応するとみられるが、それでは戦前の評價はどのような横光像を踏まえたものであったのだろうか。新感覺派と横光との邂逅に大きな衝撃を受けた当時の若い世代の証言は、数多く残されている。高見順、伊藤整、舟橋聖一な

どは、それぞれ熱っぽく印象を綴っている。しかし多くの場合感銘の事実が語られるだけで、それを横光の文学や人間精神との厳密な相關のうちに捉えた者はほとんど見当らない。前掲の人々以外も、それを、「奇妙なこと、おかしなこと」として韜晦させているのが通例のようである。

こうして、当時の若い世代に訴えた横光文学の斬新な魅力の実体をありのままに再現し、把握することは困難であるようだ。だが次の二つのことは確認されよう。かりに多くの錯誤を含んでいたとしても、戦前の横光に対する讃辭は少なくも多くの青年の偽らざる感動を証言としているという事実。またその感動が、A表現Vを職業とする作家をもつてしてもあらわに語り出すことの困難なような特異な性格をもち、その特異さは人間精神の深みにかかわるものには違いないということである。そして後者に関して敷衍すれば、新感覺派時代とその前後の時期にまたがる横光文学には、既成リアリズムの文学概念や近代的な理性的な分析方法による合理化には堪えない、一種根源的なカオスを内包しているという予見を可能にするであろう。横光の「一個の人間精神」としての難解さは、まずこうした根源的な部分に由来するのではなからうか。

次にこれと関連するが、評價の基軸をめぐる文学上の視点の問題である。たとえば自作を解説した一文で横光はこう記している。

私は一番最初は詩を書いた。次には戯曲を書いた。次には象徴的な小説を書き出した。その次には写實的に高める工夫をやつてみた。それから再び象徴へ舞ひ戻つた。此の頃が私の新感

覺派時代である。その次には再び写実へ戻ってきた……

(「ま」長さを「昭和四・二」)

散文がまず「象徴的な小説」として書き出され、新感覺派時代にそこへ再び「舞ひ戻つた」と記されている点は重要である。横光はまた他の文章で「一番はじめに書いたのは「蠅」である」とも書いている。これに対して平野謙は「写実」的作品が先行すべきであるとして疑義を表明している。だが作者の言は、「象徴」をどう捉えるかにもよるが、おおむね事実を指していると考えてよい。むしろ今日見る「蠅」は推敲を重ねたものと考えられ、「一番はじめ」の形とは異なつていよう。しかしその「象徴」的性格に関しては、ほとんど疑う余地はないものと思われる。それが反写実、非リアリズムの方向を示していることはいうまでもなからう。まずその点を確認しておきたい。だがかりにそうした事実が前提されていたとしても伝統的なリアリズムの座標の支配圏を出ない限り、横光文学は結局その晦渋な本質を語り出すことはいまといふ、もう一つの事情を指摘したいと考える。横光文学にアプローチするためには、「写実」が「象徴」に必ずや先行すべき表現形式だとみなす論理はむしろのこと、そうした仮説をいわば先験的に合理的だと判断する文學觀そのものを超脱した或る視座を獲得することが、前提的な要件と思われるのである。あるいは、横光文學の評価は、そうした視座を得るための試みそのものだと言つた方が適切かもしれない。こうした視座の問題が根本から問われぬところに、あるいはそれが不充分なところに、横光の精神を奇妙な難解さのままに置き、賞讃と貶

称を不思議な断絶のうちに許してきた第二の原因があつたと思われる。

2

それでは横光が「蠅」とその周辺の作品において実現した「象徴」とは、どのような思考と方法を指すのであろうか。この作品によつて象徴された世界はいかなる様相を示しているか。その撓められデフォルメされた世界と等価に見合う人間状況は、どのようなものであろうか。そしてこれらは全体として、どのような文學的思想的な問題を指向していると見られるだろうか。

「蠅」は大正十二年五月号の『文芸春秋』に発表され、同月『新小説』掲載の「日輪」と共に、横光の文壇登場を実現した記念すべき作品である。四百字詰原稿用紙十五枚足らずの小品であるが、一十のきわめて短かい部分から構成されている点、まず形式上の大きな特色といえる。そして小さく区分けされた叙述を単位にしてさらに構成的手法を媒介させ、最終的に結像される全体的なイメージの内部に、作品の主題が提示される仕組みを持つ。この数字を付した部分を積み重ねる構成的な手法は、この時期の作品に広く応用されており、「日輪」や「御身」はその代表的なものである。構成的手法は作品の象徴性を生み出す一つの要素とみられるが、横光の「象徴」は、それだけで説明できるほど単純なものではない。またこうした形式からみる限りでは、少しも横光の独自さを説明することに不十分な。芥川龍之介を筆頭に先蹤作品は数多くある。

横光の方法的な独自さはむしろ、「日輪」や「蠅」の構成的手法と「御身」のそれとの落差を測ることによって明らかとなろう。「御身」はほぼ伝統に準拠した写実を基幹としているとみてよいが、それは姪に対する主人公の愛着を経とし、姪の無関心を緯として、家族的な愛が主題となり、おおむね日本人の平均的な日常生活が描写されている。それは生まれ育った環境への無意識の依存と、社会的心理的秩序への全信的な信頼を暗黙のうちに含みこんでいる。したがって各小部分もストーリーの展開のうちに位置づけられ、それぞれが主題と直接関わり、主題の一部分を成している。もちろん各部分に主人公が登場する。だから付された数字は、文字として表現されないだけで、実は作品の必然性において当然経過したはずの時間の推移を表示するにとどまり、それ以上の格別の意味を担ってはいない。これに較べて、象徴性を基幹とする「蠅」の構成的方法や小部分の性格は、著るしい相違を示している。主題は結末の一部分をまっつてはじめて全貌を明らかにされ、その間主題の本質を直接表示するものはほとんど何もない。十五枚足らずの小品に次々と多数の人物が登場し、さらに蠅と馬が登場する。しかも人物達は彼らの心を占めている人間的な関心によって意味づけられているのではない。自然の法則と日常生活のおのずからなる秩序のもとに生活する存在であることが彼らの役割である。要するに、生きた人間であることだけが、彼らに要求されている唯一の資格なのである。彼らがいかに人を愛し、金を愛し、人を恐れ、金に弄ばれるかといった、個々の人生内容は一切問題にならない。死にかかっている息子はどうか

のか、駆け落ちはうまく成功するかといった物語的興味は、全て無意味である。つまり作者が問題にしているのは、人物達の生の条件、存在そのものの運命であり、存在を満たす人生の運命ではない。だから、登場人物は、生きた人間を感覚させる者でありさえすればどんな類型でもよかつたのである。出来事は人間の住みうる地上であれば、どこでもさしつかえはなかつたはずである。たしかにこのような文学的状况は、伝統のリアリズムの文脈を遠く離れた特異な世界を表出しているといえよう。そしてこのことは、作品に関わる作者の位置が、人間と人生に内在する場所ではなく、いわば外在的な位置に立っていることを意味するのである。そこで問題になるのは、人間以外の登場生物であるところの馬と蠅である。が馬は馬車馬であり、人間生活の道具であるから、人物達から独立した馬そのものの位置にはいない。そこで残された蠅が問題となる。蠅は蠅自体として捉えられている。蠅は人間生活に有害なヴェイルスを撒き散らす不潔な存在として登場するのではなく、したがって人間との道具的連関や効用性からは完全に断ち切られた位置にある。蠅は時と次第によつては、人間存在そのものの運命を高所から傍観できる、蠅というもう一つの自律した存在性を与えられているのである。少なくとも生の条件において、両者はパラレルな関係にあり、何一つ特権らしいものを人間は与えられていない。そして人物に対する作者の位置は蠅そのものというより、蠅をもさらに突きぬけた或る超越的な場所に置かれていよう。そこにこの作品の根本的な抽象性がある。だからこの小説の主人公は登場人物ではなく、

登場生物である蠅とみるのが至当である。あえて特異な作品といへば、その特異な位置關係をここまで明快に設定しえた「蠅」は、たしかに完成された作品といふことができる。こうした「蠅」の表示する世界像は、既成のリアリズムによつては掬いきれぬ異質な風景といえようが、それではその特異な世界像を支えるリアリティは、どこに求められるのであろうか。いうまでもなくそれは「蠅」の文体を描いて他にはない。

真夏の宿場は空虚であつた。ただ眼の大きな一疋の蠅だけは、薄暗い厩の隅の蜘蛛の網にひつかかると、後肢で網を跳ねつつ暫くぶらぶらと揺れてゐた。と、豆のやうにぼたりと落ちた。さうして、馬糞の重みに斜めに突き立つてゐる藁の端から、裸体にされた馬の背中まで這ひ上つた。

これは書き出しの部分であるが、冒頭の一行、「真夏の宿場は空虚であつた」という叙述のもたらす効果は大きい。これをエネルギーの状態としてみると、まず「真夏」の語によつて、充溢の最高潮にある自然の巨大なエネルギーが呼び出される。そしてその充溢は、「空虚であつた」の述部によつて一気に実体性をうばわれ、相対化されて、非在のリアリティへと変質を余儀なくされる。しかもそれがあつてどない原野の真夏ではなく、「宿場」のものであることによつて、この効果はいつそう強められ、確実にされている。「宿場」は人間集団の賑わいを示し、人間の熱気によつて満された場所であり、それが「真夏の宿場」として自然のエネルギーと溶合されることで、この上もなく生命感の横溢した状態をイメージさせる。ところ

がその巨大な熱量が、「空虚であつた」の断定された抽象語によつて、世界から一気に剝離してしまふのであり、その実在感の瞬間的な抹消が、あの非在のリアリティを、拒みがたい鞏固で読者の心に呼びこんでしまふといえよう。そして重要なのは、先に見たような人間を超出してしまつた作者の位置もまた、それを自然的現実からみるなら、この種の非在を指していると考えられる点である。

さて「蠅」の文体が開示するものとして、さらに幾つかの重要なフアクターが確認できるが、もう一つ本質的と思われる点を記しておきたい。それは引用に現われた蠅の描写法が象徴するところの独自の観念上の作用である。まず蠅の登場の仕方にも留意したい。冒頭の一文を、先とは角度をかえて空間的に眺めると、「宿場」によつてかなり広範囲な人家の集密地区を指示し、さらに「空虚」なる語の効果によつて、その広さは焦点を奪われて抽象的な次元に移され、心理的に捉えどころのない空漠とした空間に造りかえられる。そしてこうした内部感覚の曖昧な開放とは対照的に、家や往還の輪郭だけが自然の明度をこえた明るさで印象される。つまり「宿場」の具体から「空虚」の抽象への転移は、「宿場」でさえ集合的な表現であるのに、それをさらに心理的に拡張する効果をもつといえよう。一匹の蠅はその心理的に拡張された空間の中に登場するのである。ではこの一センチメートルほどの存在は、その対照の効果によつてミリメートル以下の存在に矮小化されるかというところではない。抽象的に広げられた空間に登場する蠅は、相対的に、実質以上の実体性を賦与されてしまふ。この濃密化された存在感との等価

関係において、蠅をこれまた実在をはるかに超えた、空漠とした空間いっぱい大きさに広げるといふ心理効果を生み出し、そこに蠅は誇張された姿で不動のリアリティを体現するといえよう。それは映画の突然のクローズアップが生み出す効果に似ている。こうした人工的に拡張された空間の稀薄さと、人工的に濃縮された誇大ナリアリティと——この演出された表現の効果は、宿場と蠅との現実の関係を根本から相対化する視点の介在を物語るものであり、また蠅の体現した誇大ナリアリティは、自然の実在——現実——に対する作者のアイロニカルな認識の媒介を物語るものであろう。だからこの作品に諷刺を読むとすれば、それは世界認識の根源にかかわる部分に向けられたものといわねばなるまい。ところで、クローズアップといったが、「蠅」の小部分を素材とする構成的手法は、映画のモンターージュに喩えられることが多い。表面的には連関性の薄い素材を組み合わせることによって、現象の背後にある抽象的な真実を表現しようとするこの方法は、カメラのもつ写実の正確な機能を思想化する重要な手法である。そして二十世紀文学が映画の影響を大きく受けていることはいままでもない。しかし「蠅」の象徴的発想の原型が、大正六・七年頃まで遡れる以上、横光が映画の手法をここまで本質的に小説に適用したという見方は、説得力をもたぬといえよう。それは横光の場合、より体質的な所産であり、横光の精神と、精神が向き合った現実の構造それ自体に胚胎するものとみるべきであらう。だから蠅のクローズアップの効果も、彼の内部的状況との対応関係において見るのが妥当であらう。

さて、拡大された空間との対照関係というより、その相對關係によって、視界の中心に踊り出た「眼の大きな一疋の蠅」が、作品全体の中で占める決定的な位置については、先にもふれたが、ここに典型的に現われた、実在を歪め不当に誇張する傾向は、横光の「象徴」の重要な一面を形造っているといえる。これを一口に、横光一流の「誇大志向V」としておこう。そしてこれが、「蠅」を支配する様々な觀念を形造る中心の機能を果たしている。蠅についてはすでに見た通りであるが、登場無生物の「饅頭」の位置もこの誇張傾向の結果されたものであり、その「誇大志向V」によって、蠅におとらぬ重要な役割を担っている。独自の無聊をかこっているらしい馭者は、その日蒸しあがる饅頭に初手をつける習慣を潔癖に守ることによって、じつは饅頭に支配されているという奇妙な関係のうちに落ちこんでいる。「潔癖」という人間的な美質が、その発動の対象を生きた人間や自然ではなく、あまりに局部的な無意味な物質に置いているため、こうした非人間的な状況を現出させてしまうのである。そこにこの作品のユーモアがあり、諷刺の一面があるが、潔癖が潔癖や無垢という人間的な美質を裏切つて人間自体に迫る時、極めて深刻な悲劇を形造る。「機械」や「ナポレオンと田虫」もこの延長線上にある。馭者の場合も、蒸したての饅頭がもたらした満腹感と美味の快感のため睡魔に襲われ、ために馬の誘導を怠り、転落という悲劇に到っている。比喩すれば、物質的生産關係が人間の意識を決定するというのがマルクスのテーゼであるが、ここでは即物的物質が意識を決定するというテーゼが、馭者の情念と行動の支配原

理となつてゐる。いや馭者一人にはとどまらない。崖下への転落が登場人物全てを殺したとすれば、餓頭なる物質は、そのまま人物達の運命の謂とならう。それが拡大されれば、物質状態の運命的推移を描くことが、そのまま人間の運命の描破につながるという視点も生まれてくる。「静かなる羅列」は、こうしたモチーフによつて書かれた完成品である。

このような独得な誇大志向は、横光の思考を貫く最も根本的な特色とみることが出来る。彼の全ての作品にこの誇大志向の証跡を読むことはたやすい。そして繰り返し指弾される横光の強度の八観念癖^Vも、部分を、しかも多く即物的な一部分を捉らえ、連想観念の恣な飛躍を通して、全体と本質とを直覚しえたとする思考傾向に対して言われる場合が多い。つまり部分は全体によつて位置づけられる要素ではなく、全体と本質を象徴し、時にはそれを支配する役割を担うのである。横光文学に特徴的な「外面」志向もこの「象徴的傾向」と別のもではなく、「頭ならびに腹」「芋と指環」「ナポレオンと田虫」などは、その外面志向をあらわに示した作品である。そして局部的な存在の認識から、いきなり、抽象的な真理や本質、普遍的規準や範疇定立に到達しようとする性急な観念的操作は、理性的作用とみられぬことはない。感性に対する「悟性の反逆」といわれる一面はたしかにある。しかし実在を歪めてあるがままの真实性をそこない、あるいは人間と物質との適切な対応関係を見失うという経過を含みやすい横光的認識に対して、正統的な理性的作用と見做し、「知性の作家」と命名することはおそらく誤つていよう。

同じく「悟性の反逆」という捉え方も適當ではない。横光の認識の論理は、むしろ情念を主体とした感覚の論理といふべきであつて、横光のそれを「パトロギー」⁽⁵⁾と名づけた三木清の指摘は正しいと考えられる。だが、これまでの叙述にも明らかなように、新感覚派時代の横光は、決して伝統につながる抒情の作家ではない。抒情を深く蔵しつつ、極端なまでにその流露を禁じた認識の作家といふべきであるが、人間の認識が合理的理性を主体とするにしても、それが何に対して合理的かという価値的対象の明証性が失われている混迷の場では、理性は本来の機能を生きたることはできない。そして、時として実在を不当に歪め、人間と物質との適正な対応を見誤る横光の認識上の錯誤は、じつはそのまま価値的明証性の失われた現実のアニミイに固く結ばれていたのである。

横光は「蠅」を解説して次のように言う。

「蠅」は最初諷刺のつもりで書いたのですが、真夏の炎天の下で今までの人間の集合体の饒舌がびたりと急に沈黙し、それに変はつて遽に一疋の蠅が生々と新鮮に活動し出す、と云ふ状態が諷刺を突破したある不思議な感覚を放射し始め、その感覚をもし完全に表現することが出来たなら、ただ単にその一つの感覚の中からのみにても生活と運命とを象徴した哲学が湧き出るに相違ないと己惚れたのです。

〔新潮〕「最も感謝した批評」大正二・三・一

文章は的確に「蠅」の内実を捉えており、また末尾にはこの作品に托したモチーフの重要な指摘がある。文中の「諷刺を突破したあ

る不思議な感覚」とは、先に記したようなユーフェイズムの媒介によって、蠅が濃密なリアリティを体現し、人間存在と等価な、あるいはそれを凌駕するまでに自律した存在性を与えられている状況を指すとみてよいであろう。そして見逃せないのは、こうした蠅を完璧に造型したことによって、作者自身の内部に、蠅の「眼」と等価的に同調した或る世界認識の視点が、必然的に包蔵されてしまったということである。「蠅」の文学的達成は、あの奇妙に拡大された一疋の蠅に対して、ぬきさしならないリアリティを与えることに成功した点にあるといつてよいが、その結果、達成の過程で作者の横光自身、人間のままだに人間を超出するというA変身Vの劇を不可避に経験したといえるのではあるまいか。それは中島敦の「山月記」における比喩的な変身のドラマよりも、カフカの「変身」に近い存在劇につながる根源的な性格のもの、少なくともそうした可能性を示すものと私には思われる。その可能性はA現代Vというあらわな状況を生きる人間の「生活と運命とを象徴した哲学が湧き出るに相違ない」という、横光自身の予見のうちに、すでに胚胎しているのではあるまいか。これを先走っていえば、横光一流の誇大志向や観念癖、外面志向やイロジズム——総じて横光文学の負質は、リアリズムを支える近代の合理主義とは明らかに異質な、現代の非合理主義に傾斜するような或る認識上のドラマを包懐していたということである。事実横光文学は、そうした非合理的な風景に満ちている。「哲学」とは、そうした転移が人間の根源的な部分の変容につながることを示唆していると考えられる。そして転移の具体的な意味は、「蠅」

の象徴的手法によって象徴されたところの横光の現実的な世界の様相を知ることによって明確なものとなる。当然それは彼の全ての作品に読みとられるはずであるが、手続きを単純にし理解を的確にするために、伝統的リアリズムを基幹とする作品を通して、リアリズムの崩壊過程に対応させながら観ていくことがより適切であろう。

3

この種の作品として私の意図する資格を十分に備えたものは「悲しみの代価」である。この作品は遺稿として、昭和三十年に川端康成の手ではじめて公にされたが、そこには習作期の横光の内面のドラマがあらわに描かれ、赤裸々な苦悩が観取される。「蠅」との関係でいえば、作者は登場人物の位置にあり、蠅の超出的な位置と合体するような作者の内面の抽象化は行われていない。ところで「悲しみの代価」に関しては、すでに拙稿(『成城文芸』21号)がある。

以下、旧稿をなぞりながら、この作品が内包する作者の現実の様相を眺めてみよう。主題は妻の「不貞」を恐れ、恐れたゆえに妻の不信を買ひ、その結果、現実には不倫を招いてしまった男の悲劇である。では問題の発端をなした妻の不貞に対する恐れは、どこから生まれたのであろうか。また木谷の愛と現実との観念はどんな内実を示しているのであろうか。彼は、愛はいわば絶対のものであり、唯一人の異性に向けられるべきものであつて、愛の純潔さは二人の深い同化とその半永久的な持続によって測られると考えるのである。

その頃精神的の苦悶は勿論肉体の苦痛も、夫妻は同様に共感しなくてはならないと云ふ思想から、よく辰子を膝の上へ乗せ乍ら、自分と自分の顎を抓つてみて、「お前の顎が痛かないか。」と妻に訊ねた。「痛かない。」と妻が答へると「まだ駄目だ。」と言つて彼は妻を膝から下した。

これは木谷の愛に対する観念を端的に示す叙述であるが、木谷の愛は生きた感情の肉性を突き抜けた純化を要求しており、彼の純粹と無垢とはほとんど滑稽化されている。これに類する純化への欲求は、思春期から青年期に一般的に認められる心理傾向であるが、木谷の場合、こうした傾向は生活の全局面を支配するまで徹底されており、彼の人間性の極点を形造つていとさえいえる。これは先にみた横光の特色ある人誇大志向Vが、観念に向けられた一つの例証と認められるであろう。そして右の引用の限りでは、一口に木谷の若さといつてしまうこともできる。しかしここまで純化された愛を要求される妻の立場は、むしろ悲劇的といわねばなるまい。いや、その悲劇は木谷自身のうちに典型的に現われている。彼のあまりに純粹な観念は、妻の生きた存在と日々の実生活によつてみごとに裏切られるほかはなく、現実とは容赦なくこれをひきちぎり蹂躪して、木谷を苦しめる。

俺は辰子を愛してゐた。愛が強くなればなる程、俺は辰子の心の対照を全部俺自身に向けねばをれなくなつた。が、それは結局無駄であつた。辰子の心は絶えず半分は俺に向けられてゐた。が、後の半分は俺や辰子が絶えず接する俺の多くの友達に

向けられてゐた。……俺はそれを常に感じ、それに応ずることを悦んでゐる辰子を常に見て来た俺は、苦痛のためにだんだん俺の知人から放れてゐつた。俺の社会を造つてゐる者は結局俺の知人である。その知人から一人放れた俺は俺の社会から滅びたのも同じなわけだ。

彼の純潔な観念は現実には独占欲として妻の上に向けられているが、主人公を牽きつけた妻の女性的魅力は、当然他の男達にも作用するところから、独占欲は実生活で満されていても観念的に満たされることはない。つまり妻の不貞に対する恐れは、妻の側に原因があるというより、木谷のこうした観念的な営為が生み出す矛盾のうちにあるのである。またこうした木谷の観念は、知性の所産というより、明らかに情念の表象である。もう一つ右の引用で重要なのは、木谷の「社会」についての観念である。ここでは家庭と第三者である知人の住む社会とは同じ次元で捉えられており、第三者は彼の思考の中で無媒介に家庭のうちにすべりこむ。そして個人の愛と幸福の条件として第三者を不可避に含みこむこうした認識は、極度に分業化した社会構造、テクノロジーの普及とマスコミの発達した現代社会における個人の状況に酷似しているといえなくはない。だが現代に特徴的なマイホーム主義のエゴイズムさえ、この認識のうちでは無効である。木谷の「社会」観念は、それほど時代を先取りしてゐたといえるのであろうか。もちろんこうした認識は「寝園」や「機械」の基本的な人間関係を規定しており、横光の現代作家としての積極的な一面とみなされてよい重要な契機をなしている。が

「悲しみの代価」や初期作品の中における家庭と社会との奇妙な均質化は、伝統的な八家Vの観念の崩壊と、そこに遠因した作者の強度の観念性を物語るものというべく、あの八誇大志向Vが、その危機的認識において発露したものとみなすべきであろう。

こうして共に純化された愛と社会、もしくは現実の観念は、現実の結構を突き破って誇張されて背馳する結果を招き、またその背理のために相対化されて、奇妙な均質状態を示すに到っている。これは木谷の愛と友情の古典的なモラルが、自らを捉えた現実の人間関係に、秩序立った価値規準としてすでに作用する力を失っている事実を物語るであろう。つまり、伝統的古典的モラリズム自体の崩壊であり、同時に崩壊した現実の出現を示すものである。さらにこのことは単にモラルの領域にとどまるものではない。特定のモラルを必然づけ、その現実的効用を保証していた既成の心的秩序や社会通念、認識上の慣習といった、現実世界の合理的結構を支える精神上的の基軸のすべてが、共に壊滅の危機に臨んでいることを意味するのである。そしてそうした既成秩序のアーキーな解体の様相を徹底した形で表現しえたのは、木谷が、また作者が無垢な人間だからであり、その理念が純潔なものだったからであろう。こうして木谷の内なる倫理観念は、彼の直面する現実のどの部分を掬い上げるにも少さすぎて無効であり、またいかなるエゴイズムの混入も許さぬその純潔なモラルは、絶えず他人のモラルの許容を迫るために自己の価値を形造ることを妨げる。いわば彼の純潔と無垢とは、現実と比べて大きすぎたのである。彼は自己の存在の大きさと重さに見合

う現実を捉えることができず、外界と自己との調和点を見出すことができない。彼は自らを人格的統一の相において完成することを拒まれており、向き合う現実が実体としての確かな輪郭を結ぶことがない。あくなき逡巡の苦悩に落ちこんだ木谷は、自分を「最後に死を宣告されて床の上に横つてゐる者」と感じ、自分の望むものは、穢れた「自分とは全くかけ放れて」いる「空や、星や、森の美しさ」であると考える。だが、彼のヒューマニティが最終的に身を寄せようとする自然は、次のような受け入れ方しか用意してはいなかった。

彼は森と、親しくなるためにマッチを、擦つて煙草に火を点けて、腰を下ろして柔いだ気持ちで森の中を見廻した。すると、森の顔は初めて柔和になり、また彼は静な落ちついた気持ちになつた。

彼は「森と親しくなる」ことをまず自らに課し、次にその目的に従つて自然に働きかけたことで、ようやく望むところの「落ちついた気持」にめぐり合うことができたのである。この作為に満ちた邂逅は、実は自然と彼とが深い部分で断絶していることを示すものであり、自然は要するに苦悩の果ての望みを夢みる自由を奪われ程度に、無関心なだけであつたというべきであろう。そして木谷は無色の断絶を前にして、自らの求めに従つて勝手な着色を施したにすぎない。自然はそこでは、確かな実在として存在してはおらず、美的な対象でさえなく、彼の恣意のままに、いかようにも変色し変質する奇妙にふやけた存在と化している。彼にとつて一切は、要するに

主観のうちにか存在しないのである。いわゆる「新感覺派的表現」が、外界を非連続に、自由自在にかすめとる切れ味の良さをみせ、一時期周囲を眩目させたのは、それが横光にとって、すでに主観に内在化した風景だったからである。「花園の思想」はこの種の表現の最も良質な部分を形造っている。また、たとえば「旅愁」に描かれたチロルの氷河の描写や、「寝園」の冒頭を飾る「山の避暑地」のよく知られた光景など、現実のそれと似ても似つかぬものであったとしても、少しも奇とするに足りないのである。横光の文学では、現実が現実としてありのままの様態で姿をみせたことは、一度もなかったといつてよい。こうした内在化、主観化は、しかし自然と外界にのみ限られたものではない。木谷が全てを傾けて愛する妻でさえ例外ではない。

妻の不貞な性格をあこれと出来る限り記憶の中から掘り起して無理に妻を不貞な女に仕上げることに努めてみた。すると再び、妻が不愉快な妻になつて来た。

対人圏においても、自ら欲するままに、人は姿を変える。したがって木谷は妻と向き合つていても、また群衆の賑わいの中にあつても、つまりは自分一人の存在感覚しか持たない。そして他者を認識できぬ彼にとつて、自己もまた確実な実体ではありえず、それは存在の深部で奇妙に空々しい皮膜によつて隔てられている。いかえれば、木谷の意識は、自己の存在から疎外されているといえよう。

そして彼が妻を愛し、他者を求めれば求めるほど、この自己隔離と疎外とは深刻さを増し、彼が社会との鞆帯を強く意識するほど、そ

れは自己の存在を容赦なく噛みくだく不可思議な「機械」で化して、彼の孤独だけを研ぎ進めていく。こうした木谷の孤独は、その古典的な倫理観の故に、他者からの孤立さえ許されず、周囲とのぬきざしならない関係の中にはまりこんだまま、ほとんど絶対の相帯びるまでに彼を蝕んでいる。これは先に記したように、木谷のモラルそれ自体の崩壊を意味しているはずなのだが、彼は一向にこれには気づかない。そして自らを鞭打つて、いつそう観念を純化させ、ために現実はよりいっそう稀薄になる。圍繞した世界は意のままに柔軟に姿を変えてとどまるところを知らず、一方孤独と焦燥だけが確実に肥えていく。次に『ダダリスト新吉の詩』の一節を任意に引用してみよう。

DADAは一切を断言し否定する。……

想像に湧く一切のものは実在するのである。……

DADAは一切のものに自我を見る。……

宇宙は石鹼だ。石鹼はズボンだ。

一切は可能だ。……

存在がダダ的なのだ。

凡てのものは穿き替えられ得る。

変化は価値だ。価値はダダリストだ。

(断言はダダリストの一部)

高橋新吉のユニークな詩集が公刊されたのは大正十二年、「蠅」や「日輪」が発表される二ヶ月以前のことであった。そしてこれらの言葉を仮りに木谷が綴つたと想像しても、決して不自然ではない

ように思われる。彼の∧存在∨はまさしく合理的な結構を逸脱して「ダダ的」な自由の中に放り出され、自我は裸形の孤独へと秩序の衣を剥がれてむき出しにされ、また全ての価値は自由に置き替えることのできる非合理の中に置かれる。そこでは「想像に湧く一切のものゝ実在」し、また一切の実在は主観的な想像によって夢見られたものである。あの∧誇大志向∨を支える論理も、このことばから遠いものではない。そして大正末期は、プロレタリア運動などを通して社会的自由が真剣に追求されていたが、こうした近代化への要請の間隙をぬって、いわば存在論的な自由をもてあまして懊悩する不安な自我が発現したということは、何を意味するのであるうか。ここここではそうした歴史的追求は措くほかないが、ともかくも、この時期に現代的危機の内実を直接つなぐる精神状況が現出した事実を認められてよいであろう。こうして、一切が主観の内に存在するほかはないという根源的な自由の不毛さの中に連れ出された木谷は、しばしば思考放棄の衝動にかられる。

とにかく今電車に乗りさへすればよい。次には駅で切符を買ひさへすればよい。それでひだ／＼自分の物は自分の体だけなのだ！

彼はなだれかかる相対化された観念の氾濫に堪えなくなったのである。そこで古典的なモラルを核とする思考の放棄を企て、外界に無条件に身を委ねたのであるが、木谷の渴きを癒すように、世界は鮮烈な実体性を回復してはくれなかった。何故なら彼を捉えた不安や危機が、先に見たような木谷の存在そのものにかかわる本質的な

混乱に由来していたにも拘らず、彼の意識はそれを単に倫理的な不安としてしか理解していなかったからである。木谷は実家に帰り、母に会って、心底からすすがれたような慰安を感じている。これは彼が自分の困憊を倫理的な危機として捉えていることの証左である。他者の倫理の外にある母、つまり自己の分身によって彼は慰められたのであり、一歩外へ出れば同じ危機が待ちうけていることはいうまでもない。こうした不徹底な状態は、木谷がすでに無効となり崩壊したはずの古典的モラルを捨てきれずにいるところから惹起されたものである。いや、作中人物の木谷はそれでよい。問題は作者の横光が、主人公の危機の実相を的確に知りえなかったという事情のうちに求められるであろう。母や故里による慰安をなお残している限り、裸形の外界に身を委ねたことにはならない。外界に完全に所有されるという形によってのみ、自己と外界の実在性を回復する可能性も生まれるはずであるが、その可能性も閉ざされてしまったのである。このことは、たとえば「今日、ママが死んだ。それとも昨日か、僕は知らない。」というカミュの「異邦人」などの母なる人に対する感情と比較すれば納得されよう。ムルソーはアフリカの強烈な太陽と砂漠とに完全に所有されたことによって、自己の実存を正確に我がものとすることができた。しかし横光は、ついにムルソーを創造しえなかったのである。それは小林秀雄を異様に昂奮させた、横光の最も優れた資質であった∧無垢∨を、既成のモラルの枠外に連れ出すことができなかったからと想像される。

こうした不徹底や破綻は横光文学から、芸術的自律性を奪い、致

命的な欠陥を生み出してゐる。それは横光の認識世界が、ニヒリズム——旧世界を支える基軸の崩壊を開示しておりながら、なおその形骸を捨て去ることのできなかつた過渡期の文学であることを物語るのである。彼が真実言われるような「知性の作家」であつたなら、この間の事情を解説しえたかもしれない。倫理の形骸にすぎらなく横光の抒情性は、生活者横光を美しく彩つてゐるが、作家横光の前には大きな障害となつていたといえよう。しかしながら横光文学は、こうした一面の破綻の様相において、現代文学の最も正統的な可能性を示唆していることは、高く評価されてよいであらう。次の文章には今日横光の作家的野望と独善的な自負以外の客観的な事実が読まれることはまずないであらうが、こうした視点からみると、充分の客観性を担つた重要な提言として避けるのではなからうか。

われわれの文学の新しい問題たるべきことこそは、彼らに代つて起るべき充分に文学を問題とした社会主義文学でなければならぬ。かかる社会主義的な文学は、当然、正統な弁証法的発展段階のもとに成長して来た、新感覺派文学の中から起るべき運命を持つてゐる。

（『新潮』「新感覺派とコンニチ」）
（『ニズム文学』昭和三・一）

注

- (1) 『現代の作家』（角川文庫）。
- (2) 保昌正夫『横光利一』に三重中学時代の横光の文章の一部が紹介されているが、そこには早くも新感覺派的表现に再結するような文体が認められる。
- (3) 佐々木基一『新感覺派及びそれ以後』（皇清波・日本文学史講座）にもその指摘がある。
- (4) C・E・マニイ『小説と映画』に詳し。
- (5) 『危機に於ける人間の立場』。

非公開

「惜しみなく愛は奪ふ」と「クララの出家」

— 笹淵博士の再批判に対する反論 —

小坂晋

笹淵氏は再び拙論を詳細に批判している。^(注)氏の再論は筆者には作品の表面を撫でた絞切型のものと思われ、残念ながら教示を受けることができなかつた。ただ、クララの第二夢に登場する闇の中の男がフランシスの父ベルナルドネであるという見解は氏独自のものである。しかし、これも検討してみた結果、筆者には無理と思われる、納得できなかつた。

氏のキリスト主義者としての主体的論及は、氏自身「わたしは『リビドーの宗教への昇華』などという思想を初めから信用していない」と本心を述べ、頭から性心理学を拒否する。これでは性心理学的文学研究に対する批判にならぬと思われる。更に氏は、フランシス、クララの信仰をキリスト教徒の鑑として高く評価するあまり、作家時代の有島独自のフランシス、クララ観を肯んぜず、この作品も熱烈なクリスチャンであつた宗教青年時代の有島の「意識の連続線上に生まれたものである」と断ずる。有島に二律背反があつ

たのは通説であるが、キリスト教を捨て、叛逆することによつて創作活動に入った有島が、キリスト教的立場でフランシス、クララを描いたとは何としても納得し難い。ある場合はキリスト教的作品を、ある場合は反キリスト教的作品を描く分裂的な作家がこの世に存在するであろうか？

有島の全作品は有島という個性でもって統一されており、その個性から生まれた「惜しみなく愛は奪ふ」の思想で貫かれている。本質的に対極をなす二系列の作品はあり得ないと考える。

今度、氏の再論を読み、「惜しみなく愛は奪ふ」の一元的本能生活論が氏に充分理解されていないのではないかと疑問を抱いた。

そして、今一つの誤解の因つてくる根本的原因是、クララの意識と無意識をしばしば混同し、更にフランシス、クララの言行を有島自身のとみなし、登場人物を扱う作品の背後に働く作者の視点を考慮しないことにあるのではないか？

本稿では、水かけ論に終らぬよう、可能な限り原文に密着し、有島自身の創作意図を辿ってみたい。

有島文学は難解であり、クララの出家は最も有島のな作品であるとの評がある。^(注2) この作品を追求することは、難解な有島文学の本質解明にとって意味あることと思う。

(一) 「惜しみなく愛は奪ふ」の作品化

笹淵氏は再論で、「肉親との訣別のため涙をしばらねばならない出家という着想がどういう意味で本能生活の肯定ということになるのか全く理解できない」と述べる。これは「惜しみなく愛は奪ふ」の根本思想である「本能生活」に対する誤解に基く。氏は「本能生活」の本能を性本能の如く誤解している。有島という本能は単なる性本能ではなく、既成の道德や思想・習俗をぶち破って迸る人間の創造的な生命力を指す。そして、その最も純粹な表われとして靈肉一致の恋愛や創作活動をあげている。^(注3) 「クララの出家」において、フランシスは習俗の嘲笑を浴びながら、やむにやまれぬ信仰心に促がされて宗教活動に入る。この一切を願りみぬ内発的な神を求めるフランシスのすさまじいエネルギーを本能と考えているのである。上から与えられた既成の信仰生活は知的生活であるとして、はっきりフランシス、クララの信仰と区別している。従って作中、「アッシジの市民が、僧侶をさへこめて、上から下まで生活している世界だ」と述べて、一般のキリスト教徒を批判している。クララにしては、「生まれ落ちるとから神に献げられていたような不思議な自分

の運命」を感じながら「是れからは一人の主にも心も献げ得る嬉しい境涯が自分を待っているのだ」と思い、いそいそと出家する。

このフランシス、クララの姿には、何等、献身・犠牲・義務・克己といった悲壯感は伴わず、欣然として宗教一筋に赴いている。これは、「基督の生涯の何処に義務があり、犠牲があるのだろうか」「自分の罪に苦しんで、荆棘の中に身をころがして、悶えなやんだ聖者フランシスが、その悔悟の結果が人類にどういう影響を及ぼすだろうか」と考えていたかなどと想像するようなものは、人の心の正しい尊さを露程も味ったことのない憐れな人といわなければならないだろう。^(注4) というキリスト、フランシス観に一致する。笹淵氏は「エゴイズムの愛の起克」をフランシス、クララに認めているが、有島は二人の信仰を完全なる自我充足の行為、すなわち「奪う愛」であるとして描いている。このように典型的な本能生活者とみる有島のフランシス、クララ観は笹淵氏のキリスト教的立場からするフランシス、クララ観とは鋭く対立する。

「クララの出家」における作者の眼目は、クララの二元分裂の悲劇を描くことではなく、宗教的天才少女の「人間的なあまりにも人間的な」やむにやまれぬ本能生活としての信仰を描くにあった。クララが性衝動と信仰の二律背反に悩み、肉親愛にひかれ、おびただしい涙を流す姿はいわば刺身のツマに当り、作品の色彩りを添えるものであって、作者の狙いはクララのフランシスに対する恋愛と信仰のエネルギーの相互交渉の秘儀を描くことにあった。従って、クララの信仰はフランシスに対する恋愛が出发点となっており、クラ

ラの胸にフランシスは最後まで生きている。笹淵氏は有島が恋愛至上作家であったことを忘れている。氏は一元的本能生活の思想を有島が「生活の上に実感化」することができず、「作品化もできなかつた」と断ずる。有島の波多野秋子との心中は実感の域を超え、本能生活論の完結ではなかつたか？

有島に二元分裂があつたのは否定しない。これは恐らく幼少期から青年期へかけての儒教的、キリスト教的素養と有島の体質に深く根ざす作家的原質との矛盾であつたろう。しかし、この二元分裂を一元的本能生活の思想で統一する場が作品ではなかつたか。例えば「宣言」のY子・Bも本能生活（靈肉一致の恋愛）のため習性・知性生活（友情・婚約・世間的義理）を犠牲にして進む本能生活者として描いている。Y子とクララの描写は共通する点が多い。^(注5)

有島の作家的原質はエロスの審美衝動や恋愛至上の資向を持ち、恋愛や性を卑しむ明治的、儒教的思想構造あるいはキリスト教的思想構造とは正反対な面を持つ。有島には恋愛・性・人間の生命力を極めて厳肅・重大なものと考ええるロレンス的な生命主義がある。ために、性・恋愛を賛美したホイットマンに有島の作家的原質が激しく共鳴する。この点を充分理解しなければ有島の思想は解明できないのではないのか。

有島はフランシスに「人々は今のままで満足だと思つている。私にはそうは思えない。あなたもそうは思はない」と習性生活者を批判させ、「飛雀は歌うのに人は歌はない。木は跳るのに人は跳らない。淋しい世の中だ」と本能生活を忘れた世俗の人と本能生活者で

ある二人を対置している。この短い言葉の中にも「惜しみなく愛は奪ふ」の思想を作品化しようとする作者の意図が窺われる。パオロ、クララの父母、オッタビアナを始め、この作品に登場する二人以外の人物はすべて、本能生活者である二人と対比され、批判されている。これら習性・知性生活者に対する批判は作中随所にみられる。例えばフランシスを乞食僧・狂人と嘲笑していたアッシジの市民達は、フランシスがローマから印可を受けて帰ると掌を返すように態度を変える。市民達の事大主義に対するこの批判は痛烈である。つまり、既成の道徳・思想・習俗を少しも疑わず、安易に生きる世俗の人や信者達をはつきり二人と区別して描く。キリスト教の信仰も上から与えられ、固定化・形式化すれば知性生活、更に習性生活になるが、フランシス、クララの信仰は、この時点においては、既成の觀念や習俗をぶち破るやむにやまれぬ内発的な、殆んど芸術に等しい創造的な営みであると肯定している。「惜しみなく愛は奪ふ」の思想には、本能生活であつたものも、固定化・形骸化すれば知性・習性生活になるという弁証法的な考え方が^(注6)ある。

このように、「クララの出家」は「惜しみなく愛は奪ふ」の思想で統一されており、クララの恋愛及び信仰という「あまりにも人間的な」二つの大きいエネルギーの相互交渉の秘儀が描かれている。

(二) 「クララの出家」の構想と笹淵氏の誤読

結論を急ぎすぎたので、以下、原文に密着し、構想の面から具体的に氏の誤読を指摘したい。

氏は拙論を支離滅裂な、構想を無視した解釈だとする。筆者は逆に、氏の構想論を我が仏尊しとするキリスト教的立場による強引な付会説と思う。

まず、冒頭を問題にしたい。阿川弘之氏は「私の小説作法」で「作品の核になる一つの場景と書き出しの三行ほどができ上がれば、私の短篇のほぼ三分の二は出来た感じになる」と述べている。この核は「クララの出家」においては明らかにクライマックス部（と筆者は考える）である第三の夢、クララの法悦がそれに当る。そして、「これも正しく人間生活史上中に起つた実際の出来事の一つである」「又、夢に襲われてクララは暗い中に眼をさました」「数多い見知り越しの男達の中でどういふ訳か三人だけがつき／＼にクララの夢に現われた」という書き出しは、この核を想定して書かれたものと思われる。つまり、エリスの夢、研究によって触発され、テレサの幻覚をクララの夢に変形させた有島は、この核の情景を作り得て、「クララの出家」の前半部である夢場面を構成したと思われる。勿論、サバチエの「フランシス伝」から素材を得ている。しかし、その素材は、フランシスを中心としたフランシス、クララの信仰生活及び生活環境であつて、この作品の主眼となつていくクララの無意識やフランシスに対する恋愛はサバチエの伝記には全く認められない。夢の場面は明らかにエリスからヒントを得た有島の独創である。

氏は第一夢にエリス、フロイトの影響を認めながらもその部分に限るとする。しかも、夢の構想はエリスを否定する構想だという。

何故、有島は最初の夢だけに応用して、以下の夢に使わなかったの
であろうか？ 日記に「これ（エリス）を上手く利用すれば珍らしい文学作品が出来るであろう」と書き、しかも「或る女」「石にひしがれた雑草」「首途」「カインの末裔」などに応用した有島である。氏は前にクララの第一夢を「典型的なフロイディズム」としながら、今度は「エリスの紹介の程度でどれ程フロイディズムを正確に理解しえたか疑問」と述べている。しかし、有島が最も注目し、「或る女」に応用したエリスのヒステリー研究は、フロイト、ブロイエルの共同研究である著名なヒステリー研究が骨子になっており、それなくしてはエリスの研究も成り立たなかつたものである。そのことは *Studies in the psychology of sex. vol. I of Autoeroticism II* (P. 209~P. 236) を参照すれば明らかである。

「又、夢に襲われてクララは暗い中に眼をさました」とあるクララの明け方の夢という時間設定もエリスと同じであり、「三人の男が次々に現われた」という三つの夢も共通する。テレサの幻覚が夢に変形されたのもエリスの論及が夢に重点を置いていたからである。エリスの「光り輝く肉体」は有島の「まぶしい光に明滅する」キリストの肉体に照応し、エリスの「焰の槍を胸に突き刺し、切尖は腸まで達し」は有島の「燃えさかした尖頭は下腹部まで届いた」に、「強く結びついた快楽と苦痛」は有島の「苦しい快い感覚」に照応する。笹淵氏はモチーフとしてサバチエの「フランシス伝」を重視するが、勿論、それにクララの夢や法悦が描かれていよう筈がない。人間くさい伝記とカトリシズムから問題にされるサバチエの

「フランス伝」においてもクララのフランスに對する恋愛はタブーとされている。

前論で指摘した如く、クララの法悦を性的法悦（エロスとアガペの一致）とみるか、氏のように純靈的・非性的なものとみるかは、この作品の主題解釈にかかわる。氏はこの作品の核、クライマックス部はクララの法悦ではないという。では一体どこか？ 明確でない。読者に最も強烈な印象を与える場面はここを置いてない。

氏によると拙論は構想を無視した根拠のない独断である由である。一方、氏の構想論はどうか？ 氏によると結局、クララの法悦が純靈的・非性的であるから、この作品において一切は肉から霊へ、霊肉の二律背反葛藤から霊の勝利へという構想に集約されると主張する。従って氏の構想論の大前提である「クララの法悦は非性的・純靈的なものだ」との命題が誤まっていれば、言い換えると三夢が性的法悦である場合、氏の構想論の一切は土崩瓦解する。

「クララは有頂天になった。全身は嘗て覚えのない苦しい快い感覺に木の葉の如くおののいた。喉も裂け破れる一声に、全身に張り満ちた力を搾り切ろうとするような瞬間が来た。」というクララの法悦が非性的であるとは何としても納得できない。

例えば更級日記の女主人公の法悦的な夢と比較してもはるかに性的である。

天喜三年十月十三日の夜の夢に、あたる所の屋のつまの庭に、阿弥陀仏たち給へり。さだかには見え給はず、霧ひとへ隔たれるやうに、透きて見え給ふを、せめて絶え間に見たてまつ

れば、蓮花の座の、土をあがりたる高さ三四尺、仏の御丈六尺ばかりにて、金色に光り輝やき給ひて、御手かたつかたをばひるげたるやうに、いま片つかたは、印をつくり給ひたるを、異人の目には見つけ奉らず、我一人見たてまつるに、さすがにいみじく、け恐ろしければ、簾のもと近く寄りても、え見奉らねば、仏、「さは、この度は歸りて、後に迎へに来む」とのたまふ声、わが耳一つに聞えて、人はえ聞きつけずと見るに、うち驚きたれば、十四日也。この夢許ぞ、後の頼みとしける。

右には、クララの夢のような被虐的快感は少しもない。テレサの幻覺と比較してもそうである。テレサの幻覺には「苦しい快い感覺に木の葉の如く戦いた」といった官能的表現はなく、まして、女性の強烈なオルガスムスを描こうとする「喉も裂け破れる一声に全身に張り満ちた力を搾り切ろうとするような瞬間」といった表現はない。笹淵氏は「苦しい快い感覺」が「ガブリエルの劍にあるのではなく、キリストのヴィジョンにある」と主張するが、精神と肉体は不可分だとする霊肉一致の立場にある有島が区別して描く筈はない。第一に、ガブリエルの劍そのものもヴィジョンであり、夢の中のことではないか？

氏は筆者がクララをマゾヒスト扱いにしたように誤解している。

（同様な誤解は「ヒステリカル」を「ヒステリー」と混同している点にもある）マゾヒストは意識的に苦痛を享樂し、快感に浸る異常者を指す。クララの夢が無意識であるのはいうをまたぬ。男女を問わず人間の深層心理に潜むサディズム、マゾヒズムが問題なのであ

る。特に女性の深層心理に潜むマゾヒズムの傾向を作家的洞察で、有島は鋭く見ぬいていたのである。その極端な例は菓子、佐藤の妻の描写(注1)にみられる。有島は大体、「知性生活」を信用しないで、知性・教養・理知・習俗・既成道徳などをぶち破って迸しる無意識的な生(注2)な衝動こそ確かなものと、それに興味を抱き、描いた作家である。彼は「生活と文学」でも芸術の第一義的要素は「人の内部的衝動の能うだけ端的な表現」であるといい、「本能の力の生々しい揺ぎがなかったならば、良き文学ということとはできない」旨述べている。

有島の少女偏愛と激情性は彼の本質的なものであり、難解といわれているが(注12)、「クララの出家」にはそれが典型的に表われている。作者はこの宗教的天才少女を熱愛している。「旅する心」で「この夕闇の中から一向の熱意に輝く美しい眼の少女が現われ出しはしないか」と述べ、「夢の少女」を暖め育てた彼は第三夢のクララの法悦では殆んどサディスチックにクララを扱っている。作者の少女偏愛と激情性が無意識の中に表われたものである。クララのマゾヒズムはこれを描いている作者のサディズムを裏返したもので、両者は表裏をなしている。本多秋五氏は「白樺派の作家と作品」で「サディスティックな性癖が有島の本質にあったのだ。良くても悪くても、好きでも嫌いでも、とにかくこの部分にこそ有島の本領があるのだ」と述べているが、「カンカン虫」に先駆し、「実験室」「カインの末裔」「或る女」「卑怪物」「アン・インシデント」などに、あるいはサディスチックに、あるいはマゾヒスチックに表われる激

情的描写は、有島内部の父親譲りの恐るべき情熱が創作において抑圧から解き放たれ、奔騰したものである。

卑見によると、笹淵説の致命的誤謬はクララの無意識や作者の無意識に目をふさぎ、更にクララの意識と無意識を混同する点にあると思われる。それは恐らくキリスト主義者として理想・道徳・信仰の意識などを強調するあまり、人間の無意識的衝動から目をそらすためであろう。この誤謬は再論の第二夢の解釈でも依然としてはっきり表われる。「クララがフランシスに対して『性的な関心を自覚しているわけではない』といったのは夢中のことである」と氏は述べているが、リビドーは夢においても変形、象徴化され、意識には上らないとされている。フロイトは「夢判断」で多くの例を上げている。笹淵氏はフロイトの検閲・転移・象徴などのメカニズムを全く理解していない。氏は「オッタビアナはフランシスとは対極に立つ。彼の転移などではありえない」と述べる。しかし、道徳的抑圧や畏敬の念(検閲)が働くゆえに転移・象徴が行われるのであって、転移は寧ろ対極の人物に行われることが多いとされている。具体的な例として、フロイトの応用と思われる川端康成「山の音」から信吾の性夢を引いてみよう。四つの性夢の中の最後の夢である。

乳房にふれているのに、信吾は女が誰かわからなかった。わからないというよりも、誰かと考えもしなかったのだ。女の顔も体もなく、ただ二つの乳房だけが宙に浮いていたようなものだ。そこで初めて、誰かと思うと、女は修一の友だちの妹になつた。……

息子の妻、菊子をひそかに愛している信吾が夢の中で菊子に触れるのであるが、舅としての道徳的禁圧（検閲）が働いて、菊子は他の女性に転移される。このことは夢の中で勿論信吾に意識されていない。さめて後、考えた末、始めて信吾はハッと気づくのである。作者は次のように書いている。

「あつ。」と信吾は稲妻に打たれた。夢の娘は菊子の化身ではなかったのか。夢にもさすがに道徳が働いて、菊子の代りに修一の友だちの妹の姿を借りたのではないか。しかも、その不倫をかくすために、苛責をごまかすために、身代りの妹を、その娘以下の味気ない女に変えたのではないか。もし、信吾の欲望がほしのままにゆるされ、信吾の人生が思いのままに造り直せるものなら、信吾は処女の菊子を、つまり修一と結婚する前の菊子を、愛したいのではあるまいか。その心底が抑えられ、ゆがめられて、夢にみすばらしく現われた。信吾は夢でもそれを自分にかくし、自分をいつわろうとしたのか。……

作者がフロイトの「検閲」「転移」を応用したことは一読、明白である。勿論、エリス、フロイトをそれぞれ有島・川端が応用したにせよ、両作家の作家的洞察と手腕が根本的であるのいうをまたぬ。鵬外にしても、漱石にしてもフロイトの影響ではないが、卓抜な作家的洞察でもって、フロイトの検閲・転移・象徴に近いものを「雁」「夢十夜」「行人」などで描いている。「行人」の中、二郎が車中で見る蛇の夢は二郎を誘惑する兄嫁、直の変形、象徴であり、兄嫁の不倫などは夢にも見るべきでないとの道徳的検閲が二郎に働

いたわけである。「夢十夜」で難解とされている第十夢に登場する「豚」は、第一夢に描かれた三千代の系譜を引く百合の花のような植物性の浪漫的女性に对照する卑俗な動物的女性の象徴であろう。

「雁」のお玉の夢にも転移が描かれている。このように日常、口にすべきでない、夢にも見るべきではない事柄は夢の中でも検閲され、意識されないとされている。クララにとってフランシスは恋愛の対象としてはあまりにも畏れ多く、フランシスの裸身などは夢にも見るべきでない故、消え去るのである。笹淵説ではなぜフランシスが消え去ったのか説明できぬ。

クララの性的法悦も強い検閲が働くため極めて象徴的な夢となる。氏は「第一、第三の夢においてはクララの無意識の世界はこれらに対する検閲にもかかわらず十分に表現されている」と異議を唱えているが、これは現実界におけるクララのパオロ、オッタビアナに対する意識とフランシスに対する意識の差による。クララはパオロ、オッタビアナに対して「度々自分の窓の下で夜おそく歌われる夜曲を聞くようになった。それはクララの心を躍らし、ときめかした。同時にクララは何物よりもこの不思議な力を恐れた」とある如く、性的意識があり、フランシスに対してはそのようなことは畏れ多く考えもしなかったのである。それ故に一夢と二・三夢の違いが生じたわけである。つまり、一夢にくらべ二・三夢では更に検閲が強まったわけである。フロイトにしても検閲が働くと必ず転移・象徴が起るとはいっていない。これは夢の常識でもあろう。「フランシスの裸身に対するリビドー」はリビドーである故、意識されず、

従つてクララはフランシスの裸身を見つめ「自分の眼が燃えるように思い」「思わず身をすり寄せて素足のままのフランシスの爪先に手を触れる」のであるが、本人は気づかない。しかし、これを描く作者はフランシスに「あなたは私を恋している」と言わせ、クララのリビドーを意識的に描いている。このように第二の夢も第一・三夢と同様、クララの現実界と照応させて作者は描いている。この作品の前半部・夢場面は後半部・現実場面と照応するように、作者は巧妙な計算によって構成しているのである。クララはフランシスに指摘されて「自分で知らなかった自分の秘密」を始めて知り、「長い間の不思議な心の迷い」を解かれる。しかし、クララは自分の恋を知ったが、フランシスに対するリビドーは意識しない。

笹淵氏がクララの意識と無意識を混同し、更にクララ、フランシスとそれを描いている作者を同次元で考へていることは次の一文を見ても明らかである。「性愛から不動の信仰への飛躍を信じない小坂氏がどうしてクララの心が、この時から『全く肉の世界から逃れる事が出来た』という有島の構想には抵抗を感じないのだろうか」と氏は述べる。しかし、右はクララの意識を述べたもので、有島の構想ではない。そのことは直ぐ後に続けて、「それから一年半の長い／＼天との婚約の試練も今夜で果てたのだ。是れからは一人の主にも身も心も献げ得る嬉しい境涯が自分を待っているのだ。」(傍点筆者)という文を置いていることによつても明らかではないか。勿論、クララの意識には、氏のいうように「性愛と断絶してより純一な信仰の世界に徹底した」という気持がある。従つて有島が性的法悦とし

て描いた第三夢もクララは「神のお告げ」と思いこんでいる。作者は「その朝の浅い眠りを覚ました不思議な夢も思い入った心には神のお告げに違いなかった」(傍点筆者)と述べているではないか。「不思議な夢」といい、「思い入った心には」と区別する助詞を使つていることに注意したい。作者である有島はクララのように「思い入つて」いないのである。笹淵氏はクララを聖女扱いにしようとするが、作者は「一向の熱意に輝く美しい眼の少女」(旅する心を描こうとして)るのである。作者は神学者やサバチエなどの伝記作者とは違つた視点で、クララを人間的な宗教的天才少女として描いている。「わが神・わが総て」がどうして神中心否定の人間主義なのであろう」と氏は述べているが、このフランシスの言葉が問題なのでなく、これを描く作者の視点が問題である。キリスト教を捨てて、あれ程人間主義を力説した有島が「わが神・わが総て」という立場でいる筈がないではないか。この言葉は熱烈な求道者・クリスチャンであつたフランシスを描くために置いたものである。つまり素材によるものである。

氏はキリスト主義者として、歴史上、伝説上のフランシスを理想化するあまり、有島が描いたフランシスのクララに対する恋愛を無視する。フランシスがクララに心ひかれたのは次の条でも明らかである。

『突然フランシスは慄える声を押鎮めながらつぶやいた。

「あなたは私を恋している』

「私の心もおののく。……私はあなたに値しない。……私の

罪をも亦許し給うだろう」

氏は出来るだけ、クララのフランシスに対する恋愛にも目をつぶろうとする。

「クララはそういう雑言（フランシスに対する）を耳にする度に、自分でそんな事を口走ったように顔を赤らめた。」

「彼女（クララ）は自分の眼が燃えるように思った。」

「懺悔するものはクララの外に沢山いたが、クララはわざと最後を選んだ。」

「クララの燃える眼は命の綱のようにフランシスの眼にすがりついた。」

「思わず身をすり寄せて、素足のままのフランシスの爪先に手を触れると……」

すべて、クララのフランシスに対する無意識的恋愛と信仰の結びつきを強調したのではないか。従って氏も「フランシスとクララの愛について有島の理解が人間愛を混じており、サバチエの理解からすれば多少とも俗見に近付いている」と述べざるを得なかった。

有島は氏と反対に、人間愛や恋愛を俗なるものと見るどころか、習俗生活に対する本能生活と高く評価している。「宣言」のY子とBの恋愛は「惜しみなく愛は奪ふ」の恋愛観である「憔悴する恋」「生死を慮らない霊肉一致の恋」を作品化したものである。恋愛（本能生活）のためすべてをなげうち殉ずるY子とBや「或る女」の葉子などを本能生活者としているのは恋愛至上主義作家、有島に一貫した描き方である。

更に氏の誤読の一例をあげてみる。例えばクララがフランシスに「心の秘密」を指摘されて激しく泣く場面の解釈もそうである。氏は「自分が本当に恋していたのは神ではなく男であったという自己認識がどうして狂気のように泣くほどの感動をクララに与えたのであろう」と述べる。このクララの「泣く」の心理解釈を「性愛と神への愛をはっきり区別し、神への愛に純化することができた感動の現われ」とする。しかし、これが信仰に入り得た歓喜の心理でないことは、「泣き声ばかりがいたましく聞えた」（傍点筆者）「クララはフランシスの明察を何んと感謝していいのか、どう詫びねばならぬかを知らなかった」という文でも分かる。歓喜の泣き声が「いたましい」とは不自然である。この時のクララの心理はフランシスに対して「すまない」「畏れ多い」という気持と尊敬し恋しているフランシスに恋心を見抜かれた思春期の少女が受けた激しい衝撃・感動であらう。

大体、この作品はサバチエの「フランシス伝」の小説化というよりな宗教的小説ではない。キリスト教の教義に重点が置かれているものではなく、フランシス、クララの恋愛と信仰の相互交渉の秘儀を描いたものである。作者の生涯のテーマであったアダムとイブの問題、フランシスとクララの肉体的な交渉に作者の関心は向いている。「これも正しく人間生活史の中に起った実際の出来事の一つである」という前置きはそれを意味する。同じく宗教的な素材を扱った三部作「大洪水の前」「サムソンとデリラ」「聖餐」にしても然りである。作者の主題がアダムとイブの問題であったことは、自注で

「第一の戯曲（大洪水の前）に於ける男女關係が第二のそれに於いて激しき破綻を起し、第三（聖餐）に於いてある正しい調和を得たということと言ひ表わしたかったのだ。」（聖餐に就いて）と述べていることによつても明らかである。「大洪水の前」ではナウマとヤペテの交渉を中心に描き、人間中心的なヤペテの考えに作者の主張は大きく傾いている。これについて有島は足助宛に「セムに第十八世紀以前の思想を、ハムに自然主義的思想を、ヤペテに到来すべき思潮を代表させた積りである」と書いている。「聖餐」も焦点はイエスとマリヤの人間的な交渉に絞られ、マリヤだけが真の理解者であつて、ユダを始め、マリヤ以外の信徒達はキリストを全く理解していないとする。イエス、マリヤの対置がフランシス、クララのヴァリエーションであることは否定できない。作者は自注でも「私は聖書の解釈にある新しい考え方を試みようとした。」^{注13}と述べ、キリストの捕縛と死刑が、マリヤにキリスト自身によつて告げられていたとしている。「聖餐」に有島独自の解釈を認めず、神中心のキリスト教的発想からこの作品が書かれていたという氏の説は不可解である。

氏の再論を読んで、唯一の新しい見解と思われたのは、第二の夢の解釈である。即ち、闇の中から現われた男はフランシスの父であるという説である。しかし、筆者の検討ではこの説も無理と思われ納得できない。第一に寺院の中から現われた男が世俗に住むベルナルドネであるとは不自然である。しかも、クララとベルナルドネは没交渉で、クララの夢に現われる必然性は薄い。「恐ろしい衝動」が出家への欲求であるというのも解せない。この恐ろしい衝動は前

述の如く、クララの深層心理に潜むマゾヒズムの裏返しであるサディチックな衝動で、その極端な描写は葉子にしばしば見られる。この作者独特の描写は瀬沼・伊藤・本多氏などが注目しているものである。

闇の中から表われる男は、矢張り第三夢のガブリエルに照応するフランシス、クララの肉（恋愛）に対する宗教的検閲者とするべきである。即ち、「鋭い眸」はガブリエルを思わせ、闇から現われた男がフランシスを「掴んで引き起す」のはガブリエルがクララを「掴んで起させない」のに照応し、フランシスが「宙につるし上げられる」のはクララが「光の中に投げ出され」て、「炎の剣を……ずぶりと刺し通される」のに照応する。闇の男とガブリエルのサディチックな行為はこれを描く作者のサディズムを示す。クララのサディズム、マゾヒズムは作者のサディズム、マゾヒズムと密接な關係がある。作者はクララの第二夢を第三夢の伏線として置き、照応させて描いている。「華やかな着物」は氏の言う如く世俗的榮華・肉の世界を表わし、宗教的検閲者がその着物を引き脱がすのである。氏はクララの父やオッタビアナを「闇の男」の後身としているが、闇の男の鋭い眸や能動的な行為と「恨みを含んでクララを見入る」「泥沼にじりく沈む」オッタビアナやクララの父の受動的な行為とは不似合である。氏は第二夢を「フランシスの出家とクララの出家に至る心理的動機を明らかにする」意図で置いたと主張するが、それは充分、現実の描写（後半部）で説明しているのであつて、この様に難解な夢で作者が説明する筈はないと思う。氏の説か

らは何故フランシスの肉体が消え去ったのか説明できぬ。矢張り、クララの無意識の世界で、フランシスの裸身に対するリビドーが検閲され、消え去ったものと思う。フロイトによれば着物は人物の象徴とされており、フランシスはクララの父、母、オックピアナへと転移されたのであろう。つまり、夢の場面の転換が行われたのである。フランシスの裸身に対するクララのリビドーや関心は「マントと晴着とをずた／＼に破り」捨てて、「犬のようにまろびながら悔恨の涙にむせび泣く若いフランシス」を「奇異な思いをしながら」眺めていた童女の頃から「素足のままのフランシスの爪先」に「思わず身をすり寄せ」て手を触れる少女の今に至るまで一貫して描かれている。つまり、クララは童女時代から無意識の中にフランシスを恋していたとする。華麗な「マントと晴着をずた／＼に破り」捨てて、裸身に近い姿でまろび、むせび泣く場面と第二の夢はなだらかに連続している。作者は現実界と巧妙に照応させて第二夢も描いている。以上の如く、第二夢は氏のいうように、「出家に至る心理的動機を明らかにする」ために置いたものではなく、フランシスとクララに肉（恋愛）を認めるため置いたのであろう。

(三) クララにおける有島の分身面

次にクララと作者の臍の緒の問題がある。笹淵氏もクララの法悦と有島の定山溪の体験を無関係ではないと認めている。しかし、どのようにつながっているか少しも明らかではない。

一体到有島の作の主人公は三島や漱石のような、知的に計算さ

れ、突き放して描かれたものではない。寧ろ作者は主人公の中へのめりこみ、登場人物は作者の血と肉からできている。作者自身「私の作物には、世評では自己を主題とした主観的なものと、他を主題とした客観的なものと、二つあるように言われているけれども、私としてはそう区別された二つの種類のどちらを書き現わす場合にも、自己を書き現わしているのだ」（自己を描出したに外ならない「カインの末裔」と述べている。クララを始め、「宣言」のY子やB、「或る女」の葉子が真実の生き方を求め、習俗や世俗的生活、肉親愛をふみにじって本能生活のため殉ずるのは、作者自身の生き方と深くかかわっている。例えば、クララは父母の反対を押し切って出家しようとするが、第三夢では思わず、泥沼に沈む父母を救わんとする。このクララの気持には両親の反対を押し切り入信した定山溪心中行を頂点とする青春時代の親不幸の体験が裏打ちされている。同様に友情や婚約や肉親愛を犠牲にして恋愛（本能生活）に殉ずるY子、B、葉子の姿には、内村を始めとするクリスチャン達の期待を裏切つてキリスト教を離れ、創作生活（本能生活）に飛びこんだ作者の体験が裏打ちされている。

作中人物にのみこみ、時折、顔をのぞけて喋る作者の癖は、「クララの出家」でも思春期の入信時代に立ち返り、「生れ落ちるところから神に献げられていたような不思議な自分の運命を思いやった。晚かれ早かれ生みの親を離れて行くべき身の上も考えた。」と述べ、更に信仰懐疑時代の自己を回想し、「長い間の不思議な心の迷いをクララは種々に解きわづらっていたが、それがその時始めて

解かれたのだ。クララはフランシスの明察を何と感謝していいのか、どう詫びねばならぬかを知らなかった。」とキリスト教転向者の心理的傷痕を撫す。これは、「首途」の「如何しても僕が信仰を屈げようとしなかったために、父母からは勘当同様な言葉を浴びせられた。而して僕を自分の眼程に愛してくれた祖母は、悲しみの余り死病に罹って、来世で僕を仏弟子にする外はないと言いながら亡くなった。僕の心にはそれが深く刻まれて忘れる事が出来ない。神の信仰から離れてしまった僕は、今あの世の祖母を泣かしているだろうか、喜ばしているだろうか。総ては若い情熱の仕業だったのだ。僕は女を恋する代りに神を信じたのだ。」という件りと照応する。定山溪での宗教的体験がクララの法悦と密接不可分なゆえんである。「クララの出家」はある意味では、自己の青春時代をいとおしんだ作品といえよう。勿論、素材はクララであり、フランシスである以上、クララが有島の分身であっても、クララは恋愛を昇華して、クララにとって本能生活である信仰へ赴いたわけである。本多秋五氏はこの間の秘密を夙に、「後者（クララの出家）のモチーフは、『僕は女を恋する代りに神を信じたのだ。』（迷路）」という告白につながるかも知れない。いや、恐らくそれは『宗教的有頂天』と共に『その有頂天が呼び起す恐るべく緊迫した性欲の発作』を感じた（リビングストン伝）^(注14)という、あの札幌学生時代の定山溪温泉の経験に遠くつながっている。」と道破し、伊藤整氏も『クララの出家』では聖女の内部にある性的衝動が神の實在の認識とつながることを残酷に描いた。」^(注15)と述べ、クララが有島の分身であることを認めて

いる。

結語

以上、原文に密着して検討を加えた結果、笹淵氏の論はキリスト主義者としてのあまりにも主體的な論究で、客観性に乏しいと思わざるを得ない。問題は有島の創作意図を正しく見究めることにあり、研究者の主體的意欲で歪めてはなるまい。氏の説は、有島の思想の骨子である本能生活論を客観的に理解し、更に有島の作意、表現を一步離れて考察したものとは思われない。その結果、キリスト教のアンチテーゼである有島の思想、文学をキリスト教的な思想、作品の如く解釈している。そして、「クララの出家」を宗教青年時代の「意識の連続線上に生まれた」と主張する。有島の思想、文学はそれまでの宗教青年時代の思想や生き方を止揚すべく生まれたのであって、すべて背教の思想、文学である。自殺直前、聖書を枕頭に置いたと言われる芥川や太宰などは大きく異なり、有島は死の寸前においても神を、キリスト教を否定していた。それは死の直前に書かれた「独断者の会話」でもAをして「凡ての神を葬ってしまった。私はそう叫びます。赤ちゃんを胸に抱きしめているあなた一人を想像するだけで、神の存在を否定すべき証拠は十分ですよ。」と言わせていることによっても分かる。

笹淵氏は道徳批評をした覚えはないという。しかし、キリスト教的立場による批評が道徳批評ではないのであろうか？ 有島と正反対な性や性心理学を卑しめ、否定する氏の考えはいたるところに出

ている。試みに二、三引用してみよう。「そしてこの『俗見』の極がエリスの性心理学の立場である。」(東京女子大論集xv巻二五ページ)

「古今東西を通じて世間にありふれた性心理の認識がこのような感動のこもった重々しい調子を生むことはできない。」(同上二九ページ)

「もともと現代の作家の中には性心理の描写に専らのもものもあるが、主体性を欠いた一種の観念小説に堕ちていると見られる点に致命的欠陥がある。」(同上三〇ページ)「最近の日本文学、とくに近代文学の研究には精神分析学的研究がかなり盛んである。一つの風潮ともみられる」(同上二ページ)再論では、「リビドーが元来性本能である限り、それがどのような昇華をつづけようとも、性本能、いわばエゴの世界を離れえないことは論理の必然である。」(二八一ページ)

更に氏の芸術より宗教を上位に置く立場も次の文を見れば分かる。「キリスト教に叛逆して芸術家の道をえらび取ったからといって、有島のように有頂天になるにも当たらない、ということにもなるう。」(再論一八三ページ)

次に氏は筆者が芸術と宗教を同次元に置き、宗教に赴くのも芸術に行くのもそれぞれの人や資質やテンペラメントによると考えている旨批判しているが、これは有島の思想であつて筆者の単なる思いつきではない。有島は「惜しみなく愛は奪ふ」でも「ジェームスは古来色々に分派した総ての哲学の色合は、結局それをその構成者の稟質(temperament)に帰することが出来るといつてゐる。これは至言だといわなければならぬ。」と述べているのである。ジェームス、有島のこの考えを笹淵氏は批判したことになるが、氏自身、有

島の二律背反思想は氣質によるところが大きいと述べており、矛盾している。

有島が分裂質と躁鬱質の混合型ではないかとの氏の主張は、勿論、複雑な人間という複合体を一つの型で割り切ることは出来ない故、筆者も同感である。ただ、筆者は有島においては母方からの分裂質の面よりも父方から受けついで躁鬱の面が一層強く、ために宗教から離れざるを得ず、神を信じ得なかつたものと考へている。定山溪での神を見たとも思われる神秘的体験はクララの法悦場面にながつていようが、それは恐らく折れば必ず神を見ることが出来たという母方の祖母や幻想的・空話質的な(註16)資質を受けついで母

であろう。しかし、躁鬱的な父方の血が勝つたため、遂に信仰から離れるに至つたのではないか？ 有島は、アプリアりなものや超現実的な神といった実在を認め、それでもつて演繹的に割り切る型の人ではなく、彼にはアプリアりなものや主義・思想を絶えず現実や人間に引きつけて検証する経験主義・現世主義がある。筆者には、この有島の思想的原質は笹淵氏と正反対なもののように思われる。一例をあげれば、神中心と人間中心の考え方の対照、あるいはパウロ的資質とヨハネ的傾向、幻想的・浪漫的な世界への好みと現世的内在資向等々である。余談は置いて、次に前述のジェームスや有島の思想(哲学の色合はテンペラメントの相違によるといふ思想)が人間精神の劇を認めないのではないかといふ笹淵氏の批判がある。これも筆者には無意味のように思われる。いかに思想・立場を異にしても宗教的天才や芸術的天才の生涯や業績は我々に感動を与えるで

はないか。「クララの出家」に描かれた、「光り輝く髪」を持つ一向きな眼のキラキラ輝いている美しい宗教的天才少女の「わななく許りの精神的緊張」が、読者に美的感動を与えぬ筈はない。作者も「宣言」のY子と共にクララを理想的な夢の少女として酷愛し、^(注17)二人の本能生活を賛美しているのである。クララの性的法悦をクライマックス部と見たのはそれが最も劇的であり、美的感動を読者に与える場面だと思ふ故である。ここには死に至るまで神を求め、死に至るまで生を求める人間の根源に潜む二つの大きい衝動が見事に融け合い、エロス美とアガペ美の極地が描かれている。「クララの出家」は大江作「セブンティーン」よりも詩的であり、知的人工的な三島作「愛国」よりも自然である。

いかに生な人間の衝動であつても、昇華された姿は純粹で美しい。芸術とエロス美は密接不離な関係にあり、それを否定することは道学者的欺瞞であろう。試みに芸術から恋愛やエロス美を除いてしまえばどうか？

ただ、フロイトはこの「昇華」がいかなる機能によつて果されるのか？ 性的エネルギーが何故文化的なものに昇華されるのかについては具体的に詳細な説明をなさず、手を抜いているように思われる。フロイトを深く学んでもいない筆者にフロイトの限界を云々する資格はなく、前稿も単なる疑問を抱いたまでである。しかし、この問題も人間学的に、あるいは生科学的に説明される日がくるのではないか？

心理学的方法の限界を云々するより有効性をもつと研究すべきで

あるというのは自戒の意味である。こと心理学的方法に限らない。学問研究において偏狭なセクシヨナリズム、排他主義は斥けられるべきだと考えるからである。(43・12・20)

注

- (1) 「日本近代文学叢集」の『クララの出家』の主題再論
- (2) 筑摩書房「現代文学大系有島武郎集」所収「人と文学」(本多秋五)
- (3) 「惜しみなく愛は奪ち」
- (4) 「惜しみなく愛は奪ち」
- (5) 例えば「痛ましくも肉の美しさが破壊されて行く跡に、奇蹟のように現われ出る全く違つた肉の美しさを何に替えたらいいだろう。彼女は覆せる程美しくなる。而して覆せるほど、深い盤の力が外部から感ぜられる。神の細煉の為に慥れ果てた聖者のような気高さが、彼女を光り輝くものにする。」「細々と立ち上つた処女の姿。無限の生と喜びとを生み出すへき処女の姿。行きつまる所まで盤化した豊潤な肉感……」
- (6) 「新旧芸術の交渉」にもその考え方が顕著にみられる。
- (7) エリスは Auto-Erotism I の大半を性夢の説明にあつてゐる。
- (8) “……Think of it, luminous flesh; and Oh! such tints,……” (Auto-Erotism I p.206)
- (9) “……St. Theresa describes how a beautiful little angel inserted a flame-tipped dart into her heart until it descended into her bowels (Auto-Erotism I p.206)
- (10) The “delicious agony,” the “sweet martyrdom,” the “strongly combined pleasure and pain experienced by St. Theresa were certainly associated with physical sexual sensation. (The Auto-Erotic Factor in religion, p.323)
- (11) 「而して切るような痛みと、痛みからのみ来る奇怪な快感とを自分自身に感じて陶然と酔いしれながら、倉地の二の腕に歯を立てて、思い切り弾力性に富んだ熱したその肉を噛んだ。」「(或る女「33章」) 彼は女のたぶさを挿んで道の上を歩く引つ張って行った。集会所に来た時は二人とも傷だらけになっていた。有根

天になった女は一塊の火の肉となって、ぶる／＼震えながら床の上によつ倒れていた。」(カインの末裔) 3章)

(12) 筑摩書房「現代文学大系有島武郎集」所収「人と文学」(本多秋五)

(13) 「聖餐に就いて」

(14) 「白樺派の文学」所収「有島武郎論」。これは一九五二年三月二十四日に書かれ、一九五三年二月まで「文学」に連載される。

(15) 講談社「日本現代文学全集有島武郎集」作品解説

(16) 「折れば必ず目眩の間に御神体を見ることが出来るそうだが……」(御嶽教の中

(17)

敬正となった祖母)「想像力とも思われるものが非常に豊かで、奇体に無い事を有る様に考える癖がある。……実際はない事を、自分では全く有るとの確信を以て見るが如く精細に話して、時々驚く様な嘘を吐く事が母によくある。尤も母自身は嘘を吐いているとは思わず、随かに見たり聞いたりしたと確信しているのである。」「……往々卒倒して感覚を失う事があった。……」(私の父と母)
Y子とクララのタイプ・女性美は共通し、このような少女が有島の理想であったと思われる。私見によればダンテのベアトリッチ体験の如きものが有島にもあり、ダンテからの影響も大きいと考える。

非公開

文学研究への反省

坂本浩

私が東大の国文科を卒業したのは昭和七年の春であったが、それと前後して明治文学会が結成された。わが国にあって近代文学の研究がようやく端緒についたのは、この明治文学会の出現からであるといえるであろう。これから近代文学の研究に入ろうと考えていた私にとって、それはまたない好機を与えることになったのである。

私はこの会において三人のすぐれた先輩に出あうことができた。しかも、この三人はそれぞれ独自の研究態度を持っていて、文学研究における三つの基本的な方法がおのずから示されるように感じられたのである。それらは湯地孝・片岡良一・塩田良平の三氏であった。湯地氏は文学についての

鑑賞という点においてすぐれた業績を示しておられた。繊細な感受性を持って作品自体の中に入り、すみずみまで味わい尽くすことが、文学研究においていかにたいせつなことであるかを私は教えられる思いがした。研究とは何よりも文学作品の芸術性への探求であるというゆえんがようやく明らかになったのである。

これに対して片岡氏の立場は、作品を通して作家自体の生きかたという点に探求の方向が向けられていた。それぞれの作家の人生行路の足跡として作品をとらえ、その中における人物たちの生への体当たりが常に問題とされた。彼らがそれぞれ自分の道を進もうとするとき、その行く手をはばむ社会という壁の存在が見つめられ、それといかに対決したか、いかに敗れたかなどの

点をめぐって、作家自身の生きかたがするどく批判されていた。近代文学の意義が近代的な人生探求の場に存在することを否定できない以上、片岡氏の研究態度にはその本質に根ざした重さがあつた。私はその影響を深く受けることになった。

塩田氏はまた湯地・片岡の両氏とも違った立場にあるものとして私の目に映じた。塩田氏の研究は、作品の秘密を解明する手段として、作品成立の契機や、その作家をめぐるさまざまな事情について、資料的に解き明かす方向に進んでおられた。文学研究が真の学問として成り立つためには、こういった実証的研究が必須のものであることを、私は氏によって教えられた。現在における近代文学研究のたいたいの方向は、このような実証的な方法論に向かつているようであるが、この際見落してならないことは、塩田氏における文学ないし作家へのひたむきな愛情という点である。作家を敬愛し、作品を愛読するあまり、その制作の秘密にまで探求の手を延ばそうとする精神である。そこにはやはり文学の独自性を認め、文学を文学として成立させるものへの探求という一線は常に守られていたように思う。

このことを実証するような事件がやがて明治文学会の内部に起こった。それは以上の三氏に代表されるような文学研究の態度、文学を文学の範囲において考究しようという方法に対して、新しい立場に立つ側における不満が表面化されたことであつた。文学をより社会的な視野においてとらえ、社会現象の一つの現われや広い文化的現象の一端として考察しようとする人々の出現であつた。具体的には神崎清・篠田太郎氏に代表されるような立場であり、結局のところ両氏は明治文学会を脱退して新たに明治文学談話会を設立することになつた。この間のいきさつは詳しく述べる余裕はないが、幾度か催された話し合いの席において明瞭になつたことは、この相対立する研究方法の間には、一つの線が画されているという事実であつた。それを私は文学の独自性を守り抜こうとする立場と、文学をより広い社会的現象の中に解消しようとする立場との越えることのできない一線であつたと考へるのである。近代文学研究の中に、異質の態度ないし方法論が生まれたといえるであらう。

戦争が激化するにつれ、研究自体が瀕死の状態に追い込まれる結果となり、日本全土が荒廃し尽くした中に終戦後の変革期を迎えることになつた。ようやく文学研究にいそしむだけの余裕が与えられたとき、それは戦前と全く変わった様相の下に復活してきたような印象を私は受けたのである。

文学の問題を戦争あるいは敗戦と結びつけて考へるとき、研究者の間に作家の戦争に対する責任の追求という方向が取られることになつた。それはある点において文学をより広い視野の中に解消しようとする戦前の研究態度と全く無縁なものではなかつたはずである。それよりさらに注目すべきことは、わが国が新たに生まれ変わらうとする民主主義という立場から文学を見直そうという態度の出現であつた。国民文学論などという立場もそのことと結びつけて私には理解された。しかし、マルクス主義に基づくか民主主義に立つかは別として、文学の問題をそれ以外の範囲にまで押し開けようとする態度には共通する傾向があつたことは確かであらう。

敗戦はまたわが日本の島國的な孤立性を暴露してみせた。ここにおいて近代文学研究にあつても、より広い世界的な視野から

わが近代文学を見直そうという態度を生じさせた。もともと明治以来の日本近代文学は西欧文学の強い影響下に花開いたものであつただけに、その間の交流の關係に着眼しようという方法論が出現したのである。外国文学の研究者との共同作業により、西欧文学と日本近代文学とを比較研究しようとする比較文学研究会の立場がそれである。この方向は一般の研究者の間にもかなり強い影響力を与えたように思われる。しかし、やや極端な見かたをすれば、それは東西文学間における素材としての比較研究に止まるといえるであらう。問題点はむしろ一つの素材が他国文学から取り入れられたとき、その作家の心内の秘宮において、いかに変化し変質したかという、作家自身の文学の秘密の究明にあるべきだと思われ

る。

明治・大正の文学を生み出す背景にあつたものの崩壊は、なんとしても惜しむにあまりものがあつた。作家を育てた環境、作品を孕んだ素材のなものの壊滅は絶望的な空虚感を研究者の心に刻み込んだ。作品や作家を愛するため、今では変わり果てた現地へ杖を引きたいという思いが、心ある研究者の胸を打つた。野田宇太郎氏が開拓

した文学散歩の道はその代表的なものであった。野田氏の心内に詩人的な情熱があり、作家へのイメージがあり、その精神が現実の荒廃と対峙して嘆かれるとき、そこに文学研究の一分野が新たに樹立されたことは疑いないところである。ところがこの方法論が形骸のみ受け継がれて、精神を忘れたとき、ともすれば文学散歩は文学というものから離脱して行こうとする。資料のための資料蒐集、それが文学研究のすべてであるような現象が生ずるのも、このことと無関係ではないであろう。

結論を急ぎすぎる嫌いはあるが、私は以上のような終戦このかたの文学研究のさまざまな態度のなかに、一つの貫通する特色を見いだすように思う。それは目に見えるものに頼ろうとするあまり、精神の働きを無視する傾向といえるであろう。文学を社会的に、あるいは世界的に開けることが間違っているのではない。また文学における資料的なものを重視することが無用であるはずはない。たいせつなことは、文学というものに必然的につきまとう物質的なものを明確にしよとするとする試みは、文学というものの本質的に持つ文学性という精神的なものを探明するための一手段であるという

自覚であろう。もちろん私は以上のようなことを比喩的に語っているのであるが、事のついでに言ってしまう、私はこういった傾向の背景に、戦後における機械文明の暴力、そしてその基礎に横たわる自然科学への盲信、さらに重要なことは研究者自体における人間としての主体性の欠如——そういった時代的な動勢を見いだすような気がしてならない。作家の秘密を解く鍵が、その作家の病跡学的研究にあるといった方法論などは、その明瞭な証左のように思うのである。

三

平和が回復するにつれ注目すべき大部の研究書が次々と世に送られた。若い世代の研究者の数は年とともに増加していった。近代文学研究はまだまだかつてなかった盛時を花開かせたような観がある。近代文学関係の古書は驚くべき高騰を見せ、作家の全集の刊行もまた枚挙に暇ない状態となっている。

この間にあって私の心に強い印象を与えたのは、「国木田独歩全集」(学習研究社)の刊行であった。これほど完備した作家の全集が世に送られたことは、これまでなか

ったことであり、おそらく将来においてもありえないことだろうと思う。独歩に関する断簡零墨に至るまであらゆるものが網羅され、作品はすべて発表誌に当たって細かに検討された。また彼の友人の日記まで新たに掲載され、追悼号の再録、写真帖の編成など、およそ考えうるものすべてが、五年間の努力によって集大成されている。だが、私の心を打ったのは、底に秘められた目に見えない努力の大きさだけではなかった。この全集は独歩の研究者に捧げられた研究上の基礎的資料という意味を持っているという点であった。ことばを換えて言えば、文学研究というものはこの全集から初めて出発すべきものであり、この全集における資料的な蒐集はその出発点を示すものであるということであった。資料蒐集と文学研究との間における一つの画線を明示したように私には痛感されたのである。

ちよとどそのことと対照的に考えられるような経験を、私は偶然にも最近味わったのである。それは研究者の主体性について顧みる機会が与えられたことを意味する。ひとりの作家をテーマにとりあげながら、いわば世代を異にする三人の研究者の間に、どんなに時代的な相違が見いだされる

かという問題が具体的に示されることになった。それらは伊藤信吉氏の「高村光太郎研究」と、吉本隆明氏の「高村光太郎」と、首藤基澄氏の「高村光太郎」の三冊であつた。

伊藤氏は明治に生まれ、萩原朔太郎・室生犀星に師事した詩人である。その詩人が自己の師とは対照的な存在である光太郎に全存在を賭して体当たりをしている。同質な要素が生み出す親近感、光太郎に対する深い体感となつて現われ、異質な要素は自己心内の落差として実感をもつてとらえられている。この両方の面はいつの間にか融合して、詩人光太郎の実像を生き生きと描写しているように感じられた。最近の著作である「鑑賞智恵子抄」は、まさしくその融合度の緊密さを明瞭に実証したものである。

これに対して吉本氏は、氏自身も語るように大正に生まれ戦時下になつた研究者である。したがつて光太郎に対してはある間隔をおいて見つめることができた。光太郎の生き方や智恵子との生活については、かなり苛酷に非情のメスが振るわれている。それに反して光太郎の戦争協力の問題については、氏自身がその渦中を生き抜

いてきただけに、深い同情の感じにあふれている。批判はもちろんなされてはいるが自己を裁くという思いが筆外ににじみ出ている。ただ単に民主主義という理念を概念として持ち込んだだけでは、容易に解決したい人間内面の秘密を解明している点に、私は共感を覚えたのである。

以上の二人に対して首藤氏は戦後に人となつた若い学究の徒である。光太郎の人や文学を特色づけるものとして、しばしば取りあげられる純愛の問題は、戦後に生きる首藤氏にはむしろ否定的に考えられている。そこには光太郎の愛の閉鎖性が強調されているのである。それに反して戦争責任の問題については、氏が客観的な立場に立つことが許されたからであろうか、光太郎の戦争協力の内的必然性がするどく見きわめられているのである。

四

人さまざまという平凡なことばがあるごとく、文学研究者には、それぞれ個性的な立場があるのであつて、いづれを是とし、いづれを否とするという決定権が私にあるはずはなからう。ただ私の感ずるところを正直に述べれば、戦後における文学研究

が、研究の基礎をなす資料的なものに偏しすぎて、文学を文学として考究しようとする主体性を欠いているという事実は否定しがたいと思う。したがつて、研究成果は目に見える実証的な世界にとどまりがちであつて、そこに知識の開陳のみを見せつけられるような実感が残されるのである。作家という宿命的な存在が、血と生命を賭してこの世に残してくれた文学作品に対して、研究者自体も必死の体当たりを敢行するという熱情が非常に稀薄なように思われるのである。

文学研究者というものは、明治・大正・昭和の数限りなくすぐれた作家たちを、はるか上方にあつて見降ろすような位置が特権的に与えられたものではなからう。あたかも神のごとき明晰な知性が賦与された存在でもないであろう。作家も研究者も、近代というこの困難な時代を生きてゆくという点においては、ひとしく人間なのである。したがつて、作家や作品を他人事ならず感ずるといふ謙遜な態度と、他人ではないがゆえに感じられる敬愛の念とが当然そこにはあるべきものであらう。もちろん、作家と研究者とは同一人ではない。その間には異和的な落差が感じられることは避け

がたいことである。そのような落差がどこから生じ、なぜに感じられるかという問題を、自己自身に十二分に納得できるまで探求してゆく、私はここに文学研究の本体を見ようとするものである。

文学作品は作家の血のにじむような人間探求の足跡である。私どもが絶えずそれに触れ考究しつづけてゆくということは、とりもなおさずそれによって私どもの人間性が深められ高められてゆくことを意味している。学者と呼ばれるような人々が存在することを否定することはできないであろうが、それは研究の出発点において目指すべ

きものではなく、結果としておのずから生じてくるものの意であらう。そして文学者とは文学によって人間的に磨きをかけられたものの別名であると思う。

現代を特徴づける機械文明によって、人間が疎外されることの危機がよく問題となるが、人間復興が現在に要請される重要課題とすれば、人間の学としての文学研究は、それに答えるべき大きな責任を負うていのではないか。近代文学研究が向かうべき指標も、その方向において求められねばならぬと私は信ずるものである。

近代文学研究が志向するもの

—その方法についての雑感—

久保田 芳太郎

最近私は、私自身雑学のせい、いろいろな分野での知識人によく会う。むろんそのなかには文学者もふくまれている。といって文学者とひとくちでいっても実のこ

ろ多岐にわかれていたのであって、外国文学研究家（英・仏・独）、批評家、ときには小説家や戯曲家たちと席をいっしょにすることがあるのである。そしてこれらの

人々と、文学をふくめてさまざまな話題をかかわすわけであるけれども、ふしぎなことに国文学のことはあまり話題にのぼってこない。いや厳密にいうと、万葉集や新古今、あるいは本居宣長などのいわゆる古典の類についてはしばしば口の端にのぼるのであるが、近代文学に関する国文学者の仕事についてはあまり話題にのぼらないのである。けれども一歩ひきさがつてかながえてみるとこのことはなにもふしぎなことではないのかもしれない。もともと会話というものは、その時点々々で時流にそくした材料が話題にのぼることが多いし、またそれにくらべて国文学者の研究というものは時流をこえた地点で地道になされ、またなされつつあるものであるし、さらに古典がしばしば回顧されるということは、古典というものはいわば私たちの胎内ふかく流れている根源的な血みたいものであるせい

か、時流とかということと関係なしにふたがいに折にふれて回顧されてくるのであるだろう。さらにまたいうと、作家や批評家たちと国文学者たちとの間には性格のあきらかなちがいがあがる。すなわちどちらかという、批評家や作家たちは現実の、文学の創造の場と直接的にふかくかかわっていて

おのれを前面に押し出すことにたいして、近代文学研究者たちは過去の、文学史の場とかかわってはおのれをさほどまでに前面に押し出さないし、また文学の創造の場とは間接的なかわりしかもたないし、あるいはもち得ない。おのれからそこには両者の差異が生じてくるゆえんである。

しかしながら、そうかといって両者ともいうまでもなくいずれも文学に従事するものであって、二者はまたどこかであいまじわらなくてはならない。とするとそれはいったいどこにおいてであろうか。それもまたいうまでもなく、文学作品の形象や文学者の性格と在り方およびそれらを通じての人間存在の問題とその認識の仕方をしてのことである。そうとすれば、まえのこととをくりかえすと、批評家、作家は文学の作業におのが主体をとおして直接的に参与し、近代文学研究者はそれに研究をおして間接的に参与しているということになるであろうし、また事実それが実状でもある。だがしかし、そこにすこしばかり疑惑を感じる。その疑惑とは、近代文学研究ないしそれを専攻するものにとつてこれによいのであろうかというものであり、いわば欲ばつたのぞみともいうべき性質のもの

である。が、はたしてこのかんがえ方は欲ばつたのぞみとのみいきれるのであるらうか。というのは、近代文学研究そのものの地道な在り方にたいして文句をいうつもりはすこしもないのであるが、もうすこしなんとか研究そのものが文学創造の場に参与出来ぬかというのぞみをもっているからでもある。さらにもうひとつには、過去における卓越した研究書は、かつて文学創造の場に参与したしまた現に寄与しているからでもある。

もうすこし問題をほりさげてみよう。別言するとさきの批評家、作家はおもにそれぞれ感性を中心とした主観で勝負するのにたいして、近代文学研究者ないし国文学者はおもに理性を中心とした客観で勝負しようとし、したがってその仕事は必然的により科学に接近してくる。この傾向は、世にいわれている実証主義派（文献派・書誌学派・訓詁派）にあてはまるであろうし、さらにある意味ではいわゆる歴史社会学派にもあてはまるであろう。ところがここにひとつの疑問がのこる。それは、はたして文学研究もしくはその方法がほかの人文科学部門における経済学や社会学などと同様に、純粹に科学として成立しさらに定着し

得るものであるかどうかという問いかけでもある。そうするとそれは実際どうであらうか。文学研究もしくはその方法は純粹な意味での科学になり得ないというのが私のいづくかんがえである。なぜかというその理由はいろいろあると思われるけれど、端的にいうと文学とは、作品形象を通じての人間の存在と本質ならびにそれらについてのヴィジョンに属しているものであり、したがって人間性の深奥部から発しているものである以上、方法論がすべてであるといわれる科学にはとうぜんなり得ないとかんがえられるからである。もしそうとすると、実証主義的な科学により近接しようとする近代文学研究ないしその方法や、マルキシズムにより則しようとする唯物論による文学的方法などには、その科学性の度合においておのれから一定の限界があるというべきであろう。

そうかといって最近の国文学界（近代文学）における実証主義的な動向を駁めるつもりはあまりない。いわゆる「学」と名がつくものである以上、資料のたんねんな蒐集とそれをとおしての対象（作品・作家）の客観的把握というものが絶対不可欠のことであり、その操作もしくは方法なくしては

ただたんなる解釈学や印象批評の領域にとどまるのみであろう。しかしながら、そこでちよつと留意しなくてはならぬことは、資料や研究材料の蒐集ということはあくまでも対象を全的にうきぼりにしようとする目的のための手段や方法であるというところ、そのことをなによりもまず明確に自覚しさらに意識化することが大切なことではあるまいかということである。なんととなれば、最近は一方においてややもすると資料の蒐集だけの実証をもって国文学者の主要な任務は万事終れりとする風潮が生じてきているからである。むろんこの方面においても精緻な仕事がつぎつぎとなされているし、それらを評価するのにやぶさかでない。といって、これらもよかれあしかれ方法をもって目的とする一種の倒錯が行われているといえる。というのは、そこには客観的な資料の蒐集と配列が行われている

も、より高次な、対象把握のための価値体系の構成が行われていないということである。その価値体系とは、資料にたいする価値判断すなわち、いってみれば客観をおおしての主観から生じてくるものである。し、さらにまたその主観とはそれぞれ独自の視点とかいっただものである。なにはともあれ文学研究において、価値判断を失ったものは獲物を見失った狩猟家ともいうべきであつて、かんじんの目的を喪失しているのである。

さらにまたいわゆる実証派の系統についていうなら、それは十九世紀におけるコントらの実証主義に端を発していると思われが、ただそうとばかりいえない面がある。それというのも、古くから国文学研究が書物(古典)における実証主義ともいべき訓詁注釈の学とされてきた、伝統からも由来すると思考されるからである。といっても古典研究における訓詁注釈の、先人たちのすぐれた業績は、ただたんに訓詁注釈の領域内のみにとどまっていたわけではけつしてない。かれらはそれぞれ訓詁注釈をおして、つねに対象たる全体像を正確に把握しようとするところをけていたのであつた。したがつてたとえ、一見訓詁注釈に終始していたと見えようとも、いつもそれをつきぬけようとする価値判断ないし視点をもつていたのである。そのもつともよい例が本居宣長であるだろう。人もよく知るように、その精緻な訓詁注釈の方法はものみごとに『古事記伝』で結実し、よく『古事記』全体の高邁なヴィジョンをうみ

出し得たのであつた。というの、人なみすぐれた秀抜な視点というものを、かれが内蔵していたからにちがひなかつたからである。

では、なぜ文学研究にとつて視点というものが必要となつてくるのであろうか。そつ直にいつて視点とは、各研究者がそれぞれ対象(作品・作家)にむかつてあい対峙している場合の態度であり、かつ角度にほかならない。元来文学研究といえども、その根柢には、各個人が作品をよみ、そこから伝達されてくるものを受けとめるいう営為がある。したがつてそこでそれを受けとめる享受の仕方、すなわち、その作品がおのが感性などのうえにどのような影をおとしたかということがとうぜん問題となつてくる。いわばこのようなことがめいめい基礎体験としてあつて、その個別で特殊な基礎体験を理性的作用によつてより普遍的なものまでに押しひろげようとする欲求が文学研究ともなりあるいは批評ともなるのであろう。といつてももちろん、その普遍化は対象たる作品・作家を仲介してのことであり、そこに対象をより明確に、より鮮明に捕捉しようとして方法が編み出されてくるわけである。さらにまた、

くりかえすとその個別的なものを普遍的なものへとひろげ昇華しようとする過程において方法が適用されるのであるが、その方法を統御し統一して行くためにはおのがじし基準すなわち、視点というものがどうしても要請されてくるのである。しかしその基準ないし視点というものは、おのれの内面の側みに主観的にあるのではなく、対象のうちにも客観的にあるものとかがえられる。とするとふたつの基準ないし視点があるようであるけれども、この主観的基準と客観的基準とを統御し止揚して形成されてくる基準ないし視点こそほんものであり、また文学研究に光彩あらしめるものである。そしてなおそこでいえることは、批評はより以上主観的基準に出来るだけ忠実にありとうのたいして、文学研究はより以上客観的基準にたいしてそのようなのである。といてそれもまたこうといった劃然たる区別があるわけではなからうし、やはりそれも結局は程度の問題に帰着するような気がする。しかしいづれにしてもそれぞれの方法をもちまたそのための基準や視点をどうあらうともつべきであるだろう。そうでなければ、文学研究がたんなる資料蒐集のみでおわってしまつて、ついに

はなんのための研究かということにもなりかねないからである。

いままでも近代文学研究における実証主義的な傾向およびその在り方についてあれこれといつてきたが、要するに実証そのものが悪いわけではなく、それが瑣末主義に堕することがいちばんいけないことなのである。ところでこの国文学界や近代文学研究界における悪しき風習について、それを助長させた原因についてももうひとつのことがかんがえられる。すなわちそれは、近代文学についての研究ないし批評がなにも文学畑の出身者や国文学者でなくとも、こと文学に親炙する者は誰でも出来て（このことはわかりきつていて、あたりまえのことであろうが）、社会の進展にもなう分業化ないし専門化がしだいにすすむにつれて、近代文学研究者や国文学者はいよいよもつぱら資料蒐集などの実証的な作業にうちこむようになったのではないか、ということである。換言すると誰でも文学についてかたり批評し得るような状況において、いわゆる批評の基準もしくは視点とかいいたものがはなはだあいまいになつてしまつて、客観的の蔽としてある資料のみが不変の価値をもつという見方もあつて近代文学

研究者はひたすら熱心に資料あつめのために没頭するようになったのではなからうと思われるのである。さらにまた、こうしておのれの専門を特殊化することによって自分の存在理由あるいは生活手段としての職業を成立させているのではないかとかんがえられる。しかし、多分この私のかんがえはまちがっているであらう。なぜなら、目的（対象）を失つた資料蒐集は、これもまた近代文学研究者たらずとも出来るからである。

以上いろいろといつてきたように、最近近代文学研究の形態もしくは方法がますます実証的に精緻になつてきている。そしてそれはそれとしてよいことであるし、さらにのぞましいことでもあらう。しかしいまいち度くりかえすと、それはあくまでも手段ないし方法なのであつて目的ではけつてない。目的とは、いうまでもなく対象（作品・作家）を、正確に、鮮明に究明することである。そうかといつてむろん恣意的な主観的解釈や批評はさけるべきであらう。そこで近代文学研究者によつてしか出来ること、すなわち対象にたいして実証を媒介としての論理（帰納と演繹）をふかめ、しかもその論理がより高次な視点を獲

得して行くということ、そしてこのことを意識化し方法化することで対象そのものの究明を、より明確に、より鮮明にすることはなかるうか。さもないと、ただたんなる資料蒐集一辺倒では、近代文学研究者やその仕事そのものもいよいよ現実における文学創造の場から遠ざかるより仕方がなくなってくるであろう。が、それはそれでもよいという見方もあるであろう。しかしながら文学とは人間の根源的な営為と存在に根ざすものである以上、それに専門的な文学研究者たちもなんらかのかたちで参与すべきであろうし、また参与し得るのである。それにはまず、しばしばいったように研究においてめいめいによる視点の獲得、それによる真の価値体系の樹立こそ、なによりもまず前提となってくるのではあるまいか。

非公開

近代文学学界的動向（一九六八年後期）

山 崎 一 穎

序

研究を進める上で必須だと思われる基本的な文献の刊行を記しておきたい。

『近代日本総合年表』(43・11)は、一八五三年のペリー来航から一九六七年迄を六部門に分け、一年を四ページに収録している。特記すべき事は典拠文献を記載している事である。(西田長寿「年表を編む」(図書)43・9)、山住正己「近代日本総合年表のこと」(図書)43・11)、遠山・西田・植手・山住「近代日本総合年表」一夕話」(図書)43・12)等が参考にならう。また、『日本出版百年史年表』(43・10)へ嘉永4〜昭和42年Vの刊行も重要である(『読書人』(43・10・7)―「年表」編集の苦心と意義」を特集している)。

「思想の科学」(42・12―No.70別冊臨時増刊が総索引(創刊号から一九六六・二月迄・二三七冊)を人名別、論文別に収録している。この雑誌に關していえば、会員に配布している小冊子『一九六八年版・趣旨と活

動』(43・4、非売品)も参考資料とならう。「言語と文芸」も既刊分類総目録(『言語と文芸』第60号、43・9)を出している。

全集の完結について言えば、『三好十郎の仕事』(全四巻、43・11)と、『正宗白鳥全集』(全二三巻、43・12)を挙げなければならぬ。なお、大武正人『小説・私の三好十郎伝』―「孤絶よりの出発V(43・6)も注目したい。

『昭和批評大系』(全四巻、43・8)は『現代文学論大系』と合わせて、批評のアンソロジーとしての意義は大きいと言わなければならない。編集委員による座談会(月報)も注意したい。また、児童文学のアンソロジーとしての『作品による日本児童文学史』(全三巻、43・12)刊行の意義も大きい。なお再刊としては、日夏耿之介『明治浪漫文学史』(43・11)、服部達評論集『われらにとって美は存在するか』(43・10)があり、刊行中であるが『日本プロレタリア文学大系』も付記して置きたい。

総論

幕末から明治期の文学

入手出来る限りの論文を展望して見て、今期は明治・昭和期の文学に関して、精彩のある出色の論考が見られた。多くの論文を閲読して、自戒の言葉として次の事を記るして置きたい。

- (1) 作品なり作家なりに対し、どういう態度で切り結ぶか、と言ふ問は常に問い続けられなければならない。なぜならば、今や「政治の季節」であり、「文学の季節」でなくなりつつある。その中心にあつて「文学する心」を持ち続けるためにも。
- (2) 特に若き学徒は先行論文とじっくり対決をすること。明らかに水準に達しないものが多かったのは残念である。それは研究史を踏えていない所から来ているし、例え、踏えてはいても簡単に否定し、独断的な論（それが説得力のある場合ならともかく）に陥っているが目立つ。
- (3) 要は作品をどこまで深く読み取るかに懸かっている。その点で、越智、佐藤勝、野村、竹盛、三好、小笠原、磯貝氏等の論文は視座に据えてかかる必要がある。
- (4) もっと内容へ主題Vと形式へ方法Vと言う点に留意しなければならぬ。論理の展開が荒かったり、抽象的過ぎたり、時とするに牽強付会であつたりして説得力を持ち得ていない。
- (5) 論述が難かし過ぎる。畢竟論者が自己の内部の問題として十分発酵させ、対象を領略していない事に起因していよう。秀れた論文は、平易な叙述に高度な内容を盛り得ているではないか。

総合的なものとして、「唯物史観」(第六号、43・8)所収の「明治における近代の形成」に関する諸論文、座談会と、『明治文化研究』(第一集、43・5、第二集、43・11)は留意すべきである。また、松田道雄「文学における近代とは何か—明治の文学—」(『日本文学』43・11)も興味深い。その他、柳田泉『政治小説研究(下)』(43・12)、藤田美実『明治の人間像』(木下尚江、赤羽巖穴、手塚健蔵V(43・11)を挙げておきたい。

前田愛「幕末の文学状況(1)」(成蹊大学文学部紀要)第四号、43・12は、注目すべき論文である。頼山陽の『日本外史』が「歴史に導入した非合理の契機」(楠氏一族の怨念に執着し、その主観的な歴史解釈は鎮魂者として徳川氏頌徳の一文を加筆したこと)を指す)は、朱子学的な合理主義につらぬかれ、自己充足的に安定した封建的世界にとつて、きわめて危険な毒に転化する可能性をはらんで「おり、「徳川氏頌徳の一文を以て、彼の歴史が当代に収斂し、連続体として完結すること」になったと押えている。そして、「盛極萌衰」のアイロニイを自覚的なものとして把握し、「主体と歴史の関係が流動的」で「歴史を変革する主体としての人間の発見を促す導火線となり得た」ことを評価している。一方山陽との関連で、大塩平齐の『洗心洞節記』を取り挙げ、「危機的状況」を看破していたが故に、それに対するに「客観的・合理的な歴史記述から排除された非合理的な契機」(「明末忠節の士のへ一念の烈Vへの執着」を指す)を導入する事によって、「心術の鍛錬」(「誠意」)の要請」を以つてしたのである

と論じている。しかも、山陽・中斉のアイロニイを理解し得た人物は、吉田松陰のみであったと論を結んでいる。この期の研究では杉浦民平『維新前夜の文学』が種々問題を投げかけてはいるが、頼山陽論は森銑三氏の指摘する如く、かならずしも満足すべきものでなかったが故に、また、この分野に於ては富士川英郎『江戸後期の詩人たち』の如く秀れたものが出ていないが故に。前田論文に注目し期待したい。

△福沢諭吉▽ 富田正文「新資料・偽版取締関係文書―全集未収録」と題し、諭吉の「翻譯書重版の義に付奉願書付」を紹介し、(図書43・10) 解題に於いて、願書の文体に見られる最大級の敬語の羅列を「新政府に対する不信の表われ」と見ている。また、新政府の係官に対する「教育的啓蒙的口吻」も窺えるとしている。更に『西洋各国事情』についても、版本を紹介して参考になる。同誌に土橋俊一「福沢諭吉と版權」と題し、先の資料の原本の紹介と、発見の経緯を記している。

△福地桜痴▽ 寺谷隆「福地桜痴小論」(龍谷大「国文学論叢」第十四輯、43・12)がある。この期の文学者、思想家を把える視座は中々困難である。かつて、越智氏は「内面に忠誠相対化の自発的な転回があったとみるべきだろう。しかも、怨念は彼の生涯に揺曳してやまぬ。こうした桜痴内面の劇を」追求することを提唱しているが、(『明治文学全集』11△福地桜痴集▽の月報「福地桜痴研究案内」)検討されなければならぬ視点であろう。資料紹介として、森縣「明治元年福地桜痴獄中弁明書」(『文学』43・11)は、筆禍事件の詳しい内容と桜痴の態度、当時の政府の微妙な時点の姿勢が窺われて興味深い。

△坪内逍遙▽ 「座談会・明治文学」(49) (『学苑』43・9)が、〃我が国史劇について〃と〃桐一葉〃についてふれている。今尾哲也「日本における演劇の近代化―坪内逍遙の場合―」(『日本文学』43・11)もある。なお、松島栄一「歴史劇における史実と虚構について」(『演劇界』43・7)もある。

△二葉亭四迷▽ 清水茂「『編浮雲第一篇』のテクストについて」(『大国文学研究』第三十八集、43・9)は、五種類のテクストを紹介し、その異同を報告している。明治文学もいよいよテクスト・クリテックの段階に入ったかと思うと感無量である。橋本威「『浮雲』論序説」(『広島大「近代文学試論』第六号、43・12)は、注目すべき論文である。『浮雲』の登場人物は「著しく誇張され、戯画化された類型」であると、何故に戯画化しなければならなかったのだろうか。それは「登場人物と『距離』を置いて彼等を眺めると同時に、登場人物への批判」をも含ませるためだったと捉えている。かように「直接的戯画」と「相互侮蔑、相互嘲笑という間接的戯画との二重構造」故に、『浮雲』の「先進性と卓抜さ」とがあったのであり、結局「二重の戯画化を生命としている『浮雲』」に存在する根源的対立は、△似而非西洋主義▽対△真の西洋主義▽であり、△似而非西洋主義▽対△作者▽である」と押え、「△文三方▽に見られる△似而非西洋主義▽の姿こそ、当時の、所謂知識人の正体だったのではなからうか」と見定め、「この知識人を批判することにこそ『浮雲』執筆の意図があったと論じている。そして、作者が想定した真の「西洋主義」とは、「お勢と文三との止揚された所に成立するものだったに違いない」と推測している。杉山康彦「長谷川二葉亭における

言文一致」(『文学』43・9)も、好論文である。氏は言文一致の本質について、「表現主体が表現対象と切り結ぶ主体的な位置関係の確立の有無」にあることを押え、二葉亭の翻訳文学の卓抜した主体と、『浮雲』の作中人物に関わる作者の主体とを文体の上から緻密に分析し、その落差に『浮雲』中絶の要因があったと論じている。他に関良一「『浮雲』の時点」(『古典と近代文学』創刊号43・10)がある。十川信介「いやといふ事―『平凡』について―」(『文学』43・11)が「平凡」は、文学の否定を、当の否定すべき文学によって行うという矛盾の下にはじめて肯定され、構想された『真面目』な小説」であると押え、「真面目」に生きることの実態は、本来の面目Vたる「いやといふ声」に従って生きることにならない。当初に肯定的なひびきを帯びていた「真面目」は、構想の進行とともに、ようやく否定的容貌をあらわにし、遂に思想拒否、文学否定に到達せざるを得なかった道程を問題にしている。

△下田歌子V 山口典子「下田歌子の結婚前後―父・夫・歌子の書簡をめぐって―」(『実践女子大学文学部紀要』第十一集43・9)は、未発表書簡を翻刻紹介している。

△陸羯南V 「みずず」(112号、43・9・10合併号)所収の丸山真男・西田長寿・植手通有「近代日本と陸羯南」△座談会V、岡和田常忠「陸羯南とジョゼフ・ド・メーストル」、木村毅・柳田泉・西田長寿「陸羯南とその周辺」△座談会Vは、大変興味深い。

△石橋忍月V 嘉部嘉隆「石橋忍月研究」(1) (『植藤国文学』6号、43・11)は、研究史展望の段階であるが、今後を期待したい。

△幸田露伴V 宮嶋一郎「天理図書館蔵 露伴全集未収書翰について」

(『ヒブリア』No. 40、43・10)は、六一通(米光亀次郎宛のものが多数)の紹介、翻刻している。塩谷賛「幸田露伴」(『全三巻』43・11)が完結したことは特筆してよい仕事であろう。

△尾崎紅葉V 岡保生「尾崎紅葉の生涯と文学」(43・10)所収の『金色夜叉』構想の原拠」は、比較文学の面から照明を当てていて、興味深い問題を提示している。なお、同氏は「小栗風葉伝」を「学苑」に連載していることも付記しておきたい。

△泉鏡花V 大石修平「泉鏡花論考」(43・10)は、鏡花の世界を「憧憬と反抗に根ざすVところの△感情世界Vの、いわば畸人性・反日常性の△迫真V的な表現として、―そのような△名文Vもしくは△悪文V、その△布置に、章句にVおける△估屈晦渋Vさ、また、△趣味Vもしくは偏奇のごとく見えるもの等々の、およそ瑰詭として冗雑なるもの」と抱えている。村松論文と対置される秀れた論考であり、今期の収穫の一つである。村松定孝「泉鏡花『湯島詣』考―逗子書庫所蔵草稿と刊本の異同―」(『上智大『国文学論集』43・10)に於いて、「原型の断片(八種)に僅かな前後のあるものを鏡花は最初にしたため、それに基づいて『段階子』『言語道断』『狂大源兵衛』の後半を仕上ったもの」と推定している。つまり、「サワリの部分」から書き始めたと言っているが、「恋の渦中にいた作者が己の修辭を信じ、体当りで書いた、自己の生命力と芸術衝動の可能性を十二分に発揮した力作」だと結論をくだしている。

△広津柳浪V 塚越和夫「『変目伝』の成立」(『日本文学』43・8)も注目したい。

△樋口一葉V 塩田良平「樋口一葉研究」が増補改訂版を出してい

る。松坂俊夫「『にこりえ』—草稿の検討—」(『国文学』43・7)は好論文である。数多くの草稿の検討を経て、「一つの原構想が少なくとも『にこりえ』『十三夜』の二つの作品に分化結晶していった」ことを大前提に押えている。そして、「構想も途中から変容」し、「『無題』の『奥様』の上に精神的自画像を重ねてお力を創造し、△且、那樣—奥様—源七—お初△の人物イメージとその関係を△結城朝之助—お力—源七—お初△と再構成したとき、現『にこりえ』の構想は成立した」と捉え、構想の変容も人物イメージの二重性も一葉の作家方法に起因するとしている。手堅い作品領略をみせている。川淵美美「『にこりえ』論」(『福岡女大「香椎湯」第十四号、43・8)、野口碩「樋口一葉日記成立再考」(二)(『国学院雑誌』第六十九卷第七号、43・7)もある。

△北村透谷▽ 野山嘉正「『内部生命論』における世界観の変質—透谷試論—」(上・下)(『国語と国文学』43・8・9)は、『厭世詩家と女性』に於ける△想世界▽から『内部生命論』の△内部世界▽への推移を、△「自造的」な世界▽から△「自造的ならざる」世界▽への移行と押え、かような透谷の内部世界の変質の事情、及びその文学的思想的な意味付けを、透谷に於ける内在的契機(世界像の持ち方、外在的契機(人生相渉論争)の両面から捉えた論文である。小沢勝美「北村透谷像について—平岡・色川・樋谷氏の問題提起を中心に—」(『日本文学』43・9)は、色川論と平岡・樋谷論とを対置させ、丸山静氏の論文を導入しながら、特に平岡論が「暗い透谷像」と整理してしまった所からくる「戦う透谷」を欠落させているのではないかと論である。これに対し、平岡氏の反論—「透谷像について—小

沢氏の『整理』に反論する—」(『日本文学』43・11)が提出されている。透谷論の難かしさはどう捉えても何かが欠落して来るし、そこを埋めようとするとし色川論文に見られるように拡大解釈になる恐れが生じてこよう。それは透谷自身の持っている矛盾に起因しているし、矛盾を矛盾のままどう止揚すれば、真の透谷像が把握できるかという事が問題であろう。その点で平岡論文はその努力の結実だと評価してよからうし、更にその地点からの検討が望まれよう。

△高山樗牛▽ 小野寺凡「高山樗牛伝記研究ノートから—(安田学園研究紀要)第9号、42・7)は、樗牛の本質を「なぜに、△ディオニソスの▽であった」(岡崎義恵氏が「ディオニソス的」なものとみている)のかという問題意識から出発をしている。「一筋の光明を見出し難く、やるせない厭世からくる暗い悲哀感に満ちた、センチメンタルな『滝口入道』や『わがそでの記』を「まぎれもなく樗牛の生地」であったと述べ、そして、その生地故に「無意識のうちに勝者へ己を導かずにはすまないとする方向へ、—「幼少期から一貫として培われて来た△自己の存在を實質以上に評価して欲しいという強烈な欲求▽—と赴かなければならなかった必然があり、いわゆる『日本主義』なるものも「主我主義」の深化、転進であったのであると論じている。

△内田魯庵▽ 野村喬「民友社と不知庵—内田魯庵伝ノート(三)—」(『青山学院女子短大紀要』第三号、43・11)は、堅実な論文である。魯庵と鷗外との間の未発表書簡の紹介や長沢別天についてもふれていて興味深い。

△徳富蘆花▽ 中野好夫「蘆花徳富健次郎」(『展望』43・10)「蘆花

探訪拾遺」(『文学』43・10)は連載中であるが、伝記を構築して行くための年譜等の細かい所に歟を入れており「アラビヤのロレンス」や「チャプリン自伝」等の仕事をしてきた氏の面目が躍如していて、注目すべき研究である。蘆花に関して言えば、古在由重氏が「明治の女―清水紫琴のこと―」(『國書』43・9)と題し、母の回想を記している。

△高浜虚子▽ 相馬庸郎「小説『俳諧師』の位相―高浜虚子論―」(『文学』43・11)は、注意してよい論文である。△俳諧師▽と言う言葉を「疎外された、ゆがんだ生涯」を意味するものと規定し、「自己の属する世代の青春群像」を追求しようとしたのであると押えている。そして、三蔵(俳諧的生涯)が十風の(敗残の性格)を理想像として関係は、続篇の春宵が文太郎を理想像として関係に対応しているが、(正)から(続)への接続に微妙な差異を認めている。即ち、正篇が△青春小説▽であったのに対し、続篇は春宵の俳諧師として立つ決意を通して、△芸術家小説▽としての性格が色濃く出ているし、表現方法も△写生文的方法▽から△内面的叙述・透徹した客観性・モラリシユな姿勢▽への転化がみられる。畢竟「虚子の作家として立つ覚悟と、決意の表出」であると論じている。従来等閑に附されていた分野だけに、相馬論文を土台にして、総合的に把握された虚子論が展開されなければならないだろう。

△国木田独歩▽ 『国木田独歩全集』(全十巻、42・9)十巻・資料編に収録されている「水谷日記」「富永日記」「尾間日記」、並びに月報「独歩全集を完結して」は高く評価してよいと思う。注目すべき研究では、坂本浩「独歩文学の位相」(『成城国文学論集』第一輯、43・11)が

ある。氏は独歩の本質を作品を通してさぐり、「鎌倉夫人」は書簡体であり、「酒中日記」は日記体である。「運命論者」「正直者」「女難」は物語体である。そこに独歩の主観的感動を客観化しようとする時に起こる止むをえない必然が看取される。わずかに『鶉死』『竹の木戸』だけが客観描写の形体を取っているが、これは独歩の肉体を食い尽くそうとする肺患が、彼の浪漫精神を次第に衰弱させていった何よりの証左と見ることがができる」と規定している。そして、独歩の本質を「浪漫精神にある。それ以外にはありえない」とし、「△独歩文学の位相▽は、彼を自然主義の範疇から引き離し、浪漫主義の代表作家の位置に連れ戻すことに求められねばならぬ」と断言している。視座に入れなければならぬ論考であろう。その他、栗林秀雄「『源叔父』論」(立大「日本文学」第二号、43・12)がある。

△自然主義文学関係▽ 岩永胖『自然主義虚構の可能性』(43・10)は、田山花袋研究を中心に発展させたものである。また、「解釈と鑑賞」(43・9)が△自然主義と反自然主義▽(付「自然主義・反自然主義」回想文献抄)の特集をしている。同誌の中では谷沢永一「風俗小説論」の論が大変興味深い。氏は『風俗小説論』の発想の源流を「平野謙を経由して、昭和十年前後における服部之総の△巖・マニ・時代▽説提唱に具現されている、日本マルクス主義理論史上のひとつの思考定型に発するもの、時代とジャンルを隔ててそれを踏襲したもの」と規定している。榎本隆司「自然主義評論」(角川「国語科通信」No.9、43・10)は、「早稻田文学」を中心とする自然主義評論の成立過程に焦点を当て、「確立されるべき自我を、ついにそうした(日露戦後の矛盾した社会状況)を指す)客観的諸条件との相剋

の中で、十分に論理化し得なかった」所に位相を求めようとしている。同誌所収の山田晃「詩から小説へ―島崎藤村―」は、同氏の『緑葉集』から『破戒』へ（『国文学』39・6）と併せ読むとよい。特に後者は『緑葉集』を丹念に分析してみせている。正宗白鳥に関しては、まず兵藤正之助『正宗白鳥論』（43・12）がある。白鳥にとって文学との関わり合いは常にキリスト教への「郷愁」を誘う契機であったとし、その生涯が俯瞰されている。松原新一「正宗白鳥」（『文学』43・10）も白鳥の一生にキリスト教へのたえまなき牽引と反撥をみながらも、彼が信仰からは決定的に断絶しているとし、そこに「神秘」を失った「近代」の宿命をみている。更に、白鳥に於ける「死」の問題を取り挙げながら、その「死」のイメージが終始自己の死のそれであり、どこまでも「自己愛着」の領域を出ないとして、そこに彼のキリスト教との関わりに於ける「ある重大な錯誤」を指摘している。佐々木雅発「正宗白鳥とキリスト教―棄教について」（『国文学研究』第三十八集・43・9）は、白鳥の棄教を「神意の盲信から技術の重視」という時代思潮の反映と見て、白鳥における唯物的な発想を、時代の趨勢に強いられた逆説的な「決意」だとしている。いずれにしても、論議がキリスト教の問題に集中していて興味深い。和田謹吾「近松秋江論―後期自然主義文学の発端―」（『北大人文科学論集』第六号、43・7）は、『執着』を『別れたる妻に送る手紙』の続編であるとともに『疑惑』の前編であるとし、一貫とした連作として扱っている。その間の差異を丁寧に分析することによって、「自己の醜態をさらけ出すという自虐性においてかち得た事実の確認」ということで秋江文学が一つの結着に到達し得たということは注

意しなければならぬであろう。そして、そこに私小説の典型ができてきたということ、後期自然主義文学の発端として重要な意味をもっている」と論じている。注目してよい論文であろう。伴悦「岩野泡鳴の『放浪』『断橋』『憑き物』試論」（『日本文学』43・7）もある。

△永井荷風▽坂上博一「永井荷風ノ―ト―『監獄署の裏』をめぐる―」（『文学』43・7）は、『ふらんす物語』の延長のような全篇に漂う悲愁の中に「家の問題」（親子血族に対する問題）「職業撲滅の問題」に於ける因襲的絆を断ちながら、自己を毒草と規定することにより、ロマンチックな純度を保ち得たのであると述べている。論そのものより、研究方法論上いろいろと考えさせられる問題を呈示している。即ち、作家論としてまとめる時には、様々なものを導入し、総合的に把握しなければならぬわけだが、まずその作品の成立の場で考えなければならぬだろう、その意味で、作品内部を忠実に読み取るうとしている論文に中島国彦「帰朝直後の荷風作品」（『日本文学』43・7）がある。明治四一年のうちに書かれた『狐』『曇天』『監獄署の裏』『深川の唄』の四編には「何とも言えない暗い淋しさ」がある。それは作者の「視点が内へ内へと向かっていて、自分自身や自分の置かれた立場に目をやっている」からであるとしている。しかし、『歓楽』（42）以後の作品では、荷風の感情は「外側に向かつて開いて」いて、「感情の激しい動きがそのまま作品の中に現われていて、そこに一種の生氣が感じられる」と扱っている。坂上論文との関わりで見ると、『監獄署の裏』を「この作品に社会や家庭への批判・反抗を見ようとする意見は、この作品の前半のみし

か捉えていない」とし、「後半の方が作者の心情をよく捉えているのでありハ淋しさVが一層はつきり示されている」と押えている。そして「淋しいという感情を核に置くことよって、主人公を極度に限定された場所にすえるという構想と、手紙文という叙述によつてハ純化された淋しさVを表現し得たのである」と論じている。木目の細やかな好論文である。今後「淋しさ」の掘つて来たる所を突き止めて行けば、全体が大きくなってこよう。その他、同氏の「荷風の『歓楽』について」（早大「文芸と批評」43・10）、網野義紘「在仏時代の永井荷風」（立大「日本文学」第二号、43・12）、坂上博二「最近における荷風研究の展望」（国文学）43・10）がある。

△夏目漱石V 今後研究の視座に据えるべき密度の高い論文が集中している。総合的に「解釈と鑑賞」（43・11）がハ漱石と明治Vを特集している。同誌の越智治雄「父母未生以前の漱石」は、『夢十夜』論を展開している。『夢十夜』の連夜の夢を貫く基本的なモチーフを「父母未生以前の漱石をこそ漱石は追いつづけている」とし、一夜ごとに夢を分析している。夢を操作しているのは作者に違いないが、「後半に至つて夢みる主体はハ自分Vの場より客観化」して来、「表現主体の自己意識が明確になってくる」と把えている。そして、そのことは「われわれの日常的な生そのものの相貌に関心が移りつつある」ことを意味しているが、ライトモチーフは変化をきたしてない点を強調している。そして、「生そのもの」とは、自覚の場が「二十世紀の日本の現実」であり、「漱石の直面しているのは一つの統一的な世界の崩壊と、それに伴う不安だった」のであると結論を結んでいる。また、同氏は「喜劇の時代―『虞美人草』―

（早大「人文科学科紀要」第46輯、43・9）に於いて、テーマは「悲劇を成立させること、いわば現実に対する意識の勝利を自論むことにあつた」のだが、創作の過程で「自己否定が行われ、自己発見に達する」という屈折をみせたが故に、テーマが変質し、「現実が意識に打ち勝ち、作品が喜劇に転ずる予兆」を内包していたと指摘している。そして、むしろ、その点に漱石の現実認識の深化を認めようとするのである。更に、同氏は「硝子戸の内と外」（国語科通信）No. 11、43・12）に於いて、作中の「私」と現実の漱石の残した記録を併用しながら論を進め、「ハ玲瓏透徹Vを希求する漱石の内部にもまた一枚の硝子戸がある。その一枚の硝子戸は内部世界と外部世界を隔ててはいるが、内部の漱石をも外部の現実をも映すことができ。自己をも他者をもゆがみなく見とおす、虚無の自由な目。かつて漱石は原則を喪失した世界を、分裂を余儀なくされる人間を描いてき」て、ようやく「近代人を包括的な小説の世界に定着する視点を手中にしようとしているかにみえる」と押えている。そして、内部と外部の世界は「道草」に於いて、明瞭につながると述べている。中々興味深い問題が提起されている。相原和邦「『道草』の成立について」（文学研究）Vol. 28、43・12）は、『道草』が「猫」執筆前後と『道草』執筆直前に材を取り」しかも、これらの素材と質を異にする作品が描かれた内的契機に言及し、両時期の「厭世的・厭人的発想が醸し出している」精神的状況の近似と、「両時期の精神状況からの脱却の試み」こそ、作品の根本的モチーフであったとハ作品Vとハ日記及断片Vを分析しながら論述している。これは注目してよいのではないか。更に論を進め『心』に於いて、「ハ意識Vのう」えて

論理に \wedge 死 \vee を選んで、 \wedge 観念 \vee の世界で先生を死なすことはできても、それは本質的な解決になりえず、現にある自己は依然として生きざるを得ないという厳然たる事実—エモーショナルな生の現実に想到したとき、漱石は、あらためて \wedge 生 \vee の原理をおもむろに追求し出さねばならなかった」のであり、「『道草』はこの延長線上に誕生したのである」と論じている。このような考え方は坂本浩氏も提出していることを付け加えておきたい。『夏目漱石』 \wedge 学燈文庫、29・3 \vee 高校生向きに書かれたものであっても、筆者の手柄を反映したものは秀れたものがあるので注意したい。例えば、旺文社文庫の『心』の稲垣達郎氏の解説などは注目すべきである。『心』の伏線と漱石の視点を解明しているのだが、その解説のなんと伏線の巧みなこと、一種の読み物に成り得ている。高田瑞穂「『道草』の人生」（未巻）（成城国文学論集）第一輯、43・11）は、漱石の追求し続けた主題の一つは「家」の問題であり、『道草』に至って始めて現実的表現を生んだのであることを枕にして、健三をめぐる経関係が究極に於いて「エゴイズムの対立」であるのに対して、その緯関係は「エゴティズムの対立」であったと把えている。そして健三は「片付くなんてものは殆どありやしない」という認識に立って、人生を「片付けた」のであり、「一遍起つた事は何時迄も続くさ」という裁断を、根底から再検討を迫られた所に『明暗』が生まれる必然があったと述べている。なお、付記で『道草』のリアリズムの究明と、『則天去私』的心境の究明の上に立ち、文学的位相の再確認を果たし得て、『道草』論は完結する」と述べているが、今後を期待したい。内田道雄「漱石の作品—四篇を中心に—」（『古典と近代文学』

創刊号、43・10）も注目したい。『漱石四篇』を取り挙げ、四篇を統括するテーマを「現在と過去との交錯」と押え、「自己の心の深遠な秘密の奥底に分け入り」「人間を支えるものとして無気味なものも不可解なものも剔出して見せ」たのであると述べている。そしてかような方法を取ったことを「恐らく漱石の自己の存在論的関心であろう」とし、それは長篇小説へ向う「原点」だとしている。松尾尊允「一九一五年の文学界のある風景と最晩年の漱石」（『文学』43・10）は、一九一五年の馬場孤蝶の衆院選立候補をめぐって、堺枯川・生田長江等と共に動いた漱石の視点を押え、講演「私の個人主義」がこの孤蝶を支援する為の文壇人のアピール誌「現代文集」を初出であることを突き止め、大正デモクラシーを背景に漱石の社会主義思想を論じている点で注目すべき論文である。重松泰雄「三四郎の覚醒—諸説に触れつつ—」（『国語科通信』No. 11、43・12）和泉久子「漱石の書簡—考—式場益平宛書簡—」（『文学』43・7）も参考になる。吉田六郎「吾輩は猫である」論—漱石の「猫」とホフマンの「猫—」（43・12）は、板垣、秋山説を否定した秀れた論考である。

\wedge 森鷗外 \vee 総括的なものは先に挙げた「国語科通信—漱石と鷗外—」がある。同誌所載の小堀桂一郎「妄想」小論」は、学問を生かす「零囲気」、「洋行帰りの保守主義者」の意味を、鷗外訳『冬之王』や『洋学の盛衰を論ず』を導入することにより、『妄想』の読みを深くしている。また同氏は「森鷗外のドイツ留学」（『ノイエ・シユティンメ』9号）という好論文を発表している。平川祐弘「鷗外と der Veine Widerstand」（『東大比較文学研究』第十四号）が、クラウゼヴィツの『戦論』翻訳などにみられる鷗外の軍人としての面の作品へ

の投影を、戯曲『なのりそ』を例にして報告している。小堀・平川論文にみられる比較文学的方法はますます注目しなければならぬであろう。竹盛天雄「漱石と鷗外—明治天皇の死と乃木殉死への反応—」（『解家と鑑賞』43・11）が、「鷗外は日本の近代化にあたって、遠距離目標と近距離目標とのパス・ペクティブを具備することを余儀なくされた知識人であった」と把えている視座に注目したい。氏の鷗外論が動きつつあることを示唆している一節と受け取ったが誤りであろうか。また同氏の「最後の一句」おぼえがき」（『国語科通信』43・12）も、随所に原史料との関わり合いで読みの深さを散見させている。清田文武「鷗外における小倉時代の意義—『易』との関係を中心に—」（『東北大学日本文学論稿』第2号、43・7）は、鷗外と根本通明との関係から「易」に及び、小倉時代の意義へ待つこととVを見定めている。亀井雅司「『雁』の読み方」（『京都女子大』『女子大国文』51号、43・10）は、『電車窓』と『雁』との構造、発想の類似から『雁』の特質を押えている。

△詩歌関係V 西田勝「反戦詩人内海泡沫のこと」（『文学』43・11）、西本秋夫「北原白秋論覚書」(3)と(4)（『風流』43・7・12）、太田慶太郎・南信一解説「木下李太郎の家系」（『言語と文芸』第60号、43・9）、乙骨明夫「『自然と印象』の詩人と作品」（『学苑』43・8）は、自由詩社の同人の詩の鑑賞を通して、史的意義を解明している。大里蒸三郎「正岡子規論—近代の眼—」（『中央大学国文』第12号、43・10）、片桐頭智「落合直文の詩歌」（『国語と国文学』43・9）、松村緑「与謝野晶子の未発表書簡」（『文学研究』43・12）が、晶子から杉山孝子宛（二通）、高安やす子宛（三通）、石上露子宛（一通）の書簡を紹介している。上

田哲「大井蒼梧研究ノートより」II（『塩』43・9）、山根巴「長塚節の序歌」（『広大』『国文学』第4十八号、43・10）等もある。

大正期の文学

注目すべき単行本の刊行は、本多秋五『白樺』派の作家と作品』（43・9）『書評—紅野敏郎「全力をふりしぼった発言」』（『群像』43・12）、瀬沼茂樹「新しい発見もつ論説—光彩を発揮する実篤論と武郎論—」（『読書人』43・12・9）Vと、安岡章太郎『志賀直哉私論』（43・11）『書評—本多秋五「固定化への揺さぶり」』（『群像』44・1）、小田切進「父に抗う血脈の系譜—大胆な着想と周到な論証による力作—」（『読書人』44・3・3）Vに止めを刺すだろう。今井達夫『水上瀧太郎』（43・12）、加藤謙一『少年倶楽部時代—編集長の回想—』（43・9）も挙げておきたい。

前田愛「大正後期通俗小説の展開（下）—婦人雑誌の読者層—」（『文学』43・7）は、注目すべき論文である。即ち、「大正後期における通俗小説展開の基軸のひとつは、この△新しい女V（『真珠夫人』）から△モダンガールV（『愛難華』）へという女性像の変貌に沿って辿られるのである」と述べている。

森山重雄「大正テロリストの思想」（『日本文学』43・12）が、労働運動社とギロチン社の人々の思想に検討を加えている。そして、「大正テロリズムを、大正アナキズムの一つの終末的結晶として眺め」、その神髄が△生の拡充Vという生命思想と、政治的には直接行動論にあったことは周知の通りだが、この△行為Vの絶対化に走ったのが、テロリストの一群であった」と結論を述べている。

小坂晋「宣言」試論」(『国語と国文学』43・11)は、『宣言』を日本に於ける「若きヴェルテルの悩み」受容の系列へヴェルテル宣言→暴君→石にひしがれた雑草→嘘の果→友情Vに属し、白樺派の書簡体小説のピークをなす作品として扱っている。そして、『心』『友情』との比較に立って、作品の意義を「有島の『本能生活論』を小説化する最も早い試みであり、いわば作者がキリスト教転向者として創作生活へ本能生活Vに飛び込む宣言をなす作品で」あつたと述べている。

△芥川龍之介V 「国文学」(43・12)が芥川龍之介の魅力を特集している。收穫の第一は比較文学的方法による小堀桂一郎「芥川龍之介の出發―『羅生門』恣考―」(『批評』43・秋季号)がある。『羅生門』成立には鷗外訳『橋の下』(大2)が決定的な影を落していることを、兩作品の構成方法から探求している。かつて菊田茂男氏の「芥川龍之介『運』の典拠―『今昔物語』及び森鷗外訳『センチアマニ』との比較研究―」(『国文学』第四卷第三号、34・2)に関する論考を拝見したことがあるが、兩者の関係はもっと突きつめられてよいと思う。他に島田謹二「芥川龍之介とロシア小説」(『東大比較文学研究』第十四号)がある。

坂本政親「加能作次郎評伝」(『福井大「教育学部紀要」1)がある。広津和郎に関しては、^{志賀直哉}阿川弘之「広津和郎氏の思い出」(『対談』(図書43・11)、「群像」(43・12)―特集・広津和郎、小田切秀雄「その生涯の仕事の意味についての素描」(『読書人』43・10・14)等がある。△詩歌V 角田敏郎「光太郎詩における△冬V」(『大阪教育大「学大國文」第十二号、43・12)は、詩を通して光太郎における△冬Vの意味を

考察している。即ち、「社会に背を向けた光太郎の自我が直接自然との対話を行ううちに獲得した原理が△自然の理法V」であり、△自然の理法Vとその△冬Vの心象Vとが、「自己形成の指標として」作用していたとき「詩的形象」たり得たと述べている。木林勝夫「茂吉の憤怒と笑い―附・鷗外のことなど―」(『共立女子大「文学芸術」第一号、43・9)がある。宮沢賢治に関して言えば、「日本文学」(43・10)がシンポジウムを掲載している。小沢俊郎「宮沢賢治・保阪嘉内との交友」(『国語と国文学』43・12)は、日記や書簡(新資料)を駆使しながら、交友の歴史を辿りつつ、兩者の精神構造をさぐり、相互の影響関係を論じている。

昭和期の文学

総括的なものとして、布野栄一「最近における昭和十年代の文学研究の展望」(『国文学』43・12)と、近藤潤一「国文学研究史における△近代V―『昭和十年代』の状況―」(『日本文学』43・11)を挙げておきたい。

△横光利一V 栗坪良樹「△新感覚派V論―出发点における感覺的諸問題―」(『日本近代文学』第9集、43・10)は、なによりも『頭ならばに腹』の従来の否定的評価を一変させている点で注目したい。「あらゆる現実的虚飾、功利、俗悪から完全に離脱した存在を、作家主体の視点の中核に定めて、その周囲を果てしなく流動し渦巻く現実の不可解さを写しとろう」とした所にモティフ設定をみ、「△特別急行列車Vに象徴された作品の状況は時代を超え紛れもなく現代の状況を暗示して」おり、「△頭V、△腹Vは、個性喪失を暗示する好

対照として」把えている。そして、作品の底流に「危機的感覚」をみ、横光が「現代状況にかかりながら、人間の心理的かつ神祕的なものの追求へと極度に傾斜して行く」ターニングポイントとなるのであると論究している。また、同氏の「横光利一 その誠実」をめぐって（『北方文藝』44・1）は、横光の誠実な心情を「自己の論理的混乱に居坐ることを意味」することと見据え、それは「一種の純粹状態に対する憧れの感覚」であったと把えている。それ故、あらゆるものを次々と背負い込みながら、「対決」をすることなく、一生「自からを蹴飛ばしつづけ」、遂に思索を思想に転化することがなかった悲劇を、横光の本質として把握している。論者が「横光の肉体的腑分けは、とどのつまりは自己の肉体的腑分けになりかねない」と絶句する時、文学する者のあらねばならぬ姿勢を示唆して、前者の論文にみられるようなへかまえた姿勢がなく、精彩を放つて好論文である。その他、神谷忠孝「横光利一の表現意識—文体論の可能性—」（『帯広大谷短期大学紀要』第5号、43・7）もある。エッセーであるが注意してよいものに、間宮茂輔「小島昴のこと」（『文化評論』No. 85、43・10）と、井伏鱒二「富ノ沢鱒太郎」（『新潮』44・1）がある。

八川端康成▽「国文学」（43・12）が「川端康成の文学」を小特集している。福田陸太郎「ほんやく川端文学」（『読書人』43・11）もある。平山城児「川端康成の作品と夢の世界」（『立大「日本文学」』第三十一号、43・12）は、発想はおもしろいが、結論の叙述に飛躍があり惜しい。なお、川端自身「風景」（44・1、百号記念）に連載している「一草一花」も興味深い。特に『伊豆の踊子』について語っている所など。

△葉山嘉樹▽浅田隆「葉山嘉樹小論—『海に生くる人々』に現われた葉山の内面的論理について—」（『立命館大「論究日本文学』第34号、43・11）は、注目すべき論文である。登場人物三人の形象に焦点を当てながら、葉山の内面的論理の顕現の諸相を考察し、海に生きる男たちの闘争がリアリティを持ちえているのは、「小倉の苦悩や波田の存在、ボーイ長」等の「労働者の危険の共有感」を「限ざられた場面」の中に集約しえたところに起因していると論じている。また、浦西和彦「葉山嘉樹年譜△未定稿▽」（『岐阜・坂下女子高文芸部「友樹」』第42号、43・11）も、従来の年譜を正して、丁寧な仕事であり注目したい。なお同誌に松井恭平「続・山邨省記—葉山嘉樹二十三回忌の口と、ほか—」も掲載されている。西田勝「井伏鱒二の知られざる一面—プロレタリア文学との関係—」（『法政大「近代文学研究」』第4号、43・8）は、資料として注目しておきたい。

△転向文学▽『全集・現代文学の発見・第三卷革命と転向』（43・10）が、池田寿夫「日本プロレタリア文学運動の再認識」を収録した意義、並びに平野謙「たたかひやぶれたもの嘆き」と題する解説文中の「池田寿夫の論は注目してよい。更に、月報の対談△中野重治—平野謙▽も注意したい。次に注目すべき論考に磯田光一『比較転向論序説—ローマン主義の精神形態—』（43・12）がある。庄巻なのは、第四章「ナシヨナリズムの美学—コルリツジと保田与重郎—」である。保田の転向を政治的転向という面から押えるのではなく、コルリツジの「パンティンクラシー」の心情的構造分析という補助線を引くことによって、保田の心情△孤絶と反俗▽が「微妙に転向者の心理と重なり合ってくる」と、心情的な転向という面に光彩を

当てている。杉野要吉『村の家』の成立—中村光夫・中野重治論争の視点から』（『日本文学』43・12）が、中村・中野の論争を見据えながら、『村の家』成立への道程を論じている。即ち、「中村・中野論争のコースは、日本プロレタリア文学運動の内部における挫折からの理論的再建をめぐる提出されていた、いわゆる社会主義リアリズム論争の中での中野のコース（姿勢）の問題に重層」し、『村の家』の成立にすら有力に「関わって来ていると論じている。なおこの続稿として、『村の家』論』（短大論叢43・6）がある。亀井秀雄「中野重治と伊藤整」（『北方文芸』43・9号）が、種々問題を呈示しながら、八回にわたる連載を終えたのにも注意したい。

△中島敦▽ 佐々木充『わが西遊記』の方法—その二・『悟浄出世』の方法意識—』（『帯広大学短期大学紀要』第五号43・7）は、注目してよい論文である。『西遊記』がすでにそうであったように『悟浄出世』もまた、戯面化を基本方法とした観念小説であったと規定し、原典素材との比較を通して、中島の心象が「まず△おのれ▽の存在を確かめ、△世界▽についての認識を得る」という自己限定を確立し、そして、「おのれの過去の体験は未来の体験の先取りである」という認識を持ち、それが意味を持ち得るか否かを検証したい希求が、「その実現の場を求めて、ついに『西遊記』を発見し、悟浄を発見したのである」と論じている。つまり、「太平洋戦争下における中島の危機意識」は、活動してやまない観念の「定点」をここに発見したのであると結んでいる。

△堀辰雄▽ 杉野要吉「堀辰雄における日本古典接近の問題—小久保・高田両氏の御論にふれて—」（『国語と国文学』43・7）が好論文であ

る。小久保氏の堀へ関わる姿勢、高田氏の方法論を問題にしなから、堀に於いて「△西欧近代文学精神（リルケ）▽と△日本古典▽とのまぎれもない媒体であった」と言いえるもの、それは『かげろうの日記』（成立についても従来の年譜の誤りを正している）ではなく、「近代国文学の伝統的因習をすどく突き抜けるところのあった折口（折口信夫）の詩的感性性に発想をおいた独自の古代学であった」と結論を導き出している。また、同氏の「初期堀辰雄における抒情—中野重治との関連において—」（『日本文学』43・8）も注目したい。「△ひとりと美しく、空に上昇する▽初期の堀の芸術は、じつは堀の師芥川が△人工の翼を太陽の光に焼かれ▽て落ちた道を、おなじく歩む運命を秘めていたといわざるを得ぬ。けれども堀は、現実から明快に切斷され、△割切れ▽すぎ、△美し▽すぎる自己の△風船▽が、いつの日か現実の△針▽に刺しぬかれ、破碎されねばならぬ危険な均衡の上に仮構された美的球体として結ばれていることとを、おそらく理解できていなかった」と述べ、そこに「中有に迷う」不安を宿命として背負った昭和文学者の不幸を初期の抒情の中に包含していたと述べている。両論文とも、氏の内部で長い間温められ、発酵された好論文である。

△太宰治▽ 山内祥史「太宰治『思ひ出』の書誌—『餘瀝近事片々』に関する全集逸文の紹介を兼ねて—」（『日本文学研究』第十九巻第四号、43・12）、また、同氏の「太宰治△作家生活に対する構へ、覚悟、ほか—△太宰治と保田与重郎をめぐる—」（『近代文学試論』第6号、43・12）、更に同氏編集の「太宰研究」XVI（43・8）、XVII（43・10）等があり、氏の太宰にかける執念が窺える。長篠康一郎「太宰治伝の真実を求

めて」(『北方文芸』44・1)が完結をみた。特異な太宰研究である。

「久保栄研究」も注目したい。第十号(44・1)の小笠原克「『斬られの仙太』論」も読みごたえがある。

▲詩▽ 首藤基澄「金子光晴のライトモチーフ」(『文学』43・7)、満田郁夫「金子光晴の詩について—詩集『L』を中心に—」(『文学』43・10)が看取される。

戦後文学

「日本近代文学」(第九集43・10)が戦後文学を特集している。同誌の佐藤勝「戦後文学の出発」は、出色の論文である。主として野間宏の『暗い絵』を分析することによって、戦後文学の原点を見定めようとしている。民衆という座標軸へ給、青春の後に訪れる成熟▽と、知識人という座標軸へ革命—青春そのもの▽との交点を、木山と深見の在り方から押え、「八仕方のない正しさ▽からほんとうの△正しさ▽の発見に至る道程」こそ、「戦後にあること」によってはじめて成立しえたのであり、そこに戦後を見定めようとした作家自身の姿勢を読み取っている。つまり、『暗い絵』は戦後から戦前・戦中へという方向で把えられ、その視点の原点は「民衆」に在ったのであるとし、その地点に太宰治の「パンドラの匣」もあつたと述べている。そして、論者は『暗い絵』↓「顔の中の赤い月」、『パンドラの匣』↓「斜陽」「人間失格」への「またぎ」を問題とすることに よつて、戦後文学の「変貌の軌跡を改めて追求」しなければならぬいと提言している。今後視座に据えてかかるべき論考であろう。

野口武彦「三島由紀夫の世界」(43・12)も、見据なければならぬ

いだろう。氏の批評は氏の小説に比較して何とイメージの豊富なことか。▲書評—磯田光一「安保世代の聖痕示現」(『群像』44・3)、桶谷秀昭「イロニイ的自我の批判—反動の言説と美学との関連を解明—」(『読書』44・2・17)▽三島に関して言えば「解釈と鑑賞」(43・8)が三島由紀夫特集をしている。

阿部正路「日沼倫太郎論」(『国学院雑誌』43・9)は、読みごたえがある。「心を明晰の地獄に置き、身は破滅の極楽に置いていた人だつたのではあるまいか」という観点から、その「死」について、その「生」について論じている。何よりも事実の周到な調査が(特に注記の項に)随所に見られ、よくまとまっている。

森川達也『埴谷雄高論』(43・9)、高野斗志美『存在の文学』(43・12)、中村完「小野十三郎・吉本隆明—戦後抒情論批判(上)(下)—」(『日本文学』43・8・9)も注目したい。

なお、文学論、並びに作品論等を取りあげている文献を参考のため列挙しておくたい。

* 猪野謙二、尾崎秀樹、杉山康彦「『文学理論の研究』をめぐって」△座談

平岡敏夫、益田勝美、三好行雄

会▽(『文学』43・7)

* 鶴見俊輔、橋本峰雄「『文学理論の研究』書評に答えて」(『文学』44・1)

* 多田道太郎

* 森山重雄「日本文学史の二律性」(『日本文学』43・9)

* シンポジウム・「日本文学における△近代▽」(『日本文学』43・11)

* 特集・「作品論への招待—付作品論をめぐって」△江藤淳・吉田

精一▽(『国文学』43・7)

* 特集「現代の評論」(『国文学』43・9)

* 特集「文学百年の内と外—付明治百年の事件と文壇—」(『解釈と鑑

賞「43・7」

* 「近代詩歌鑑賞の手帖—明治・大正・昭和の詩・短歌・俳句—付
 // 近代詩歌年表 // 近代詩歌鑑賞研究用語辞典 //」(『国文学』43・10
 臨時増刊)

* 「古典と近代文学」(第3号、43・10)、「国語科通信」(N。10、43・11)。
 「ポリタイア」(N。9、43・12)、「文学」(43・12)等が、// 詩 // の特
 集を企画している。

* 岡野他家夫「資料・近代歌壇側面史」(『風炎』43・6)

附記

諸先輩の秀れた論考をできる限り私意を加えずに、原文を引用すること
 によって把握することに努めました。が、読み落しや誤解もあるうかと思ひ
 ます。なによりも、私の視野の狭さからダイナミックな展望に欠ける恨み
 があるうかと思ひますが、その点よろしく御叱責戴けますれば幸甚です。
 なお、「展望」として、心づもりをしていながらも、「文庫本・全集本」の解
 説や月報(例えば河出『国民文学全集』)など特色があるのだが、十分にふ
 れられず、研究発表や講演に至っては等閑に付してしまつたようなわけで
 申しわけなく思つております。

最後に「紀要」等の閲覧に際し、昭和女子大図書館、早大文学部国文専
 修室のお世話になつたことを記して、感謝の意を表したい。なお、佐々
 木雅彦学兄、栗坪良樹学兄にもいろいろと御教示戴いたことも併せて記
 しておきたい。

補遺

紅野敏郎「宿南昌吉遺稿—教養派知識人の形成—」(皇大教育学部
 『学術研究』第十七号、一九六八年)は注目すべき論文である。大正期教養
 派知識人として、宿南昌吉は魚住折蘆、安倍能成、阿部次郎、山本
 飼山等と全く等価であること、知識人としての自己形成に關してい
 えば、「宿南のほうに、かえつて一般性があつた」ことを、「遺稿を
 手がかりに、その人と業績、その思想形成について」論じ、文学史上
 に正当な位置付けを行つている。即ち、「戦鬪的自由人というより
 は、大西祝・網島梁川・トルストイ・西田天香の線上に立つたり内
 面重視の求道的な教養派知識人」であり、「直接『文学』運動や『文
 学』そのものの場にのり出したりはしなかつたが、同時代の文学と
 思想については、鋭敏な神経を働かせ、真剣に悩み、摸索した。そ
 の限りにおいては、宿南は、阿部次郎や安倍能成ら、漱石門下生の
 一先蹤ともいふべき位置を占め」ていたと論述している。

山本昌一「白柳秀湖—自然主義の關連から—」(『新文学史』第七号、43
 ・12)も注意したい。

なお、助川徳是氏の魚住折蘆に関する好論文があることを仄聞し
 ているが、未見なので次の担当者を紹介をお願いしたい。

佐藤泰正著『日本近代詩とキリスト教』

佐藤 房 儀

まず、この書を手にし、目次を一見した際の驚きから記さなければならぬ。題名によれば新詩の発生いらい現在までを詩史的考察のうちに、キリスト教のかかわってきた諸相を解明したごとく思えた。だが、目次をみると、数人の詩人を摘出して、彼等のキリスト教的側面にスポットをあてたものらしい。それにしても次の如き章立ては、当初意外感をおこさせた。

- I 八木重吉と草野天平
- II 宮沢賢治——そのキリスト教観
- III 透谷と藤村
- IV 朔太郎と暮鳥

一番の問題は草野天平と宮沢賢治の存在であろう。両者を仔細に検討すれば、信仰に疑問の余地があるにしても、明確に仏教信者であることを自ら述べた、類例のすく

ない詩人である。それ故、なぜこの二人が「キリスト教」と題された本書に入れられているのか理解に苦しんだ。

しかし本文に接して、これらの意外感がいよいよ本書のユニーク性となって逆に注目され、読書欲をそそられていったことは確かである。

* * *

「I 八木重吉と草野天平」では、「私はこのふたりを近代詩人中、最も求道的な詩人と思っている」(22頁)と書き、両者にみられる強い宗教的求道性に注目して、キリスト教的視点からその精神のありどころを探ろうとしている。この試みは新らしい文学研究の方法であり、この視点が本書全篇にわたっている。

重吉の生涯が信仰者としての敬虔な態度

に貫かれ、詩篇がキリスト者としての立場から書かれていることは、今更いまでもない。しかし著者佐藤氏は、重吉の詩の中に信仰の告白を逸脱する何ものかを探り、詩脈の底に流れる精神はキリスト教という外来の宗教ではなくして、むしろ日本人の心性に深く繋がる求道者精神の発現であったという。詩の根底においてキリスト教信仰をのみだしているのは、キリスト教が日本に土着する過程で許容されなければならぬ必然性であり、重吉が自己に忠実であろうとすればするほど現出する矛盾も、「むしろ純一にキリストの前を生きぬいたがゆえに、自己の矛盾を、昂ぶりを、かなしみを、ためらいなく、真率にうたいえたとみるべきであらう」(18頁)と結論づける。

重吉のようにキリスト教界より生まれた詩人の作品を、信仰の門外漢たる私が読んでいる時、何か大きな意識上の脱落をしている不安にかられる。その不安は草野天平に対してはおきない。仏教を信じていなくとも、天平の宗教観はなんとなく理解される。しかし重吉に対する場合は異なる。そ

これはキリスト教が、私の内部で土着の信仰として捉えられていない点からくることは明らかである。それ故に「八木重吉——その側面ii」その土着性の意義Vを一層普遍深化してもらいたかった。重吉の詩が好まれるわりに論及が少ないのは、作品に内在する宗教性が大きな原因であると思えるからである。

草野天平については、漂泊し、比叡山に登り、世捨人の生活を体験した詩人の、ストイックとも見られる精進の姿勢と詩作態度を重ね合せながら、その志向していたものを見極めようとする。天平の詩と生活に、世阿弥や芭蕉につながる伝統的精神を見るとともに、その姿勢の中にキリスト教と関わる問題を抽出する。天平の数少ない詩作の内にキリストに関するものが二篇ある。「レオナルドの最後の晩餐」と無題の作である。また遺稿「キリストの磔刑」という文章も残されている。これらの詩の読みかたは人により異なるが、佐藤氏は、ここからキリスト教観を探り、「日本的心性に発する、キリスト教への問いかけ」(46頁)に目を向ける。しかし氏は、福音の土着化

と日本の伝統との問題に性急な結論を下していない。ただ、キリスト教が受け入れられるためには、日本的心性——ここでは天平によって代表されているのだが——を考えない訳にはいかなないとする。

草野天平について、これほどまで紙幅をついやした論を知らない。近代詩の愛好者の中でも、彼の名すら知らない者が多々ある。それだけにこの論は貴重であり、後進に対する責任を持つ。佐藤氏が天平をとりあげた理由はすでに明らかにしておいたが、しかし、天平の作品のあつかいについては少々問題があるのではなからうか。重吉と天平の非常に類似する作品の並記から論は導入されているが、この操作は危険であろう。一般に複数の作品が類似しているとしても、創作にまつわる種々な要素はまったく別であろう。

同じ危惧は天平の詩精神の捉え方にまでつながる。

何処か知らない遠いところを思ひ

ただそつと坐つてあるキリスト

来るものは来る

形のあるものは無くなる

善も悪もない

何処か知らない遠いところを思ひ

ただそつと坐つてあるキリスト

これが「レオナルドの最後の晩餐」の全行であるが、名画に題材を得たことは一見して知られる。同じように造形美術に題材を得たと思われる次の詩がある。

手に粗末な器を一つ持ち

米を欲しいでもなく

欲しくないでもなく

ぼうつと広く

そして優しく一つところを見て

この地の上に

黙つて立つてゐる

これは「無着菩薩像」と題されているが、佐藤氏は天平が「二篇の詩の直指するところを、その狭間を歩んだと言っているのでないか」(43頁)と問いかける。はたしてそうであろうか。むしろキリスト晩餐の図に対する天平の姿勢には、キリストを求道者のひとりとして観察した仏家の眼が感じられはしないか。天平の大乗的仏教観が、キリストの晩餐の絵画を見て、求道者の痛ましさに魅入られたのだとは考えられ

ないか。つまり天平の思想は、両者の間にあるのではなくして、あくまでも仏家としての思想に擬立していると思われる。佐藤氏はキリスト者たる自己の世界観に、論ずる対象を近づけすぎではないか。この疑問は、本書全体を通じて、また氏の原著『近代日本文学とキリスト教・試論』においてもおこった。

なお付言すれば、天平についてのいくつかの新資料が発掘されていることも興味深く、論者の研究が長い蓄積の上になされたことを語っている。

Ⅱ 宮沢賢治——そのキリスト教観——では、童話「銀河鉄道の夜」に見られる「神」の問題を取り上げ、主人公ジョバンニの語る「たったひとりのほんたうの神さま」という言葉に含まれる賢治の高調性と決意を見る。この少年主人公の言葉の内に、賢治の「キリスト教への、ある體質的な異質感、あるいは異質感ともいふべきものもまた、深くにじんんでいる」(80頁)と述べ、「銀河鉄道の夜」が妹とし子の死による賢治の哀惜と無縁でないことよって、賢治の観念生活に感情が加味され、「たった

ひとりのほんたうの神さま」を見出したのだという。

佐藤氏は、賢治のいう「神」が、キリスト教や仏教といった既存の宗教を越え、同時にそれらを一にした大乗的な精神に基づくことを「銀河鉄道の夜」ばかりでなく、「ビデチリアン大祭」を読みながら明らかにする。更に氏は、キリスト教的イメージの探究の内に、賢治の精神的摸索と苦悩のあとをたずねる。それは「銀河鉄道の夜」の草稿末尾に書かれた「開拓功成らない義人に新しい世界観現はれる」という部分の「義人」という一語に注目し、その真の意味を探り、賢治のキリスト教志向に論を進める。それには、宮沢家が熱心な仏教信者であったばかりでなく、内村鑑三門下の斎藤宗次郎と親交の篤かったことよって、賢治の受けた精神的影響を考える。そしてこの「義人」の一語が、「ロマ書」中の「義人は信仰によりて生くべし」の一句と深いかわりを持ち、パウロの十字架による贖罪思想と繋がっていることを論じる。挫折と苦悩の生涯をたどった義人ヨブと、やはり薄幸の中に信仰をつらぬいた斎藤宗

次郎という目前の知人の姿が、賢治の思想に投影されていると見るわけである。

賢治に対する論及は、佐藤氏の前書にも見られた。それ故、本書の論は前の発展として読まれる。このことよって、も氏が長期にわたる考察の後に、上述の結論に達したことは明らかである。そのためか本書に取り上げた幾人かの詩人論の中でも、この部分は、最も整理され、論求の視点も明確で、興味深く読めた。

賢治の詩にキリストを直接うたった作はない。しかし今後発見される可能性を含んでいる。なぜなら彼の農村への接近の姿は、現世救済という仏教思想に基づいて、普現色身の菩薩にならったかのごとく思われるとともに、地の塩の思想とも無縁ではないと考えられるからである。その賢治であれば、童話の中に様々な宗教観が見られるのもうなずけるし、その点を深く鋭く指摘された佐藤氏の業績は、今後の賢治研究へ新たな一歩をしるしたといえよう。「銀河鉄道の夜」をめぐる佐藤氏の読みの深さは、たとえキリスト者としての観点が強いとしても、多く傾聴すべき内容を含ん

でいる。さらに賢治のもつ人間観から宗教観へ、また世界観へと、その思想を解明してゆく叙述は、示唆に富み、内容の豊さを感じさせる。▲補遺▼とされた斎藤宗次郎と賢治の関係も興味深く読めた。

「Ⅲ 透谷と藤村」では、両者のキリスト教の把握と棄捨の様相を探る。

北村透谷については『楚囚之詩』『蓬萊曲』及び他の抒情詩を論じているが、中でも重点的に述べられているのは『蓬萊曲』である。佐藤氏は『蓬萊曲』に、古代日本人の持っていた「常世」思想、道教の「仙境」、仏教の「淨土」、さらに『ファウスト』や『神曲』との構成上の類似など、種々な思想や物語の影響が見られることを指摘し、同時にそのような混淆の中に時代を代表する性格を見て、彼の矛盾をそのまま時代の内蔵する矛盾であるという。さらに透谷の思想の矛盾混淆が表出されている中に、「根源に、深い、土俗の原初的な体感」(138頁)を意識し、「劇詩の底に横たわる深い虚無感」(139頁)を探る。混乱ともいえる思想の中で、彼のキリスト教に対する帰依が、「十字架の贖罪といふ教義を抜きに

して理解せられてゐる」という笹淵友一氏の指摘(210頁)をふまえながら、透谷の思想の欠落に触れ、「宗教は文学と共に、常に、現実に、対する、熱い、「濃情」として、把握され、意識されていた」(211頁)と述べる。この「濃情」とは「現実に自己の存在を篤実に、また濃密にかかわらせてゆく姿勢」(212頁)であるという。

透谷に対する論及では、論者のキリスト者としての立場はそれほど明確に感じられない。むしろ『楚囚之詩』や『蓬萊曲』に対する読解の深さを感じる。ただ文中に「われわれは彼(透谷)のキリスト教信仰の内実には、多くの批評を加えることができよう。しかしまた反面、われわれが透谷の生涯に聴くべきものは、彼がこのような矛盾を引きずりつつ、キリスト教信仰から汲みつくそうとした、そのかけがえのない何もかのである」(210頁)と言う箇所を見るが、この「何ものか」をキリスト者たる著者により、深く究明してもらいたかった。「濃情」という言葉だけで集約させるのでは、残余の部分が多すぎることく思われる。たとえ透谷におけるキリスト教が、贖罪の信

仰という点で重大な欠落をしているにせよ、またキリスト教に携ったことも手から口へという現実問題があったにせよ、短い一生の間のかかりの年月にわたって密接に関係していたことは事実である。その間に、何を得、何を失ったか解明してほしかった。それを出来るのは、冷静な判断と知的傾向をもって知られる「兄弟団」の一員たる、佐藤氏に課せられているのではないか。

島崎藤村に対する論述は、『若菜集』の初期詩篇から、小説『新生』に見られる罪の意識を辿り、長篇『夜明け前』の父と子の問題にまで立ち至って、藤村文学を俯瞰している。

藤村の詩篇と讚美歌の類似に触れながら、その改変が背教や背信にかかわるものではなく、教師である藤村が教子で婚約者のある女性を恋することによって生じた罪の意識に基づき、真の信仰からの反逆ではなかったと説く。それが更に、後の小説『新生』の旅にみられる罪の苦難と逃避へつながる過程を明らかにする。藤村におけるキリスト教観は、初出「哀縁」が「一葉

舟』に収録されるにあたって省略された箇所に見られる、神に対する不信感の中に込められており、キリスト教志向は真の信仰になりえず、「汎神性への傾きと(中略)人間的な愛の情念の肯定と、それゆえの暗い破滅への予感」(201頁)が生涯にわたっていたとする。

これはたしかに論の通りであらうし、安易とも見えるキリスト教への入信と離脱が、ヨーロッパ文明に対する驚異に端を発しているという発想も、興味深い指摘である。藤村に対する論述において、佐藤氏は歯痒い思いをしている。おそらく、キリスト教思想の前後を行きつ戻りつした藤村の姿は、論者の立場からすれば優柔不断とも思えたのであろう。またこの部分はいささか手を広げすぎたきらいがある。しかし、キリスト教を軸にしながら、藤村文学の思想的根底を、かなり明らかにしているといえよう。

「IV 朔太郎と暮鳥」では、どちらかといえば萩原朔太郎を中心にして論が展開している。

朔太郎の「浄罪詩篇」を大きく取り上

げ、『月に吠える』の前期作品に見られる「浄罪」意識は、精神の最深处より生じたものであり、「その神経的・生理的幻覚の創造」を根底においては病者の歪みとして、罪として問い、告発せざるをえなかつたところにこそ、彼の言う「浄罪」の真義があつたのではないか」(240頁)と述べる。

さらに散文詩集『宿命』の中の「父と子供」という作品において、白痴の子供が父親に人生について問を発する最後で、「歯が痛い。痛いよう！ 痛いよう！ 罪人と人に呼ばれ、十字架にかり給へる、救ひ主イエス・キリスト……歯が痛い。痛いよう！」と記されている点に注目し、この子供の苦痛を「かつての自身の、あの若き日の苦痛こそは、この理不尽な痛みにも似たものではなかつたか。(中略)しかもこの理不尽な苦痛の背後に、あのキリストの痛みと愛が、苦難の十字架のイメージが重ねあわされる。(中略)この子供の叫びのなかに、彼の「浄罪詩篇」期の痛覚は、まさしくよみがえっていると云ってよい」(260頁)という。つまりここにもみられる生存の痛覚こそ、「浄罪詩篇」期より『宿命』まで、かす

かに続いている思想的根底であることを跡づけるわけである。

朔太郎に対する論者の立場はかなり好意的である。「彼こそは実に、やっとあの『近代』に辿りついた、『近代の悲劇』に到達した、ほとんど唯一の詩人であつた」(262頁)という結論は、なによりそのことを語り、大いに共感するところである。しかしそこにいたるまでの過程が、あまりにもキリスト教思想を中心に置き過ぎてはいないか。氏は朔太郎の若い時に強烈な精神的動揺を与えた「浄罪」意識が、かすかな埋れ火として生涯を貫き、『宿命』にいたって再び炎をあげたとしているが、後者の熱情を若い時とイコールで結んでよいものであろうか。その炎は『宿命』では似て非なるものではないか。散文詩「父と子供」及び「臥床の中で」において、キリストや聖書について述べている点も、信仰を離れた様々な解釈も出来よう。佐藤氏の論述は、うなずけない訳ではないが、あまりにも一面的すぎるように思え、何か見落しているものがあるように感じる。

山村暮鳥については『聖三稜玻璃』に注

目しつ、後の『風は草木にささやいた』から『雲』へと詩風の展開する様子が、内的必然性に基づいていることをまず明らかにする。詩形の上からみると、これら三詩集の差異は瞭然としている。しかしそれは彼の半生について回った様々な苦勞と精神的煩悶の末に、「人間礼讃、人間礼拝の世界」(276頁)へ至ったのだという。さらに暮鳥のキリスト教観にふれ、彼が苦惱の中で自己救済を願いながら、苦難に堪える同胞の姿に共感と近親をおぼえ、讚美の声を送り、ドストエフスキーの「苦惱神秘主義」や「大地信仰」に影響されていった過程を跡づける。彼が教会や教団のリゴリズムや形式的頹廢を批判しながらも、キリストへの帰依を怠らず、彼の詩業を通じて「自然と人間の同根不離の世界」(297頁)が見られることを認める。

『聖三稜玻璃』の言語感は、たしかに小手先の技術ではない。より精神的必然性があったと見られる。その点を解明して「八聖ふりずむ」の世界は、遠心と求心、肉と靈あるいは肉と信、感性と靈性、内面と外界、自己と自然、詩と信仰——これら

二元の対峙を、△信念一味▽△真実一念▽の志向のうちに、一元と化してやまぬ——一念観法の世界であったとみることができよう。その極まるどころ——天地、一木一草、この肉身——すべてが△さんらん▽の一元と化し、穢土寂光ならぬ、燦光の世界を呈する」(274頁)という指摘は鋭い。佐藤氏はこの「一元と化」する世界観を断定的に見ていないが、むしろ、ここにこそキリスト教に裏付けられた詩感があったのではなかるうか。その点について、キリスト者である詩人暮鳥の特色を、個人と時代の両面から解明してほしかった。本書において暮鳥に触れた部分は少なく、問題を後に残しているが、その残された部分にこそ、明らかにしてもらいたい多くがあるように思える。

* * *

以上によって、いくつか落穂もあるが、全篇にわたって読んできた。佐藤氏の研究態度は前著『近代日本文学とキリスト教・試論』において「キリスト教を軸として」という言葉がみられたが、本書においても同じことがいえる。本書の「あとがき」で

は「日本の近代詩人中、透谷や朔太郎の如き認識者の承譜に数えらるべき詩人の、キリスト教との出会いを通して」(299頁)と書かれている。つまり、キリスト者としていかに文学作品を読んだかが著述の根底にある。この点を理解して本書に接しないと、初めに書いておいたような戸惑いがある。このような視点をもってなされた研究が今まで稀であり、特徴があることは言うまでもない。このような研究者の存在は貴重といえよう。それだけに、著者に対していささかの希望がある。それを結びとして書かせていただく。

本書を通読するに、非常に難解であった。それは当方のキリスト教に対する無智も大きな原因であるうが、それだけとは思えない。論法があまりにも「螺旋的」である点も原因しているのではないか。よく文中に「評家云云」の語が挿入され、他者の引例があるが、それが多すぎるように思える。他者への反論として論旨が展開する場合も多くみられるが、なにより表面切った主張を述べることが第一であろう。

本書が新しい面から近代詩にスポット

をあてたことは間違いない。キリスト教と近代詩のかわりあい、これほど精緻に論じたものは今までになかったし、なされなければならぬ命題である。しかし精緻であることは逆に大を見過し、斜視を生じさせはしないか。たとえば本書を手にした時の意外感、読了した後も完全に払底されない。もし『日本近代詩とキリスト教』というテーマで著述するならば、やはり詩史的追求の上でなされるべきではなかったか。たとえば新体詩の発生期において、その新文学形式があれほどまで速く全国に広がっていった背後には、「詩篇」や「讚美歌」の力があざかっていたと思える。なぜなら、新体詩の享受者とキリスト教へ関心を示した層は、共に当時の中産インテリ階級であった。両者はほとんど同一であったと見られるのではないか。そのあたりから透谷と藤村にかかわる問題も生れてこようし、『十二の石塚』のような聖書に題材をとった詩史譚が読まれたことも理解されよう。

また、キリスト者として大きな足跡を残した内村鑑三は、その作詩において少数な

がらも佳篇を残している。鑑三については多くの詩史家が見残しているが、このような人物の作品の発掘もあっていいのではないか。

さらに三木露風はカトリックの詩人として大いに活躍し、トラピスト修道院の名は、彼によって高まったといっても過言ではない。そのような彼を等閑にすることはできない。

また戦後のキリスト教と社会主義の問題

岡保生著『尾崎紅葉の生涯と文学』

伊 狩 章

一
本書は、著者がここの数十年のあいだに発表した、尾崎紅葉及び硯友社関係の論文を集めたものである。本書の公刊は、岡氏にとつて慶賀すべきはもとより、学界にとつても硯友社作家や二十年代文学の研究に、新たな一書をつけ加え得た意味において、大いに賀すべきことであつた。

を考える上で、大江滿雄の存在も忘れることはできない。

この他にも幾人かのキリスト教詩人と呼べる人がいる。その人々の紹介も佐藤氏に期待したい。求道者の系譜は系譜として作業を進めればよいのであり、同時にキリスト教により密着した論及のなされることを後進として切望する。(昭和四十三年十一月、新教出版社刊 B6版 二段組 三〇〇頁 六五〇円)

漱石についての論文は約八千篇、鷗外のものでも、長谷川泉氏によれば「舞姫」関係だけで二百五十篇を数えるという。その他の△卒論用流行作家▽などもおそらく右に準ずるものがある。

これに反して硯友社や露伴などから三十年代前半あたりの研究は、ごく一部をのぞいて依然として陽あたりが悪い。これら明

治中期の文学は、若い研究者には文章だけでもはや古典的な難解さを感じさせ、成果も地味であるから、手つとりばやく論文をまとめるには大正期以降にしかず、といった安易な傾向が強いのもやむをえない。

しかし一般の傾向は、学界の風潮に作用されるところも多いのであって、例えば、樋口一葉は明治中期の作家中で、大学生の卒論の対象となることの多い唯一の例外であるが、これは一葉の研究に、塩田良平、関良一両氏をはじめ諸氏の著書・論文が多いことと決して無関係ではない。

ともかく私などは、今後はたされる近代文学の系統的研究の基礎を作る意味で、専門家によってこの期がさらに深く研究されるべきものと考えている。その意味で、ここに岡氏の新研究書を加えたことは喜びにたえない。

著者の岡氏の研究態度が、真摯な実証主義にあることは定評どおりで、本書収載の諸論文も、ゆきとどいた調査と手がたい推論とで、信頼に足る成果をあげている。

本書は四部に分け、一、作家としての紅葉、二、紅葉の作品、三、紅葉文学の背

景、四、紅葉研究ノート、の分類となる。中では第一部がもつとも読みごたえがあり、論文としても学界の第一線に問題を提起する内容のものをふくんでいる。ついで第二部の、小栗風葉及びその周辺の研究がまざっている。氏には別に現在「学苑」連載中の風葉研究があり、それが一日も早く一本にまとめられんことを期待しておこう。

第二部は、失礼ながら玉石混交のうらみがあつた。とはいえ、岡氏のたゆまぬ研究ぶりには重ねて敬意を表しておく。

二

「金色夜叉」構想の原拠」は、本書中でも最重要な論文の一つである。「学苑」(昭四二・一)に発表当時から最も興味ぶかく読み、「金色夜叉」の源泉について示唆される処の多い文章であつた。その後、長谷川泉氏が「国文学」誌上で論評した(近代文学の鑑賞・金色夜叉)昭四二・七十一)こともあつて、岡氏の説は学界でも高く認められた観がある。

幻の原作「ホワイト・リリー」についての木村毅説や山本健吉の「嵐が丘」説をさ

らに一步掘りさげた論証の深さの点、あるいは、水谷不倒訳「理想佳人」を紹介し、バアサ・M・クレイとシヤロット・ブレムとが同一人であることを確認した点などにおいて、実証的成果をおさめた卓論であつた。

ただし私は、「金色夜叉」の構想について、右の岡氏の説、及び故勝本清一郎氏の説に多少の異論がある。以下、岡氏の説を紹介しながら、私の意見を述べてみよう。

なおこの「金色夜叉」の原構想について、私は近々拙論を「国語と国文学」に発表の予定なので、詳しくはその論文について見られたい。

まず岡氏は、山本健吉説をさらに深く検討したあげく、結論としてはやはり山本説に賛成し、紅葉は「金色夜叉」を書くにあつた「嵐が丘」を読んでいたが、ないし影響はうけなかつた、としている。その理由として「金色夜叉」には「嵐が丘」のような怪異の空気が感じられぬからだ、とする。これは論拠としてはいささか弱すぎる。もとより作品の印象というものは主

観的なものだが、それにしても、後篇第六章以下の狂女、鮑浦雅之の母が放火にいたる情景描写、続篇第八章の貫一が夢の中の満枝とお宮の死の場面、ついで続々篇の塩原でまたその夢の場面と同じ景観をみる場など、紅葉はやはり怪異趣味を意識していたと考えられなくもない。

ともかく私は「嵐が丘」が有力な源泉をなした、と考えており、この点については別稿を見られたい。

さて、「金色夜叉」の骨子となる構想は、紅葉自らの述懐(「藝文」での「合評」と、「如是畜生」の一文によって、(1)金に目がくらんで愛人を裏切る女、つまり、古めかしい貞節などにこだわらない八明治式の女Vと、(2)女に裏切られて出奔し、復讐を企てる男、との二本の柱にまとめられる。(2)の原拠は「嵐が丘」が最も近いが、(1)の、お宮のアイデアは何からとったか。この最重要な主題について、岡氏は、やはり消極的ながら、「嵐が丘」のキャサリンをあげているが、私はこの点に異論がある。

私はこの構想の原案は「夏小袖」だと考えている。「夏小袖」と八お宮の秘密Vと

の関係について、故勝本氏の一文(明治大正文学研究一第九号)が名高いが、私はこの氏の所説は疑わしいものと考えているから、そういう点から「夏小袖」を原拠としたのではない。

「夏小袖」を、原作のモリエールの「守銭奴」と比較考察し、そこに「金色夜叉」の初案と思われる主題を見出したからであり、また、構成上にも「夏小袖」を換骨した痕を数箇所に見たりかなり深く発見したからでもある。

「夏小袖」は明治二十五年刊行以来評よく、毎年版を重ね、三十六年まで十一版も刊行された人気作で、芝居にもたびたび上演されている。紅葉が「金色夜叉」の骨組みとして、この人気作から根幹を借りたであろうことは十分に考えられる。

私のみるところ、紅葉は、「守銭奴」の翻案である「夏小袖」から「金に動かされた女の裏切り」という主題をとり、ブロンテ姉妹の二作からもう一つの「裏切られた男」という主題をとって一篇の骨組みを立てたものであろう。

三

紅葉がモリエールの原作から翻案した、その翻案の仕方注目すべき点が二、三ある。

紅葉は原作を半分くらいにちぢめ、一部の筋を省略したが、その改変した部分に「金色夜叉」の鍵があった。まず、六十歳をこえた老人アルパゴンが、年がいもなく若い娘マリアーナに恋慕し、娘にはほかに約束した男(自分の息子クレアント)があると知りながら、金にも言わせむりに娘と結婚しようとする。同時に、アルパゴンの娘エリーズには執事のヴァレールという恋人があるのに、アルパゴンはむりやりに中年の財産家に嫁がせようとする、これが中心のプロットである。

紅葉はこの二つの三角関係をそれぞれ、五郎右衛門、徳之助、お八重、と、お染、和七、滝造との二つに翻案した。しかも紅葉の翻案は、原作の滑稽風刺的な気分を改変して、現実的で深刻なものにした。とくに、クレアント、マリアーナの恋愛について、原作では、この恋はプラトニックな、二人はただ顔をあわしただけの淡い恋で、

女の方では男が何者だかも知らぬので、とりもち婆の仲介で金持のアルパゴンの後妻になろうか、と思案するというふうに、マリアーヌは清純な娘として描かれている。

同様にエリーズとヴァレールとの恋も美しく精神的なものである。

しかるに紅葉はこの二組の恋人同志を、いずれも肉体関係があるものとして翻案した。とくに徳之助、お八重の恋は深刻で現実的なものとして描いている。この二人は肉体関係があつたのを、金に目のくらんだお八重の母親が縁談をすすめたので、お八重も嫁ぐ気になる。裏切られた徳之助は女を面罵し、女が弁解する、という筋立てとなるが、このような条件設定や男のうらみのせりふなどは原作にない、完全に紅葉の創作である。

即ちこれは、紅葉には、女というものはたとえ肉体関係があつても、事情によっては、(とくに金のためには)男を裏切るものだ、という女性観があつたことを示す。これは「金色夜叉」の成立に重要な意味をもつ。この女性観こそが、「金色夜叉」の初案を作つた。お官が金の誘惑にまけて貫

一を裏切る、という主題は、早く「夏小袖」のお八重のなかにその原形をそなえていた、と私は考える。

さらに、徳之助、お八重は肉体関係があるという情況設定のもので、お八重に他の縁談が起ってくるのだが、これも「金色夜叉」に借用され、貫一、お官は関係がありながらあのような推移をとる、という構想になつたものと思われる。従つて安田保雄氏が、これを「あひびき」の感化をうけたものとする説(「鶴見女子大学紀要」第二号)を私はとらない。この二人は、はじめから関係があつた、とする方が自然であり、現実的な紅葉の考え方としては当然こういう構想になつた、と考えられるからである。

* * *

その他細部にわたつて「守銭奴」から借用したとおぼしき点を数箇所に見出すが、これらは詳しくは別掲の拙論にゆずることにして、最後に本書の中で岡氏が肯定している勝本説の誤りについて触れておく。

勝本氏は、「夏小袖」の第十、結納の場で、口入婆のお勘がお八重にむかつて説く

せりふを指摘し、これが、当時の女の財産獲得法であり、お官は財産を入手してから貫一に再嫁するつもりであつた、「紅葉には、はじめ東大法科に学んだ学校の関係で若い時から岡田朝太郎を始め法科出身の友人が相当にあつたので、法律的知識を聞かされて居り、その法律知識こそがお官の言葉の中の『余言難い事』なのである。」と説き、「お官の秘密」とはこのことであつて、『夏小袖』そのものがまた金銭の問題を主題にした作品であり、その意味でもやはり『金色夜叉』と関連する。」と述べていた。

この勝本説にはかなり大きな誤りがある。一つは氏の所説の最重要な論拠となる「お勘のせりふ」が、全くモリエールの原作どおりであつて、紅葉の創案らしい点は皆無に等しい、ということである。つまり、お勘の説く「うまく行きや半年経つた経たない内に、ぼつくり往生して、(あと)どんなにでも若い、好きな婿様をおもらひなさいまし」という文句は、殆んどそのまま「守銭奴」の第三幕第八景で、口入れ婆のフロージーが言うせりふなのである。

紅葉が「岡田朝太郎ら法科出身の友人」から得た法律的知識でも、なんでもなく、モリエールの原作をそのまま翻訳したものにすぎず、その場のその考え方について、紅葉の創案らしいものは殆んどみられない。このことから、紅葉がこれを「お宮の秘密」にする構想を立てていた、という所説は、氏のうがちすぎだった、と考えざるを得ない。

さらにまた、「守銭奴」や「夏小袖」の夫たちは六十歳をこえていて、若い後妻が夫の死後の財産を目当てにする、ということも考えられるが、お宮の相手の富山唯継は若い青年実業家で、健康も異常なく、お宮が唯継の死後を考えて嫁いだ、などとはどう考えてもむりな構想である。現実的な作者が、そのような不自然なプロットを立てていたとは考えられない。従ってもし「お宮の秘密」について、何かあるとすれば、それは別のことがらであろう。これについても意見を拙論に述べておいた。

また、「夏小袖」の主題を、勝本氏は、「金銭問題」としたが、これは氏の読みと

りの浅さではなからうか。高利貸のことや、金をめぐる事件などは本篇の副次的テーマにしかすぎず、真の主題は「金によって動かされる恋愛の三角関係」または「金に目のくらんだ女の背信」にある。即ち「金色夜叉」の原案的なテーマがその根幹をなしていたのである。

紙数がないので省略するが、結論を述べると私は、「金色夜叉」の骨幹の一つは「夏小袖」で、もう一つの柱は「嵐が丘」だったと考えている。もちろん、その他にも「ジェン・エアー」を、狂女放火の場を利用するなど、細かい点ではその他の小説や実際のモデルや事件を利用したことも多くあったであろう。「ホワイト・リリー」についてもまだまだ謎がとけているわけではない。

しかし、今のところ私としては、この考えを変えただけの資料をもたないのである。

四

岡氏の著書を批評する本筋からすっきりはずれてしまい、申しわけない。本書には

そのほかにも注目すべき研究が多い。

たとえば「紅葉と外国文学」の文なども、この種の先鞭をつけた意義ぶかいものである。ただし、まだ不明のものも多く、今後に期待するものだが、「不言不語」は、ほんの思いつきだが私は、バアサ・クレイではなく、ゾラではないかと思っている。たとえば「テレーズ・ラカン」の中で、夫婦が殺人を犯した罪に責められて自殺にいたる経緯などを、お家騒動的な骨組みの中にとり入れたものか、あるいはその他のゾラ物か。識者の後考にまつ。

また「寒牡丹」は、紅葉がほんのわずかばかり手を加えた程度で、あらまし秋濤の翻訳だが、内容でもわかるようにこれは明らかにロシア文学である。岡氏は何を根拠に、英米大衆小説とされたか。ちなみに「新小説」(明治三二年五月)の消息欄に「秋濤氏が訳、露国小説『雪の夜』は近き中に刊行せらるべく云々」とある。これも御示教を得たいところだ。なお最近、土佐享氏が、「八重だすき」は、マリヴオーの戯曲「愛と偶然との戯れ」の翻案だ、と立証している。

また「多情多恨」には、近松門左衛門の「堀河波鼓」の感化があったのではなからうか。岡氏は、秋声の「英米の通俗小説を粉本とした」という説を批判しているが、(本書第二部・「多情多恨」)これは全く同感である。そこで私は、前半は「源氏物語」で、後半は「堀河波鼓」ではないかと思う。この近松の作の女主人公の名は八お種、姦通して斬られるが、その経緯は、

岩永胖著『自然主義文学
における

虚構の可能性』

榎本隆司

さきに著者は『田山花袋研究』一卷を世に問うているが(昭和三十一年四月、白楊社)、本書は、その旧稿のすべて、すなわち、「田山花袋について」「蒲団」の成立まで、「蒲団」から「百夜」まで、「重右衛門の最後」「田舎教師」「時は過ぎ行く」「一兵卒の銃殺」「花袋文学に於ける虚実と矛盾」「花袋文学の二元構造とその限界」の九編を収め、加うるに「虚構の可能性」

夫の彦九郎が江戸詰め留守中、酒を飲んで前後を失ったゆえのこと。モリストの紅葉は、姦通させて悲劇をおこすにしのびなかつたのであろうか。調査不十分ながら書きそえておく。

以上、予定の紙数をこえたので、この辺でおゆるし願います。重ねて岡氏の健筆を祈って筆をおきます。(四四・二)

「主体性形成の文学」「蒲団」「再び草の野に」「事実と創造の世界」「抵抗と逃亡の文学」の六編と、これに「序論」「あとがき」を付して一本を成している。

旧稿九編は、全体として表現上に若干の修正をし、一部結論の部分を中心に補訂をしているほかおおむね前著に収められたかたちのままである。あえていえば、旧稿での明快な断定がいくぶん婉曲ないまわし

になっていること、もしくはあらためて問題を提示する恰好をとっているあたりが挙げられるが、基本的には変わっていないといつていい。それは、十年來の「思索を傾注した結果」の集大成として提出されているのであって、著者みずから、著者なりに「作り上げてきた世界をもち得た」というほどに、研究者としての年輪をうかがわせるものになっている。

ところで、そうした著者の勝ち得た成果は、巻頭の「虚構の可能性」と「主体性形成の文学」と題する二論文に集約されている。著者のいう「判決主文」にあたるものである。

虚構とは、的確な事実の把握、現実認識にもとづく作家の主体的な創作的衝動によってもたらされるもので、不成熟な事実追及は、事実の歪曲とスポイルを伴う。逆にその正しい追及は作家の主体的心情を高める。「荒海や……」という芭蕉の句において、「天の川」は、荒海と佐渡を凝視する中での主体的心情の昂揚が生んだ虚構である。主体の昂揚は、事実そのものをとらえるだけでなく、その事実を変更し、何かを

つけ加えようとする創造的な衝動を呼び起こす。虚構とはそのような運動と変形そのもので、そこにこそ、「虚構の可能性」は考えられる——と著者はこういう論拠に立っているのである。当然それは、「主体性形成の文学」への要請となり、そこにそうした可能性を秘めた独歩とその影響下に育った花袋とを比較する視点が導かれるわけである。

独歩の文学は自由を求める政治批判に発して組み立てられている。しかも詩的情熱こそが政治の基本たるべきことを求めているところに、他に類を見ない文明批評にも発展し得べき個人的な可能性があったのだ、と著者の独歩評価は高い。しかし、「驚異」の感受が、単に詩人の天職に限られると考えるに到り、それを現実的・政治的に成就し得なかつたところに、つまりそれがついに「願望」に終わらざるを得なかつたところに、独歩の観念的な弱体性があり、文学思想の限界があつたと著者は見るわけだが、そうした独歩像を浮き彫りにする筆はきわめて精緻で鋭く、本書における注目すべき論考となつている。それは、信

子との問題を論じた部分にとくにきわやかで、信子を失つた独歩の嘆きの真因を、「公然たる恥」を与えられたところに求め、信子の出奔が、「独歩の超越と独善と非現実性に対する批判」にもとづくといった指摘は、そしてそこに独歩の限界を見ているのは、独特の分析として示唆的である。

花袋は独歩から、「事実の意味の重大さと、創造的世界との関係について追及する方法」や、「大自然と人生との関係を結びつけて考える方法」を学んだ。このことを著者は、従来見落されてきた大きなポイントとして指摘しているが、具体的には、「重右衛門の最後」に対する高い評価となつて論証される。透明を欠いた憾みはあるにせよ、重右衛門をめぐる事件の数々が、結局、村の後進性による閉鎖的な生きかたの強制と極端な貧困化によることを無意識裡にも剔出し得ているということから、近代文学における民主主義的な作品として先駆的な意義をもち得たもの、とさえ著者は評価するのだが、これは在来の方を超える創見であり、また、虚構が社会変革にまやかかわつてゆく現実認識に胚胎すべきで

あると考える著者の立場を示すものとして注目される。

もちろん著者は、そうした可能性ととも、それが挫折してゆく実態をも見逃してはいない。近代的リアリズム文学を生んだ、少なくともその可能性を大きく内包した作家として独歩を評価するかたわらで、自然と人事との対立矛盾に触れ得たという点で独歩を超えながら、事実そのものにつき動かされての成功が災いする恰好で、事実の意味をたずねることなく、主体性を背後に押しやつて事実の直写にのみ傾き、「可能性」を失つていった花袋の足跡をきびしく追つているのである。

一般論としては、虚構と事実との関係、その意味するところの解明を試みつつ、ありのままの事実を書いていくと信じられてきた自然主義文学観への警鐘たり得るとも著者は自負しているのだが、たしかに、ここに自然主義文学研究におけるあらたな視点が呈示されたわけで、それはじゅうぶんに評価されなければならない。

さて、如上の「主文」に対する「証拠物件」たる以下の各章だが、これはまさに

「執念」というのほかない飽くなき事実の究明である。巻頭に掲げられた「赤塩村選挙有資格者調（重石衛門の地租納額）」、「三水村放火事件一覧表（長野地方檢察庁調べ）」、「岡田美知代の筆者宛書簡」(小林秀三の日記)、岡谷繁実の著作権法違反事件にかかわる「告訴状」、「一兵卒の銃殺」のモデルに下された「軍法会議の判決謄本」、飯田代子宛の「花袋書簡」等々の写真が端的に物語っているごとく、著者の多年にわたる研究の本領がそこに集約されている。

もちろん著者はその研究を通じて、単に作品との異同を追尋しこれを現象的に列挙しているのではない。作品と事実との比較研究は、著者によれば「事実の客観性が作品の世界として作者の主観を通して、どれだけ吸収され得たかを調べるため」である。当然著者の眼は、事実の意味を問う作家の姿勢に集中される。したがって、著者の事実調べが進めば進むほど、その客観的な把握の十分でなかった作家への論告は、あたかも檢察官のそれのごときびしく痛烈になる。しかもその論告は、未開の分野に鉄を入れたものであるだけに、これまで

誰もが言及し得なかつたユニークな、そして大胆な想定や断定を多く導き出している。

「十七倭二人扶持の次男」として育った花袋には、権力的な秩序に連ることに空想的な憧憬があり、その文学への途は、俗世間的な成功への希望と不可分に結合して選ばれている。俗世間への絶望に発した透谷や独歩と異質であるゆえんだが、そういう視点に立つ著者にとって、だから「蒲団」の告白は、罪の意識からではなく「恥の文化」からの脱出を決意したところに成立したことになる。そして、「恥の意識」をかなぐり捨てたところにこそその「暴露」の歴史的な意味も認められるのだが、しかし美知代に対する愛情が、外面的なハイカラさや岡田家の財力にひかれての錯乱でしかなかった以上、そこには新しい人間の世界は約束されず、単に、花袋の文壇的野心を満足させる結果をしかもたらさなかつたという結論になる。それはいわば、一方で因襲への反逆の姿勢をとりながら、他方で不発弾的な安全性を保証する虚構の方法で、その「驚くべき」「狡智」と「技巧」を指

摘して著者は、在来の「痴愚」と結論づける花袋観に疑問を呈している。同時にそれは、主体をかけた戦いを放棄した第三者的な立場の偽装でもあり、この逃避と保守の中に、自然主義文学のテーゼである「無解決」と「傍観」も生まれ、やがてそれは、「生」の平面描写への推移の必然をも示すものであつたと著者は考えるのである。

徹底的な事実の究明を通じて、著者は花袋の虚構化に、重大な事実の「切り捨て」や「歪曲」を発見する。「田舎教師」のモデル小林秀三における石原民助の存在と死、「時は過ぎ行く」の背後に存在する岡谷繁実や兄実弥登の人間的要求、資本主義草創期における労資協力による開発の関係など、さらに「一兵卒の銃殺」のモデル岩松善蔵における事実の歪曲等々、そうした著者の足と眼と推理によって蒐集され提出された証拠物件は、まさに動かしがたい事実として読者に突きつけられている。そしてその過程で著者は、岡谷らによって培われた、封建的秩序とつながる花袋の観念的、中立的歴史主義、そこに胚胎する「時」の観念や、背信的行為と結びつく功利主

義、さらに硯友社の女性観に尾をひく好色性等々を剝り出し、虚実の混淆の中に近代と前近代が同居する花袋の実態を暴きながら、その可能性と限界を立証している。

花袋自身が、事実にもとづいて事実そのままを書いたといっており、研究者もまたそう素朴に信じている現状への疑問から出発した著者の事実調べは、やがて自我を私生活の内部に凍結し、閉鎖的な袋小路に落ち込んでゆかざるを得なかった自然主義文学の問題をも含めて、その特質を究める上でたしかに有効な方法であった。著者自身の、その方法への限定的な自戒が生きている限り、明らかにされた興味深いひとつひとつの事実は、花袋および自然主義の文学を理解する上で貴重な資料として教えるところ多く、研究としての意味も大きい。労作成つて深い感慨をもらしておられる著者にあらためて敬意を表するとともに、その成果をじゅうぶんに享受すべきだろう。しかし、説くところの細部にわたって、あるいは方法論的に問題にしたい点がないわけではない。たとえば、「重石衛門の最後」を論ずる中で著者は、花袋が、その土

地にはない「田池」ということばを用いているのを「明らかに著想と同時にこの作品が書き上げられたあわただしさの一例」として指摘しているが、著者自身触れている数年後の作品「秋晴」が、おなじ土地を舞台にし、しかもやはり「田池」ということばを使っている事実からすると、著者の想定は成り立たなくなるのである。現地踏査をころみている著者が、まさに事実によらずにすぎたの勇み足といえようか。(著者は、土地では「ためけ」といっており、それは「ためいけ」△溜池▽のつづまったものだろう、という推定から右の論を立てている。「ためけ」についても、「溜池」ではなく「たねいけ」△種池▽ではないかとの示教を別に受けているが、とすると、それは著者の事実調べそのものにもかかわってくる)。

「田舎教師」における事実の歪曲を、少年小林秀三を「三十有余歳の青年花袋」の眼でとらえていることを非として例証しているが、日記を書いた時期の二十一歳の秀三がなぜ「少年」で、引用された教え子との会話が、少年らしい感受性の限界を踏み

破って、三十余歳の花袋の感じ方そのままを露出したことになるのか。しかもここで著者は、事実と作品との年齢的なずれを、「花袋の主観が対象から客観的に限定されることなく、無限定に対象の内部に入り込んだための結果」だとしているのだが、なぜ花袋は、この場合、客観的な年齢によって主観の限定を受けなければならぬのか。それも、実際には、「二十一歳の少年」といい「三十有余歳の青年」という著者より、むしろ花袋の方が事実に近い受けとめ方をしてるのである。さらにまた著者は、事実では「乙種」で喜んでる徴兵検査の結果を作品では「丙種」で残念がっているとしている点をもって、「権力に対する願慮が事実の『ありのまま』の写実をまげて、このような歪曲に追いやつたと見るべき」だとしているが、はたしてそういう切れるのだろうか。

著者は論述の過程で、しばしば「歪み」「歪曲」とか「うそ」「あやまり」という表現を使っている。事実と異なるところを指摘し糾弾するいいかただが、このことばにぶつかると、時にふと妙な感じに襲われ

る。花袋における事実の歪曲が、著者のいうごとく、三つのうちの一つをとり出して書いたのとわけが違ふ、つまり、事実の本質を意識的にすりかえているという場合も

ともかく、かならずしもそうでない捨象をも「歪み」といわれ「うそ」と論断されているのに接すると、著者の研究の前提と方法への自戒を思いつつ、やはりあらためて疑念が募ってくるのである。虚実の究明は、「一兵卒の銃殺」においてもっとも精細であるが、著者はここで、女主人公の造型と主人公の生い立ちに見られるあらわな虚飾と虚構が、主人公の異常な行動と心理の根元的な追及が打ち切られることに「随伴して」生じていると述べている。虚構を事実との対比において問題にし、事実を基軸にして考えれば当然それは結果的に「随伴」という形で指摘されることにならう。まして、事実の根元的な追及を欠いているとすれば、何が根元的な追求になるのかというだいたいな問題はあるが、「随伴」というとらえかたも正しいといふべきかもしれない。しかし、もし作者のそもそもその要求が、いうところの根元的な追及になく別な

狙いにあるとしたら、是非はともかく、少なくともそれは「随伴」ということにはならないはずである。

「再び草の野に」における「町になるかもしれない」という村人の予測を、鉄道開通という現実を無視した虚構であるがゆえに小説としての客観性をもち得ないと著者はいう。しかし、花袋はこの作品で、東武鉄道の歴史を叙述しているのではない。村人のおもわくが裏切られてゆく、その空虚な思いを深めさせるためには、伏線として期待をふくらませておく方が小説としての効果は大きい。「町になるかも知れない」という表現は、素朴ながらそうした技法の問題として認めるべきではないのか。「あきらかに事実が小説的企図によって修飾され、歪曲されているのみでなく、虚実混淆して、作者の観念を立証する材料になっていくに過ぎない」と著者は批判するが、立証する材料になり得ていれはいいという考え方は認められないか。「作者はルウインの観念にとりつかれていくに過ぎぬ」ともいうが、「ルウインの観念」こそ、この作品を支える作者の思想だったはずであ

る。そういう「感傷に墮してはならなかったのである。」というきめつけは、著者の虚構観からすれば当然だが、しかし、そうした感傷の中にも花袋が求めつづけなければならなかった真実を掘り当てることこそま

ず必要ではないのか。
著者は自己の方法に対する疑問に応え反撥もしているが、そのリアリズム観、あるいは倫理意識や文学観の問題、さらに、概念規定や表現の問題（新旧かなづかいの混同や誤植の目立つことをも含めて）等、なお触れるべき問題は少なくない。しかしすでに委曲をつくす余裕を失った。著者が花袋という作家に見ようとしたものはその「偉大さや立派さではない」という。あえていえば、本書が前人未踏の地を開拓し、多くの示唆的な見解を提出している功績を高く評価しつつ、なお、ひとりの作家の「偉大さや立派さ」を問題にせず、作品における虚実混淆の中味を洗い出すことで「更に広い統一的な世界をひき出す可能性」をひたすら追尋する作家研究とは——と、そんなことをあらためて考えさせられたことである。

事務局報告

○大会・例会における題目および講師
昭和四十三年度(その二)

十月 秋季大会(於昭和女子大学)

鷗外「舞姫」の問題 秦 行正

—その自伝性の限界をめぐって—

「道草」私見 相原 和邦

「一兵卒の銃殺」をめぐって

小久保 武

宮沢賢治と大正詩

境 忠一

小熊秀雄の思想的母胎について

高野斗志美

「青銅の基督」小論

赤松 昭

—その芸術・宗教・恋愛観について—

「人間失格」小論 角田 旅人

堀田善衛小論 鈴木 昭一

—「海鳴りの底から」の成立について—

ハンボジウムV

大正文学の起点

大津山国夫・河村政敏

平川 祐弘・成瀬正勝(司会)

十一月 明治四十年代文学における青年像

平岡 敏夫

徳富蘇峯の文学観 野山 嘉正

—明治二十年代文学状況への一視角—

十二月 近代革命演劇の系譜 松本 克平

一月 昭和初期とアンドレジット

—大菱健の場合— 塚田 満江

二月 「灰燼」(森鷗外) 試論 山崎 一穎

三月 初期佐藤春夫論 山敷 和男

* 編集後記 *

本号は、ことさら特集のテーマを設定せず、自由に、各自の得意の研究対象について執筆してもらおう方針で編集してみた。特集テーマの種が尽きたというわけでは、もちろんない。学会誌の性格上、研究主体の独自性と、研究課題の自然成長を重視するのは当然のことであって、むしろ、これが本来の姿であるともいえよう。ここに集めた各論文は、それぞれ新たな研究の視点を設定した、ユニークな、豊富な問題の所在を示唆するものと思う。ただ、いささか遺憾なのは、大学紛争等政治的季節が続くせ

いか、どうか、依頼原稿の集まりがわるい。また、投稿原稿も少い。その点、学会員諸氏の意慾にまつこと多大なものがあ

る。本誌も本号でちょうど第一〇集を重ねたことになり、特集のテーマ、執筆者の顔触れなどの面で、サイクルの新転回をはかるべき、一種の端境期をむかえた観もなくはない。文学史の構想、研究の方法の問題等、とりあげるべきテーマは多々あるが、今後の特集、ないし小特集などに関して、学会員諸氏の積極的な御発言、御協力に期待したい。

昭和四十四年四月

編集委員

- 越智 治雄
- 酒井 森之介
- 清水 茂
- 高橋 春雄
- 堀井 謙一
- 吉田 精一
- 吉田 熙生

国語国文学研究史大成

全15巻
別冊増補付き

■学界の総力を結集した、
日本文学研究史の集大成！

全国大学国語国文学会

久松潜一ほか編著

■各巻A5判・約五〇〇頁
■上製箱入

全巻 三七、四〇〇円

セット特価 三五、〇〇〇円

■全国大学国語国文学会の事業の一つとして企画・編集された。内容は各専門家による

国語国文学の全分野・全時代の主要作品・作家の研究史の過不足なき展望と資料整理を行なった集大成である。第一

回配本「芭蕉」以来、斯界の高い評価をうけており、国語国文学研究者必携の書である。

■内容 研究史通観／翻刻研究文献／翻刻研究文献解説／研究書誌／研究略年表／索引

第1巻	万葉集上	武田祐吉・久松潜一 森本治吉	二、二〇〇円
第2巻	万葉集下	武田祐吉・久松潜一 森本治吉	二、六〇〇円
第3巻	源氏物語上	阿部秋生・岡一男 山岸徳平	二、二〇〇円
第4巻	源氏物語下	阿部秋生・岡一男 山岸徳平	二、五〇〇円
第5巻	平安日記	秋山 虔・池田正俊 喜多義男・久松潜一	二、五〇〇円
第6巻	枕草子・徒然草	岸上慎二・斎藤清衛 富倉徳次郎	二、五〇〇円
第7巻	古今集・新古今集	実方 清・西下経一	二、五〇〇円
第8巻	謡曲・狂言	田中 允・西尾実 池田広司・金井清光	三、〇〇〇円
第9巻	平家物語	市古貞次・高木市之助 永積安明・瀧美かをる	二、五〇〇円
第10巻	近松	守屋憲治 守屋憲治	二、五〇〇円
第11巻	西鶴	曙峰康隆・野間光辰	二、二〇〇円
第12巻	芭蕉	井本農一・栗山理一 中村俊定	二、五〇〇円
第13巻	藤村・花袋	石丸 久・岩永 眸 吉田精一	二、二〇〇円
第14巻	鷗外・漱石	成瀬正勝・橋本芳一郎 湯地 孝	二、五〇〇円
第15巻	国語学	佐伯梅友・中田祝夫 林 大	三、〇〇〇円

三省堂

(表紙2の日本近代文学会会則の続き)

附 則

- 一、会員の会費は年額一、二〇〇円とする。
(入会金一〇〇円)
- 二、維持会員の会費は年額一口二、〇〇〇円とする。ただしその権限は一般会員と同等とする。
- 別 則
- 一、会則第二条にもとづき、五名以上の会員を有するところでは支部を設けることができる。
- 二、支部を設けるには支部会則を定め、理事会の承認を得なければならない。
- 三、支部には支部長一名をおく。支部長は支部の推薦にもとづき、会則第八条に従って代表理事がこれを委嘱し、その在任中この会の評議員となる。支部は支部長のもとに必要な役員をおくことができる。
- 四、支部は会則第四条の事業をおこなうに必要な援助を本部に求めることができる。
- 五、支部の経費は支部所属会員の納める会費のうち八割をこえない額およびその他をもってあてる。
- 六、支部は少なくとも年一回事業報告書および財務報告書を理事会に提出しその承認を得なければならない。
- 七、この別則の変更は総会の議決を経なければならない。



三省堂新書——絶賛発売中!

●三省堂新書の定価は、200円(青帯)、220円(緑帯)、250円(赤帯)の3種類です。

表現の解剖

続文章工学——樺島忠夫▼前著「文章工学」で展開した理論を、表現面の分析・解剖によって実践的に裏打ちした続編。現代短歌をとりあげてその表現の限界を指摘し、谷崎潤一郎の作品を素材として表現形態と機能の問題を分析。作文教育とその実践に文章工学の立場から鋭く切り込む。200円

*話題の既刊!

人間茂吉上下

〈上巻〉農民の血と詩人の血 〈下巻〉愛と別離
 〓真壁 仁▼赤裸々な男性をむきだしにした茂吉と、抒情詩の世界での茂吉を描く。各250円

源氏物語の舞台裏——王朝の世界
 〓福田政義

ことばのカルテ——ふだん語百話
 〓吉田金彦

文章工学——表現の科学
 〓樺島忠夫

250円

250円

250円



三省堂

東京・神田神保町

研究成果の集成と展望
を示し、問題別・テーマ別の視点で広い視野から文学の本質を追求した研究者必読の講座

全国大学国語国文学会監修
A5判・二二四～二八八ページ
各冊五八〇円

講座 日本文学 全13巻・別巻1

●最新刊の2点近代編Ⅰ・Ⅱの内容をご紹介します。

9

近代編Ⅰ

近世から近代へ 前田 愛
明治初期の政治と文学 平岡敏夫
近代小説概念の形成 稲垣達郎
紅葉・露伴・一葉 関 良一
浪漫主義の成立と展開 笹淵友一
社会小説論 佐藤 勝
近代口語文体の成立と展開 山本正秀

近代批評の萌芽 重松泰雄
劇詩の季節 越智治雄
子規と鉄幹 藤川忠治
象徴詩の系譜 松村 緑

自然主義の成立と展開 岩永 胖
漱石と鷗外 生松敬三

写生文の展開 福田清人
耽美派の文学 高田瑞穂

「冬の時代」の文学 清水 茂

10

近代編Ⅱ

白樺派の文学 紅野敏郎

「新思潮」と芥川龍之介 田中保隆
「三田文学」の作家たち 宮城達郎

「奇蹟」とその周辺 橋本迪夫
私小説の成立と展開 和田謹吾

近代の自照文学 塩田良平

近代文学とキリスト教 佐藤泰正

近代文学と短歌 木俣 修
翻訳文学 太田三郎
大衆文学 尾崎秀樹

日本近代文学 (年2回刊)

— 第10集 —

定価 400円 (送料70円)

昭和44年 5月10日 印刷

昭和44年 5月20日 発行

◎ 編集者 / 日本近代文学会 代表理事 吉田 精一

編集所 / 「日本近代文学」編集委員会
東京都千代田区麴町3-2-8 三省堂麴町分室気付

発行所 / 株式会社 三省堂 代表者 小倉 正風
東京都千代田区神田神保町1-1

印刷所 / 清和印刷株式会社 代表者 清水昭一郎

日本近代文学 第10集

400円